阪神・淡路大震災から 17 年

震災の記憶がない高校生が

親に教えられた自分の震災を

語り継ぐ

兵庫県立舞子高等学校

伝える震災

阿部　美汀

はじめに

当時1歳5ヶ月だった私は、震災そのものの記憶がなく、唯一覚えているのは、明け方から兄と近所の友人と一緒に車の中で待機していたときのことだ。父や母がどこにいたのかは覚えていない。しかし、そのときの車の中での会話などは覚えている。

父、母、兄、私の４人家族で、当時はメゾネットタイプの団地に住んでいた。

1．日常

地震が起こる数日前、母が車を運転しながらラジオを聞いていた。すると、地震の専門家が、「阪神間には大きな地震がおこるという意識はないけれど、実は活断層がたくさんあるし、大きな地震が起こらないという保証はないし、起こる可能性も高い。まだ意識が薄すぎて何の備えもしていないから、大きな地震が起こった時には大変なことになる。」と言っていた。

16日夕方、大久保の祖母の家に、家族と叔母と生後一ヶ月の従妹が集まっていた。珍しく、しっかりと体に感じる地震があり、その時洗濯物をたたみながら、数日前に聞いたラジオの話をしたそうだ。「関西で地震が起こったらえらいことになるらしいよ」。

その日は夜中に家に帰り、そのまま寝ていた。

2．地震発生

明け方、ものすごい揺れで目が覚めた。寝ている部屋の照明がシャンデリアで、それが頭上で大きく揺れ、母は私の上に覆いかぶさり、上から布団をかぶった。そして、隣で寝ていた兄の頭を引き寄せて「布団をかぶりなさい」と言いながら、頭まで布団かぶせた。
そのまま、揺れが治まるのを待った。私は全く覚えていないが泣いていたそうだ。しかし、3歳半の兄は全く泣かなかった。

いつもだったら父はテレビのある和室で寝ているが、その日はなぜか父も同じ部屋に寝ていた。後でその部屋を見ると、いつも父が寝ていたところに本棚2本が倒れガラスが砕け散っていた。もしもその日、いつも通りに和室で寝ていたら…と考えただけでぞっとする。

揺れが収まり天井を見ると、シャンデリアを打ちつけた跡が残っていた。父が家の1階に降りようとしたが、階段の上の電気の笠が割れていて、階段がガラスだらけだった。階段の上の棚の荷物が落ち、階段が荷物とガラスでぐちゃぐちゃになっていた。階段を降りたところにピアノがあったのだが、その上の電気の笠も割れ、ピアノには今も傷が残っている。下の部屋に入ると、台所の食器棚の前は割れた食器が山積みになっていた。炊飯器も落ちていた。そして、いつでも外に出られるように手元にあった服やジャンパーを着込んだ。三軒隣りのおじさんが、一軒一軒「大丈夫か」と玄関を叩きながら、声をかけていた。父も外に出て、一緒に回った。そのとき、玄関が歪んで開かない家もあり、大人で開けてまわった。

朝ごはんとお弁当のために炊飯予約していたお米が炊飯器ごと落ち、こぼれていなかったため、家から持ち出した鍋にお米を移してカセットコンロで炊いた。それをおにぎりにしてみんなで食べた。近くに居た人にも配った。

停電でテレビもつかないし何の情報もなかった。そうこうしているうちに1時間くらい経っていた。やっと夜が明けてきたころに、とにかく家の中は危ないということで、子どもたちは一台の車の中に詰め込まれた。

家の周りがあまりにガス臭かったため、消防に電話した。「わかりました。タバコや火を使うものはとにかく注意してください」と言われただけだった。その後、誰かの家のラジオが家の前の廊下の手すりのところに置かれていて、ずっと流されていた。母はそのときにラジオから、阪神高速

が倒れているという情報を聞き、大変なことが起こったのだと認識した。
　しばらくして、東の方の空が黒くなってきて「雪が降ってきたね」と言っていたら、それは小さな灰だった。火災の灰が風で飛ばされてきたのだろう。家のすぐ近くの道路では、ガス管が破れて火が噴きだしている、という情報が流れてきた。
　父はバイクで、コンビニに食料品などを買い出しに行ったが、もうほとんど残っていなかった。

3. 復旧
　3日目（19日）には北区箕谷の祖母の家に行った。伊川谷の方から太寺を抜けていくと道は混んでいなかった。箕谷はいつもとあまり変わらない、普通の生活だった。2～3週間祖母の家にいて、その間に家の方で水が出るようになったと聞いて、箕谷から片付けをしに帰った。祖母の家から毎日、父は仕事、母は家の片付けに行くようになった。
　母は、震災の3年前まで須磨の幼稚園に勤めていたため、子どもたちの消息が気になり、覚えている範囲で子どもたちの家一つ一つを訪ねていった。しかし、ほとんど人は住んでおらず「〇〇に避難しました」等の貼り紙がしてあった。
　また、父の職場の人たちで炊き出しをするという計画があり、駒ヶ林の公園に炊き出しに行った。父の職場の学校の家庭科室で材料を切り、公園まで運んで炊き出しをした。

4. 父の仕事
　父の職場である学校は、須磨アルプス北側のニュータウンにあるため、建物としての地震の被害は、大したものではなかった。しかし、一人の生徒が板宿で家の下敷きになり犠牲になった。少し経ってからそのことがわかり、先生たちは、安置されていた遺体と面会することが出来た。
　安否確認は大変だった。先生たちで分担しながら避難所や家を歩いて回ったが、私学であるため、生徒の居住区域が大阪から姫路、淡路島と広く、高校は一学年が10クラスを超えるなど数も多かったからだ。結局、その他の生徒の無事が確認されたが、1月末から3月までの受験シーズンを、先生の自宅に「避難」しながら受験勉強の最後の追い込みをしていた3年生もいた。電話での連絡網は使えないので、テレビ等を利用しての安否確認や、学校再開についての連絡をした。結局卒業考査は取りやめとなり、しばらくは午前中のみ授業での再開となった。かなりの数の生徒たちが先生たちと一緒に、午後から炊き出しの活動に参加していた。生徒全体の居住区域と、炊き出しなどの活動参加者の割合を見ると、明らかに須磨・垂水・長田・兵庫・中央区あたりの生徒の割合が高く、西区・北区の生徒の割合は低かったという。大人たちが車で送り届けたりしていたため、「帰るのが大変」という問題ではなかった。父は、「同じ神戸市内であっても、同じ学校のクラスメイトであっても、山のオモテ（南）とウラ（北）の当事者意識・隣人意識の温度差は明らかだった。しかしそれは高校生という年齢を考えるならいたし方ないのかも知れない」と言っていた。中には中央区の自宅が全壊して避難生活をしている生徒が、兵庫区の避難者のために公園での炊き出しに参加していたケースもあった。

5. 北区に住む祖父の話
　戦後間もないころ、地震がよくあった。そのころから祖父は、「神戸は直下型がくる」と聞いており、「古くから神戸に住んでいる人間にとって、いつか直下型が来るというのは常識のようなものだったはずなのに、ニュータウン開発によってやってきた新しい住民が増えるにしたがっていつのまにか『神戸には地震は来ない』ということが迷信のように言われ始めた。結局、地震の被害が大きかったのは“古い神戸”で、ニュータウンなどの“新しい神戸”に被害はほとんど無かったことは皮肉なことだと思う。
　兵庫・長田では大規模な火災があったが、大きい通りがあるために、火は燃え移らないと思っていた。しかし、上沢通のような「広い道を、炎が走って渡った」という目撃談を、祖父は同僚から聞いたという。強風であおられた、というよりもたぶん、足りなくなった酸素を引き寄せる、バック

ドラフトのような原理なのだろう。

6. わたしの震災の記憶

環境防災科に入学して、震災の話を聞く機会が増えた。そのときによく「当時1才やったら覚えてないと思うけど、」と言われることが多かった。また、「震災の時のこと、何でもいいから覚えている人いるかな？」と言われた時も、いつも「覚えています」と言うことができなかった。

震災の前日に一緒に居た祖父と、震災の話をしているときに、「震災の時に車に待機していた時のことだけ覚えているねん」と言うと、「それは小さい頃にお父さんとかお母さんに話聞いて覚えていると思っとんちゃうか」と言われ、自分もそうなのかもしれないな、と思った。それに、高校に入学してからそう考えることも多々あり、“震災の時の記憶がある”と言って良いのか、悩んだ時期もあった。しかし、祖父にそう言われたとき、父が「小学校の時に、親に震災の話を聞いてくるっていう宿題が出て、そのときに、子供は近所の人の車の中で待機しとったって言ったら美汀が、そのときのこと覚えているって言ってんな」と言ってくれた。小学生の私は、車の中での状況をひとつひとつ兄に確かめるように話していた。しかし、その兄も当時のことはほとんど覚えていないという。地震が起こった瞬間のことや、その時の家の中の状況も覚えていないし、私が3歳になるまで住んでいた家も、家の中の階段で兄と遊んだことしか覚えていない。細かく覚えているのは、幼稚園くらいの記憶からだろうか。しかし、震災の後、車に待機していた時のことだけは詳細に覚えている。やはりそれほど、1歳で何もわからなかった私にとっても大きなことだったのだろう。

7. 復旧・復興と共に

小学生のときに「しあわせ運べるように」という、震災のときのことを小中学生が書いた作文が載っている副教本が配られ、総合の時間や道徳の時間に使われていた。私はその本を家に持ち帰り、寝る前によく読んでいた。そこで、クラッシュシンドロームなどのことばも覚えたり、非常持ち出し袋の中には何を入れたらいいのか、などと考えていた。このように、小学生のころから災害や防災、阪神・淡路大震災に興味があったようだ。

毎年1.17にテレビで震災の特集をしたり、追悼式が行われている。ある団体の支援活動期間について、「震災の年に生まれた子どもたちが小学校を卒業するまで」と聞いたことがあり、それを知ったときに「（私は）神戸の復旧・復興と共に育った」と思った。震災当時に1歳だった私たちがこのように成長できたのは、父や母、周りの人の支えだけではなく、日本中、世界中の方々が支援をしてくださったからだと思う。次は私たちが、日本中、世界中の方に恩返しをしていきたい。

8. 環境防災科

私は環境防災科に入学し、ボランティアなどで数多くの地を訪れてきた。机の上の勉強だけではなく現地に行って、現地の人との出会いを通じて初めてわかることや、食べ物や風、臭いを直に経験することで、初めて気付くことがあるのではないかという考えを持っていたため、たくさんの訪問行事にも参加した。ネパールでは途上国で防災を広める難しさを感じ、どうやって防災をやっていくのか、などいろいろなことを考えた。

私が四川省を訪問した時は、四川大地震から3年が経とうとしていた。神戸の経験では、震災後2、3年経ったころに心のケアを必要とする人が増えた。四川省のある学校でも実際に、地震に関する相談が増えていると聞いた。そこで、ボランティアを継続して行うことの重要性や心のケアの大切さを強く感じた。

3月に東日本大震災が起こり、それは被災していない私の人生をも変える出来事となった。1月に開催された『ぼうさい甲子園』の前日のワークショップで、岩手県から来た3歳下の女の子

と仲良くなり、東日本大震災から9日後に初めてメールが送られてきた。私はずっと安否を心配していたため、すごくほっとした。それから毎日メールを続けている。これからもメールや電話をしたり、会ったりしてずっと繋がっていきたい。これも、もしかしたらひとつの恩返しになるのかもしれない。

9. 語り継ぐ

私の周りの友達は皆、震災のことを覚えていない。今の中学生や小学生は震災を経験していない。私たちは“震災を覚えている最後の世代”でもないのだ。これから、震災は「昔のこと」と思われるようになるのではないかと思う。そのように、風化を防ぐためにも、防災を学ぶ私たちは特に、親や外部講師の方から聞いたことを語り継いでいかなければならないと思う。

将来の夢は、まだ曖昧なままだが、他者の喜びが自分の喜びとなるような人生を送りたいと思っている。どんな職業に就くかわからないが、震災のことや防災についてはしっかりと伝えていきたい。

一才の自分と震災

石井　壮太

一才と震災

　阪神・淡路大震災が発生した1995年1月17日5時47分ごろ。私は一才の赤ちゃんだった。ママにべったり甘えん坊、その小さな脳みそのほとんどをママと遊びに回しているような、普通の赤ん坊だった。

　その赤ちゃんが震度7、マグニチュード7，3の兵庫県南部地震を体験したが、私はその時のことを覚えていない。普通に考えればそんな大地震を体験したら恐怖で泣き出してしまうのではないか、と思う。なぜなら家具は倒れ、食器は飛び出し割れていき、下からものすごい力が襲ってくるかのように揺れる、そんな爆音と衝撃の地獄に巻き込まれているのだ。高校生の今でも怖くて泣いてしまうかもしれない。だが一才と8ヶ月ぐらい、石井家に生まれ、壮太という名を与えられた赤ちゃんは地震の中平然と眠っていた。爆音と衝撃の地獄、この世の終わりとも形容された状況で、ただ静かに眠っていたのだ。それなら地震の記憶が無くたって当然だろう。恐怖という形で現れる危険信号は睡魔が完全に抑えつけていた。それが生物として正しいかどうかはわからないが。

　高校生の今なら当然跳ね起きるだろうと思うが、そんなに大きい地震を体験したことがないので何とも言えない。が、あるいは目が覚めない方が幸せかもしれない。恐怖を体感することなく、眠っている間に全て過ぎてしまう。それが一番かも知れないが永遠に目を覚ますことができない状況になる可能性もある。それなら跳ね起きた方がいいかも知れないが、私はそんな大地震の中でどれだけのことができるだろうか。

　眠っているときに大地震が起きたとする。私は揺れに驚いて跳ね起きるだろう。そして恐らく何もできないであろうと思う。大地震の混乱の中――焦りと恐怖に思考回路をジャックされた状態で私に何かできるのだろうか。ただ布団の中で小さく丸まり震えることぐらいしか出来ないのではないか。それで生き残れる確率はどの程度上がるだろうか。

　しかし地震が止んだ後なら動けるのではないかとも思う。震える足や抜けてしまった腰に喝を入れて立ち上がり、家族を心配することができるかもしれない。阪神・淡路大震災を体験している父と母はまだしも、一度も経験していない妹はパニックになっているかもしれない。ならまっさきに見に行くべきなのは妹だろうか。と考えるように、足と意識が動けば、地震が終わった後なら何かできそうだと思いたい。

主婦と震災

　阪神・淡路大震災が発生した1995年1月17日5時47分ごろ。私の母は一才の赤ちゃんを抱いたママ歴1年と8ヶ月くらいの、新米に何本か毛が生えたママだった。

　地震が起こる少し前、眠っていると赤ちゃんがグズグズとなにか寝言を言っている。母はすぐ目が覚める方だったので、目がさめて赤ちゃんを見ながらうとうとしていた。そして兵庫県南部地震が起きた。母は当然大地震を体験したことがない。まったく初めての出来事を半分以上寝て

いる状態にぶつけられた。普通ならパニックになってもおかしくないと思うのだが女性は強く、自分の赤ちゃんを守ろうと覆いかぶさって赤ちゃんをかばったのだ。その状態のまま地震が終わるまで耐えていた。

地震がおさまり、周りを見てみるとテレビは倒れ、食器棚からは飛び出した食器がメチャクチャに割れ、窓も割れて真冬かつ早朝の冷たい風が入り込んできていた。とりあえず赤ちゃんが風邪を引かないようにジャンパーを着せて、割れた食器やガラスを踏まないようにテーブルの上に赤ちゃんをのせた。赤ちゃんは何が起こったのか理解していなかった。テーブルに上がってテンションが上がったらしく、踊り始めていた。何とかと煙は高いところが好きなのだ。

赤ちゃんは何もわかっていなかった。が母も何もわかってはいなかった。母はこんな大地震を体験したのは初めてで、何が起こったのかがまずわからないのだ。普段大変なことを体験していない人間を大変なことが襲ったとき、その大変なことに冷静な思考と判断で反応できないのだ。危機管理能力、もしくは危機意識の低さとでも言うのだろうか。普段やってないことは緊急時には絶対に出来ないのだ。このことから普段からの防災訓練の大切さがわかる。

というわけで何が起こったか分からないうえに、何が起こったか考える頭も起きていなかった。だから地震の後、しばらくはボーっとしていたらしい。母はどんなことが起きたか分かっていないし、どんなにひどいことが起こった状態かも分かっていない。だから母はガスを使って朝ごはんを作っていた。このあとにガスは危ないという話を聞いて使うことはやめたが、もしかしたら事故になっていたかもしれない。ガス管が壊れているかもしれないのに、ガスを使うと危ないということが思いもつかない。それに家が崩れるという発想も出てこないのだ。だからすぐ避難することはできなかった。

父が西区にすむ祖父と祖母を心配して見に行ってくると言った。お願いして送り出したが、本当は不安でいっぱいだった。もしもう一度あんな大きい地震が来たら一人で赤ちゃんを守らなくてはいけないと思ったからだ。誰かの命を自分一人で背負うのは、なかなかつらく厳しいことだと思う。それに自分の息子だ。初めてのわが子であり、お腹を痛めて産んだ子だ。そんなわが子をこんなことで失うわけにはいかない。という思いがあったのだろう。そんな重くのしかかってくる想いと不安、そして命の重さを感じながら、ひたすら耐えて祈っていた。もうあんな地震が来ないようにと。

母がラジオを聴いていると、死者は一人という情報が聞こえたらしい。そこで母はあんな衝撃だったのに、意外と被害が少なくてよかったなぁと思っていた。が、テレビを見てみると大変なことになっていることに気がついた。街の至る所で火の手が上がり巨大な黒煙が街を覆っているような状況がテレビを通して映し出され、母はようやく本当の震災に気づいた。非常事態である、と感じた。

その後、父は無事に帰って来た。祖父母の住む地域は被害がほとんどなかったらしく水やらガスやらは全部使えるようだった。だから祖父母の家に避難することになった。道は車では通れそうにないような状況だったのでバイクで行くことになった。祖父母の家につくと高校教師をしている父は学校の様子を見に行くといって、バイクで行ってしまった。そのときも僅かに不安がよぎったが、安全な所に避難できているという安心感もあった。

祖父母の家での避難生活は一週間に及んだ。祖父母の家は広かったので生活スペースには

とくに困らなかった。赤ちゃんはいつもとは違う環境かつ走り回れる広さのあるところに来たことからテンションが上がっていた。テンションが上がって走り回っていた。本当に現在の状況が分かっていないやつである。そして祖母もテンションが上がっていた。息子の初めての子供とこれから過ごせると思って、大いにテンションが上がっていた。祖母もあまり状況がわかっていなかった。被害がなかった地域だったから、テレビでみた巨大な被害もどこかテレビの中の、映画やドラマと変わらないような、つまりは別世界の出来事と捉えてしまっているのかもしれない。同じ兵庫県のなかで大変なことが起きているのに、自分のこととして捉えにくい。実感がわかないというやつだろうか。そんな状況にあった。祖父母は地震のとき、決して丈夫とはいえない牛舎で作業していた。もし地震の震源がもう少し近かったら危なかったはずだ。それでもあまり危機感を持っていないのはテレビの中とか別世界云々というよりもおっとりとした人柄のせいであるかも知れない。そんなわけで祖父母の家の中を走り回る赤ちゃんとそれを追いかけるおばあちゃんの姿がよく見られていた。

母は祖父母の家に避難している時、これからどうなるのかという不安と自由にできないいらだち、そして二人だけテンションの高い息子と義母など色々なストレスを感じていた。
そこで少しでも元気を出そうと思い、ケーキを買ってきてみんなで食べようと思いつき買ってきたが、義兄に「震災でろくに食べられてへん人もおるのになんや！ケーキって！」と怒られてしまった。みんなのストレスを少しでも緩和しようと思ってやったことだったが、裏目に出てしまった。ここで母は被災地の人に対する思いやりが足りなかったと言っていた。誰かのことを思ってやったことが、そのほかの誰かには失礼だったり、まずかったりする、そんなことはよくあることだ。特に誰かを思いやっているときには、なかなか自分の非には気づけない。本人は善行を、正義をしていると思っているからだ。思いやりは文字どおり重いということだろうか。重くて思考の多くを占拠しているので、ほかの価値観や立場の人に気づけないのだ。人間は手を二つ持っているが二つ同時につかみ取ることはできない。ある程度の優先順位はあるだろうが、二つの立場を同時に考えると、なかなか行動できないだろう。ちょうどいい折衷案なんてめったにないだろうし、よっぽど酷くなければ別にかまわないのではないだろうか。大切なのはバランスということなのだろうか。

それから家に戻って元の生活を再開した。ライフラインは切断されていたが、電気がかなり早く回復したので助かったという。今までは電気や水道やガスなど何不自由なく使える状況だったので、もしこれらが使えない状況がきたらということを考えもつかなかった。
そしてその全く考えられない状況から一つずつ元に戻っていく。それはまるでかけがえのないものを一つずつ取り戻していくような感覚で、当たり前すぎて気付かなかった普通の生活、日常が戻ってくるような思いがした。固く縛られた縄が一つ一つ解かれていくような安堵と平常への感謝。生活が日常へと戻って行くたびに、ありきたりで、平凡な日常のありがたさが身にしみてわかった。

母はこの震災で学んだこととやりたかったことがある。学んだこととは、ご近所とのコミュニケーションの大切さである。近所の人と顔を合わせておき、いざとなったら協力できるようにしておくことが大切だと感じた。やりたかったこととはボランティアである。
このときは小さい赤ちゃんがいて自分たちのことで手一杯だったが、ボランティアに参加してひどい被害にあった人たちを助ける手伝いがしたかったという。今回の震災で、多くの人が大切なものを失った。私たちは失っていない。その差は本当に紙一重で、私たちが失ったかも知れないのだ。だから本当の震災というのを見たかったのかもしれない。と母は話していた。

高校教師と震災

阪神・淡路大震災が発生した1995年1月17日5時47分ごろ。私の父は高校に勤める教師だった。お兄さんと呼ぶには老け過ぎて、おじいさんと呼ぶには若すぎる。つまり「おっちゃん」であった。

地震が起こったときはもちろん眠っていた。大きな揺れが父を襲ったとき、何が起こったか、状況が分からずにキャーキャーと叫んでいた。どこかのちびのように爆睡してそもそも起きないということはなかったが、これではちびとそう変わらないだろう。

その後祖父母の家（父にとっては父母の家だが）に避難することになった。妻子と一緒に避難した後すぐに父は自分の職場である学校に向かった。阪神・淡路大震災では西側はあまり被害を受けていなかったが、逆に東側はかなりの被害を受けていた。学校はまさに東側にあり、どのような状況にあるのか心配であった。

学校はひどい状況であった。この姿を見て普通の仕事や登校しようなんて思わない。メチャクチャとハチャメチャが同時に来たような状況だった。生徒の教室などがある本棟はなんとか無事だったが、特別教室や図書室がある特別教室棟は大きな被害を受けて、崩れているところもあった。　そのときは入試前だったので、問題用紙を印刷屋に持っていった。が、こんな状況である。今回の入試は中止となった。いつ再開のめどがつくかも全く分からないのだ。この学校は元の学校に戻れるのだろうか。

父はそれからが大変であった。とにもかくにも生徒の無事を確認しなければならない。
もちろん学校の電話は使えなかったが、運よく公衆電話がつながったのでそこから生徒の家に電話を掛けまくった。そこで無事を確認できた生徒はいいが、できない生徒もいた。もう避難しているのか、電話がつながらないのか、あるいは……。父もこの時ばかりは不安になる。だが立ち止まっても仕方がないと、今度はバイクであちこちの避難所を回り始めた。もう避難しているだろう生徒たちの身元を確認するためだ。消防のホースがあちこちにあったり電線がちぎれていたりとかなり危ない状況だったが、バイクなので何とか切り抜けられた。そして教師たちの努力が功を奏し、全員無事という確認が取れた。こんなひどい状況ではあったが、決して地獄のどん底ではない。最悪の状況ではないのだ。きっとなんとかできる。と信じることができた。

震災もだんだんと落ち着いていくにつれて、学校を再開できる見通しも立ってきた。とにかく水不足だったので、自衛隊が水の配給をしている博物館へ水を取りに行った。トイレ用や、飲み水にするためだ。道が悪いこともあってなかなか大変な作業だった。だが今までの先が全く見えない状態から、元の日常へとだんだん戻ってきている。そのことを思うと、疲れはあったが頑張ろうという気になれた。そして震災も落ち着き、無事に学校も再開できるようになっていった。

父は学校を再開させるために尽力していたためか、あまり家の手伝いはできなかった。いつ余震が発生するか分からない時に、妻と子を置いていくのはいささか不安だが、こっちの地域のほうが危ないし、生活もしなければならない。心配ではあったが、何とか震災を無事に超えられたようで、安心したと話した。

阪神・淡路大震災　～これらの私～

井上　依理

　1995年1月17日、午前5時46分。当時1歳だった私には、阪神・淡路大震災を経験したという記憶が全くない。何が起こったのかもわからない。地震が発生して自分がどのような行動、反応をしたのかもわからない。私が今から書いていくことは全て両親記憶であり、私の記憶ではない。しかし、両親が話してくれたことをしっかりと自分の中に刻み込みながら、書いてきたいと思う。

1. 震災当日から数日間

　私は、いつも通り母と2人で1階の和室で寝ていた。その時、大きい地鳴りと共に大きな揺れが襲ってきた。母は揺れがおさまるまで、私の上に覆いかぶさり守ってくれた。私は揺れている時も、揺れがおさまってからもずっと寝ていた。揺れがおさまると、2階から父、8歳年上の兄（9歳）、6歳年上の姉（7歳）が下りてきて合流し、5人でずっとリビングのテレビを見ていた。テレビを見ながらも消防士の父は、いつ非常招集の電話がかかってきてもいいようにと、着々と出勤の準備を始めていた。私は、動き回ると邪魔になるのでずっと布団で寝かされていた。私の住んでいる稲美町は震源地から遠いということもあって、そこまで大きな被害はなかった。だから、兄と姉はいつも通り小学校へと登校して行った。母は震災があってからしばらくの間、2階へ1人であがるのが怖くてしかたなかったそうだ。そのため父がいない間、寝る時はいつも4人で1階の和室で寝ていた。

　地震発生から数日後に買い物へ行くと、神戸ナンバーの車がたくさん停まっていた。普段はそんなに人が入らないお店でも、人でいっぱいだった。紙おむつや粉ミルク、トイレットペーパーなどはすでに品薄状態になっていた。それらは1歳の私にとって必要なものだったので、とても困ったそうだ。

　家の裏の道には、“災害復興支援”と書かれた横断幕を張ったトラックが、たくさん通るようになった。神戸へ行くのに近くて、便利だということでよく使われていたそうだ。今まで交通量の少なかった道に、いきなりトラックがたくさん通るようになったので、最初はとてもびっくりしたそうだ。稲美町役場の車、姫路からの支援車など、さまざまな車が通るようになった。

　数週間してから、神戸に住んでいたいとこが水を汲みに来た。幸いいとこの家族は全員無事だった。その日は帰ったが、それから何回も水を汲みにきたそうだ。この話を聞いて、やっぱり水はなくては生きていけないものだから、もっと大切に使っていかないといけないなと思った。

2. 環境防災科との出会い　～私に出来ること～

　私が、環境防災科というのに出会ったのは小学3年生の時。当時中学3年生だった姉から聞いたのが1番初めだ。私が小学4年生の時に環境防災科2期生として入学した。部活をしていたため、家に帰ってくるのは遅かったが、毎日今日学校であった事を詳しく話してくれた。姉に言ったことはないが、その話を聞くことが毎日楽しみでしかたなかった。姉からいろんな話を聞いているうちに、環境防災科にとても興味を持つようになった。そして、この頃から「環境防災科っていいなぁ。めっちゃ楽しそうやし、私もこんなんやってみたいなぁ」と思うようになった。

　環境防災科に入ってからは、さまざまなことを学ばせてもらった。例えば、災害がなぜ発生するのかを知ることもそうだし、発生した後にどのように対応すればいいのかということを知ることが

大切だということだ。

　私たちが小学生に授業をするという出前授業というのがある。その時に、小学生に分かるように説明しているつもりでも、実際はあまり理解できていないということが多くあった。そこでは、説明をする難しさや、聞いている人全員が理解で来るよう説明していかないといけないということがよくわかった。また、私自身も災害についてもっともっと勉強し、今よりさらに防災に詳しくならないといけないと思った。詳しくなって、年代を問わず、より多くの人に伝えていきたいと思った。

　また、ボランティアにもたくさん参加した。そこでは、人とのつながりの大切さや、コミュニケーションをとる大切さというのを学んだ。実際、阪神・淡路大震災でも地域のつながりが強かったために、消防・自衛隊より多くの人の命を救うことができた。普段から挨拶をすることや、お話をするということを意識することで、いざという時にとても役に立つということがわかった。

　災害復旧ボランティアにも参加した。水害・地震・津波…さまざまな災害で被害を受けた被災地を、自分のこの目で見てきた。その景色や風景は、一生忘れることはないと思う。自分が被害にあったわけではないけど、すごく喪失感や、悲しい気持ち、暗い気持ちになった。被害にあっていない私がこうなるということは、被害を受けた方はどのようになってしまうのか…。そこで、心のケアを行うことの大切さというのをすごく感じた。被災した方は、私たちが行くと笑顔で迎えてくれて、とても優しく接してくれる。作業を何日もしている間に信頼感ができ、いろんなお話をしてくださる。でも私たちが帰った後にどうなるのか…。それを考えるととても怖くなるというか、不安な気持ちになった。そのことから心のケアも大切だけど、継続的にお付き合いをするということの大切さも感じた。

　環境防災科に入って、本当にいろんな体験をさせてもらった。その時感じたこと、学んだこと、気付かされたこと。たくさんのことを自分の将来に生かしていきたいと思った。

3．消防士　～憧れから将来の夢へ～

　前でも書いたように、私の父は消防士だ。小さいころから出初め式や救助大会などで、父が働く姿を見てきた。その時は「すげー!めっちゃかっこいい!」という憧れだけで、消防士になりたいとは思っていなかった。私が本気で消防士になりたいと思ったのは、高校に入ってからだ。環境防災科に入って、地域の行事に参加したことや、消防学校に体験入校したことで、たくさんの方に防災・減災について伝えていかない、こんなやりがいのある仕事をしたいと思ったことがきっかけだ。

　父は、今も神戸市消防局に勤めている。阪神・淡路大震災が発生した時も、すぐに非常招集がかかり、現場へ行ってしまったそうだ。当時、航空機動隊だった父は、ヘリで空の上からめちゃくちゃになった神戸のまちを見たそうだ。いつも見ていたまちが、こんなことになるなんて想像もしていなかった。初めに行った仕事は、地図に火災が発生しているところを赤ペンでマークするという仕事だった。マークしているうちに、地図が真っ赤になってしまったそうだ。それからもずっと情報収集や写真での記録という仕事をしていた。現場が命だった父は、何度も「救助へ行かせてくれ!!」と隊長に頼んだそうだが、「お前は行ったら帰ってこんくなる」と、なかなか救助へ行かせてもらえなかった。この話は直接父に聞いたのではなく、母の話や、「もっと多くの命を救いたかった」という本を読んで知ったことだ。私はまだ、直接父の口から震災の話を聞くことができない。聞きたいという気持ちはあるが、いざ聞くとなるとなかなか緊張して言い出せない。父の悔しかった思いを聞くのが嫌なのかもしれないし、聞いてどんな反応をすればいいのかわか

らないのかもしれない。また、「かっこいい父ちゃん」という像を崩したくないのかもしれない。聞けない理由は、自分にもよくわからないが、いつかはお酒を飲みながらでも、絶対に聞きたいと思う。

高校に入って1年生の時に、日帰りの消防学校体験入校があった。その時はまだ、消防士になりたいとあまり思っていなかった。だから、父や姉の迷惑にはならないようにしようという思いで頑張った。でも2年生の時に、1泊2日で行った体験入校では少し気持ちに変化があった。1班のリーダーに任命され、最初はとてもプレッシャーがあった。私が間違えると、みんなに迷惑をかけることになる、消防士の娘という目で見られる、失敗できない。いろいろな思いがあった。私の緊張が伝わったのか、前からの知り合いだった教官の方に、「思いっきりやったらいいんやで、間違えたっていいから怖がることない」という言葉をかけていただいて、とても気持ちが楽になった。それから自分なりに、みんなを引っ張っていけるように一生懸命に頑張った。そうしているうちに、みんなが1つにまとまってきた。そして体験入校が終わると、今までに体験したことのない達成感を感じた。それは、リーダーをしていたということもあると思うけど、助けてもらいながらだったけど、みんなを引っ張っていくことができた、という思いがとても強かったと思う。またその時に、毎日こんな達成感を味わいたい、こんなやりがいのある仕事がしたいと思うようになった。

私の姉は、父の背中を追って消防士になった。家でもいろんな話をしてくれる。その話を聞いているうちに、消防の中でも総務係や、救急係ではなく、予防査察係という仕事に興味を持った。それは、いろんな年代の方と関わることができるし、たくさんの方に環境防災科で学んだことや、防災・減災について伝えていくことができると思ったからだ。防災・減災についてだけでなく、今までに発生した災害やそれからの教訓、自分の目で見てきたことなど、たくさんのことを伝えたいと思っている。それを伝えることによって、今までよりもっと、災害に強いまちをつくっていくことができると思う。また、いろんな場所で、いろんな年代の人と関わることで、コミュニケーションが多くとることができるし、そのことでより地域のつながりが深くなると思う。それで何でも話せる、市民に1番近い消防士になりたいと思っている。

4. 東日本大震災　～伝えていかないといけないこと～

2011年3月11日、午後2時46分。東北地方を大きな地震と津波が襲った。私は、部活をしていたこともあって、地震が発生したことを全然知らなかった。部活が終わってから先生に話を聞いて、友達と衝撃を受けたのを覚えている。それから家へ帰ってテレビを見た瞬間、言葉を失った。津波がまちを襲っていく映像を見た時に、CGだと思ったし現実ではないと思った。でも、ずっとテレビで流れている映像を見て、「現実なんだ…」と思った。この時にも父は何時連絡がきてもいいように、携帯を片手に準備をしていた。その様子を見てやっぱり行くんだなと思った。実際、地震発生から1週間後に現地へ行ってしまった。1週間以上帰ってこなかった。父に聞いた話だと、向こうで食べたご飯は、おにぎり1つに、カップラーメンだったそうだ。避難所のグラウンドを借りてテントを建て、寝袋で過ごしたそうだ。避難所で、「家にまだ人がいるから助けてください」と言われたが、津波で家が流され、どこに家があるのかわからない。父は阪神・淡路大震災の時と同様に、悔しい思いをして帰ってきた。帰ってきた次の日に、ニュースでおばあちゃんと孫が発見されたというのを見て、「これ見たらやっぱ悔しいなぁ」とつぶやいた父の言葉が、とても印象に残っている。

震災当時１歳

猪口　陽菜

〇はじめに

震災当時 1 歳だった自分に当時の記憶など無い。そんな自分が震災の記憶を辿って書くことは必然的に無理なわけである。今から述べることはすべて両親に聞いた話だ。両親が自分に何を伝え、どんな思いで当時のことを話してくれたか。文章では表現しにくいが、不器用な自分が不器用なりに述べてみる。

当時我が家は須磨区の北落合にある 5 階建て団地の 5 階にあった。今は西区に引っ越しているが、自分が 5 歳になるまでずっとその団地で暮らし続けた。5 人家族で、自分は 3 人兄妹の末っ子。当時 4 歳の兄と 2 歳の兄、そして 1 歳だった自分。震災当時、母親と自分たち兄弟 3 人はすぐに鳥取県にある祖父家に避難したので、唯一神戸に残った父親に当時の様子を語ってもらった。

今からは父親が話してくれたことを自分が代弁する。

〇1995, 1, 17

その日の朝 5 時 25 分トイレに。前日の月曜日は成人式で祝日。3 連休後なので、父親は布団の中で仕事の段取りを考えていた。（後で思えば 3 連休のうち 15 日は京都に、16 日は奈良に行き、阪神高速が倒壊した深江付近を4回通行していた。何日か何時間かずれていれば震災の関連事故に巻き込まれていただろう。）

5 時 46 分、最初は「あ、地震か。」という感じだった。すぐ、グウォーという大きな地鳴りとともに、ダンダンダンと叩きつけるような揺れ。思わず「うそー」と叫び、父親は隣で寝ている 4 歳だった兄に布団を被せ、和室に寝ている母親と兄、自分に向かって「布団を被れ。余震が来るぞ。」と指示した。以前、父親が住んでいた関東地方では地震が結構あったそうで、震度 5 くらいまでは経験していたが、今回のとてつもない揺れに父親は相当驚いたようだ。室内では棚の物が落ちて散乱した。家族みんなが朝に必ず見ていた掛け時計は床に落ち、5 時 46 分を指したまま止まってしまった。冷蔵庫の上の大きな皿が床に落ちて割れた。食器棚の扉が開いて食器類も床に落ちて割れた。屋外では犬がワンワン吠えまわっていた。他の部屋からは、逃げ道確保のためかドアを開ける音が聞こえた。下の階の人は外に出ていたようだ。自分と兄と一緒に寝ていた母はこのとき、「この子たちはぐっすりすやすやと眠っているから助かるだろうけど、私はもうこれで死んでしまうだろうな。これが死ぬっていうことか。」と死を真に受けながらずっと揺れに耐えていたらしい。

余震が続いた。停電して真っ暗な中、父親はペンライトと携帯ラジオを取り出し、（たまたまだったがペンライトと携帯ラジオをすぐ取り出せるところに置いていたのは良かった。）すぐさま情報を集めようとしたが、NHK では「阪神、神戸で地震が発生した模様」としか入らない。6 時半頃になってラジオ関西（当時は須磨）の社員が出勤途中に見た光景を流した。それが、父親が耳にした最初の情報だった。（報道機関も非常時のニュース速報体制が整っていなかったように感じる。）そのラジオ関西の社員は、電車が止まっていて離宮方面から徒歩で南下したようで、東須磨あたりでは木造住宅が多数倒壊していて火事も発生しているということだった。また、けが人・死者もでているようだとの内容だった。自分たちの住んでいる落合団地はガスと水道はその時点では出ていたが、その後水道が出なくなった。給水塔にある分だけが出たようだ。依然と

して電気は停電したままだった。

7 時過ぎ、父親は出勤する時間なので着替えて様子を見た。ラジオの情報も多くはない。余震は収まらない。ベランダに出ると霧がかかっていてよく見えなかったそうだが、長田方面から煙が立ち上っているのが見えたらしい。電話で勤務先へ連絡を試みたが繋がらなかった。7 時 35 分に最大の余震が来た。食器棚の上の救急箱が落ちて壊れた。この状態では母親と子供 3 人を置いて出勤できないと考えたので、そのまま様子を見ることにした。長田方面の火事が大きくなっていくのがはっきりと分かった。9 時頃停電が復旧し、TV が映りだした。依然として現地の映像などなく、大地震で交通機関が止まり、停電し、ガス水道も止まり混乱している様子、けが人・死者数百人規模と報道されていた。

その日は落下物の片づけをしながら父親は午後もそのまま家にいた。夕方には長田の火事がひと段落し、原爆の写真で見るような巨大なキノコ雲が長田上空にできていた。余震はまだまだ続いており、まだ幼かった兄 2 人と自分を母親にまかせて出勤するわけにはいかないので、次の日は家族 4 人を鳥取にある祖父家に避難させようと考えていた。

〇翌日～

翌 18 日、神戸を脱出しようとする車で西神方面への道路は大渋滞でまったく動かない。三木街道へ回るとなんとか動いていた。窓ガラスや車体の壊れた車で皆避難しようとしていた。自衛隊の救援車両が反対方向に列をなしていたそうだ。父親はその中を西脇から加美町方面の比較的空いている道路を選んで鳥取へと向かった。田んぼの脇の農道も抜け道に使いながら但馬へたどりつく。自宅の電話は通じない状態が長かったが、道の駅の公衆電話は通じて、勤務先へも連絡が取れたそうだ。勤務先に近い父親の同僚が電話に出て、門がくずれ近所の家は倒壊しており、名谷周辺とはちがって大変な状況であることを知らされた。個人の安否も確認していたので無事であることを告げた。但馬は雪がたくさん積もっていて、その日は普段の 2 倍くらいの時間の 8 時間ほどかけて鳥取へ着いた。その翌日 19 日、姫路バイパス・第 2 神明は救援車両以外規制されていたので、やはり但馬経由で父親 1 人神戸に戻った。この日にはラジオや TV で徐々に被害状況が明らかになって死者が 1,000 人を超えたというような報道だったと思う、と云った。

震災 3 日目の 20 日に出勤した。恐ろしい光景が目に飛び込んできた。これらの光景はあまりにも無残で、震災後常時車にカメラを積んでいたにもかかわらず「1 度もカメラを向けようという気にならなかった。」と父は云った。結局震災当時の写真は 1 枚も撮っていない。普段腹を立てたりすることがあまりない父親でさえ、被災地外から来てもの珍しそうに写真を撮りまくっている人たちに対しては腹立たしく感じていた。ひよどりの料金所の先で乗用車が崩れてきた大きな岩に押しつぶされていた。新神戸トンネルを出たところから先は信号機が停電のため動かず、警官が出ているところもあったが、皆ノロノロと交差点に進入してなんとか通行していた。互いに手で合図しながら譲り合って通行していたのだ。（普段の交通マナーの悪さからは考えられない光景だった。父親は、こんな非常時には人は譲り合いの気持ちを持てるのだと感心したそうだ。）周りの家やビルが焼けたり、倒壊していたりして 1 車線、あるいは片側しか通れない状態だった。灘区の水道筋辺りでは水道管が破裂して水が噴き出しているところもあった。六甲道から御影にかけては JR の高架線路の橋脚に X 字の亀裂が入り、勤務先の北側では橋脚が落下し三角形のトンネルになっているところを人も車も通っていた。落下しないかヒヤヒヤしながら通って勤務先へたどりついた。周辺の古い家は何軒もつぶれたり、傾いたりしていた。

父親が仕事場に辿り着くと半分位の人が出勤していた。電車通勤の人は大阪方面からは通勤できていた。阪神電車は御影まで、JR は住吉まで、阪急は王子公園まで大阪方面から通じていた。西からは寸断されていた。関係者の安否確認が真っ先にすべき仕事だった。一般の電話は通じにくかったが近所の NTT の公衆電話がよくつながった。電話連絡のつく所もあれば、避難所に行ったり、親戚のところへ避難したりで、なかなか全員の安否を確認できなかった。（最後に確認できた人は奄美大島に帰郷していた。避難所にいるその人の兄と連絡が取れたのは 5 日後位だったと思う。）仕事場は蛍光灯が落ちて、机の上の物が床に散乱していた。関係者の安否確認と一緒に自分の机の片付けを始めた。建物の柱にも X 字の亀裂が入って外が透けて見えた。

東灘区では南の臨海部にあるガスタンクが爆発するかもしれないというので避難命令が出ていた。2,000 人以上の避難者が避難所となった学校に避難していた。学校の体育館に避難して亡くなられた方もいた。あるいは死体のまま体育館に運ばれた人もいたらしい。

〇震災から 1 週間

震災後 1 週間たった頃には被災地にボランティアが入りだし、父親は勤務先の関係でそのボランティアの人たちと一緒に避難所のボランティアをやっていた。水道が通じていないので給水車の水を汲んで 18 リットルの灯油缶を 3 階、4 階まで持って上がりトイレ掃除を何日も続けた。これは結構体にこたえた。しかし、ボランティアの人たちは若い人が多く苦にせず仕事をこなしていた。父親はこの時、「普段勝手な行動をする若い人たちが多い中、ボランティアに積極的に参加している人たちにはとても感動した。」と思っていたらしい。避難所の近くにはボランティアの炊き出しがテントを張った。山岸イズムや、幸福の科学（幸福実現党）などの宗教がかったグループがなぜかたくさん来ていた。幸福の科学からは 1 度だけ炊き出しをもらった。お腹が空いてもそういうグループからは貰わない人もいた。東灘周辺は大変だったが自分の住んでいた名谷辺りでは余震はあるもののなんとか生活できた。ただ、1～2 週間水道が止まったままで、近くにある神の谷小学校や西落合中学校まで水を汲みに行った。風呂に入れないので、東条温泉や無料開放のグリーンピア、舞子ビラなどに入りに行った、東条まで行くと余震もないのでゆったりと温泉に入れ、気分的にもゆっくりできたらしい。神戸は震災なのにこの辺では普通に農作業をしているのがずいぶん差があると感じたものだった。毎日無料開放された新神戸トンネルを通る時余震でつぶれるかもしれないと不安だった。そして東条あたりまで来るとほっとしていた。

「震災時の TV 番組はドラマや歌謡ショーやクイズなどほとんどなく、震災の報道ばかりだったが、その方がなぜか落ち着いたと」父は言う。震災後 2 週間ほど経つとドラマやクイズ番組が復活したが見る気にならなかったらしい。そんな気持ちの余裕が被災地全体になかったのだと思う。今回の東日本大震災が起こったときも、震災後 1 週間はほぼすべての番組が報道だったように思う。

震災直後もそうだったが、震災復旧の 3 月以降は市内各所で大渋滞が発生した。父親の知り合いが渋滞の横をすり抜けるバイクにはねられて亡くなった。震災関連でもあるだろう。また、当時淡路に住んでいた人々は「明石海峡大橋なんか作るから地震が発生したんや！」と口々に言っていたらしい。地震との関連性はあるかどうか未だ不明だが、世間ではこの震災を「阪神大震災」と略して称されるのに淡路市民が腹を立てるのは自分もなんとなく理解できる気がする。

4 月には兄が幼稚園に入園するので、3 月下旬には家族みんなで団地に戻った。

結局、自分と一つ上の兄は震災のことが記憶にない。4歳だった兄は、掛け時計が落ちてきたとき自分の枕の横スレスレに落ちてきて、布団をかぶっていなかったらそのまま頭にかけ時計が落ちてきていたかもしれない、といったことや、団地の周りが騒然としていたこと、救急車や消防車のサイレン音が外からひっきりなしに聞こえ、床に散乱した食器を父が片付けていたのをずっと見ていたこと、その程度しか覚えていなかった。

自分は17年間過ごしてきた中で両親から震災の話は何度も聞いていた。いつ聞いても父親は鮮明に覚えているし、真実のみを語ってくれる。これからも決して忘れることはないだろう。

〇環境防災科

環境防災科に興味を持ったのは中学3年生の時。それまで殆ど、いや全くと言っていいほど防災に興味は無かった。実際、阪神・淡路大震災のときのことだって覚えていないし、自分自身がこれまで生きてきた中で、(家の近くの山火事などはあったが)自然災害に直面したことが無かったからだ。避難訓練をしたり防災に関する授業は何度となく聞いてきたりしたが、「防災」と言われてもピンと来なかった。それだけ、自分と防災とは無関係といった間違った意識を持ちあわせていた。

でも、縁があって環境防災科に入学することができ、クラスの仲間と勉強していく中で培われてきたことはたくさんある。自分の意見をしっかり持つようになり、他人に自分の思いを伝えることや発表する力は確実に身についたように思う。防災に携わることが物理的にも精神的にも多くなり、また自ら災害や防災について考えるようになった。テレビなどで自然災害の特集をやっていると、以前は興味を示さなかったものの今となっては食い入るように見てしまう。それはきっと自分の中で「環境防災科」で勉強していることがプライドだからだと思う。ボランティアに参加することによって学んだことは数えきれない。募金活動のボランティアに参加した際は、神戸の人の温かさを改めて知ることになる。

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、今後さらに日本は防災について深く考えていかなければならない時代がやってきた。防災を身近に感じてもらうためにも、私たちが自分自身の中にある災害や防災に対する想念をいつまでも持ち続け、後世を担う新しい世代の子供たちにこの想いを伝えていかなければならないだろう。

〇語り継ぐために

私にとって防災とは、人間が自然と共存するためには必要不可欠であるものだと思う。自分が自然側に立って考えてみると、人間という生物がわれわれ自然を好き勝手に侵食し、破壊されていると思うと人間は邪魔で仕方ない存在であるといえる。地震や津波・火山の噴火は自然現象である。自然も、いくら人間に恨みがあるからと言って故意にやっているとは思えない。であるにも関わらず人間は自然現象に対して対策を取らないから災害に繋がってしまう。少なくとも自分は今後防災を考える上で、人間と自然がどうやって共存していくかに焦点を当てていきたい。自然と人間がお互いに足りない部分は補って生活していかなければならないし、それでも人間という生物は喜怒哀楽の感情をもったエゴイストであり、最終的には「自分さえ良ければ」といった考えに辿りついてしまう。じゃあその考えをうまく活用して、「津波が起きたら自分だけでも助かりたい」といった意識に変え、「非常用持ち出し袋を用意しておけば、非常時でも自分だけは3日生きていける」といった意識を持つようにすればいい。利己主義な人間にぴったりの考えだと自分は思う。人間の、人の真似をしたがる性格もうまく活用すれば、「周りがやっているから自分もやろう」という風になり「自分の身は自分で守る」といった意識に変わる。すると地域の防災意識は自然と高まる。防災に対してのこの考えは決して間違っていないと思う。今回の東日本大震災において、災害を予測し防ぐことは物理的に不可能に近いことがわかった。それなら、やは

り一人一人の防災意識や災害に対する知識を深める方が早いのでは、と思う。大きな災害は100年に1度ほどしか発生しないので、地球上に災害経験者がいなくなってしまうのは仕方のないことだ。世代交代があるからこそ語り継いでいくべきである。自分は経験者ではないが、父親の思いを未来の子どもたちや同世代の人々に語り継いでいきたい。

1人の神戸市民として、自分自身が神戸の震災をいつまでも忘れないために。

意外と身近にあった阪神・淡路大震災

今井　和良

＊家族構成＊　父（会社員）母（主婦）姉（5 歳・幼稚園児）私（1 歳）

1：私の記憶…

　兵庫県南部地震が起こった時、私は1歳だった。加古川市で被災したので聞くところによると震度 4 ぐらいだったらしく食器棚から食器が落ちた程度でそこまで大きな被害は出なかったらしい。当時のことはほとんど記憶になく、自分の中でイメージがあるのは食器棚からお皿が落ちたリビングを自分がハイハイしている様子だ。
　これは本当に自分がやったことの記憶か、人から聞いた阪神・淡路大震災のことから作り出された記憶なのかは定かでないが、とりあえずはこのイメージがずっと自分の中にある。
　1 歳だったのでほとんど記憶になく知らないに等しいと思うが、聞いた話を中心に書いていこうと思う。

2：私の震災前のこと…

　ちょうど 1 歳になり、立ち歩きができ、好奇心が旺盛な時だった。とにかく無邪気に遊んでいたらしい。
　1 月 15 日が祖父の誕生日だったため 15 日から 16 日まで東灘区の祖父母の家に遊びに行っていた。16 日の晩に加古川市まで帰ったのだが、もしそこで帰らなかったと考えると私は震災に巻き込まれていたのであろう。そう考えるとぞくぞくする。

3：震災の時の私の様子…

　母と一緒にタンスや鏡台がある部屋で寝ていた。幸い加古川市は震度 4 だったので食器棚があき食器類が割れるくらいの被害ですんだ。近くの家は瓦がずれたり外壁にひびがいったりとあったみたいだが、小さな被害ですんだ。私の様子は特に変化はなく、前日に祖父母の家に遊びに行った時の疲れがあったためぐっすりと寝ていたそうだ。
　母は私が起きて泣かれたとしたら大変だと思っていたみたいだが、案外私の神経は図太くスヤスヤと眠っていた。

4：震災後の私の様子…

　私自身記憶にはないのだが、話を聞いていると東灘区の祖父母が避難生活している時に 2,3 回ほど遊びに行ったそうだ。
　私は、長机を滑り台にして遊んだり、傾いた床でスーパーボールを転がしたりして、何も知らずとにかく無邪気に遊んでいたそうだ。ほかには、ちょうど歩きたてだったらしく、よちよち歩いて、壊れた祖父母の家と避難生活を送っている市営住宅を行ったり来たりしていたそうだ。道路にまで家の瓦礫があふれていたため危なく、母に注意されたらしい。
　父が休みだったので家の近くで一緒に遊んでもらったりもした。

5：家族の体験…

父:私の父は震災から3日経った日、祖父母がいる東灘区にリュックいっぱいに食料やガスコンロなどをつめてバイクで行ったそうだ。行く途中バイクのタイヤに釘が刺さりタイヤ屋さんで修理した。被害の様子はとにかくめちゃくちゃな被害で、車が渋滞しまくっていて、たくさんの人が歩いていたのが深く印象に残っているみたいだ。

父は神戸にある神戸中央郵便局で働いているのだが、地震のために17日から24日の7日間自宅待機の指示が出て休んでいたみたいだ。そして25日から仕事に行き電車が止まっているので須磨から歩いて神戸まで行った。あたり一面焼け野原で、とてもすごいにおいがしたと話している。着いたのは昼ごろでそこから4時まで業務をし、帰宅した。その時は保険関係の仕事をしていたので、問い合わせ電話の応対をしたそうだ。地震で保険関係の処理が必要となっていたのでひっきりなしに電話がかかってくるので大変だった。26日からは局の車を乗り合って行き、朝の6時に出てつくのは11時くらいで、帰るのは夕方の16時ごろに出てつくのは19時だったそうだ。

母:母は、地震後すぐにこれは何事かということですぐにテレビをつけた。そうすると神戸が燃えて、大変な状況になっていたのをみて驚いたそうだ。東灘区に母の父と母がいるので、飲み水とカセットコンロを父に託していってもらった。私や姉が起きたらどうしようと思って心配に思っていたみたいだが、さっき書いたようにスヤスヤ眠っていたため邪魔は一つ減った。

6:祖父母の被災体験…

私の母方の祖父母は東灘区で被災した。築5年の家だったため家自体は大丈夫だったが、隣の文化住宅が倒れてきて、それに巻き込まれ家が傾いてしまった。家が傾いてしまったため戸が開けられず、閉じ込められてしまった。家の家具は30センチほど動き、二階にあったテレビも一階まで落ちてきていたそうだ。

家に閉じ込められてしまったため、外に出ることができなかった。近隣の人が物干し竿で窓ガラスを割ってくれたおかげで逃げることができたそうだが、祖母曰く地震が起こってどうしていいか分からずパニックになっていたらしく、中から窓ガラスをたたこうとまでは頭が回らなかったそうだ。私の叔父は二階から飛び降りて逃げたそうだ。

倒れてきた文化住宅は道路にまで瓦礫が広がった。その文化住宅では二階の人は大丈夫だったらしいが1階の人の中には亡くなった方がいた。

祖父母の住んでいた地域では近所の人が、声のするところに行って助けるということをしていたみたいだ。私の祖父は大工だったのでのこぎりをもって出掛け、近所の人を助けにいったそうだ。こういう話は初めて聞いたのでとても祖父のことを誇りに思った。

祖父母は避難しようと避難所に行ったが、戸をあけると人であふれているほどたくさんの人がいるという感じで、何件か回ったが結局避難所に入ることができなかったそうだ。そして、避難所に入ることができないまま、数日が経ったある日近所の人から近くの市営住宅に行こうと誘われていき、そこで避難生活を送ることになった。そこの市営住宅は建て替えのため住民の方が立ち退いて行ったあとらしいので空き家だった。部屋の様子はというと、畳はずれていて、下は板の間だったため板もずれ避難した所が一階だったため底が見えてとてもスースーしたそうだ。そこの市営住宅には38軒ぐらいの人が避難してきていて、近所の人はほとんどそこに避難していたそうだ。最初はライフラインのすべてが止まっていたが、しばらくして電気がついて、水は共同の水場、ガスはカセットコンロで何とかなったそうだ。最初のほうは飲料水と電池が不足していて、そこを調達するのに苦労したそうだ。洗濯物は近くの川でして、昼食は避難所となっている小学校に行って、弁当・パンをもらって、足らない分は自炊した。幸いにお正月の後だったので食料がたくさん残っていたため、食べることには苦労しなかった。一番困ったことはお風呂だが1カ月ほど入れなかったが、しばらくして、尼崎のほうに入れる風呂があると聞いて行ってやっと入

れたそうだ。
　祖母は地震の際に鏡台に挟まれて足をけがしていたが、近所の人にそのことを言われるまで気づかなかったそうだ。そして避難所までいき、手当てしてもらった。その時に見た光景だが、火葬場の処理が追いついていないらしく死体が教室にたくさん並んでいたそうだ。私たちの身近な存在でもある教室がそういう場所になるとは信じられないが現実はそうなっていたのだと受け止めるしかない。
　祖父母の家だが、5 月 10 日には元の家を解体することができ 11 月ごろにプレハブの住居を立ててそこに住むようになった。市営住宅に避難した 38 軒の人の中には、仮設住宅に入った人、自分で再び家を建てた人といろいろいた。家を建てようと思ってもローンがある。お金の問題が複雑にかかわってくる。どんなことでも自分でやっていかないとあかんという精神が大切だという。
　祖父母は避難所ではなく個人的に避難生活を送ったため、公のところに避難した人との格差を感じたそうだ。
　当時は大変すぎて、どんなことがあっても、震災に驚きすぎて涙は一つも出なかった。

7：阪神・淡路大震災と私…

　5 歳の時、神戸市の北区に引っ越してきた。自転車でちょっと飛ばせば三田市という立地だった。当時はまだ開発途中の住宅街でお店がほとんどなく、近くにあったのはプレハブで立てられたミニコープだけだった。小学校に入ると 1 月 17 日に震災メモリアル的な行事や避難訓練があり、阪神・淡路大震災のことや防災対策について学んだように思う。中学校になると、やはり阪神・淡路大震災のことについてもやっていたし、トライやるウィークで消防署に行かせてもらった。ほかに防災に触れる機会といえば地域の防災訓練に参加する程度である。そこまで防災の意識は高くなかったかと思うが、両方の祖父母も被災したということもあり、折にふれて話してくれることもあったし、私から聞く機会もよくあった。小さい頃から阪神・淡路大震災について触れる機会がよくあり意識するようになっていたから、阪神・淡路大震災というものの存在は、自分としてはあまり記憶になく現実ではないような感じになりつつある。
　ある時に聞いた話だが、小学校の近くの大きな公園・空き地に仮設住宅が広がっていたと耳にした。今気になって調べてみたら平成7年1月17日に起きた阪神・淡路大震災の仮設住宅建設地として、広大な未開発地域に 1800 戸あまりの仮設住宅が建設されて、平成10年4月以降に県や市の復興住宅が建設され入居が進むのに伴い、平成 10 年度末には仮設住宅が撤去されたそうだ。身近なところに実は阪神大震災と関連のあるものがあったのだと知り驚いた。
　ほかにもルミナリエに連れてもらったりした。最初はただ単にきれいだなという気持ちだったのだが、年を重ねるにつれて震災で亡くなった方々の追悼への気持ちが大きくなってきたように思う。今は観光イベントのようになってきていて、追悼という色が薄くなってきたように思うが、最近のルミナリエでは語り部や震災復興も増えてきているので喜ばしいことだと思う。東遊園地である 1・17 の追悼式には環境防災科に入るまで行ったことはなく、それまでは朝早く起きられればテレビで見て御祈りするという程度のものだったが環境防災科に入ってからは 2 年とも行っている。実際に行ってみると、厳かな雰囲気がした。竹がたくさん並べられ、思いがこもった言葉とろうそくがたむけられている。炊き出しのコーナーもあるし、語り継いでいこうという動きもある。阪神・淡路大震災から 16 年たった今でもまだまだ風化していっていないという現実がうれしく思えた。
　こういう行事に参加するようになったのは、環境防災科で阪神・淡路大震災に触れることが多くなり防災という意識が高くなったということがあると思うのだと思う。1 月 17 日を忘れたくない、風化させてはいけないという気持ちが防災のことを学んでいるうちに大きくなってきたということ

があるのかもしれない。

8:環境防災科に入って…

私は将来、消防士になりたいと思い授業で消防学校に行ける舞子高校の環境防災科に行きたいと思うようになった。ほかにもいろんな理由があるのだが一番大きいのはやはりそれだったように思う。しかし、環境防災科に入り、阪神・淡路大震災のことについて外部講師の話を聞き自分の中で震災のことについて深く理解する機会が増え、ほかにも防災のこと、支援のこと、メカニズムのことなどの授業もあり防災に関して知識も興味も大きくなっていったと思う。ほかにも、積極的にボランティア活動に取り組むようになり、新たな学び・生きがいを見つけることができたと思う。本当に舞子高校の環境防災科に来ることができてよかったと思う。

いろいろな活動・授業を通して、消防士になりたいという夢は薄くなっていってしまったが反対に防災に関する仕事がしたいという思いが強くなった。具体的に今考えているのが兵庫県の防災の職員になることだ。これからどう夢が変わるかはわからないが、防災に対する考え方を磨いていくことができればと思う。

9:これから…

今回の「語り継ぐ」を通して、今まで私が知らなかった身近な「阪神・淡路大震災」のことをより知ることができてよかったと思う。自分たちが住んでいる地域について詳しく知ることも大切だと思うし、防災を学んでいる以上阪神・淡路大震災のことは知っておかないといけないと思っている。

今回の東日本大震災で多くの方が亡くなった。これからは防災の分野が注目されることが多くなるように思う。たくさんの人が関心を持ち、意識が高まっていくということはとてもいいことだと思う。しかし、心配なことが一つある。それは、震災の記憶の「風化」である。今はまだ大丈夫だが、2・3年後には忘れられてしまっていくであろう。自分の目で被害の様子を見て、復興までにこれから何10年というとてつもなく長い時間がかかるのであろうと感じた。これからも末長い寄り添った支援もハード面での支援も続けていかないといけない。日本は地震大国であるため、近い将来に南海・東南海地震が起こるといわれている。おそらく、今回の東日本大震災で起こったようなことが起こるのであろう。ほかにも近畿地方だったら山崎断層帯の地震もあるし、中央構造線帯の地震もあるし、上町断層帯の地震もある。他にも大きな地震が起こりそうなところがたくさんあると思うのだが、日本に住んでいる以上は災害に備えておかないといけない。今、「防災」ではなく「減災」という言葉が言われてきているが、私にとっては「減災」という言葉はただの妥協にしか聞こえない。しっかり「防災」をして備えた上でないと「減災」の効果は果たせないと思う。今回の東北地方太平洋沖地震の津波でも大堤防が破壊されてしまったが、その効果は果たした。自然には人間の想定を上回る力がある。防災を行ったことが結果的に減災につながることがと思うので、これからも防災をしていくことが大切だと思う。

環境防災科を卒業しても、環境防災科で学んだことを生かして災害ボランティアや日常のボランティアにも参加し続けていきたいと思っている。

「被災していない」「覚えていない」は、関係ない。

今井　直人

1. 阪神・淡路大震災当日まで

僕が生まれたのは阪神・淡路大震災の 11 か月前 1994 年 2 月だ。須磨の病院で生まれ、それからは父の実家の奈良県で生活していた。

僕の祖父母は叔母と三人暮らしをしていた。祖父母の家は木造で、築 100 年ぐらいで 15 年前ぐらいに増築した家だ。家で酒屋と居酒屋を経営していた。

祖父母の家は長田だったため当時周りにはケミカルシューズの工場や木造住宅がたくさんあった。また、自動車も入れないような路地が多かった。自宅の前の道路は広く大きな道路だった。

2. 阪神・淡路大震災当日

1995 年 1 月 17 日（火）5 時 46 分阪神・淡路大震災が起きた。僕は奈良の実家でぐっすり寝ていた。まだ一歳にもなっていないので全く記憶にない。母と父は起きてテレビを見た。奈良は震度 5 だったが、神戸の震度は出ていなかった。大変だったなぁと思いテレビを消して寝た。6 時 30 分ぐらいにまた起きてテレビをつけると、阪神高速が倒れている映像が流れた。最初は何か分からなかったが、そのときはじめて故郷神戸に大震災が来たとわかった。7 時前に長田の家に電話した。2 回コールしたが切れてしまった。それからは全くつながらなかった。どうなっているのか、無事なのかが分からなかったのでずっとテレビを見ていた。

祖母は道路の角の家にダンプカーかトラックが突っ込んだと思い目が覚めた。怖くてうつぶせに丸まっていた。祖母の上にはタンスが倒れていて、タンスの上にあった人形ケースが落ち蛍光灯が割れた。祖父は起きて窓を開けて驚いていた。幸い三人とも怪我もなく無事だった。

道路の角の家の子供の「助けて」や「おかん大丈夫か」という声が聞こえた。自分のことで精一杯だったから何もできなかった。後から聞いた話では、母親は逃げれなかったが隙間があってそこに入っていたから助かったらしい。しかし、その家の祖母は屋根の下敷きになって亡くなった。

祖父母と叔母は避難しようと思ったが、シャッターが開かず外に出れなかった。幸い増築した部分は被害がなかったので外にも出れたし、トイレも使えた。トイレの水は家の前の井戸水を使った。5 時ごろまで家にいた。

母は奈良でテレビを見ていると昼過ぎに祖母から電話があった。その時初めて無事を確認できた。母が祖母の実家や叔父に連絡をした。東京からは奈良にすら電話がつながらなかったらしい。

叔母は 5 時頃に通帳やお金を持って西神の親戚の家に行った。祖父母は近所の小学校に行った。しかし、小学校はいっぱいだったため近くのマンションの親戚の家に行き泊まらせてもらった。

3. 阪神・淡路大震災から一週間

翌日まではその近くのマンションで泊まった。朝、祖母の実家から親戚が水、カップ麺、おにぎり、ガスコンロなどあらゆるものを持ってきてくれた。また、酒屋のつながりでアサヒビールやキリンビールの人たちが非常食などを持ってきてくれた。水曜日の夕方から地下鉄の一部が運行を再開した。木曜日からは西神に二泊して土曜からは荷物をまとめて明石にハイツを借りた。月曜

日からJRが一部で運行を再開した。須磨までしか運行していなかったから須磨からは単車で新長田にきた。

4. 阪神・淡路大震災から一か月

明石から新長田まで毎日来て片付けをした。卵焼きやおひたしを作っていって居酒屋のテーブルで食べるものがない知り合いや常連のお客さんに食べてもらった。
僕の誕生日の近くの日曜日には奈良まで船と電車で来てくれた。会いたかったから行ったのだよと言ってくれた。

5. 阪神・淡路大震災から半年

4 月に祖父の病気が判明し、入院のために長田に帰ってきた。それと同時期に僕と姉と母は神戸に来た。普段なら 2 時間で行けるが、このときは 5，6 時間かかった。そのまま長田の実家で寝泊りをして母はお手伝いをした。
5 月に叔母が結婚した。祖父も仮退院して見に行った。祖母はこの一年で唯一うれしかったことと言っていた。
家はキッチンが使えず、水とガスの復旧も遅かった。水は小学校に貰いに行き、電気の炊飯器があったからご飯を炊くことはできた。半年間食べ物に困ることはなかった。

6. 阪神・淡路大震災から一年

7 月に祖父が退院。そのあとも看病が大変だった。
8 月に父も奈良から神戸に転勤して 4 人で新しい家に住んだ。家探しは大変だった。ろくに家もなく家賃もとても高かった。たまたま知り合いの家が空き家だったの安く借りることができた。実家は片付いていたので家業を再開させるためにお手伝いをした。
11 月からようやくお店を再開した。はじめは自動販売機だけだったが一日二回入れ直さないといけないぐらいよく売れた。

7. 阪神・淡路大震災から今まで

祖母は 10 年たって震災で大変だとは思わなかった。いろいろなことがありすぎて祖父の病気もあってそっちの方が大変だった。
震災からちょうど 10 年後の 1 月 17 日、祖父は亡くなった。震災と関係があるわけではないが、僕は何かを語りかけられている気がした。
区画整理により昔あった細い路地もなくなり大きな道路になった。また周りの家は新しくなった。僕の家は区画整理に入らなかったから立て直すことができなかった。そのような家にも何か支援をしてもしいと思った。
今、長田のまちは昔と大きく変わった。防災公園ができて備蓄倉庫なども完備されている。昔懐かしの家が減って新築やマンション、高層ビルが増えた。僕の記憶がある小学生のころからも大きく変わった。少しさみしい気もする。

8. 家族と阪神・淡路大震災

震災で僕たち家族は大きく変わった。親戚は一人亡くなり、奈良から神戸に引っ越した。父も転勤もしたし、母も働くようになった。震災があって本当に悲しいこと辛いことがあったけど、震災

があったからこの素晴らしいまち神戸に来て環境防災科に入れた。僕にとってそれはとてもうれしいことだ。

9. 自分と阪神・淡路大震災

僕は直接被災もしてないし、小さかったから何も覚えていない。だから、あまり震災の影響を直接受けてもいない。だが、祖母から震災の話を聞いたり、震災の写真を見してもらったりする機会があったから少なくともここら辺で震災があったのだということは感じていた。

中学生3年生になると環境防災科という学科があるという話を先生から聞いた。興味を持ったけど、正直高校に行けたらどこでもいいと思っていたから大して調べたりしなかった。オープンハイスクールで舞子高校に行った時、再び環境防災科という名前を聞いた。その時なんとなくここに行きたいと思った。それから、環境防災科説明会に参加して進路を確定した。このときは震災の被災者の家族だからとか被災地神戸に生まれたからとかいう理由で入りたいと思ったわけではない。進路を決めてからは防災や震災について勉強した。その中で印象に残ったのは人と防災未来センターに行った時に見た、地元長田が燃えている写真とボランティアについて書いてある資料だ。このときはじめて、震災と自分がつながった気がした。このときに、神戸に住んでいるのに全然震災を知らないことが情けなくなって、なんとなく環境防災科に入りたいと思っていた気持ちがもっと震災について勉強したいという気持ちに変わった。また、震災の時のボランティアがほとんどはじめての人だったことや地元の高校生が活動していたのを見て自分もボランティア活動がしたいと思ったのも入学したい理由だった。そして環境防災科を受験して、無事合格することができた。

10. 高校生になって

高校生になって自分と震災がより親密な関係になった。今まではただここで大きな地震があったとしか思っていなかったが、震災の勉強をしたり、外部講師の方に話を聞いたりして、忘れてはならない出来事だったのだと分かった。震災の勉強をしていく中で、阪神・淡路大震災のこともそうだけど、いろいろな災害が起こっていると知った。ニュース等で、知っていたけど中身を全く知らなくて、こんなに無関心でいいのかと考えた。僕は被災地神戸に生まれた子どもで、震災の体験を身近に感じているのに他の災害のことをあまり分かっていなくて、もしかしたら神戸以外の土地の人や普通科の人はもっと無関心で災害のことを知らないのではないかと思う。だから、これから僕ができることは過去起きた災害と今起きている災害をほかの人に知らせることだと思う。専門学科で勉強している生徒から友達へ、家族へ、どんどん広めていきたいと思っている。直接被災はしていないが、阪神・淡路大震災は僕に様々なことを教えてくれたと思う。もう二度と自然災害が起こらないことを願うが、もしもの時のために最大限の備えと準備をしたいと思う。

また、僕は高校に入ってからたくさんのボランティアに参加させていただいた。ボランティアがしたいと思って入学したから当然のことだが、そこで感じたことがある。それはボランティアをするのにきっかけは必要だが、体験、経験は必要ない。ということだ。あの災害に被災したから災害ボランティアをする。とか、被災地神戸に生まれたからボランティアをする。ではなくて、人の役に立ちたいからボランティアをする。で良いのだ。もっとボランティアを身近に感じてもらって、気軽にたくさんの人に参加してもらいたい。そして自分も環境防災科のレールの上を走るだけじゃなくて自分でボランティア先を見つけて率先して参加したいと思う。

11. 感想

僕は祖母と母に震災の話を聞いた。正直、面と向かって震災の話をする機会はなかったし、

することもないだろうと思っていた。しかし、授業という形で話を聞くことになってなんて言おうかなんて聞こうかと考えていた。いろいろな話を聞いて、なぜ今まで聞かなかったのだろうと後悔した。また、聞けてよかったと思った。自分に深く関わりのある人が被災していて、そのリアルな話が聞けてこの話をもっといろんな人に聞いてもらいたいと思った。震災の経験は忘れることはできない、忘れてはいけない経験だ。その話を聞くことは大切なことだと思う。

また祖母の話からも教訓があった。それは人とのつながりだ。祖父の親戚の家に泊まることができたり、祖母の親戚の人がいろいろな物資を持ってきてくれたりしたのもつながりだ。また、アサヒビールやキリンビールなどの酒屋としてのつながりも大きく役に立った。そして、自分が支援できる立場にあった祖父母は酒屋の飲み物を被災者に提供したり、トイレを貸したりとさまざまな支援活動をした。その中にもここの人なら大丈夫というつながりや信頼があったからこそ成り立ったものだと思う。このような教訓を少しでも多く知ってこれから役に立てたいと思う。

僕は将来高校の教師になりたいと思っている。教師になって防災を広めたいと思うが、今回のような身近な人の被災体験を聞くという授業をやりたいと思った。これほど一人一人に響く防災教育はないと思ったからだ。

今回、話を聞いただけではなく、自分で自分と阪神・淡路大震災とのかかわりについても考えた。今までは「被災地に住んでいる。」「親戚が被災した。」程度のかかわりしかないと思っていた。しかし、阪神・淡路大震災があって生活に大きな変化があり、知らないところで僕も影響を受けていると思った。高校に入るまで特に阪神・淡路大震災の勉強もせず何も知らなかったけど、かかわりはたくさんあったから、これからはもっと勉強してもっとかかわりたいと思いました。

12. 最後に

今回話を聞いて「被災していない」とか「覚えていない」とかは関係ないと思った。神戸に住んでいる以上周りの誰かは被災しているのだ。被災していなくても自分で調べたり、話を聞いたりすることで阪神・淡路大震災を知れると思う。今回そのことが本当に大切なことだと分かった。何が変わるとかじゃないけど、阪神・淡路大震災を知らない、人に少しでも阪神・淡路大震災を知ってほしいと思った。そして自分自身もっと阪神・淡路大震災について勉強して「被災してない」「覚えてない」という人が居ても「知らない」という人が居なくなるように広めていきたい。

今年東日本大震災が起こった。僕は被災していない。しかし、被災地に行ってボランティア活動をさせてもらった。僕は「被災していない」立場だが、ボランティアに行って感じたことや東北の現状を少しでも多くの人に知ってもらいたい。阪神・淡路大震災を忘れないように東日本大震災も忘れないようにしていきたい。

「語り継ぐ」

江川このみ

阪神・淡路大震災は私にとって正直身近に感じられる災害ではない。よくニュースなどで流される当時の映像も今の神戸とはかけ離れており、その映像から「ああ、あそこだ。」と分かることはない。私は当時一才。一応被災した身ではあるが、記憶が全く無い。今阪神・淡路大震災から17年がたち、今のほぼ完全に復興したこのきれいな神戸の街しか知らない。「ルミナリエ」や「1・17追悼式」などは昔からのなにかのイベント事のように思える人もいると思う。でも、確かに今いる神戸で17年前、一瞬にして大切なもの、全てが消えたということを絶対に忘れてはいけない。

また同じことを繰り返さないためにも、語り継いでいくことは重要だ。私も語り継がれたことを語り継いでいく。

1.　震災前日

震災の前日はもちろん地震が起こるなど考えもしなかっただろうと思う。あの当時はここで大きな地震は起こらないと思われていたからだ。家族は私と、母、父、4つ年上の姉。
この4人で当時は垂水のハイツの2階で暮らしていた。震災の前の夜は、私は母の枕元で寝て、後の三人は川の字になって家族みんなで一緒に寝ていた。

2.　震災直後

揺れが起こったとき、私の母はすぐに1歳の私を抱えて姉を連れて、父と一緒に机の下に避難した。私たちの住んでいた家は棚の中の食器が割れたりしたくらいで被害はあまりなかったという。しかし、すぐ隣の家は食器棚などが倒れたりしたそうだ。

家は少し高台にあり、周辺を見渡すことが出来た。向こうのほうで崩れている建物などが見えた。

父

単車に乗って最寄り駅の朝霧駅に様子を見に行った。駅は崩れていて駅員さんには電車は動かせないといわれた。その後、幼稚園の様子を見に行った時は、道に沢山の段差ができておりひび割れたところから火が上がっていた。おそらくガス管が割れたのだろう、それ以上は進むことができなかった。家に着いたころには単車のタイヤがパンクしていた。相当地面がでこぼこだったということがわかる。

震災当日の昼くらいから電気が復旧し始めテレビがついた。ニュースは長田あたりから須磨のほうまで火の手が迫っているという報道だった。須磨には私の祖母と曾祖母の住む家がある。電話は全くつながらなくて安否の確認ができなかった。祖母の家の近くの小学校までもう火が迫っているということで、父は同じハイツに住む人の単車を借りて急いで須磨まで様子を見に行った。

国道二号線沿いに進んで、垂水までは割りとすんなりと進むことができたのだが、そのあたりから進むのが困難になった。回りの景色も全壊した家などが見えるようになってきてだんだんとひどいものになっていった。道の先の遠いところで煙が上がっているのを見た。何かを焼いているというような煙ではなく、今までに見たことも無いような太さの真っ黒な煙が何本も空に向かって上がっていたそうだ。

祖母の家に着いたときには近くまで煙がきており危ない状態だった。幸いどちらも助かって本当によかったと思う。普段なら３０分でいける道のりを３時間ほどかけて行ったそうだ。

母

電気がついてテレビをみることができるようになったのは昼ごろ。それまで情報を手に入れるすべが無く、被害の少なかった地域にすんでいたため地震の規模はどこもその程度だろうと思っていた。テレビにいきなり映ったのは、慣れ親しんだ三宮の壊滅した映像だった。

知っているビルが２，３，４階あたりから崩れていたり、傾いていたり…。そのときにとてもショックを受けたそうだ。

3.　その後の生活

ちょうどインフルエンザが流行っていて「感染したら嫌だね。」といっていた時期に地震が起こり、母と姉はインフルエンザに感染してしまい相当つらかったという。ガスはなかなか復旧せず、寒い時期でお風呂にあまり入れなかったのが辛かった。たまに三木市に住む友人がお風呂を貸してくれた。

朝から夜まで、絶えずサイレンの音が鳴り響いて怖かったそうだ。夜中にふと目が覚めて眠れないようなこともあった。

その時まだ一才だった私にも変化があったそうだ。今まで人見知りもせず愛想の良い子供だったらしいが、普通ではない日常を繰り返していくうちに、知らない人の顔を見なくなった。絶対に目を合わさなくなり、「どうしたの？」と覗き込むとしまいには自分の腕で自分の顔を隠すようにしていたらしい。一才で状況など全くつかめていなかったと思っていたが、何かしらのストレスを感じていたのだろうと思う。

当時住んでいた団地は家族構成や年齢の近い人が多かったためご近所との繋がりが深かく、いろんな面で助かった。物の貸し借りや譲り合い、例えば水を汲みにいくときに車を貸してもらったり、またすぐ近くが明石市ですでに水道も電気も使えた友人のところで洗濯機を使わせてもらえたりもできた。そのあたりの面では困ることはなかった。当時団地に住んでいたことは本当によかったと思う。コミュニティーがしっかりしていたからだ。

今すんでいるところではなかなかうまくいかなかたと思う。一戸建てや学生アパートが多く、あまりご近所付き合いも深くないし、すんでいる年代が様々だからだ。

父の仕事場は当時三宮のセンター街の中にあったのだが、震災で傾いてしまい店をたたまざるを得ない状況になってしまった。まだ電車も使えなかったので、父は単車で大阪まで仕事に行っていた。

祖母、曽祖父の家は結局取り壊しになりしばらく一緒に住むことになった。祖母の話では、「こっちにあったテレビがあっちに、あっちにあった棚がこっちに」というような状況だったそうだ。祖母と祖父母はお互いにしがみついて守っていたという。祖母の家は平屋だったから倒壊することは無かったが、近所の二階建ての家はすべて道路に崩れていた。震災前の祖母の家周辺は、古い家並みだったが今は復興住宅が立ち並び綺麗で新しい街に様変わりしている。近くには公園があり、当時５歳だった姉はその公園が好きだった。しかし震災の後仮設住宅が建ち始め遊べなくなり悲しかったという。仮設住宅はずいぶんと長い間、仮設住宅が結構古くなるくらいまでたっていた。仮設住宅が撤去された後も、その公園にはテントを立てて住み着いている人がまたその後何年もいてあまりいい雰囲気ではない状態だった。

祖母が復興住宅に住めるようになったのは震災が起こってから２年くらいたてからだった。祖母が住んでいて立ち退かなければならなくなった場所はいまだに空き地のま

まだそうだ。
　この祖母は母方のほうだが、父方の祖父と祖母の家は山のふもとのほうにあって地震により大きな岩がおちてきたそうだ。こちらも怪我などは無かったので幸運だったと思う。大きく崩れることは無かったようで、今でも当時と変わらない場所に住み続けている。

4.　　神戸の復興
　私からすると、神戸は完璧に元に戻ったように思う。しかし私は震災後の、それも復興した後の神戸しか知らない。神戸で生まれ、神戸で育ってきた私の母は、震災前と震災後とでは神戸はずいぶん違うという。昔からあった”神戸のお店”は再建できずたたんでしまったというところはたくさんあるらしい。例えば父の働いていたお店もそうである。三宮で映画を見に行くときにそのお店で必ずサンドウィッチを買って持っていくというのが恒例だったのだが、そのお店は今はもう無い。
　街には、そこに住んでいた人々の思い出がたくさんつまっている。地震はそれも壊してしまう。街を再建できても、人の思いまで元に戻すことができないということがわかった。やっぱり災害はとても悲しい出来事だと思う。

5.　　防災対策
　震災前私の家は防災対策は全くしていなかった。被害が小さくすんだことは幸運だったと思う。震災の後、荷物をまとめたりというように防災対策をしてはいたが、今している防災対策は水を買い置きしておくことくらいになっている。そういったところで、やはり感覚として阪神・淡路大震災というものが過去になってしまっているんだなということがわかった。

5.　　1･17 追悼式
　私は環境防災化に入ってから 2 度、1･17 追悼式に参加した。初めて参加したときは安易な気持ちだった。毎年ニュースや新聞でみる光景を実際に見に行ってみようというくらいだった。、この追悼式は多くの人の多くの思いが詰まっていることを知った。竹に水を入れろうそくをひたすら並べるといった作業をしていると知らない間に人が増えてくる。5:46 分に間に合うように早朝からいろいろなところから人が足を運んでくる。
　十何年たってもあの阪神･淡路大震災の傷は癒えない。黙祷の瞬間はそれはどうあらわしていいのかわからないような気持ちになる。悲しく、痛ましいような空気が流れる。でも暖かいようにも思う。何か重みを感じて心がいっぱいになってくる。私は一度でもこの追悼式に参加してほしいと思う。

5.　　これから
　私はこの大好きな街神戸を守っていきたいと思う。簡単なことではないけど、一つ一つの簡単なことの積み重ねで、大きな力になると思う。この環境防災科を中心として皆でこの街を思い、守っていければと思う。私は将来、保育士になりたいと思う。ちょうど授業で夢と防災とのかかわりを考える授業があったのだが、消防士や、救急救命士といった仕事と比べるとやはり防災からは離れてしまうような仕事だと感じた。でも少なくてもその仕事で防災を広げていけるということも実感した。
　例えばストレートに、子供たちに防災について教えること。簡単で良いから自分のみの守り方を知っていてほしい。また保護者を通して防災や震災についてしってもらいたい。そして一番重要なのは保育士には子供を守るという重要な仕事があるということ。

今回の東日本大震災では保育中の子供たちの被害が 0 件だったことを聞いて私はとても驚いた。普段から避難経路、避難方法を確認して、避難訓練を重ねた結果だという。保育士の気持ちの重要性を改めて強く感じた。その仕事を通して少しでも多くの人に伝えていきたい。また、子供たちのいのちを全力で守りたいと思う。

6. まとめ

母にも、阪神・淡路大震災はもう過去のことで、これ以上は思いつかないといわれた。
確かに十何年も前のことでしょうがないと思う。

私は震災当時の神戸を知らない。話はたくさん聞いたし、写真もいろいろと見たことがある。でもやっぱり私は阪神・淡路大震災を知っているとはいえない。今年は東日本大震災という大規模の災害が起こり被災地を訪れる機会があったが、やはりテレビを通して見るのと実際に自分の目で見るのとは感じ方に大きな差があることを知った。被災したその地に立って見ることで何が起こったのか、少しは事実に近づける。阪神・淡路大震災はもう過去のことである。被災した現地に行くことはできない。本当の阪神・淡路大震災の被災地を知っている人はもう多くないのではないかと思う。

今回東日本大震災が起こり、関西の地域にすむ人は地震に対する安心感を持ってしまっているような気がする。東日本で余震が絶えず続く中で西日本ではまったく地震が起こらない。「大変やなあ。」と地震速報を見て他人事のようにそう言う。

でもここは少し前に震度 7 の大地震が起きたところだということを、意識の中で絶対に忘れてはいけない。いつ大きな地震が起こるかは誰にもわからない。現在だと震度4以上の大きな地震が起こるとされる時に緊急地震速報が流れる。緊急地震速報から実際に地震が起きるまで、自分はいったい何ができるのかをもっと考えておく必要がある。

「かつてこの場所でこんな災害があった。」ということを聞かされても、同じことが起こった時にまた同じことを繰り返しているのが今の現実だと思う。自分はどうやって最良の方法で被害から逃れることができるのか考えてみても私自身はできない。

地震を起こらないようにすることは不可能である。でも被害を減らすことは個人のほんの少しの心がけで、簡単に出来ることだと思う。

もし、阪神・淡路大震災が起こる前に、「ここは地震は起こらないだろう。」という考えが無かったなら、被害はもっと少なかったかもしれない。今でも、「ここは東日本のようにはならないだろう。」というような安易な考えでいると、本当に危ないと思う。地震はいつ起きてもおかしくない。

阪神・淡路大震災は多くのものを奪い、そして多くの教訓を残した。

多くの死を無駄にしないためにも、阪神・淡路大震災を忘れず、教訓を活かしていくこと亡くなった人の死を無駄にしないためと思う。

「過去がくれた、今」

太田　聖母

〔はじめに…〕

「阪神・淡路大震災」…震災当時0歳だったため、そのときのことを思い出そうとしても自分での記憶というものは全くない。どんな揺れだったのか、周りがどんな景色だったのか、わたしは全て人から聞いたことや、映像でしか見たことがない。そのため中学生の頃までは自分の中で自分は体験していないような、他人ごとのようなそんな変な気持ちをもってしまうときがありました。でも高校で環境防災科に入り勉強するなかでそのような気持ちは消え、今は他人ごとではない決して忘れてはいけない出来事だと思う。記憶はないのでここからはお母さんから聞いた話をしたいと思います。

〔阪神・淡路大震災〕

1.　　震災までの生活

私はお父さん、お母さんと神戸市兵庫区の新築マンションの3階に住んでいた。お父さんは大阪でサラリーマンをしていた。お母さんは専業主婦だった。

2.　　被災

1995 年1月 17 日(火)5 時 46 分、ゴーという地鳴りでお母さんは目が覚め隣に寝ていたお父さんに「パパ、地震！」と言ったが返答は無く、何度も言うと「わかってる！」と言われた。部屋に太い物干しがあり、お父さんとお母さんの頭上で寝ていた私に落ちると危ないとお母さんは私に覆い被さった。それと同時にその物干しがお母さんの上にのしかかって来た。しばらく続く揺れ…お父さんの声はしなかった。揺れがおさまってきたので、お母さんの上の物干しをのけてもらおうとお父さんに助けを求めると「助けたいけど…俺にもタンスがのってて動けへん。」と言われた。真っ暗で何も見えないなかお父さんも自力でタンスをのけ、助けに来てくれ、お母さんと私も脱出した。みるとその物干しは湾曲をえがいて折れ曲がっていた。お父さんが「そこにいろ。」と言い、外の様子を見に行こうとしたのか、何かは分からないが玄関の方に向かった。だがお父さんがリビングの辺りで「いたっ！」と声を上げた。割れた食器を踏みケガをしてしまった。お父さんは3人の靴を持ってお母さんと私の元へ戻ってきた。靴を履き、上着を着て、私を毛布で包んでベビーカーにのせ、外に出た。

隣の住人の人も出てきていたので一緒に近所の避難所になるであろう中学に向かった。その途中自分達のマンション以外の建物が全壊だったため、その光景にお母さんは愕然とし震えがとまらなかった。またいろんな場所で助けを求める声がしたが「大丈夫ですか？」と声をかけるのが精一杯で助けに行くことができなかった。とにかくその場から逃げるので必死だった。中学校に着いてからの記憶がお母さんにはほとんどない。

すぐに中学校を後にし、大倉山にあるお父さんの親戚の家に行った。お父さん側の身内の安否を確認し、ニュースなどで現状を知った。

灘のお母さんのお祖母ちゃんの様子が気になり、線路を辿り歩いて大倉山から灘へ向かった。何時に出発したかは覚えていないが、お祖母ちゃんの家の近くに着いたのは夜の8時頃だった。しかしお祖母ちゃんの家は全壊で、お祖母ちゃんの姿もそこには無かった。「避難所だ。」と思い近くの小学校に行き体育館に居た係りの人に聞くと「その方は中学校にいます。」と言われ急いで中学校に向かった。中学校に着くと、一足先にお母さんの父と姉が来ていた。みんなでお祖母ちゃんの所に行くと、ケガ一つなく元気そうなお祖母ちゃんが居たので、お母さんは思わず

無我夢中で抱きつき「良かった…生きてて…」と涙を流した。
　その後、お母さんの父がお祖母ちゃんを連れて実家の猪名川町に帰ると言ったので、一緒に連れて行ってもらった。地震の影響で道は寸断され、高速も閉鎖され、逆走する車などグチャグチャだったため、夜に実家に向かい明け方に実家の猪名川町についた。私はそれまでずっとベビーカーで眠っていた。お母さんにとっては、途中で泣いたら困ったのですごく助かった。

3.　　避難先での生活
　1・2ヶ月猪名川町にあるお母さんの実家で生活をした。
　そこでは、スーパーもあり何も不自由は無かったが、「向こうに帰ってからオムツやミルクをどうすればいいのか。」など毎日不安や悩みばかりだった。毎日「こっちも地震がくるのでは。」など嫌なことばかり考えてしまい恐怖に脅えていた。
　そんななか実家で見た新聞記事で「人生で3度地震を経験した」というお祖父さんの記事。「その人はどんなメンタルの持ち主なんだろう。」とすごく驚いた。

4.　　元の生活に戻るまで
　実家に避難し1ヶ月がたった頃、お母さんの父が「お前は、家が気にならんのか？普通は気になるやろう。ここに居て欲しくないとかではなく、一回家の様子見て片付けてきなさい。」と言われ、お母さんとお父さんは電車に乗ってマンションへ戻った。
　着くと、たまたま隣の人のお父さんが「何でも持っていってくれるの今日までや。良かったな。」と教えてくれた。そのおかげで分別せずに捨てられたので楽だった。重いものをのけるために若い男の子が手伝ってくれた。そのとき、地震のときお父さんにのっていたタンスを男2人で持ち上げようとしたが全然動かず、「火事場の馬鹿力ってあのことを言うんやな」とお父さんは言っていた。
　その後ライフラインが復旧したのでマンションに戻った。そこから毎日どうやって生活していたかあまり覚えていない。

〔お母さんの想い〕

　今でもすごく怖いし、当時のことは思い出したくないので記憶を抹消しようとしている部分がある。正直、娘が居なかったら守るべきものもないのでここまででなかったと思う。
　今となっては、日頃からの備えやシミュレーションに越したことないと思う。しかし、個人の備えは小さいがそれが大切だと思う。また、行政が阪神・淡路大震災での教訓がいかせていないと感じる。もっとすばやく動けるように行政も備えが必要。

〔1,17 からの神戸〕

1.　ルミナリエ
　私は高校生になって初めてルミナリエに行きました。見たときで現実ではないみたいに綺麗で驚きと感動でいっぱいでした。今では神戸のシンボルとも言えるルミナリエは阪神・淡路大震災を契機に鎮魂と追悼また街の復興を祈念していて、震災で激減した神戸の観光客を呼び戻す目的で開催されはじめた。毎年今年で終わるとか噂が出ているが、私はあんなに素敵なものはずっとやっていて欲しいです。ルミナリエをとおして、もっと阪神・淡路大震災を知らない人に知ってもらえればいいなと、いい機会になると思いました。また、私はいつか自分の子供と一緒にルミナリエに行き、ルミナリエから阪神・淡路大震災のことを語り継ぎたいと思っています。

2.　1,17 追悼式

　初めて追悼式に環境防災科に入っていきました。正直何をするのかもよく分からないまま行きました。でもそこでたくさんのひとが５時 46 分に泣きながら手を合わせていて、その光景に私も自然と目に涙が滲みました。こんなに経ってもあの阪神・淡路大震災で大切な人を無くした人のなかでは時間があの日から止まっているのだと感じました。そんな人たちにとって阪神・淡路大震災は決して忘れることのできない、忘れて欲しくないことだと思います。震災を忘れないためにも 1,17 追悼式はこれからも続くと思う。だからこれからも私は参加したいと思いました。

〔環境防災科〕

1.　　環境防災科で得たもの

　私は環境防災科に入学するまで震災に興味や関心はあまりありませんでした。でも入学し、たくさんの外部講師の方が当時の様子などをお話して下さったり、また毎年 1 月 17 日前後にテレビでは阪神･淡路大震災の特番が組まれているのを見るようになり少しずつ考え方や思いが変わってきました。たくさんのボランティア活動をとおして人々の温かさやたくさんの経験をすることができ価値観も全く違うものになりました。変わったのは私だけでなく私のお母さんも変わり始めました。入学当初は学校で聞いた話を帰ってお母さんにするととても嫌がっていました。震災関連のことに敏感で、特番などもお母さんは絶対に見ませんでした。でも最近では｢あのとき･･･やった。｣｢すごく大変やった。｣など少しずつではあるけれど当時の話をしてくれるようになりました。

　私がこの3年間で阪神･淡路大震災のことなど勉強して思ったのは、入学前に私が震災に興味や関心が無かったように、環境防災科のように勉強する機会や場所がないと学ぶことがないのが現代の若者だと思います。だから私たち環境防災科は若者が少しでも震災に対して興味･関心が湧くようにお手本になりこれから増える震災を知らなかったり、経験していない人にこの震災や自分たちの体験を風化させないように伝えていくことが大切だと思いました。

2.　　東日本大震災と阪神・淡路大震災

　2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が起こりました。そのとき家で現地の様子をテレビで見て「何かしたい。」と思い、学校が行った募金活動にも参加しました。そのときに１人の人に「阪神・淡路大震災ではたくさん助けてもらったから、これ届けて助けてあげて。」といってくれた人がいました。そのときに「東日本大震災と阪神・淡路大震災は別ではない、あの時は東北の方にもたくさん助けてもらい、今回はこっちが助けるときだ。」と思いました。

　また、実際に現地に泥かきボランティアに行きました。被災から２ヶ月経ってもまだ大変な状態でした。被災地というものを初めて見たので私は言葉を失いました。でも阪神・淡路大震災のときもこんな状況だったが、今はキレイになっていると思ったときに、「早く東北も元のキレイなまちに戻るように今できることを精一杯頑張ろう。」と思いました。

５日間泥かきをしていると、お家の人や近所の人などたくさんのお話も聞きました。みなさんに「お姉ちゃんたちも阪神・淡路大震災経験したもんね」と言われました。でも私たちは記憶もないし、赤ちゃんなのでお母さんやお父さんなど大人が助けてくれたので、実際全然苦労なんてしていません。だから今回被災地に行って、お話しや被災地を見て苦労や恐怖などを身に沁みて感じました。

　この東日本大震災でのボランティアをとおして、改めて震災を決して忘れてはいけな

いと思いました。東北に行くまで阪神・淡路大震災を忘れてはいけないとは思っていたけれど、そこまで深く考えていませんでした。でも実際に被災地に行き、この光景や現状、こんなことがあった事実を風化させ、いつか人々の記憶から無くなることは絶対にあってはならないと思いました。だから阪神・淡路大震災や東日本大震災でのたくさんの教訓や失敗があったと思うので、それをたくさんの人に、そして次の世代に語り継ぐことが大切だと思います。

〔将来の夢〕

私の将来の夢は歌手になることです。歌手になって、たくさんの人に元気や勇気を与えることができ、なにかのきっかけを与えられる歌手になりたいです。

東日本大震災でたくさんの歌手やアーティストや有名人などが被災地を訪れ、みんなの力になっている姿にとても感動しました。それと同時に、わたしもたくさんのひとの力になりたいと強く思いました。しかしどんな人も行くのは被災直後ばかりで、被災して何ヶ月も経った…また何年も経つと行かないと思います。でも私は被災直後だけでなく、復旧復興してからも、継続的にその場所に行って力になれる歌手になろうと思っています。また防災に詳しい歌手としていろんなことを発信していける人になりたいです。

〔これから…〕

私は3年間防災や災害について学んできて、今では興味や関心があるけれどまだまだ興味や関心のない若者はたくさんいると思います。だからそういった人でも分かるように、阪神・淡路大震災のことをもっと話せるように自分ももっと阪神・淡路大震災について勉強してたくさん知っていきたいです。

また今、私が阪神・淡路大震災や防災・災害について知っていることはほんの少しだと思います。だから防災に詳しい歌手になれるように、もっともっと防災の知識を増やしたいです。そしてたくさんの人に自分の聞いた話でいいから阪神・淡路大震災について語り継いでいきたいです。

両親と私の震災体験

大西　遼佑

１、私の阪神・淡路大震災の記憶

私は、完全に阪神・淡路大震災についての記憶がない。
しかし、今まで小学校や中学校の震災教育や高校生になってからの環境防災科で習ってきたことを使い、父や母に聞いた話をまとめた。
少し感じることがあったので、父と母は別に記入した。

２、家族構成

当時、父（３２）母（３２）私（１）の３人家族。今は妹がいるが、妹は震災の２年後に生まれた。
避難生活の時は、この３人家族に、実家の祖父、祖母、叔父、叔母、義叔父とともに生活をした。

３母の話

３−１　1/16 前日

この頃私たちはまだ引っ越したばかりで、マンションに住んでいた。
１／１６日、長田で母方の曾祖母の葬式が行われていた。
母はこの時点で風邪気味であった。さらに母の話ではこの日から何度か地震があったらしい。
特に違和感があったこととして、母は今まで育ってきた曾祖母の家で体験したことのない現象が起こったらしい。昔から地震の前はナマズが暴れたりと、動物が暴れ回ったりするという話があるが、実際に屋根裏でネズミがどたどたと走り回っていたそうだ。
そして家に帰ったら母が高熱が出てしまった。
その夜は母と父と私と３人で寝た。

３−２　1/17 震災の日

母と父と３人で寝ていた。ものすごい揺れと音だったそうだが私は起きなかった。
部屋の中の物がぐちゃぐちゃに飛び散り、戸棚の中の食器はすべて落ちてしまった。この後すぐ名古屋の父方の実家に電話をし、友人から実家の安否がわからないと電話がかかってきてこの段階までは電話は通じていた。
この時点で母はインフルエンザの可能性があったため基本的に安静にさせていた。
父は祖母の家が心配になったので車で神陵台に行ったらしい、そして祖母の家に着き、確認したら多少歪んではいたが大丈夫であった。
そこで、マンションでは４階から１回まで階段でも上り下りしなければならなかったことと、祖母の家には食料が溜め込んであり、さらに友人が井戸のある家だったために祖母の家で住むことになった。ただ、母がインフルエンザにかかっていたため、母はしばらく自宅で生活していたしていた。

３−３　震災後・避難生活

母は震災当日から３日間マンションの方で生活し、ぐちゃぐちゃになった部屋や食器などを片付けていた。そのとき一番困ったことがやはりマンションのため、１〜４階を階段で移動しないといけないことだった。
震災後外に出ると雪が降っていると思ったら、長田から流れてきた灰が降っていた。
それから、三日たち、母も祖母の家に合流し、一緒に避難生活を始めた。
しかし、１月なので電気もない状態ではとても寒かったため叔父が会社よりアラジンストーブというストーブを借りてきてくれたらしい。それで湯を沸かしたり簡単な調理をしていた。
そして生活していく上で欲しい物はだいたいあったのだがお風呂が問題だった。だが運良く近くの銭湯がすぐに営業を再開し、その銭湯は地下水で行っていたため水にも困らず営業を再開できたらしい。
しかし、毎回銭湯に行くわけにはいかずたまにはタライにお湯を張りで体を洗ったりなどしてお風呂の代用もしていた。
基本的に母はいつも祖母宅と自宅を行き来して片付けをしていたのだが、マンションの下の集会場にいろいろな情報が集まっていた。（水、救援物資など）

４、父の話

同じところも多いが、基本的に行動は母と供にしてなかったようでいろいろ違った点も見られるため上げようと思う。
さらに震災後父はボランティアとしても活動していたはなしなどもある。

４−１　1/16 震災前日

母方の曾祖母の葬式の準備で忙しい朝だった。
そんな中、マンションに住んでいるため、ベランダから淡路島と明石海峡が望めるのだが、淡路島のほうを見ると海峡の真上に奇妙なＶ字状の雲が発生していた。そのＶ字の頂点はタコフェリーの航路の少し西を向いていた。
葬式、では父と母は初七日の法要を終えて、疲れて果てて家に帰った。

４−２　1/16 前日、夜

風邪気味だった母は、こじらせたようで熱がでてきた。
当時、一歳になって間がないに自分に風邪をうつすといけないと言うことで、いつも寝ている場所を変更し、母はいつも父が寝ている別の部屋で眠り、父と私の二人で寝た。
夜中に私が泣き始め、いつまでたっても泣きやまず結局、隣室から母があやしに来てそのまま三人で寝入った。

４−３　1/17 当日、早朝

そして寝てすぐに、遠くからどんどんどんどんがたがたがたがたと、超高速で音が近づいてきて体が上下に揺られ始めたと思ったらドーンという音とともに下からすごい力で突き上げられました。

それからは必死で上から何かが崩れてきても大丈夫なように父が私たち２人に布団をかぶせて、跳ね飛ばされないようにそれを上から押さえつけていた。
揺れが収まってから、布団をはがすと自分は気持ちよさそうに眠っていたらしい。
父はすぐに玄関のドアが開くか確認しに行き、母がリビングの床が食器などのガラスが飛び散っていて危ないというのでスリッパをはいてリビングに行き父の実家（名古屋）に電話をし無事であることを伝え、すぐに母の実家に電話したところもう電話はつながらなくなっていた。
この前日から、長田の曾祖母の家に親戚が線香を絶やさないために泊っていたのだが、震災が来て正面の長屋が全壊してしまい、その親戚の人は数名助け出してその後曾祖母の家でしばらく一緒に避難生活を送っていたらしい。

４－４　1/17　当日、朝

それからうっすら明るくなった外に出てみたらマンションの他の人たちも出ていて、軽いけがをした人が一名で済んだことを確認し、マンションの近辺（朝霧周辺）を歩いてみた。
屋根瓦が落ちている家が結構あったが、近所にはつぶれている家はなかった。JR の線路（海岸沿い）まで行ってみると、貨物列車が脱線しているのが見えた。
家に戻って風呂に水をためたのち、電話がつながらなかったこともあり、心配なので母の実家（神陵台）へ車で行ってみた。途中のバス路線では、破れたガス管に引火し、道路の端から端まで炎のフェンスができており、通れずに大きく迂回して行った。
母方の実家も決定的な被害はなく、その日からはそこで家族七名での避難生活が始まった。
この日は家の片づけや情報の収集（水の出る公園など）をしていたのだが、ふと東の空を見ると黒煙が立ち上っていた。しかし、当時携帯などでテレビが見られるような時代でもなかったためどうにか知ろうとして車のラジオで長田が火事になっているという情報を知った。

４－５　1/18　自転車で

この日父の会社や祖父の会社をどうなっているか見に行くため、義叔父と自転車を飛ばして三宮まで向かった。
三宮に向かう途中、須磨のあたりから急に倒壊している建物が急増し、父はここに断層が走っているのだろうな、と考えたらしい。
三宮に着くとビルが、お互いがお互いを支えあうように倒れかけている状態のものが多くみられた。アーケード街にも入ろうと思ったのだが、その時余震が来て、アーケードの上からバラバラバラといろいろな物が落ちてくるのを見て、危険と判断し入らなかった。
その後、ハーバーランドにある父の会社と貿易ビルを見に行った。
父の会社はビルの一部を借りているのだが、中はぐちゃぐちゃになっていた。他の部屋ではスプリンクラーの誤作動で PC がすべてダメになってしまっているところもあった。
このころからすでに、自衛隊の人々ががれきをのける作業をしていたらしい。

４－６　1/19~ ボランティア

この日から、父と父の友人とで車でボランティアに向かった。
最初のボランティアは届いた救援物資を分ける作業をしていた。救援物資にはいろいろなものがあり、翌日から雨だということで全国からたくさんのブルーシートが集まってきた。このブルーシートで壊れた屋根などにかぶせて、雨をしのぐらしい。父は途中からこのブルーシートを配り歩くという作業をしていた。
そのあと、救援物資を市役所からしあわせの村に集めるということで、しあわせの村に運びに行った。そしてこの日のボランティアが終わったのだが、救援物資の中に柿の葉寿司などの生ものが多くあり、このままでは腐ってしまうからそこのボランティアの人たちみんなで分け、持って帰った。
翌日、またボランティアに出かけると、今度は野村工業高校でご遺体を運ぶ作業をした。教室が安置所になっていた。
そこの避難所に看護師さんがいたのだが、その人の手伝いで体調の悪い人はいないか避難所を回っていた。すると、女性が「父が持病もちで、発作が来てしまった。薬がない、助けてください。」と訴えられた。看護婦さんに言うと薬がない。と言われ、父と友人で相談し、このあたりでその発作を止める薬のある病院を探そう。ということになり、まずNTTに電話し、事情を説明し、このあたりの病院をリストアップして教えてくれ。と言い、緊急事態ということでNTTも快諾してくれ、病院を探した。するとそこから2～3キロ程度のところに薬のある病院があることがわかり、娘さんとお父さんを車に乗せその病院まで運んだ。そして薬を投与してもらうとかなり落ち着き、そのお父さんに拝まれるほど感謝された。
その人の話を聞くと、長屋の大家さんらしいが、その長屋がつぶれ、住民の人や奥さんまでもが目の前で焼け死んでしまったらしい。そして、生き残った住民の人に責められていて、心が不安定になり、持病が発病してしまったらしい。
そして、父と友人が病院を後にして、西代のセンターに向かった。そこでボランティアをしようと思ったのだが、誰もボランティアを統率する人がいなく、仕方なく父と友人とだけでセンターにたまっていた救援物資をリヤカーに乗せて配り歩くという作業をしていた。焼け野原を歩いていると、ところどころに明かりが見え、なにかよく見てみると、亡くなった方にささげているろうそくだった。それを見てとてもつらい気持ちになった。

４－７　1/21 大阪へ

この日、父以外の会社の人が大阪に住んでいたため、打ち合わせをするために大阪にむかった。
大阪の北新地に行くと、いつもとなんら変わらぬ生活をしていることに大きなショックを受けた。少し場所が違うだけでこんなにも違うことに驚いた。
帰りに、大阪で六甲道の友人にたくさんの物資を買って帰った。
帰る途中におじさんが一人歩いていて、どうしたのかと尋ねると、「今いた避難所の食料が少なかったからたくさんあるところに移動しているんだが、思ったより遠くて困っている」といい、父が車に乗せ、連れて行っていたのだがその道中、父がおじさんにどこから来たのか尋ねると、大阪から来たらしく、なんとタダ飯が食えるときいたホームレスだった。父はその場でおじさんを下ろし帰った。
そして帰りに六甲道の友人宅にいろいろ買ったものを届けて、帰った。

それからしばらくして、2/11から、出張に行かなければいけない父は電車が開通していたので、電車とタクシーと船とで空港まで行ったのだが、ポートアイランドを通った時１~1,5ｍほど液状化しているのを見て衝撃的だったという。

５　語り継ぐ

今回この授業で知らなかったことをたくさん知れたと同時に、父と母で少し話が少し違っていたことに、震災のことが薄れてきていると実感した。
私は、今回のように文章にまとめて、忘れたとしてもすぐ思い出せる。ということがとても大切なことだと思った。そしてその話を次々に語り継いでいくこともとても大切なことなのだと思う。

忘れない。

奥田　珠子

はじめに

1995年1月17日5時46分　地震発生。
私は当時1歳で全く記憶にないため、両親から聞いた話を書こう。

当時の家族構成

父（34）母（33）姉（2）私（1）

震災前日

いつもと変わらない日常。お父さんは仕事に行くために早起きをし、お母さんはお父さんのお見送りをするために早起きをする。お父さんが仕事に行くと私とお姉ちゃんは起きてきて朝ごはんを食べ、遊んでいた。お母さんは主婦の仕事をしながら私たち2人の世話をしてくれていた。夜、お父さんは次の日が東京に出張の予定だったから、始発の新幹線に乗るために何時に家を出たら良いかを考えていた。

震災当時

私が1歳になった8日後に阪神・淡路大震災が起きた。当時私は垂水区五色山にある3階建のアパートの2階に住んでいた。家の中はなにも耐震補強はしていなかった。
5時46分　突然地面から突き上げてくるよな“ゴォ――ッ!!”という大きな音とともにすごく大きく揺れた。

父の行動

お父さんは東京に出張の日だったので、朝早くから始発の電車に乗るためもう家を出ていた。ちょうど駅にいる時だった。地震発生直後大きな揺れのせいで駅の電気が全て消えた。しばらく近くにあった手すりにつかまり、真っ暗闇の中を何人かとぶつかりながら壁をつたって外まで出た。外も街灯や照明がすべて消えてとても暗く、慌てている駅員さんの懐中電灯と車のライト以外に光はなかった。これは帰ったほうがいい、家族が心配だと思いタクシーで家まで帰ってきた。家まで向かう道は自動販売機が倒れ、ブロック塀が倒れ、電信柱までもが傾いていた。お父さんとタクシーの運転手さんは「これはとんでもないことが起きている」と会話をしながらいろんな障害物を避けながらアパートの近くまで辿り着いた。その後、タクシーの運転手さんも自宅へ帰った。
タクシーが行ってしまうと本当に真っ暗で足元が見えず20mくらいをすり足で歩いていると、新聞配達の人がバイクのライトを頼りに新聞を配達し続けていた。その光でアパートの階段の入口が見えてやっと帰ってきた。
そのことがあったからか、震災後お父さんは暗い所が怖くて家じゅうすべての電気をつけていた時期があった。

母の行動

お母さんは朝早くからお父さんを見送った後、また私とお姉ちゃんが寝ている寝室に戻って、寝ようとしていた時だった。以前から、お母さんはお父さんに地震が起きたらまず出入り口を確保するように言われていたので、まずは玄関、その後開けられるドアを全て開けた。
私とお姉ちゃんが怖がらないように余震のたびに「ゆ～らゆ～らよ～、揺れているね～」と笑って声をかけながら2人をあやしてくれていた。お姉ちゃんは眠りに就いたが私は眠らず起きていたのでお母さんがずっとおんぶをしてくれていた。
お母さんは寝室にある、倒れてきた家具などを起こそうとした時、ドレッサーで手を切る怪我をした。

家の被害状況

家の被害状況は家族4人の寝室に置いてあったドレッサー、テレビなどが倒れてきて、玄関の下駄箱から靴が散乱していた。食器棚の中で食器が落ちて何枚も割れてしまった。家も少し傾いたもののまだ住める程度だったので、避難所には行かずしばらくの間そのアパートに住み、落ち着いてから現在住んでいるところ（西区）に引っ越してきた。
ライフラインは途絶えてしまったが、その日の内に電気はついた。そのおかげでテレビが見られて、被害状況の映像を見ることによってここで大きな災害が起きているということを実感した。
電気が復旧する前はラジオを聞いて情報を得ていたが、音声だけではこれほどすごい被害だという実感がわかなかった。

震災後の様子

災害直後、下の階に住んでいた人の家のタンスが倒れてしまい、夫が単身赴任でいなかったため奥さん1人では起こせなかったからお父さんが手伝いに行った。私の家よりたくさんの物が倒れ散乱していた。その奥さんはすごく不安で怖かったそうなので震災当日は私たち家族と一緒に過ごした。それでも建物には大きな被害はなく私たち家族が住んでいたアパートにはけが人はでなかった。
同じアパートでも棟によって被害の大きさが違った。私の家では電気も水もガスも止まったが、隣の棟では水とガスがしばらく生きていた。また家具の配置や方向によっても家ごとに室内の被害は違った。
タンスが倒れたり食器が散乱したりして室内の被害が大きかった人は夜が明ける頃から外に出てきていて、お互いに被害状況を話し合ったりラジオを聞いたりして大きな災害が起きたことを知り、7時頃にはさあ今からどうしようかと考えはじめていた。水とガスが使えてタンスなども倒れなかった家では、最初は停電しているだけとしか思わず、大きな災害が起きていることは知らなかった。そのような人は7時頃から普段通りの生活が始まった。
家の周りでガスが漏れていた匂いがしたため、お母さんは近所の人たちに「ガスが漏れているので気を付けてください」と注意を呼び掛けた。しかし大きな災害が起きていることを知らない家ではガスを使ってお風呂を沸かしたり、朝ご飯を作ったり、水道水を使って洗濯機に水を入れたり、普段通りの生活をしようとしていた。お母さんは今大変なことが起きているのに…。と少し戸惑った。
お父さんは交通の便が途絶えたため、仕事に行けず、家族も心配だったから家に帰ってきたが、逆に今何が起きているのかを理解できていない人は「電車は動いていませんよ」と伝えても「え、ほんと？でも行ってきます」といつも通り仕事に向かう人もいた。でも数分後に「電車が止まっていました」と戻ってきた。情報の有無でこんなにも行動に差が出るものかと思う。
ライフラインが途絶え、水がなかったので私と姉は自分の小さな水筒を、両親は一般的な18リットルサイズのポリタンクを持ってお寺の井戸水をもらいに行った。他にはさらに大きな45リット

ルコンテナを二つ三つ持ってくる人もいたが、水を入れたら重くて一人で運べなくなって立ち往生している人もいたり、井戸水は1日に大量に使うとなくなってしまうということを知らない人がたくさんいて、お寺の住職さんと言い争いになっている人もいた。
　ご飯は、品数は少ないが営業しているお店に買いに行ったり、友達同士が交代で皆の分もまとめて買い出しに行ったり、それぞれの実家から食料を送ってもらったりしていた。
　私の家ではカセット式のガスコンロがあったため、それを使いお湯を沸かし、買ってきたカップラーメンなどを食べていた。
　震災後は水、電気、ガスのすべてのライフラインが途絶えたためお風呂に困っていると、妙法寺に住んでいた友達がしばらくの間出かけていて、自分の家を自由に使っていいと言ってくれたので、お風呂に入らせてもらった。その他にも温泉がある場所に行くと神戸からきたということで無料で温泉にいれてくれたりしたため、お風呂は人の親切で何とかなった。
　洗濯は祖父母の家に井戸があるからその水を使って洗った。
当時、祖父母は舞子に住んでいた（現在も）。祖父母の家はおじいちゃんが建設した家だったが壊れなかった。しかし大きく傾き、現在はトイレのドアが勝手にしまるし、床に置いたビー玉がコロコロ転がるほど傾いてしまっている。きっと次地震が来たら倒壊してしまうだろう。

復興後の生活

５日後には少しずつ電車が動き始めたので、お父さんは満員電車に乗り会社に行きはじめた。
それから約１年後、今住んでいる家に引っ越した。

感じたこと

　震災が起こりたくさんの命が失われ、たくさんの悲しみ、辛さを感じた人はたくさんいるけど、その震災を通じて友達、近所の人の優しさに触れ、すごいありがたさを感じた。地域の人たちみんなが協力し合い、助け合いながら生活をしていた。そして毎日の生活がどれほど幸せなものだったのかとても知らされた。家族と一緒に温かく美味しいごはんを食べられて、毎日お風呂に入れて…。このような生活が当たり前ではないということを、震災を通じて感じた。

1回目の追悼式

　私が初めて追悼式に参加したのは高校一年生の時だ。環境防災科に入るまで、追悼式の存在を知らなかった私は、6400人以上の死者、そのご遺族の方にすごく申し訳ない気持ちになった。
　夜中からボランティアに参加した。みんなが書いたメッセージをひまわりの形に貼り合わせる作業が済んだ後、竹の中に水を入れてその中にろうそくを入れていく。ただ黙々と行った。
　5時46分黙とう。なんだか悲しい気持ちでいっぱいになった。

2回目の追悼式

　2回目の追悼式は何も知らずに行った高校一年生の時とは少し違う気持だった。自ら率先してボランティアを行うことができた。1回目と同様夜中からボランティアに参加した。竹に水を入れてろうそくを入れる。そして5時46分になる前、分灯を行った。震災が起きてから16年たった今でもたくさんの方が追悼式に来てろうそくに灯をともした。
　5時46分黙とう。阪神・淡路大震災を、たくさんの方々が亡くなったことを決して忘れてはいけない。その方々の分まで精一杯生きていきたい。そして、今生かされている自分にできることを

見つけていきたい。と強く思った。

環境防災科

　私が環境防災科を知ったのは中学二年生の時、同じ塾に通っていた1つ上の先輩から舞子高校の環境防災科へ進学するという話を聞いた時だ。その話を聞くまで私は全く環境防災科の存在を知らなかった。でも、全国に唯一の学科だと聞きすごく魅力を感じた。それから私はインターネットで環境防災科を調べ、その学科では専門的に防災を学んでいると知った。その時、阪神・淡路大震災が頭に浮かんだ。その学科をもっとよく知りたいと思った私は中学三年生の夏休みに環境防災科体験入学に参加した。
　ボランティアに積極的に取り組む先輩方の話や、被災地に行って活動している先輩方の話を聞き、人のために動いているというところにすごく尊敬した。とても憧れた。わたしもそんな先輩方のような人になりたいと思い、入学を希望した。
　環境防災科に入って通常の授業のほかに防災のことを専門的に勉強した。入学当初は全くと言っていいほど防災の知識がなかった。3年間でたくさんのことを勉強し、経験していくなかで、防災に対する興味がすごく大きくなっていった。そして机上の勉強だけでなく、フィールドワーク、消防学校、ボランティアなどを通じて、防災の知識が増えたことや、人前で発表する能力が上がったことを実感できようになったが、人間的にもすごく成長できたと思う。そして、環境防災科で3年間防災を学んできて、自分の中にある防災というものの考えがすごく大きなものになった。

これから

　私たちにできること…。それは語り継いでいくことだと思う。今の子供たち、これから生まれてくる子供たちは阪神・淡路大震災を体験していない。今の神戸の街を見てもここであんなにひどい災害が起きたなんて誰もわからないと思う。でも6400人以上の尊い命が無くなり、たくさんの負傷者を出し、家を失った人がたくさんいるのは忘れてはならない事実だ。そのことを風化させないために私たちがいるのではないのか。それが震災を経験した者の使命ではないかと思う。

　自然災害を防ぐことはできない。でも、災害に対する知識や防災をみんなが知ることによって、少しでも被害を減らすことはできると思う。
　さまざまな災害について学ぶ、防災訓練に参加する、家を耐震補強する、非常持ち出し袋を用意しておく、災害時に役立ちそうな知識を身につけておくなど、1人1人が防災を意識することによって減災に繋がると思う。私は環境防災科で学んできたことを活かし、防災を広げていきたい。

震災と“1歳の自分”と“18歳の自分”

笠井　佑太

1、被害概要

　死者：　6，434名　行方不明者：2名　負傷者：43，792名
　重傷者：県内10，494名（98．2％）・県外189名（1．8％）
　軽傷者：県内29，598名（89．4％）・県外3，511名（10．6％）
避難人数：316，678名
住家被害：全壊104，906棟　・半壊144，274棟　・全半壊合計249，180棟（約46万世帯）
　・一部損壊390，506棟
火災被害：住家全焼6，148棟、全焼損（非住家・住家共）合計7，483棟、罹災世帯9，017世帯

（ウィキペディア参照）

　この災害で初めて、ボランティアが組織化されるようになり、ボランティア元年と呼ばれている。またこの災害を受けた後に、法律も作られた。行政・市民としても、数多くの教訓を得る事となった。

2、被害　垂水（家）

　垂水の被害は、ライフラインの寸断や、都市部への交通網の混乱はあったものの、長田などの地域に比べるとそれほど大きなものではなかった。
発生直後、家周辺はガス臭く、あたりでは、避難を呼びかける近所の人の声もあったそうだが、その後も火事が起こることはなかった。近くのスーパーにしても、電気は付いていなかったそうだが、通常通り業務は行われており。大きな被害はなかった

3、発生前の一歳の自分

　震災当時、僕は一歳だった。
一歳といっても、一歳と九ヶ月であり、ある程度の歩行もできていて、完ぺきにという訳ではなかったが、普通に話すこともできており、母親や父親の言っていることは、理解できていた。
　一歳当時のことはあまり覚えていないが、震災後、親戚が集まったときに、『まさか神戸でこんな災害が起こるとは思っていなかった。』という会話を伯父さんや伯母さんがしていたのは、何故かぼんやりと覚えている。事実、今になって、母親に聞くとそういう話をしていたらしく、親戚、おいては住んでいる地域全体・神戸全体が全く予期していなかった災害であった。
　家族内においても、同じことだった。震災前日、震度3程度の地震があったそうだが、両親は、特にその地震に対してこれといった不安や違和感を持たなかったそうだ。
　僕自身もまさか、翌日の地震を予期しているような様子もなく、いつものようにプラレールで電車ごっこをし、ご飯を食べ、お風呂に入り、寝る時間になると、1月の真冬の時期であり、暖かい格好をして、いつものように布団に入った。

4、発生直後の一歳の自分

　1995年1月17日5時46分、僕はベッドの上に居た。ベッドの傍には、タンスが置かれていた。（幸いにも、タンスは倒れなかったが、その後ベッドの傍にはタンスなど大きなものが置かれなく

なった）
僕は、震災発生後、すぐに泣き始めた。何かが上から降ってきたとか、タンスが倒れてきたわけでもなかったが、ただただ‘揺れ‘を怖がり泣いていた。父親は隣の部屋で寝ており、隣には母親がいたが、母親のお腹の中には、弟がいて、お腹を守るのに精一杯だったらしく、揺れている間、僕に覆いかぶさることができなかったことも、恐怖を増幅させた要因であった。
　ようやく、揺れがおさまり、母親が抱っこをし、大丈夫だと声掛けてようやく泣きやんだ。
　僕たちの家は、先ほど述べたように特に大きな被害も受けなかったが、家の中の食器が割れ、母親は食器の片付けをしようとしたが、僕が母親の傍を離れようとしなかったらしく、なかなか片付けができなかった。
　母は、仕方なく僕を、毛布にくるませ、靴をはかせて、母親の近くで椅子の上に座らせて片付けを続けた。
　その後、父が、当時の仕事の現場であった長田を見に出かけて行った。交通網も寸断されていたこともあり、長時間、家に帰って来ることができなかった。母親は自分と僕だけで不安であり、また母親の不安そうな顔を見て、何が起こったのか分からず、僕自身不安になり、TVもつかず、また歳も小さかったので、ただただ静かに座っていた。
　家の近くのスーパーは電気こそ付いていなかったそうだが、普通に営業も行われて、配給品などを受けることもなく、特に物資で困ることもなかった。
　ライフラインが寸断され、水もでなかったが、母親の実家では水がでており、また実家への交通網は寸断されていなっかたので水を受け取ることもでき、家族内で、食料に困ることは無かった。
　僕自身も、その頃、ミルクや離乳食ではなく、普通のものを食べて、普通に水道水を飲めていたので、僕自身の食料の確保についてもこまることはなかった。

5、発生から数日経過後の一歳の自分

　発生から数日経過しても、普通に、飲料水や食料は確保することができていた。
　食料などは無事に確保できていたが、それ以上に確保するのに困ったのが僕のオムツだった。
　日頃から、うちの母は、オムツが安いときに多く買うようにしていたため、それほど差し迫った状況には陥らなかったものの、店舗では、一度に変える個数の制限がされ、オムツの確保には多少困ったそうだ。
　僕自身、地震が起こって神戸が大変なことになっていると、把握できていなかったそうだ。後に、TVで神戸の現状を見たものの、やはり1歳で当時の状況を把握するのは、難しかっただろうとおもう。
　その当時、父と母は僕に何が起こったのか詳しい説明はしなかったそうだ。
それは今言っても絶対にわからないと思い、もう少し大きくなって僕自身が震災について知り、震災について聞いてくることがあったら伝えようと、考えたためだった。
　何も、分かっていない僕にとっても、身体に負担はかかっていたようで、ストレスと寒さにより風邪をひいてしまったそうだ。たとえ、何も分かっていなかったとしても、身体には少なからず、負担がかかることを母から聞いた、僕自身の体験により知ることができた。
　僕がいたことにより最も困ったのは、お風呂だったそうだ。
先ほども述べたように、水道から水は出なかったが、母の実家から水をもらうことにより、飲料水には困らなかった。
　しかし、お風呂となると、また別問題で、やはり大変な量の水が必要になる。もっといえば、お湯が必要になってくる。もちろんガスも通っておらず、水を得ることができたとしても、沸かすことはできない。
　しかし、小さい子は体を清潔にしておかないと、どんなウイルスに感染してしまうかわからない。

そこで母は小さい鍋に水を入れその水をコンロで温め体を洗ってくれたそうだ。母が言うには僕がいたことにより、最も大変だったのはその作業だったらしい

6、災害発生後から現在の自分

　1995年1月17日　5時46分　阪神・淡路大震災
僕が5歳頃になって、母は僕に当時のことについて覚えているかどうか聞いたことがあったそうだ。
母が『じしん怖かった？』と聞くと、僕は『怖かったなー』と答えたそうだ。
本当に覚えていたのか、ただ単に母に話しを合わせたのかそれは今となってはわからないが、自分自身の感覚からすると、おそらく後者であったであろうと思う。
　小学生になり、震災の話を聞く機会が何度かあったが、震災を受けたことによって、住んでいる家が倒壊したわけでもなく、また心に傷を負ったわけでもなく、また住んでいる垂水の町が壊滅的な被害を受けたわけでもなかったため、僕自身、良くも悪くも震災は僕に大きな影響を与えなかったのだと思っていた。それどころか正直覚えてもいないし自分には関係ないとまで、心のどこかで思っていた。
　しかし、今僕は、進路において、防災に携わっていきたいと思っている。きっかけは環境防災科に入りたいと思い、そして入学したことにある。さまざまな専門科目や大学の先生を通して、災害のことを知り、実際の消防士や水道局の方の話を聞き、実際の防災活動を知り、またフィールドワークをし、自然の強大さや、また一方で脆弱さを知った。
　今回発生した東日本大震災では、阪神・淡路大震災以上の被害が出ている。そんな被災地に入り、実際に現地の方の話を聞き、泥かきなどの活動をした。そんな活動の中で、防災へ携わっていこうという、より強い思いを持つようになった。さまざまな講義・フィールドワーク・被災地ボランティア活動、これらの活動は環境防災科がなかったら、決して体験することができなかったと思う。
　そして、この環境防災科は、その阪神・淡路大震災の教訓を生かすために設立されている。震災がなければ、環境防災科はなかっただろうと思う。つまり、今の自分は、小さいころに抱いていた感情とは反して、震災に大きく影響をうけているといえる。

7、自分の震災体験を振り返って

　環境防災科に入り、大学の先生や行政機関の方などいろいろな方の震災体験を伺ってきました。
　しかし、自分の被災体験を振り返って自分自身もかつては、被災者であったことを改めて感じさせられた。僕自身震災のことは全く覚えていないが、16年前は確実に被災者であったことは、確かである。そのことを僕は忘れかけていた。それは僕自身だけに言えることではなく、父親にしても母親にしても、震災の記憶が薄れてきていることに今回、話しを聴いて気づいた。
　時間がたつにつれて、記憶が薄くなるのは人間として仕方ないことだ。しかし、その記憶が薄くなり、無くなってしまう前に、次の世代に語り継ぐ・何らかの形で記憶を残すことが大切だと、今回父親と母親に話を聞き、自分自身の被災体験を振り返り、改めて思った。
　今、僕たちも含め、震災を覚えていない世代・他地方からの移住により震災を知らない人が増えている。少し風化の傾向にあると思う。しかし、今回の東日本大震災にしても、そして例え、過去のどのような災害であってもそれは決してあってはならないことだと思う。過去に固執しているわけではなく、それほど震災で得た物は多く、また失ったものも、はかり知れず多い。将来、必ず大きな災害はやってくる。
　より良い将来の街のためにも、時として過去を見つめることも大切である。小さい頃の自分のよ

うに、震災は、自分には関係ないと思っている人は必ずいる。震災に関わっていない人はいない。そう思ってもらうためにも、語り継ぐことは重要であり、僕はそのような機会をこれから、もっと増やしていきたいと思っている。

16年前の震災体験

川崎　由紀子

1、はじめに

　16年前、私は大阪に住んでいた。大きな被害を受けた神戸には住んでいなかったけれど、私を含め、私の家族が経験した阪神・淡路大震災や震災後の生活の変化、神戸に引っ越してきて思ったこと、震災への思い、環境防災科に入って、などを書いていきたいと思う。

また、今年3月に起こった東日本大震災についても書いていきたいと思う。

2、阪神・淡路大震災

　阪神・淡路大震災とは…
1995年1月17日　5時46分
兵庫県淡路島北部を震源
マグニチュード7．3
震源の深さは16km　内陸直下型地震
死者　6434名　行方不明者　3名
負傷者　43792名

　この震災を機に日本中の多くの人がボランティアに関心を寄せるようになったことから、ボランティア元年とも呼ばれている。

　16年前、私は当時1歳だった。1月17日の阪神・淡路大震災が起こったとき、私は大きな被害を受けた神戸には住んでいなかった。私は当時、父・母・兄と4人家族で大阪府枚方市に住んでいた。枚方市は震度4の揺れだったそうで家族全員無事でケガもなく、被害もなかったと聞いた。
震災直後、私は祖母と一緒にいた。大阪府高槻市にある祖母の家に兄と一緒に泊まっていた。5時46分、地震の揺れで祖母は目を覚まし私と兄を抱き寄せてくれていたそうだ。震度4だったが、家の中はかなり揺れてテレビが落ちそうになったそうだ。
家の中にある家具やテレビは何の補強もしていなかったと聞いてとても危険だと思った。
1月17日の朝、家があった枚方市も祖母の家があった高槻市もライフラインはいつもどうり使うことができ、町の様子もいつもと変わらない様子で、生活には何の影響もなかったそうだ。なので、私の家では父はいつもと変わらず仕事に行き、母は兄と私を迎えに来ることができたそうだ。

3、震災から学んだこと

　私の家では阪神・淡路大震災以降、地震に備える「防災」に対する意識が高まったようだ。
・お風呂の水を溜めておく
・テレビや大きな家具を補強する
・使わないときはコンセントごと抜く
・非常持ち出し袋の準備
・大きな家具などの前では寝ない
・家の近くの避難所の確認

・お母さん、お父さんの携帯番号を暗記しておく

　実際に私の家でやっている取り組みで、私が物心ついた頃から覚えている。
　お風呂の水は災害時、水道が止まってしまった時や、火事が起こった時などのためである。テレビや大きな家具を補強するというのは阪神・淡路大震災の時、亡くなった方の約80％の死因が建物や家具の倒壊による圧死だったと知ってとても重要視しなければいけない大事な取り組みだと思った。実際に高槻市にある私のおばあちゃんの家は震度4だったにもかかわらず、家具やテレビを何も補強してなかったため、倒れそうになったりして危険な状態だったことからの教訓でもある。
　コンセントを抜くというのは、例えばテレビを見るときはコンセントを差して見て、見終わったら電源を切ってコンセントを抜く。といった感じでいつもしている。一見、防災とは関係ないと思うかもしれないですが、4年前くらいに私の家の近くの団地で火事が起こった。その出火原因がパソコンのコンセントにホコリがたまっていて引火してしまった、というのを聞いた。私の家では節電のつもりで当り前のようにやっていたことが、実は防災とも関わっていることがわかってとても嬉しい。
非常持ち出し袋の準備は知っている人も多いと思いますが、災害時に必要最低限のものを持って避難できるように準備している。
　大きな家具などの前では寝ないというのは、家具やテレビを補強するのも大事だけれど、補強したから安心するのではなく、補強したけれどもしかしたら倒れてくるかもしれないと想定して、より安全な場所で寝られる環境を作っている。
　家の近くの避難所の確認は、災害時にどの避難所に避難するかなどを家族で決めている。私の家の近くには小学校、中学校、高校が家からほぼ同じくらいの距離にあるので、同じ避難所に集まれるようにしている。
　父、母の携帯番号を覚えておくことで、緊急時どこからでも連絡ができる。

　地震などの災害はいつ起こるかわからない。私は地震などの自然災害の一番恐ろしい点は予測できないということだと思う。私の家でやっている防災が生かされるときは決してきてほしくはないけれど、日本で生きていく上で機っても切れない地震との縁に一人でも多くの人が防災・減災に取り組んでいくことで、もしもの時に立ち向かって行くことができるだろうと思う。

4、復興した神戸に引っ越してきて

　震災から4年ほど経った、私が5歳の頃、父の仕事の都合で大阪から今住んでいる神戸市垂水区に引っ越してきた。比較的被害の少なかった垂水区だったが、たった数年前に震災が起こったという面影は全く感じなかった、と母は言う。私はまだ5歳ということもあり、復興した街だということも阪神・淡路大震災という災害が起こった街だということも理解できず、地震って何なのかすら知らなかったし記憶になかった。そして、小学校に入って、年に何回か防災訓練や避難訓練が行われるようになり、1月17日になると黙祷を捧げた。毎年これを繰り返しやっているうちに私は小さいながらに1月17日は特別な日、阪神・淡路大震災について少しずつ関心を持つようになっていった。
　小学4年生の時に「しあわせ運べるように」という歌を歌ったのをすごく覚えている。なんだか悲しい気持ちになった半面、神戸が大好きになった。ぜひ、もっとたくさんの人たちにこの歌を知ってもらいたい。

5、環境防災科に入りたいと思った理由

私が環境防災科に入りたいと思ったきっかけは大きく分けて2つある。
まず１つ目は、さまざまな分野のボランティア活動で活躍している環境防災科の先輩方の様子をテレビや新聞で見て、私もボランティアを通じて、人の役に立てるような人になりたいと思うようになったのがきっかけだ。2つ目は、私は小さい頃から人と話したり接したりすることが好きで、将来は介護福祉士になりたいと思っていた。環境防災科では地域の防災訓練やイベントに参加できる機会が多く、たくさんの人と出会い、接する機会があるのではないかと思い興味を持った。

6、さまざまなボランティア活動

環境防災科に入って2年半が経つが、ほんとに幅広い分野でのボランティアに参加させていただけている。地域のお祭りや防災訓練、もちつきボランティアにスタンプラリー、色々な災害募金活動、佐用町水害泥かきボランティア、佐用町交流ボランティア、東北泥かきボランティア、イベントのお手伝い、被災地の方との交流、復旧・復興前の被災地ボランティアまで幅広い活動をすることができた。しかし、どんなボランティアにも多くの人が関わってくれている。
周りにいる先生たちや地域の人、兵庫県や教育委員会など、本当に多くの人たちが陰で支えてくれているから成り立つボランティアもたくさんあることを知った。そんな人たちに感謝の気持ちを忘れないこともボランティアをさせていただく上で大切だと思った。

7、東日本大震災

2011年3月11日金曜日　14時46分
私はテレビを見ていた。するとテレビの上に緊急地震速報が流れた。宮城県、岩手県などで大きな地震が起こったことを知り、どのテレビ局も緊急番組に変わった。すると、まもなくして津波警報が発令された。危険な地域の津波到達時間が表示され、「大きな津波がきます。高台に避難してください。」とアナウンサーの人が繰り返し呼びかけていたのを覚えている。そして、ついに大津波がくる様子をテレビを通してはっきりと見た。今までに見たことのない光景だった。まるで、おもちゃのように見えた船も車も電柱も家も黒い波にのまれていくのを目の当たりにした。どんどん町の奥の方へとすごいスピードで波が押し寄せて行った。
私の見ていたテレビの津波の光景の中で何十人、何百人の人が流されてしまったのだろう・・・
この時の映像を思い出すと、ふと考えてしまう。

私は震災後、2回宮城県にボランティアとして行かせていただくことができた。
第1回目は4月６日～8日だった。活動内容は津波の被害を受けた小学校と中学校の掃除のお手伝いだった。生まれて初めて津波という災害の被害を目の当たりにした。海からは結構離れていた場所にある学校だったにもかかわらず、学校の校舎の中は海の潮の匂いがした。それに、グランドには魚や木材、自転車などが流れてきていた。体育館の床の掃除は、床が泥まみれで、拭いても、拭いてもきれいにならなくて苦戦した。また、液状化現象により床の一部が大きく盛り上がっている部分もあった。

第2回目は5月７日～13日だった。
活動内容は宮城県東松島市大曲地区のボランティアを必要とされているお宅に班ごとにお手伝いをさせていただいた。この活動は5日間行ったが、そのうち4日間連続でお手伝いさせていただいたお宅がある。初日は津波の泥が山のようにあったのが2日目、3日目・・・と、だんだんきれいになっていくのが目に見えてわかったので、すごくうれしかった。しかし、私たちは限ら

れた日数しかお手伝いできないが、被災された方々たちは毎日毎日しなければならない。そう思うと私たちがお手伝いさせていただいたのはほんの少し。とても無念だった。だが、一生懸命お手伝いさせていただくことによって、そのお宅の方が自分の体験した震災体験を自然に話してくれたのだ。少し心を開いてくれたようで本当にうれしかった。
　私は、この東北ボランティアに行って、阪神・淡路大震災とはまた違った津波という被害の恐ろしさを見て、もっともっと多くの人たちに伝えていくことが大事だと思った。また、一度きりの支援ではなく長期的な支援を継続することが大切だと思った。

8、語り継ぐ

　阪神・淡路大震災から今年で16年が経とうとしている。
　今年で18歳になる私たち今の高校3年生は当時1歳である。震災を覚えている人は少ないだろう。しかし、決して忘れてはいけない、決して風化させてはいけない災害だということを多くの人に知ってもらいたい。阪神・淡路大震災はとてつもない被害を出し、多くの人が苦しんだ。
でも、その分たくさんの教訓を生んでくれた。今回の東日本大震災でも神戸の教訓は生かされていると思う。私は、被災地神戸で震災を体験していないが、私なりに大きくなってから聞いた話や知り合いや友達から聞いた話をこれからも語り継いでいきたい。

一歳の自分と震災

北野　文穂

1. はじめに

私は、阪神・淡路大震災の記憶が全くありません。復興の記憶も全くありません。それは、私の家の被害が、あまり大きいものではなかったのもあるかもしれません。

私の家族は5人家族です。阪神・淡路大震災が起きたとき、私は一歳でした。当時私は、父と母の真ん中で寝ていたそうです。姉と兄は違う部屋で寝ていたそうです。地震が起きてから、母は私を抱きかかえて布団に潜り、揺れがおさまるのを待っていたそうです。父は慌てて、姉と兄が寝ている部屋へ行きました。姉と兄は揺れに気づかずに、寝ていたみたいでした。父はすぐに起こして、窓ガラスなどのガラスの破片が落ちていたため、靴下を履かせて母と私のところに来たそうです。

私たち家族は、当時団地に住んでいて、三～四階建ての一階部分でした。食器棚からはお皿が飛んでいる光景を、母は今でも鮮明に覚えていると言っていました。
家屋の倒壊などというような大きな被害はありませんでしたが、床にはたくさんガラスの破片が落ちていたと聞きました。

私が唯一覚えていることは、小学校の音楽の時間に「しあわせはこべるように」を歌ったことです。あと、阪神・淡路大震災が起きた日には必ず黙とうを行っていました。それは、高校三年生になった今でも続いています。中学校に入るまでその意味を理解することはできませんでした。

2. 父の話

父は震災から三日間ぐらいは、家族とずっと一緒にいたそうです。父は自営業をしているので、仕事に行かないといけないという気持ちには、ならなかったそうです。しかし、父は建設関係の仕事をしているので、震災が起きてからは仕事が増えたと言っていました。会社が損壊してしまったところが多かったそうです。あまりに仕事の電話が多いので、父は余震が続く中、屋根に上り仕事をしていたそうです。屋根がなければ、雨が降ると雨が入ってくるので主にシートがけをしていたそうです。仕事の電話が一気に増えたので、順番性にしたそうですが、順番を待ってくれたお家には青のシートが掛けてあったといっていました。屋根を直すのに使う材料に困ったことはなかったと言っていました。被災地に優先的に送ってくれていたそうです。今回の東日本大震災でも被災地優先だったため、材料が全く入ってこず、仕事ができないと言っていました。

父が震災後、生活をしていて感じたことは交通の便の不便さだったそうです。道路が寸断されていたため使える道が少なく、そのうえ車の数も多かったため渋滞が多かったと言っていました。近くの現場に行くのにも約1～2時間かけて行っていたそうです。
震災前と震災後で父が変わったと思ったことは、生活だそうです。震災後急に仕事の電話が増えたため、建築関係の仕事をしている人は生活が楽になったのではないかなと言っていました。

3. 母の話

母から聞いた話では、地震発生直後は動けなくて布団にこもるぐらいしかできなかったそうです。私たち家族は、近くに小学校があり避難所になっていましたが、避難所には行きませんでした。祖母の家の近くで車を止め、車の中で寝ていたそうです。それは三日間続いたそうです。家の中に入れるのは出来たそうですが、寝ることはできなかった状況だったからだそうです。

ライフラインの復旧は水道や電気は早かったのですが、ガスの復旧が遅かったため、電熱線を買ってお湯を沸かしてミルクを飲ませてくれていたそうです。

祖母の家のライフラインの復旧が早かったため、お風呂を借りたりしていたそうです。他には、親戚などにもお世話になったそうです。家の片付けもやる気が起こらなく、昼だけやっていただ

けだったので、何日もかかったそうです。
　当時住んでいた家の近所でも、ビルの壁がはがれていたぐらいで、大きな被害はなかったそうです。私たち家族が住んでいた団地も、一部損壊だったため建て替えておらず今でも多くの人が住んでいます。そんな被害の少ない地域だったため、今回の地震はそんなに大きくなかったと思っていたそうですが、従姉妹の家のテレビで三宮の被害状況を見たときに初めて、阪神・淡路大震災の大きさを知ったと言っていました。

4. 姉兄の話
　兄から聞いた話では、当時兄も幼稚園に通っている年齢だったため、あまり覚えていないそうです。揺れにも気がつかずに寝ていたら、突然父に起こされ何も分らないままとりあえず靴下をはいて、私と母のところへ来たそうです。
　兄の中で印象に残っていたことは、食器棚から食器が飛んでいるような感じで食器が落ちていた事と、外に出ると空から黒い灰が降ってきたことだと言っていました。
当時は兄も幼かったため、今何が起きているかなどは全く分からなかったと言っていました。大きくなってから、長田の家事の煙が垂水まで来ていたんだ、と理解できたそうです。

　姉も当時は小学生の低学年くらいで、あまり覚えていないらしく揺れにも気付かなかったそうです。姉が通っていた小学校は震災後すぐに避難所になったため、学校には行かなかったそうです。低学年だったため、何も考えずただ学校が休みになったので嬉しかったと思ったそうです。学校がいつから再開したかなどは、覚えていないそうです。
当時は車の中で寝泊まりしたり、家の片づけを手伝ったり、祖母の家など行っていたので友達にはなかなか会えなかったそうです。しかし、地元でそんな大きな被害がなかったので、大丈夫かなと心配になることはなかったと言っていました。

5. きっかけ
　私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけのひとつは、阪神・淡路大震災です。中学3年生ぐらいの時に、四川大地震が発生しました。その時はじめて環境防災科の存在を知りました。実際に現地に行ってボランティアをしている姿を、見てすごく興味を持ちました。それから担任の先生と話し合い、まず色々調べてみようと思いました。阪神・淡路大震災をきっかけに作られた、初めての防災科と知ったときに入りたいという思いがとても強くなりました。親にその話をしてみると、快く賛成してくれて無事に環境防災科に入学しました。今までいろんな経験をしてきました。阪神・淡路大震災の被害を元に、水道局の方や大阪ガスの方、たくさんの人にその頃の状況、復興の様子など話していただきました。記憶がない私にとっては、話を聞いていると自分たちが住んでいる地域の話をしているようには思えないくらいの被害の大きいものでした。しかし、今回自分の家族に阪神・淡路大震災について聞いてみると、被害は少なかったにもかかわらず細かいことまで覚えていて驚いたし、すごく身近に感じました。今まで環境防災科で阪神・淡路大震災について学んできましたが父の仕事の話など、知らないことも多くてすごく自分にプラスになったと思います。

6. これからしていきたいこと
　今まで、阪神・淡路大震災のことを授業で学習したり、実際の映像を見たりすることはありましたが、自分の親から直接どんな様子だったとか、聞くことはあまりなくて今回初めて聞いた時に、自分の知らないこととか多かったしすごく身近に感じました。
　インターネットでいろいろ見ていると、阪神・淡路大震災について環境防災科の先輩が書き込みしているのを見つけました。そこには（これから環境防災科に入る子は、阪神・淡路大震災の記憶がないと思います。でも高校生が学び語り継ぐことでより当時のことを分かってもらえるだろ

う。きっと阪神・淡路大震災より大きな災害が来るだろう。その時のために環境防災科の勉強に取り組み、次につなげてほしい。環境防災科に行っていたの？と聞かれても恥ずかしくないように活動してほしい。）と書かれていました。

私はこれを読んで、私たちに言われていることだと思いました。

阪神・淡路大震災よりも大きい東日本大震災が起きました。私達、環境防災科は一週間交代で宮城に行かしてもらい、ボランティアをさせていただきました。周りから見れば頑張っていると思ってくれているかもしれません。もちろん、宮城では被災者の方が少しでも楽になれたらと思い、精一杯活動させていただきました。

しかし、それは学校側が私たちに設けてくれた場なのです。私たちだけではできませんでした。先生のおかげなのです。

だから、これからは自分でできることは自分から進んで取り組みたいと思いました。自分たちだけでは出来ないこともあります。その時は先生や学校に協力してもらい、自分から先生に提案し積極的に行動に移していきたいと思いました。

私たちみたいに、災害を経験した記憶なくても災害に関心を持ち、これからの災害に備える人が増えるように、今の私たちにできることをしていきたいです。

母校に行って小中学生に、災害を教えたり、防災を教えたり、この地域ではどんな被害があったかなど、教えられることはたくさんあます。

環境防災科に入って、今まで学んだことを生かし次の災害に備えたいと思いました。そして今よりもっと多くのことを学び、過去に起きた小さな災害も忘れられないように、語り継いでいきたいと思いました。小学校の頃から、阪神・淡路大震災が起きた日には必ず学校で黙とうを行っていました。東日本大震災が起こった後では、阪神・淡路大震災で亡くなった方への黙とうは行われないのではないかと不安になりました。そうならないように、語り継ぐことは大切だと思いました。災害が増えるたびに、過去の災害が忘れられるのでは、いけないと思いました。

今回、初めて家族の口から震災当時のことを聞きました。被害が少なかった地域に住んでいたので、覚えてはいないだろうと思いましたが、ささないことでも覚えていて私に聞かしてくれました。16年も経った今でも忘れられないくらい、怖い経験をしたのだろうな、と思いました。改めて、阪神・淡路大震災が大きな災害だったんだ、と思いました。大きな災害が来れば、過去に起きた災害が忘れられてしまいます。そうならないように、どんどん語り継いでいける社会にしたいと思いました。

7. 東日本大震災

今年に入り、阪神・淡路大震災をよりも被害の大きい地震が発生しました。地震の種類や被害状況は、全然違いましたが私は一瞬写真などで見た阪神・淡路大震災の光景を思い出しました。テレビで実際に津波が来ている様子など、見た時は何も考えられませんでした。学校で、代表生徒が東北にボランティアに行っている時に、結構大きな地震が起きたことを知って、とても怖くなりました。みんな無事ですぐに帰ってくるというのを知り、すごく安心しました。

自分も環境防災科の一員として、東北に一週間ボランティアに行くと家族に言うと、気をつけて行ってき。と言ってくれたので、できる限りのことはしようと思いました。東北についてから、次の日の朝私は余震で目が覚めました。急に怖くなって、すごく帰りたくなったことがあります。でも、実際に被災者の方のお家で泥かきをしていると、少しでも楽に生活してほしい、と思いました。大勢で一斉に泥をかいても一日では終わらないくらいの量の泥で、被災者の方は毎日当たり前のようにこんなことをしているんだと思うと、余震が怖かったぐらいで、帰りたいと思ってしまった自分がとても恥ずかしかったです。活動1日目は余震で目が覚めて、怖くなってしまったというのもあり、1日元気が出ませんでした。そしたら、私が逆に被災者の方に心配をかけてしまって、とても恥ずかしかったです。自分はすごく弱いってことがわかりました。少しでも被災者の方が楽

になってくれるのならば、と私たち環境防災科が１ヶ月間ボランティアさせてもらうのに、１日目から自分の中ですごく反省しました。その次の日からは、余震で目が覚めても怖いと思わないようにしようと思い、精一杯被災者の方、被災地の復興のために頑張りました。でも実際被災者の方と直接、震災のことについて話していて、その時どんな被害だったかなど聞いていると、なんて声を掛けていいかも分からずただ聞くことしかできませんでした。今になっても、あの時なんて声をかければよかったのだろうか、考えますがわかりません。だから、今回家族から聞いた話や、東北の方に聞いたお話などを生かし課題として、これからも環境防災科で学びたいと思いました。

『知らなかった震災』

幸川　和矢

1.1.17を振り返って…

私は阪神・淡路大震災が発生した当時はまだ１歳と、幼くあまりにも曖昧で不確かな記憶しか残っておらずこの記憶が本当に体験して得たものなのかさえも確かでないほどしか残っていない。
しかし死者6，434名、行方不明者3名、負傷者43，792名という多大な被害をもたらした阪神・淡路大震災…あまりに曖昧な記憶しか残っていなくても、それでも私は忘れずに『語り継ぐ』ことが大切だと思う。

2. 日常

私の家族構成は、父、母、兄、そして私の４人家族。父は仕事で遅くに帰り、兄は保育園に行っているため自然と母と過ごす時間が多かった。また、人見知りが激しかった私だが、向かいの家に住んでいる人にはよくなついていたのを覚えている。
ただまだ歩き始めたばかりのことだ。一日の大半を寝て過ごしていたはずだ。そんな穏やかとも平和ともいえる日常をすごしていた。

3. 震災当日

1月17日午前5時46分。最大震度7を記録した阪神・淡路大震災。この日もいつものように、二階にある和室で4人そろってまだ寝ていた頃に発生した。兄は地震が発生しても寝ていたらしい。母と父、そして私も起きたが泣くことはなかったそうだ。きっと3歳くらいなら泣いていただろうがそのときは『地震』というものを体験したこともないし、なにより恐ろしいという感情がまだはっきり理解できていなかったのだろう。加古川市に住んでいたため、被害は少なく震度は4くらいだったはずだ。ライフラインは確保できていて蛇口をひねれば水が出る。ガスの元栓を開けば火をつけることができる。電気をつければ明るくなる。神戸と加古川、同じ兵庫県でこれだけの被害の差があったのだ。方やなすすべもなく思い出が消えていくのに私たちは同じ県に住みながらテレビの前で家族がそろって被災した神戸の様子を見ていたのだった。たった数10km違うだけでこれほどまで被害が違い、比例するかのように関心が薄れていっている。私はそれが悔しくてたまらない…

4. 買い物へ

母と私は買い物へ近くにあるスーパーへよく行っていた。震災当日も昼から買い物へ出かけていたくらい日常の生活を送っていた。
しかしスーパーにつくと慌ただしく大量のカップ麺やパン、飲料水を買っていく人がいた。この人は被災地へと食料品を送るため買いに来た人だと母は教えてくれた。それからしばらくの間スーパーやコンビニではカップ麺やパンや飲料水それにガスコンロが品薄になった。

5. 親戚の話

私の親戚は高砂市に住んでいた。
朝地震が発生したと共に起き、家の様子を見てみたところエアコンが天井からぶら下がってい

る以外異常はなかったという。その後仕事で姫路に行こうとしたら「神戸のほうへ向かってくれ」と言われ、いつもなら1時間かからないような道のりが、渋滞でこんでいたと共に高速道路が使用できずにもっと時間がかかってしまったそうだ。叔父は土木の建築関係の仕事をしており、被災地で壊れかけた家を修理しに被災地へ行った。すると長田で古い長屋を見つけ、その長屋の一つに両側の壁がなくなっていたものを見つけ、その前にはもう一棟長屋が建っていたが跡形もなくなっていた。その前にはずらりと花が手向けられていて人々がそこで亡くなっていたことを物語っていた。

それから叔父は被災地に何度も入り仕事をしていて、そのような光景に最初は胸が痛んだが仕事が終わるにつれなんとも思わないようになっていた。

人は誰しも長い間同じ状況が続けば慣れてしまうものだと思う。そのような状況で今一度、本来思うべきことを思い、振り返ることにより大切なものを見失うことなく思うことが大切だ。

6. 小学生の記憶

私は震災のことなど何も知らずに小学校まで生活を送った。小学校低学年。私は無知なままに何度目かの1月17日を迎えた。1月17日に行われる防災訓練もただの訓練。黙祷は誰のために、何のためにするのかもわからず、ただ先生に言われた通りに目を閉じ、ただ早く終わればと思っていた。今思えば恥ずべきことだが何分そのときなにもわかろうとしない自分がいたことも事実だ。

しかし高学年にあがると物心も付き、記憶も明確になってきた。そこで私は阪神・淡路大震災の特集を見て初めて震災を知った。しかしそのときですら神戸がどこにあるのかわからず、ただ恐怖だけがあった。今の日常がテレビで起きているようなことになったらどうなるのか…そのようなことを考えていた。

7. 中学生の記憶

中学生になると震災がどこで起きたのか、どのような規模だったのかを加古川市防災センターで詳しく知ることができた。それを機に黙祷の意味を知ることができた。

目を閉じるだけなら誰にでもできることであり、何を思うのかを大切に思い黙祷を被災地神戸へ捧げた。

8. 舞子高校へ

私は中学三年生となり進路に向けて悩むようになった。進路希望調査を出されてもただ近くの学校でなにもせず高校生活を送ろうか、と思っていた。しかしそれでは私のしたいことがわからないままでただ流されて生きていくだけだと思い、将来について悩むようになった。

そこで舞子高校に行っている兄にどのような学校かと訊ねると一言「面白いし、将来のためになる。」と返ってきました。その話を具体的に知りたいと思い、パソコンで調べ、さらに兄に話を聞かせてもらったとき兄は「被災した人とかの話を聞くことあるし、将来の夢を叶える為なら舞子高校が一番お前に合っている。」と言われ私はますます興味を持つことができた。

そしてボランティアをすることは素晴らしいと思っていたが、何のために、誰のために時間を割いてまで被災地に行き、泥かきや家の掃除などを手伝うのか理解できなかった私に兄は「それは体験した人にしかわからん。だから舞子高校でボランティアを体験してみたらわかる。」、そう言われ『震災』、『ボランティア』、そのふたつの言葉が私を舞子高校に興味を示させた。

ただ漠然としか感じることができなかった被災地神戸を知ることができる。どれだけ本を読んでも伝わらない被災者の話を直に聞くことができる。ボランティアや消防学校、特別科目の授業も

ある。これだけ知らなかった世界を知ることができる。私は『好奇心』のもと舞子高校環境防災科に進路を決定した。

9. 舞子高校

私は舞子高校環境防災科に入学することができた。入学したのはいいがやはり被災した地域と何もなかった地域。意識の差も大きく、記憶も知っていることも違っていた。私にとって知らない世界…『好奇心』で舞子高校に入学したが、クラスメイトと自分の中での震災はとても違っていた。

それでも知りたい意欲は強く、被災された方々や関係者の話を聞くたび、できるだけ話の世界に飛び込み、あたかも自分が体験しているかのように思い込ませることにより震災当時どのような気持ちだったのかを知ろうとした。

そのたび心は痛み、震災を知ることは苦しみを知ることだったが、それさえも受け入れ、『語り継ぐ』ことの大切さを知った。

震災の記憶が薄れていくように、この苦しみもまた人々の心から薄れていくだろう。しかし被災者は違う。鮮明に記憶して苦しいはずなのに未来のために話をしてくださり、私たちに傷を見せてくれている。私たちは舞子高校環境防災科の生徒として、人々の記憶から忘れ去られないように、震災があったことを伝えていく義務がある。それが私たちにできることではないだろうか。

10. 震災から学んだこと

私が震災から学んだことは人の生きていく強さだ。

人は被災するとまず『絶望』しますが、復旧復興に向けて『希望』を持つ。相反する二つの言葉が被災地では起きていたのだ。全てを奪われ『絶望』し何もする意欲がなくなるが、人々に支えられやがて自ら『希望』を持つ。どれだけ被害を受けてもその地でまた1からやり直し、歩き出そうとする、そのように強く生きる人間だからこそ、ここまで被災地を復興している。

『絶望』の中であっても力強く輝く『希望』を取り戻す。そこまでの過程で必要なことは、私は二つあると思う。1つは誰かがいること、もう一つはその街を愛していることだと思う。この街だからこそ1からでもやり直そう。その『この街だからこそ』があるからこそ人は何度でも立ち上がり前を見て歩いていけるのではないのだろうか。

11. これからの私にできること

私はこの環境防災科に入り、たくさんのことを学んだ。それは震災のことだけでなく人の立ち上がる姿も、生きていく姿も学んだ。もう昔のように『知らない』では済まされないこととなり、語り継ぐことの必要性を知った。意識を高めるだけで風化することを少しでも遅くできる。ならば少しでも人々の記憶にテレビでは映せなかったことを、テレビでは知れないことをとどめてもらうために私たちは『語り継ぐ』ことを終わらせてはいけない。

12. 最後に

私たちは舞子高校に入り、さまざまな震災を知り、その中で生きてきた人たちの話を直接聞くことができた。その話をどう語り継ぐのか。この『語り継ぐ』を書いているとき、「人に物事を伝えることはこれほどまでに難しいのか。」と感じた。阪神・淡路大震災の被災者の話を聞いた時には脳裏にその映像が焼きつくのではないのかと思うほど印象に残ったが私が同じ話をしてもきっと同じようにはいかないことだろう。記憶がはっきりと自分のものとしてあるのか、テレビや人の話、

本などで得た情報としての震災、この二つには埋めようのない差があり、この話を未来へつなげていくためには私では力不足なのではないのかと歯がゆい思いだ。しかし私は必ず語り継ぐだろう。これから先、生きている限り記憶に留め、1月17日のことを未来の為にも。

そしてまた今も東北で震災が発生した。私たちは大きな震災を二度も体験したのだ。無いに越したことはないが、自然とは循環しているものだから必ずまた発生する。では私たちにすべきことは阪神・淡路大震災を被災者として内側からみて、東北での震災はボランティアとして外側から見てきた。この二つから大切なことを学ぶことができた。それは突き詰めれば震災を忘れず、発生した際にどのように動けばいいのかを日常の時に想像し、それを非日常で実践することができる。つまり『生き残ること』だ。生きていれば1から物を創造することができる。人はまた歩き出すことができる。そのためにも震災を知り、意識を高めいざという時に備えておかなければならない。私は2つの震災を忘れずに語り継ごう…。

震災について考える

児玉　優衣

震災時、私は1歳4カ月だった。だから震災のことは全く記憶にない。これから書くことは父と母から聞いた私の震災体験だ。

1.　　震災前

私は父と妊娠中の母と3人で暮らしていた。家は2階建てのアパートの2階で、1階は自転車屋さんだった。毎日朝仕事に出かける父を2人で見送り昼間は母と2人で過ごす、毎日そんな生活をおくっていた。震災前にはディズニーランドに行ったこともありその余韻に浸り、「幸せだね」と言いながら暮らしていた。

父と母はまさかこんな地震が起こるはずはないと思っていたので、防災対策は何もしてなかったそうだ。

2. 震災当日

1月17日5時46分。阪神大震災の大きな揺れが神戸を襲った。地震が起こったとき私は寝ていたそうだ。母はお弁当を作っていた。突然大きな音がして、母は私のもとに駆け付けた。そして私の上に覆いかぶさった。母の叫び声を聞き、起きた父は母の上に覆いかぶさった。こうして揺れが収まるのを待ったそうだ。もう少しで私の上にテレビが落ちてくるところだったと母が言っていた。揺れが収まり、外に出ようとしたが、ドアがすぐに開かなかった。一旦家の外に出て、そのあと父はストーブやキッチンの火を消しにいった。家の中は食器が割れていたり、天井が落ちていてぐちゃぐちゃだったらしい。外は寒かったので、車の中で暖をとっていた。近くに住む親せきは、古い家に住んでいた私たちを、もうだめだろうと思っていたらしい。祖父が震災が起きてすぐ自転車で駆け付けた。私たちは車の中に避難しているため家の中にはいなかったし、ぐちゃぐちゃになった家の様子を見て、亡くなってしまったんだと思ったらしい。

私の家は少しの間は電気が通っていたためテレビのニュースを見ていた。母は私にかわいそうな思いをさせたくないと思い、すぐにご飯を炊き始め、たくさんのおにぎりを作った。水道も通っていた。困ったのはガスだけだそうだ。

私の家は天井が落ちていたため、放っておいたら瓦が落ちてきて危ないからと、父は余震の続く中、屋根を直した。隣の家は家の壁から水が噴き出していたらしく、父が復旧作業を行った。

その後私たちは祖母の家に避難した。

3. 震災後の生活

震災後は家の中がぐちゃぐちゃで母が妊娠中ということもあり、母の方の祖母の家で暮らした。初めは大丈夫だったライフラインも、工事中のため止まることがあった。

私は震災後も続く余震を怖がったそうだ。揺れが起こるたびに何をしていようと私はかたまった。祖母に当時のことを聞くと、小さい私が毎日ニコニコしながら遊んでいたり、音楽をかけて踊っているのを見て、場がなごんでいたと言っていた。祖母の家には50日間いた。

家の壁がところどころボロボロになって砂のように落ちているのを私は食べていたそうだ。

私が初めてチョコレートを食べたのもこの時だった。祖母の家の近くにはたくさん親戚がいたので、みんな小さい私を心配してたくさんのお菓子を買ってきてくれたのだ。その時にそれまで食べたことのなかったチョコレートを初めて口にし、私は「おいしい～」と言ってニコッと笑ったら

しい。

4. 伯母から聞いた話

私の伯母は当時妙谷に住んでいた。少ししか離れていないのに被害は小さく、食器が少し落ちるぐらいだったそうだ。その日の晩はガスを使わなくてもできるお好み焼きを親戚を呼んで食べたらしい。

震災の次の日から伯父は会社に行き始めた。会社に行くと被害が大きかった人たちで前の日から何も食べていない人がいた。伯父はその人たちに自分のお弁当をあげた。その話を聞いた伯母は、次の日から炊けるだけのご飯を炊き、できるだけ多くのお弁当を作って伯父に持たせた。

震災から何日か経ち、家を訪ねてくる人がいた。その人は家がつぶれてしまい、車で生活していた。伯母はその人に「お風呂入っていきますか？」と声をかけたが「家族のみんなが入っていないのに、自分だけお風呂に入るなんてできません」と言って帰って行ったそうだ。

5. 小・中学校での防災教育

小学校の時、私は初めて震災の勉強をした。がれきの写真やバスが高速道路から落ちそうになっている写真、家が燃えている写真を見たことを覚えている。その写真を見たことは今でも覚えているが、それを見て何を思ったかは、覚えていない。でも印象に残っているということは、小学生だった私も何か感じたんだと思う。

初めて「幸せ運べるように」を聞いたのも小学校の時だった。その時はあまり深く考えず、新しく覚えた歌だったのでよく口ずさんでいた。でも今大きくなって震災の勉強をしていると、毎年1月17日に近づくとテレビなんかでよく流れる「幸せ運べるように」を聞いて、とても悲しい気持ちになる。

小中学校では避難訓練や防災訓練などもした。消防士の人が学校に来て放水しているところを見せてくれたり、消火器で火を消したりもした。小中学校の避難訓練なんかはみんなしゃべっていたり、ふざけていることが多かった。私もその時はそこまで大事なことだと思っていなかった。でも今考えてみたら、避難訓練は本当に大事なことだし、全員が真剣に取り組まなくてはならない大事な行事だと思う。

また、初めて「人と防災未来センター」に行ったのも、小学生の時だった。大音量で震災当時の映像が流れたり、震災後の街がリアルに再現されていたりして、とても印象的だった。こんな風に震災を忘れないために施設を造るというのは大事なことだと思う。

6. 環境防災科に入って

私は小さい頃から人のために何かをすることが大好きだった。そんなとき、環境防災科の生徒たちがボランティアをしている姿を見て、「私もボランティア活動がしたい！！」と思ったのが、環境防災科に入ったきっかけだった。

環境防災科に入っていろんな勉強をした。ボランティアに必要なこと、気を付けなければいけないこと、防災のこと、また校外学習に行ったり、外部講師の話を聞くなど、普通の高校生だったらあんまり経験できないようなことをたくさん経験した。その中でも阪神・淡路大震災の勉強をすることは多くあった。阪神大震災の時の話を聞いたり、野島断層や人と防災未来センターに行ったりもした。また追悼式にも高校生になって、初めて参加した。私は環境防災科に入らなかったら、阪神・淡路大震災の話を聞く機会はここまでなかったと思うし、私たちが震災を知らない世代に伝えていかなければならないという感情もなかったと思う。長田の町歩きに行った時に

震災のことを話してくれた人たち、1．17メモリアルの時に話してくれた人たち、そして全国の語り部の皆さん。それぞれいろんな思いがあって自分の体験を話してくれていると思う。その人たちから聞いた話を、ここで留めておくのはもったいないと思う。だから、これから震災を知らない世代の子供たちにも、これまでに聞いた話を伝えていかないといけないと思う。
これからは、どうやって多くの人に防災に興味を持ってもらうか、どうやって防災を広げていくか考えていかないといけない。また、環境防災科を卒業しても、防災とかかわり続けたいと思う。

7．最近の災害

最近、大きな災害が多いと思う。今まで私に災害に対する関心がなかったからそう思うだけかもしれないが。
2年前の夏は佐用で豪雨災害があった。今年に入って新燃岳が噴火した。そして3か月前、東北で多くの死者・行方不明者を出した大地震があった。こうして新しい災害が起こるごとに前の災害の関心が薄れていっているような気がする。確かに新しい災害はテレビでも大きく取り上げられるし、それは仕方のないことだと思う。だからと言って他の災害を忘れることはいけないと思う。
これだけの災害が起きてたくさんの死者・行方不明者が出た。もう少し被害を減らすことはできなかったのか、そして今回の地震で学んだことを、次の災害にどう活かしていくのか。これからの課題になっていくと思う。そしてこの地震を体験して、心に傷を負った人は本当にたくさんいるだろう。その人たちとこれからどうかかわっていくのか、考えていかないといけない。
私は5月に東北へ行って、いろんな人と知り合った。そして震災の話を聞かせてもらった。それは本当に辛くて悲しい話だった。聞いている私ですらとても悲しかったのに、実際に体験した人たちはどれほどの悲しみを感じただろう。時々東北で聞いた話を思い出してはそんなことを思う。
まだ思ったことをちゃんと口にできない5歳の男の子は津波ごっこをして遊んでいた。笑いながら一緒に遊んでいたが、男の子なりにその時感じたことを遊びで表現していたんだと思う。
私はこれからも東北で会った人たちとの出会いを大切にしていきたいと思っている。今は高校生なのでメールのやり取りや手紙でのやり取りしかできない。でも、これから自分でお金を稼げるようになったら、自分で東北へ行き、1週間一緒に過ごした男の子に会いに行こうと思う。

8．将来について

私は環境防災科に入って本当に良かったと思っている。机に向って勉強しているだけじゃ学べないことも、環境防災科でたくさん学んだ。
そして私には栄養士になりたいという夢もできた。阪神・淡路大震災の時も、今回起こった東北の震災でも、食べ物がないとか、栄養が偏るとか、そういった問題があったと思う。そこで私は、このような問題を減らすためにも、栄養士になって非常食の開発をしたいと思った。食べるということは生きていく中で絶対に必要なことだし、楽しみでもある。その食べることに関わっていく仕事は私にぴったりだと思った。
そして栄養士になれたら、普通に栄養士として働くだけでなく、せっかく高校生活3年間で防災を学んだんだから、防災に関わっていきたいと思う。
これから生きていく中で、災害は絶対に起こる。でも分かっていても何もしなかったら、分かっていないのと同じだ。だから私は災害を多くの人に知ってもらい、各自でできる簡単な防災対策を教えていけたらいいなと思っている。そして災害が起こったときに少しでも被害が減るといいのになぁと思う。
特に私は小さい子と関わっていきたい。大きな災害が起こると大人が子供を助けたいと思っていても、どうしても助けられないこともあると思うからだ。そんなときにとっさに自分の身を守れたら、

命を落とさなくてすむかもしれない。だから私は小さい子にもっと防災を知ってもらいたいと思う。そして小さかった子が大きくなったときに、また小さい子に防災を教えるというような社会ができたらいいなと思う。

9. 最後に

　今回この「語り継ぐ」を書いて震災について考えさせられました。そして今まで聞いたことのなかった話も父や母から聞きました。自分がこうやって文章を書いて、改めて語り継いでいくことの大切さを実感した気がします。私はこれで終わりではなくこれからもたくさんの人に防災を広げたいと思います。

阪神・淡路大震災当時の話

齋藤　圭方里

1.　　震災当時の話

私は震災当時１歳だった。だから震災当時の記憶はほぼ覚えていない。
　だからお父さんとお母さんにその震災当時の話を聞いたのをまとめた。

お母さん目線

　震災の年の5月に弟がうまれた。
　だからおかあさんは阪神・淡路大震災が起こった時は妊娠6カ月ぐらいだった。
　おかあさんとおかあさんの中にいる弟と私はおばあちゃんの家にいっていた。
　たまたまおかあさんの友達の結婚式に出席するために大阪に行っていたからだ。
　結婚式に出席した後、本当はすぐ神戸に帰るつもりだった。
　だが、おじいちゃんが「結婚式に行って疲れているだろうから今日は泊っていき。」
と言ったからお母さんは泊ることにした。その夜に地震が来た。お母さんは身ごもっていたが真っ先に私を覆いかぶさるようにかばった。お母さんの足元には大きなテレビが落ちてきた。おばあちゃんは娘と孫の心配をして、私たちが寝ている部屋と一番遠い部屋で寝ていたのにも関わらず廊下を這いつくばるようにして私たちのところへ来てくれた。おばあちゃんの家に泊まっていたことで地震は感じたけど小さい規模の影響で済んだ。おじいちゃんが「泊っていき」と言ってくれていなければ私たちは危なかったかもしれない。
テレビをつけたら地震のニュースばっかりだった。電車も動かず、車が通れる道すらなく、神戸に帰られなくなった。おばあちゃんの家に結局3カ月間いることになった。お母さんは妊娠8か月～9か月になるまでいた。地震が起きてから翌日にお父さんは原付で丸1日かけて実家に来た。
　3か月後、やっと帰れることになったが、まだ十分に道は整備されていなかったから電灯も無く真っ暗の中で帰った。3か月たってもマンションが半分無かったり、ビルがそのまま倒れていたりでそのままの状態だった。私の家は半壊でブロック塀が倒れていたらしい。
　　その１ヶ月後お母さんは出産するために入院することになった。
その間私はおばあちゃんの家で預かってもらうことになっておじが私を迎えにきてくれた。入院していても余震が絶えなくて、退院してからも余震が絶えなかった。
出産前は地震のこともあり不安だった。
　無事出産し、家でお母さんと私と生まれたばかりの弟とお父さんの4人家族になった。
地震によるダメージを多少受けた私の家は、雨の日は寝ていても壁のひびから水が入ってきて傘をさしながら寝ないといけない状態だった。横殴りの雨だったら壁から雨が漏れてくるぐらいになっていた。

お父さん目線

　地震が起きた時、お父さんは私たちがおばあちゃんの家に行っているので家で一人寝ていた。お父さんは子供のころから垂水に住んでいた。だから垂水は結構地震が起こる所だったから大きさにはびっくりしなかったが、揺れている時間が長かったことで「これはすごい地震だ。」と思ったらしい。だが命がなくなるほどの地震だとは思わなかった。

テレビやラジオをつけてみると良く知っている神戸がすごいことになっていた。
お母さんに電話をしようと思ったが急には通じなかった。もうその日はどうすることも出来ないと判断してその日は寝ておこうと思って寝た。
その翌日、車が幸い動いたので「これからは水が必要になる。」と思ってすぐ姫路に買いに行った。ポリタンク何個分か買ってきたが、お母さんや私はおばあちゃんの家にいっているからお父さん1人で使いきれる分量じゃなかったので、お向かいのお世話になっている老夫婦にあげた。それから原付で私たちのいるおばあちゃんの家に向かった。
バイクに乗っている途中に誰かが救援物資のパンを配っていて、大勢の人がそれにたかっていた。1人1人に手渡しすることが困難だったためパンを投げて配っていてそれを運よくお父さんがキャッチした。まわりの光景はゴジラが踏んだようだった。
道が特撮映画のように無くなったり割れていたりしていたのを目の当たりにして、これをこれから元通りにするのには相当長い時間が必要だと思った時は落ち込んだ。
家に帰ってから、しばらくしてガスより電気の方が先につくようになった。オール電化だったから電気でお風呂もわく。オール電化ではない近所の人にお風呂をかしてあげたりもした。
お父さんは仕事柄でマンションの建設の仕事をしていたからそこのオーナーさんの所に行って、パンを配ったりした。そのマンションは建設中であったのにもかかわらず、鉄筋コンクリートだったからびくともしていなかった。
地震が起こる前はこんなにコンクリートをたくさん使ってそれも鉄もたくさん入れて、意味あるの？と思っていた。でも地震が起こってから、鉄筋コンクリートは丈夫だということと構造強度というものは大切だと思えるようになった。
その仕事が終わってから三宮でかなり傾いている建物をまっすぐに起こす工事を担当した。そのジャッキアップ工事にかかる前に、中は居酒屋さんだたったからゴミを出さなきゃいけなかった。食品ばかりだったのでくさりきっていた。ゴミを出した後は、その不動産の社長に鯛飯をもらったりしてみんなで一息つけたのはうれしかった。震災後は夜勤ばかりで本当にしんどかった。
最初の復旧作業というのはベテランの人は着任せず、若い子達ばかりが3、4人くらいしか復旧作業に出向かなかった。1か月ぐらいたったあとから本格的に復旧作業しようという声が大きくなった。復旧支援をするにあたっての整備などベテランの人に「復旧作業しよう」ということの伝わるスピードがものすごく遅かった。
阪神・淡路大震災が起こった当時は前例が無く、本当にどうしたらいいかわからなかった。
復旧作業をしていて「10年以上かかるだろう」と思っていたが2、3年で大体は元通りにできたのはすごいと思った。
建築業界で問題になったことは、復旧にあまりにもエネルギーを使いすぎて、他の仕事が出来なくなったり、次の仕事がなくなったりしてリストラされる人がいたり会社がつぶれたりした。建築業界では震災バブルと言っていた。
東北ではそういうことが無いようにしないといけない。
復旧してから被災者の仕事が無かったり不景気になったりすることは許されない。
復旧してからも生活しないといけないから、生活まで検討しておかないといけない。
そのころのごたごたしている時に希望になったのはオリックスが優勝したということだ。神戸の人には本当に希望になった。みんなでがんばっていこうという気力に繋がった。

2. 震災と私

毎年震災が起こった日の近くになると新震災体験など震災であったことが毎日、新聞に掲載されるようになる。私とお母さんはその震災体験などに興味があって小学生のころからそのような記事を見つけては読んで泣いていた。
私は小学生のころから総合の時間などで震災関係の話をするようになると妙に真剣になり、少

し楽しみにしていたりした。震災を直接は体験していないからか、勉強していて怖いという感情も無くそういう話にとても興味があった。
　震災に限らず、戦争の話や命の大切さがわかる話が好きだった。聞くたびに泣くけれど何度も何度も同じ話を先生やお母さんから聞いたりした。
　お母さんは人が好きで人助けとかをするのが本当に好きだ。だからお母さんは人助けができる保育士になった。私もその血を受け継いだからか昔からボランティアというか人を助けることが大好きだった。困っている人を見ると助けないといけないという気持ちになるし、完全にお母さんからの血を受け継いでいると思う。

3. 小学校の時の震災教育

　小学校のころはたくさん総合の時間があって震災関係のお話を聞く機会がたくさんあった。「しあわせ運べるように」は絶対に1月17日近くになると朝の歌になり、毎朝みんなでラジカセを流しながら歌った。朝の歌は義務だったけど、休み時間やお昼休みなど、別に歌わなくてもいい時間に勝手にラジカセで流して歌ったりした覚えがある。時々先生に手話を教えてもらったりして、手話を交えて歌ったりした。
全くと言っていいほど震災で悲しい思いではないから出来ることだったのかなと今になって思う。
　小学校の何年生の時かは覚えていないけれど、1月17日に私より低い学年の男子2人がこの「しあわせ運べるように」を小学校の近くの駅前でアカペラで歌っていたという話を先生から聞いたのを覚えている。後日、その近隣の家に住んでいる人から学校に電話があって「震災を思い出して涙がこぼれそうになりました」というような感謝の電話が入ったということがとても印象的だった。
　震災を思い出して辛くなったり悲しくなったりすることがない私たちの世代が
震災の歌を歌っていたり、震災に関する話をしたりする。ということは震災を直で受けた被災者の方にとってはどう思うのだろうか。と小学生ながら少しだけ考えたのを思い出した。
　小学校では震災が起こった日近くになるとある教室一室を貸し切って、阪神・淡路大震災のブースみたいなものが毎年出来た。休み時間に自由に行ってもいいし、総合の時間にみんなで一緒に行くということもあった。その教室には当時の写真や新聞など、震災当時小学校に通っていた人が描いた絵などを飾っていたりした。私は絵よりも写真をたくさん見た記憶がある。「震災が起こった時はこんなことがあったんだよ」と先生や知り合いに言われるだけではなく写真という視覚で震災のことを知れるということが少し感動だった。それでも小学生だった私はその写真を見てどうこうするわけでもなく「ただ可哀そう」だと思うだけだった。「過去のこと」だから私にはどうすることもできないと思っていた。
　総合の時間にはその教室を見てまわる以外に震災当時の作文や、詩など、震災が起こったらどうするかなどが描いてある本をみんなで読む機会もあった。
　私の小学校だけなのかは分からないけどかなり震災のことの教育をしてくれていた小学校だったなあと今になって思う。私が環境防災科に入るきっかけとなった小学校生活だと思う。

4. 中学校の震災教育から高校へ

　中学生になってからは総合の時間はあったりしたが、その時に震災の話をするより、進路や将来の夢のことなどだった。1月17日近くになると教科の先生がひとりごとのように私たちに震災の当時のことを教えてくれるぐらいだった。中学校で教わった震災の話はあまりに少なすぎて本当に覚えていない。
　高校受験に迫ってきたとき、私は進路について本当に何も考えていなかった。
　私よりお母さんの方があせって、いろいろな高校を調べたりしてくれていた。

私はピアノを習っていてその先生はこの地域の高校などをよく知っている人だった。
その人にお母さんは「環境防災科」をすすめられて、はじめて私はこの世に環境防災科があることを知った。
「ボランティアとか好きだし震災のこととか学べるらしいよ。かおりちゃんに合っていると思うけどなあ。卒業してから保育士になる人もいるみたいだよ。」と言われた。
「ボランティアがたくさんできるならいいかなあ。小学校の時みたいに震災の話を聞けるなら面白そうだなあ。合っているって言われたし。」という軽い気持ちで受験することを決めて、少し頑張って入学することができた。

中学生の時には全然震災や防災について勉強していなかったからか、高校の授業がはじまると違和感がたくさんあった。でもその反面防災に対しての知識が増えていくことが楽しかった。友達が出来てからはたくさんのボランティア活動に参加しはじめた。それまで「ボランティア活動が好きだ」と公言していたのにもかかわらず、高校になってからはじめたボランティア活動ははじめてすることがたくさんで、今までボランティアだと思っていたことが本当に小さく感じた。

5. これから

私は環境防災科に入学することが出来て、勉強することができた。
震災の時の話や防災するにはどうするかをいろいろな種類の人からたくさん聞くことができた。正直この人は別に震災や防災に関係ないだろうと思っていた人も話を聞いてそんな接点があるんだと思うことができた。
だから私は将来どんな職業についたとしても震災や防災につなげていって、3年間学んだことを広めることができると思った。
この3年間で学んだことを全部これからの世の中に活かせていけたらいいなと思った。
阪神・淡路大震災は終わったことじゃない。起こってしまった阪神・淡路大震災から学んでこれからの世界をもっと防災に強い世界にできるきっかけにする。阪神・淡路大震災を無駄にしないようにこれから生きていこうと思った。

阪神・淡路大震災と私

斯波　花織

≪家族構成・住居≫

私の家族は私と父と母の3人だ。当時私はまだ1歳だった。母は専業主婦だったので家にいたが、父は海上保安官なので仕事で家に帰ってこないことがあった。当時私たちは垂水区の合同宿舎の3階に住んでいた。宿舎の下には小さな公園があった。宿舎の人たちとは仲が良かったので、よく一緒に遊んでもらっていた。震災の時にも、そのつながりがあったので心強かった。

≪震災前日≫

普段父は居間のテレビの近くに布団を敷いて寝ていた。私と母はタンスが置いてある部屋で、和ダンスの方に頭を向けて2人で寝ていた。

この日父は仕事で職場に泊まっていたので、母は夜遅くまでコタツでジグソーパズルをしていた。

≪震災当日≫

地震が起きてすぐに母は私を下にして布団に潜った。私はその時起きなかったらしい。タンスの中の軽いものがたくさん落ちてきたが、重いものやタンス自体は倒れてこなかったから助かった。もしそのタンスの中の重いものやタンス自体が倒れてきていたら私たちは助からなかったかもしれない。居間にあったテレビや電話は落ちた。普段はテレビが落ちた場所に父が寝ていたので、危なかった。だが、台所の冷蔵庫がずれて居間につながる襖を塞いでいた。食器棚から食器はほとんど落ちて割れていた。地震がおさまってから、2階に住んでいたおばちゃんが「大丈夫か？お父さんは居るか？」と様子を見に来てくれて、母は私を抱いたまま、襖のところまでずれてきていた冷蔵庫を退けて玄関まで行き、おばちゃんに私を預けておむつなど簡単に用意をしてそのおばちゃんの所に行った。そこに父が帰ってくるまで居さしてもらっていた。父がいなかったのでおばちゃんが来てくれてとても心強かったらしい。

母は明るくなってから部屋に戻り、散乱していたテレビや電話を片付けていた。その時に父から電話がはいり無事が確認できた。その時私は、おばちゃんのところで仲の良かった子と一緒に遊んでいた。

父は地震の直後にテレビの地震速報で震源地を見て、宿舎は潰れたのではないかと心配していたので、電話が繋がって安心した。

お互いの親族に家族全員の無事を連絡し、みんなが安心した。幸い私の親戚は神戸には住んでいなかったため、被害はなくみんな無事だった。

宿舎は古かったので建物にひびが入り、地盤沈下し宿舎の基礎が見えていた。特に私の住んでいた棟の周辺が一番ひどかった。ガス管と下水管が壊れていた。電気は明るくなってから復旧した。うちの近くはそれ以上の被害はなかったらしい。

父はその日の夕方頃に仕事から帰ってきて、すぐに姫路にいる父の同僚の宿舎に避難させてもらうために、約 2 週間分の服を用意し、宿舎から避難した。

≪震災 2 日目から約 2 週間≫

私たち家族は姫路の宿舎に避難していたので、何不自由することなく生活することができてい

た。
　そのころの垂水の宿舎は電気が復旧していただけで、ガス・水道の復旧はまだだった。水は給水車がきていたらしい。近所の人たちは2、3日中に親戚や実家に避難した。2階に住んでいたおばちゃんは、どこにも避難せずに宿舎でみんなが帰ってくるのを待っていた。そのおかげで、宿舎のライフラインの復旧状況が確認できた。
　姫路では私の遊ぶものがなかったため、ビデオレンタルをしたり、絵本を買ったりしていた。買い物も普通にできていたが、カップラーメンや水などは品薄だった。

≪その後≫

　いったん家に帰ってきて少し片付けをして荷物をまとめてから、大阪にいる親戚の家に行った。そこでは1か月くらい生活させてもらった。その後、父の実家の京都で3週間くらい生活をした。この間父は仕事でいなかった。
　垂水の宿舎に帰ってきたのは3月下旬だった。そのときにはライフラインはすべて復旧していた。しかし、地盤沈下し見えていた基礎はそのままだった。これが修復するまでには2、3年かかった。
　帰ってきてから、塩や砂糖が散乱していた場所のフローリングが腐っていたので張替えをたり、割れた食器などの後片付けが大変だった。

≪父の仕事≫

　そのときは加古川に勤務していた。そのころは、船ではなく陸上勤務だった。加古川の保安署には船がたくさんなかったので、父が直接神戸の保安署に行くことはなかった。地震の後も、普段とあまり変わりない仕事をしていた。唯一違うのは、地震が起こってから交通の便が悪くなったので、姫路、加古川、明石の順番で海上保保安庁の職員を巡視艇で神戸まで送り迎えをしていた。
　私たちが避難していた大阪や京都にきたのは1週間に1回程度だった。それ以外はずっと加古川の保安署で寝泊りをしていた。

≪神戸ルミナリエ≫

　「神戸ルミナリエ」は、阪神・淡路大震災犠牲者の鎮魂の意を込めると共に、都市の復興・再生への夢と希望を託し、大震災の起こった1995年12月に初めて開催され、震災で打ちひしがれた神戸の街と市民に大きな感動と勇気、希望を与えた。閉幕直後から、市民や各界から継続開催を求める強い声が寄せられ、都市と市民の希望を象徴する神戸の冬の風物詩としての定着を目指すことになった。
参考：http://www.kobe-luminarie.jp/

　神戸のルミナリエは、私も幼稚園の年長の頃から祖母と母に連れられて毎年のように行っていた。その頃は、ただ単に「きれいだな」くらいにしか思ってなかったし、なんでこんなことをしているのかも全く知らなかったし、知ろうとも思っていなかった。私がこのルミナリエが震災で亡くなった人たちのために始まったものだと知ったのは、小学校高学年に入ってからだった。そのときに10年でルミナリエがなくなるということも知った。その年はルミナリエがなくならないように募金活動をしている団体があった。私はルミナリエがなくなるのはだめだと思ったので募金をした。なぜだめだと思ったかというと、神戸の1つの大切な行事でたくさんの所から、ルミナリエを見るために人が集まってくるし、何よりも地震を忘れてはいけないと思ったからだ。ルミナリエがなくなって

しまうと、今まで以上に震災のことが忘れられてしまうと思うし、10 年たったからといって復興が終わったわけではないと思うからだ。今でもたくさんの人が震災で苦しんでいることは環防にはいって知ったが、その人たちを見捨てるような気がする。だから、ルミナリエはなくしたらいけないし、何のためにやっていることなのかたくさんの人たちに知ってもらう必要があると思う。
最近はルミナリエには行っていないけれど、また行きたいと思う。今度行く時には、ただ「きれいだな」で終わるのではなくてもっと震災のことを思い出して、見ていきたいと思う。

≪環境防災科にはいって≫

地球温暖化の問題が騒がれていた頃に高校入試があり、環境問題の勉強がしたいと思い環境防災科に興味をもった。もうひとつの理由として、阪神・淡路大震災のことが知りたかった。なぜかというと、私たちは震災を経験した最後の年代だからだ。当時1歳だった私に記憶はないが、震災を経験している。だからこそ、当時の状況が詳しく知りたいと思ったし、私たちが語り継いでいかなければならないと思った。今の神戸には震災のことを知らない人や、生まれていなかった子たちがたくさんいる。そういう人たちに、もし同じ様な災害が来たときに、震災で学んだことをいかし、同じような過ちを繰り返さないためにも私たちが震災を知り、語り継がなければならないと思った。
環境防災科に入らなければ、知れなかったことをたくさん知ることができている。防災の知識はもちろん、阪神・淡路大震災のこともこんなに詳しく知らなかっただろう。今までにも軽くなら聞いたことはあったが、ここまで詳しくは聞いたことがなかった。もしかしたら死んでいたかもしれない状況だったなんて考えたこともなかった。阪神・淡路大震災のことを詳しく両親から聞いて、私は恵まれているなと改めて感じた。親戚が亡くなったわけでもないし、地震の後すぐに避難ができ、不自由な生活を送ることはなかった。その恵まれた環境の中で育った、その環境に感謝しなければならない。
また今回、東日本大震災でボランティアに行かせていただいて、自分がどれだけ幸せな暮らしをさせてもらっていたか感じることができた。今回の東北ボランティアで、人との繋がりや、災害の怖さなどを知ることができた。ボランティアに行かせたいただいたお宅で、津波が来たときのお話をたくさん聞いた。そのお話を聞いて何もできなかったし、何を言ったらいいのかわからなかった。現地に行って、私にできることは本当にあるのか不安だった。でもボランティアにいかせてもらった先の、おばあちゃんにすごく優しくしていただいて、「あんたたちが来てくれたら元気が出る」と言ってもらえて、私にもできることがあると感じることができた。環防に入って「継続」が大切だと学んだので、この繋がりを切らずに大切にしていきたい。そのために、手紙を書いてしている。電話番号も教えていただいたのでまた時間がある時に電話もしたいと思う。
2 年の震災メモリアル行事の時の語り部さんのお話を聞いて、家族や 1 日 1 日を大切にできていないと感じました。少しの気遣いや、「おはよう」とかの当り前の挨拶を大切にしないといけないと思うことができた。当り前が当たり前ではないと気づくのは、きっと災害がおきてからだと思う。でもこうやってお話を聞くことで、気づくことができる。今では阪神・淡路大震災を語れる人が少なくなっている。私も自分の体験ではないからはっきりと話ができるわけではない。でもお話を聞き勉強して、伝えていくことはできるので、そういう風に伝えていきたいと思う。

災害はいつ起こるか分からない、だから備えが大切だ。災害が起こったすぐ後には、たくさんの人が意識をして備えをするけれど、時間が経つとそのことを忘れてしまう。そうならないために意識が必要だと思う。被害を軽減するためには、過去の災害をしらなければいけないし、知るだけではなく学ばなければいけない。私たちはそういうことをしなければならない。専門家ではなくても、最低限の防災の知識はいると思う。日本は災害大国だから、災害は起こる。被害を増やすか減らすかは私たち次第だ。

≪将来の夢≫

私の将来の夢は保育士になることだ。この夢は高校に入ってから持つようになった。理由は、ボランティアなどで子どもたちと関わることが多くなって、環境防災科で学んだことや、簡単な防災をこどもたちに教えていきたいと思うようになったからだ。日本にいる限り地震はきっといつか体験することだし、小さい頃から遊び感覚で防災と触れ合うことによって、防災を身近に感じられて、大きくなったときに少しでも興味がもてると思うからだ。ほかにも、阪神・淡路大震災のことも語り継いでいきたいと思ったからだ。

こどもに防災を教えるほうが将来につながるし、日本の将来のためにもなると思う。だから私は保育士になって防災を広げていきたい。

保育士になりたいが、防災からも離れなくないのでボランティアなどには積極的に参加していきたい。

今、伝えたいこと

須之内　智美

1. 震災と自分

私は震災当時、神戸ではなく、大阪の貝塚市というところに住んでいた。神戸に引っ越してきたのは、次で年長さんになる、5歳の春。幼かったということもあって、大阪で震災の話を聞いた覚えはないし、震災について深く考えた記憶はない。阪神・淡路大震災について意識するようになったのは、私の記憶の中で、小学校2年生の頃だと思う。きっと、幼稚園でも小学校1年生のときでも、震災については聞いていたはずだけど、私の記憶の中では、小学校2年生のときに、震災について勉強したことが、震災を知り、考えるきっかけとなった。小学校の震災に関する授業の中で、一番印象的なことは、「しあわせはこべるように」を歌ったことだ。当時震災のことはよく知らなかったが、小学生ながらに、歌詞の意味一つ一つ、しっかり感じながら歌っていたような気がする。

両親は、二人とも愛媛県の生まれで、育ちも愛媛県。私も生まれは愛媛県だ。父が公務員で検疫の仕事をしていて、大阪に関西空港が開港されたことをきっかけに、大阪に引っ越してきた。両親は、また愛媛県に戻るつもりだったそうだが、結局神戸に引っ越してきて、そのまま神戸に住んでいる。もしも、関西空港ができたときに、父が大阪に行こうと思っていなかったら、私は大阪に住んでいなかっただろうから、もちろん神戸にも住むことはなく、ずっと愛媛県に住んでいたかもしれない。もしそうなっていたら、私は環境防災科に入ることはなく、阪神・淡路大震災についても、あまり知らなかったと思う。

2. 地震発生当時

震災が発生した日、私は父と母と、一つ上の姉の４人で寝ていた。寝ている周りには、タンスや本棚があった。地震が起こったとき、揺れにびっくりして父と母は起き、周りにあるタンスや本棚が倒れないように、押さえていたそうだ。私と姉は、気付かないで寝ていたらしい。私たちは当時、5階建ての宿舎の1階に住んでいた。なので、震度4の地震ではあったが、被害らしい被害はなく、ライフラインも通常通り使用することができ、揺れたこと以外は、特別なにもなかった。他の階の人たちも、家具が倒れるといった被害はなかったらしい。でも、高層階のマンションに住んでいた人の中には、食器棚が向きによっては倒れたところもあったそうだ。

父と母は、神戸の被災地に行ったことがあるそうだ。親戚の子が神戸の大学に通っていて、その子を迎えに愛媛からおじさんとおばさんが、大阪にある南港までフェリーで出てきたそうだ。そのとき、まだ神戸までの交通機関が回復していなかったから、おじさんとおばさんを港から、子供のいる西宮まで送って行ったそうだ。親戚の子は三ノ宮の辺りにいたが、同じ避難所にいた方に、西宮までバイクで送ってもらっていたそうだ。西宮まで行くときに、倒れた阪神高速の横を走ったらしい。映像以上にすごいと感じたそうだ。

3. 地震発生後　母

テレビで、NHK のビルが倒れているところや、阪神高速が横倒しになっているのを見て、コンクリートと鉄筋の塊が、もろく倒れてしまっていることが衝撃的だったらしい。愛媛県から引っ越してきて、まだあまりたっていなかったので、近所の方と震災について話す機会はあまりなかったそうだ。だから、テレビを見ていることが多く、当時はだんだん被害の様子がわかってくるようになっていたので、テレビにくぎづけだったそうだ。母は、まだ私たちが小さかったから、ボランティ

アはできなかったそうだ。
　震災から5年後に神戸に引っ越してきて、5年経ってもみんなが語り継いでいることに、本当にいかに大変なことだったかということを、実感したらしい。私たちが小学校に入って、震災に関する行事が毎年あった。その時母は、神戸に住んでいるのに、語り継げないもどかしさを感じたらしい。大きな地震が発生して、大きな被害を受けたところに、まさか自分が住むとは思ってもいなかったそうだ。
　神戸に引っ越してきてから、震災に関連付ける話しが、大阪にいたときに比べて増えたそうだ。特にお年寄りの方が、「あの戦争も乗り越えて、この震災も乗り越えた。」という話をよくしていたそうだ。

4. 地震発生後　父

　勤務していた関西空港から神戸が見えていたらしく、神戸の火事の煙が見えていたそうだ。支援物資も、空輸で届いてきていたらしい。大阪と神戸の間の交通機関が途絶えてしまったので、職場では、大阪から神戸へ通勤している人たちと、神戸から大阪に通勤している人たちに、職場に近い宿舎へ引っ越しする措置がとられたそうだ。
　職場の中では、書庫に耐震化が施されたそうだ。
　神戸からきた職員の方の中には、水が使えないので、神戸ではお風呂に入れていなかった方もいたそうだ。

5. 父から聞いた神戸の被害

神戸港は、昔は世界でも有数の貿易港だったが、地震により輸出入ができなくなり、物流が途絶えてしまった。いまだに、当時の貿易量までは回復していないらしい。
　明石海峡大橋は、まだ橋がかかっていなくて、橋脚とパイロットロープだけの状態で、橋脚が地震によって、東西に1メートルずれてしまったそうだ。

6.　環境防災科に入って

　私が環境防災科に入ろうと決めたきっかけは、犬の訓練士に興味があったからだ。小さい頃から犬が好きで、将来犬に関わる仕事に就きたいと思っていた。中学3年生になって、部活も引退し、進路にずっと悩んでいた。秋になって、舞子高校のＯHSに参加したとき、環境防災科のパンフレットを見た。そのとき、外部講師に災害救助犬の訓練士の方がくるということを知って、犬と一緒に人の命を助けられるという点に興味を持ち、災害救助犬の訓練士について知りたいと思ったので、入ろうと決めた。
　環境防災科に入って、3年生になった今、思うことがある。それは、環境防災科に入っていなかったから、自分は阪神・淡路大震災のことをよく知らないまま、毎年 1.17 を迎えていたのではないかということ。私たち家族は、当時神戸に住んでいなかったから、私は震災当時の神戸の状況を、親から聞くことができない。だから、神戸に住んでいた近所の方や、友達、語り部さんの話を聞かないと、当時の詳しい被害状況について、知ることはできない。環境防災科に入るまでは、自分から聞くのはなんだか聞きづらいということもあったので、周りの人から震災当時の状況を聞くことはあまりなかったし、語り部さんの話を聞く機会も、あまりなかった。だから、環境防災科に入って、外部講師の方からの話をたくさん聞くことができて、当時の状況について知ることができた。
　私の姉が前にふと、「震災っていつやったっけ」と聞いてきた。私は「え、覚えてないん！？」と、驚いた。神戸に住んでいるから、知っていて当たり前と思っていたのに、身近な家族が、震災の

発生した日をあやふやに覚えていた。そのとき私は、震災の風化を実感した。環境防災科で勉強をしている私たちは、震災について学んだり考えたりする機会が多い。でも、そうでない同世代の人たちは、私の姉のように、震災について考える機会が少ないのだと思う。だから、語り継ぐことは大切だと思った。でも、震災について学ぶ機会が少ないひとたちの多くは、語り部さんの話を、すぐ聞きに行けるわけではないと思うし、震災について考える機会も、そう多くはないと思う。だからこそ、自分に大きな力はないけれど、家族や友達など、身近な存在の人たちに、自分が環境防災科にいて学んだこと、聞いたことを、少しずつ伝えていくことも、語り継ぐことなのではないかと思う。語り部さんから聞いたお話、外部講師の方から聞いたお話を、私が身近な人に伝えていくことで、私がお話を聞いた人たちの経験を、伝えていくことができる。だから、私は自分の学んだことを、少しでも多くの人に伝えていきたい。そして、まずは自分の周りの人たちだけでもいいから、震災について考える機会を少しでも多く持ってほしいし、震災のことをしっかり覚えていてほしい。

7. 私の夢

私の夢は、入学当初は犬の訓練士になることだったが、3年生になって変わった。今の私の夢は、高校の教師になることだ。

私が高校の教師になろうと思ったきっかけは、部活と環境防災科の影響が大きい。部活動は、バレーボール部に入っていた。毎日活動していく中で、部員全員でバレーをできることのありがたさ、本気でぶつかることの大切さ、他にも、今後の人生で生かせることのできる、大切なことをたくさん学んだ。顧問の先生は、よく「毎日バレーができることは、当たり前ではない」と言っていた。頭の中ではわかっていたつもりだったが、実際はバレーが毎日できることが当たり前になってしまっていたので、できなくなる日がくるなんて、考えたことはなかった。だが、総体の１カ月ほど前に、足を負傷して、引退前の大事な時期なのに、練習に参加できなくなってしまった。そのときに、毎日部活ができていたことのありがたさを強く感じた。環境防災科では、たくさんの外部講師の方のお話を聞いたり、様々な災害について学んだり、災害心理のことを学んだりして、普通科にいては学ぶことができない、防災や災害に関する多くのことを学ぶことができた。あと3年生の5月に、東北にボランティアへ行く機会があった。そのとき、避難所で生活している方たちに出会った。みなさん明るくて、元気だった。でも、被災当時のお話を聞いたとき、笑顔で話をしてくれている方でも、どこか悲しげだった。家をなくされて、とても辛い思いをしている。でも私たちは、いつも通り過ごすことができている。そう思ったとき、自分の毎日送っている生活は、当たり前ではない、とても幸せなことだということを、強く思った。

こうした、学校生活や環境防災科での活動で学んできたことを、将来多くの人たちに伝えていきたいと、3年生になってから考えるようになり、高校の教師になろうと思った。3年生になって、授業で「夢と防災」というテーマで発表をした。私は、そこで自分の夢と防災のつながりについて、考える機会を持つことができた。学校の先生になったら、授業がある。舞子高校のように、メモリアル行事もあると思う。そうした行事や授業を通して、生徒に自分が環境防災科で学んだこと、感じたことを伝える機会は、たくさんあると思う。私が教師になれたら、私の教える生徒はみんな、震災を知らない世代になっている。だから私は、環境防災科で学んだこと、外部講師の方に聞いたお話を、少しでも多くの人に伝えていきたいと思っている。

8. 学んできて

外部講師の方の話を聞いたこと、東北へボランティアに行ったことを通して、私は毎日生活している日々が、当たり前ではないことを強く感じた。当たり前ではないことは、分かってはいるけど、でも普段何気なく生活していると、いつの間にか当たり前になってしまっている。私も、高校

2年生までは、毎日の生活が当たり前ではないなんて、深く考えたことはなかった。毎日朝起きて、ご飯を食べて、学校へ行って授業を受けて、友達と話して、部活をして、家に帰ってきて、ご飯を食べて、お風呂に入って、テレビを見て、布団で寝られる。この毎日がいきなりなくなるかもしれないなんて、考えたことはなかった。でも、外部講師の方の話を聞いて、東北のボランティアに行って被災者の方の話を聞いて、ライフラインがいきなり寸断されたこと、家が倒壊してしまったことを聞き、毎日ガスや水や電気が使えること、帰る家があることのありがたさを知った。

東北のボランティアは、宮城県に行った。バスで片道14時間程かかる。正直行きのバスは、長くて大変だった。だから、帰りまた14時間乗って帰るのかと思うと、気が重かった。でも、被災者の方が、家をなくして辛い思いをしていることを直接聞き、14時間かけたら、帰れる家がある、家を失ってしまった方たちには、今帰るところがない、14時間かけたら帰ることができるのだから、別にしんどいことではない、と思うようになった。

震災では、失ったものが多い。たくさんの方の命、家、思い出、大切なものがたくさん奪われた。でも、震災があったから、人とのつながりの大切さや、絆の大切さを知ることができたと思う。震災は、私たちに悲しみをもたらした。でも、それと同時に、大切なことも教えてくれた。複雑ではあるけれど、震災は決して悲しみだけをもたらしたのではないのではないか、と思う。

震災から16年たった。きっと今、月日がたっていく度に、震災の風化は進んでいっている。神戸の人たちは震災について、考えることが多いと思う。でも、神戸に住んでいない、他の地域の方たちは、考える機会があまりないのではないかと思う。そんな人たちに、神戸の震災について知っていてもらうために、自分たちに何ができるのか。

私が今まで学んできた中で、一番伝えたいことは、今の生活が当たり前ではないこと。家族と過ごせることも、友達と毎日学校で会えることも、全部当たり前ではない。2年生のメモリアル行事で、語り部さんのお話を聞いた。そのとき、語り部さんは「家族の方を大切にしてほしい。あいさつすることは照れくさいかもしれないが、親は嬉しいから、しっかりしてほしい。」とおっしゃっていた。考えたくはないが、いつ会えなくなるか分からない。だから、照れくさいけれど、毎日顔を合せている家族に、「おはよう」や「いってきます」と毎日言うことは、大切なことだと思った。学校に行くのも、面倒なときもあるけれど、でも通えることが当たり前ではない。そう考えていくと、毎日の生活がどれだけ幸せか、感じることができる。これからの生活の中でも、毎日同じ日々を過ごせていることが幸せだということを忘れずに、毎日を大切に過ごしていきたい。

風化していく震災

瀧野　奈央美

当時のことを1歳だった私は何も覚えていない。だから両親の話などを元にしている。

当時
父（郵便局課長代理）、母（助産師、当時は育児のため休暇中）、長男（小学校2年）、次男（年長）、私（1歳）
当時は家族ぐるみで仲の良い女の子と男の子（小学校1年生と年長）を、両親が九州まで法事のため2、3日預かっていた。
そのとき、わたしたちは星陵台の社宅に住んでいた。

1. 震災前日

前日の1月16日は、お兄ちゃんの6歳の誕生日で、みんなで誕生日パーティーをしていた。するとその夜、地震があった。割と大きい揺れで、ここらへんで起こるなんて珍しいけどたいしたことがなくてよかった、くらいにしか思っていなかった。
父は当時ポートアイランドの郵便局で働いていた。前日は郵便局の耐震壁を作るための準備をしていた。建物の中で、弱い壁があったのでその部分を耐震壁という地震に耐えられる強い壁に変えようとしていた。建物の調査も終わり、次の日1月17日の朝に入金予定だった。

2. 地震発生

午前5時46分。突然激しい揺れが襲った。寝室では父と母と私の3人で寝ていた。母は私の上に覆いかぶさるように乗って、物が私に落ちてこないように守った。幸い、棚などは倒れてこなかった。兄たちは4人で別の部屋で寝ていたが、みんな無事だった。でも4人のうち1人の子どもの前にはテレビが置いてあったので、もし落ちていたら大変なことになっていた。台所は食器棚の扉が開いて、食器は粉々だった。床は食器とガラスが散乱しており、何が起こったのか全くわからなかった。

3. 母の行動

地震後、母はとりあえず片付けをしないといけなかった。水道・ガスは止まったが、電気は大丈夫だった。自分の住んでいる社宅は大丈夫だったが、家の近くでは全壊や半壊の家が何軒かあった。子供は5人もいてまだみんな小さく面倒を見ないといけないのに、父はみんなの安否確認をするとすぐに会社へ向かったので母一人でみんなを見なければならなかった。
電話はつながっていたので、しばらくすると学校からしばらく休みと電話がかかってきた。預かっている子供の両親も電話が来て、交通手段がないので迎えに行けないと連絡がきた。その後は1週間くらいしてから、両親は迎えに来た。
配水はずっと近くの小学校まで行った。子供たちも連れて行ったが、言う事は聞かないし泣いたりするので大変だった。食糧も、スーパーに並んでずっと買っていた。周りではパン屋が個数制限で販売してくれていたり、本多聞では湧水があったりしたので本当に助かった。
母は状況が落ち着いてから、保健部で働いていた。仮設では聞き取り調査や話を聞いたりした。半年くらい経ってからはボランティアで助産師として週に1回、灘区で子供の子育て相談のボランティアの募集があったので行っていた。そこでは妊娠中の人のケアや母乳ケア、親子

サークルのサポートをしていた。震災があってからは子供たちの遊ぶ場所が全然なかったので、部屋を借りて親子で遊べるように活動も行った。

4. 直後の父の行動

とりあえず家族の安否確認を終えると、すぐに会社に向かった。駅まで行ったが電車は動いておらず、家に引き返した。そして車で向かったが道路は通れず、また家まで引き返した。そして同じ社宅に住んでいた近所の方からバイクを借りて、垂水から三宮の会社まで向かった。

須磨水族館の前の橋から町を見ると、朝なのに東の空は真っ暗だった。長田ではたくさんの家が崩れていた。湊川の橋は渡ろうとしたら1mもの段差ができていた。その為バイクをかついで橋を渡った。長田をすぎると大丈夫だったが、フラワーロードのあたりはまるで町がいがんでいるようだった。ビルはななめに倒れそうで、市役所は真ん中の階がつぶれていた。

震災当日はバイクを借りることができたが、その後は祖母に借りるまでしばらく自転車で会社まで父は通ったらしい。

5. 職場での行動

郵便局は1階がつぶれて、全壊状態だった。耐震壁をつける予定だったところがすべて壊れ、そのせいで1階部分が全てつぶれた。

父のいる郵便局は外国からの郵便物を全て受け入れるとても重要な郵便局だった。神戸の港までいろんな国の船から郵便物が来て、それらを日本全国に届ける場所である。しかしその郵便局は全壊状態ですぐ取り壊しだったので、とにかくそれらの郵便物を別の場所に移動させなければならなかった。そのため10トントラックを10台呼び、2階の壁を破ってトラックに郵便物をすべて北区の郵便局まで移した。2階は、1階部分が潰れているため歩くたびに揺れて、ふわふわしていた。

その後はポートアイランドにある輸出用の建物へ行った。ポートアイランドが沈下し、神戸大橋のところは1mの段差ができていた。ポートアイランドはみんな液状化により泥だらけだった。建物の中にも、床のひび割れから泥が吹き出し30cmもの泥の層ができていた。泥はすぐに業者を呼びかき出してもらったが、外国へ送る郵便物には泥がついていた。だからそれぞれの国の言葉で1通1通全てに「震災の影響で泥がついて汚れてしまいましたが、送らせていただきます。」と書き外国へ送った。

ポートアイランドは、ずっと断水状態だった。水がない間、ずっと大阪から大きなタンクで給水に来てもらっていた。週に2回くらい来たが、車がずっと渋滞していたので水がくるのは夜中の2～3時だった。だから父は給水の日には郵便局に泊まりがけでずっと給水タンクを待っていた。

そして、三宮の郵便局をつぶさないといけなかったので罹災証明を取り磯上公園にある事務所までいった。でも1月という寒い気候の中、4時間もずっと外で並んで待っていて被災証明をとるのも大変だった。

6. 郵便局の働き

震災があっても、ずっと郵便局の窓口は開き続けていた。でも全壊のため、最初はずっと仮設で2～3か月開いていた。お客さんへ震災の影響を与えないようにずっと復旧をしながらも仕事を続けた。外国からやってくる船もブラジルなどは震災の1か月くらい前から出港して日本に向かってきているのでずっと受け入れを続けなければならず、とにかく必死でしばらくの間は受け入れを続けていた。

そして配達をするときには、家を探して、避難所を回りながら全ての郵便物を配った。その時

には誰がどこの避難所にいるかというリストも作り、郵便物をちゃんと配れるようにした。当時配れたのは郵便局だけだったらしい。

7. 父

震災から2ヶ月後の3月のある日、父は職場で仕事中に倒れた。急いで病院に運ばれた。原因は過労のせいだったらしい。その時は1週間くらいで退院することができた。
そして、震災から8か月後の9月、再び父は過労で入院してしまった。今回は1か月も入院した。その病院は家からすぐ近くの病院だったので、私は母と毎日お見舞いに行った。入院中、父は「仕事をやめたい」と母に言っていたが、母は「やめていい」と父を止めなかった。もし、ここで母が止めなかったら父は仕事をやめていただろうと言っていた。私がお母さんに「何で止めんかったん？」と聞くと母は「自殺でもされたら大変やし、お父さんは家事でもすればいいから」と言っていた。
父曰く、仕事中はずっと緊張しているから大丈夫だけど、仕事がひと段落してからが安心するから疲れが一気に出てしまうと言っていた。それに父は当時、中間管理職だったので社員は定時ですぐに帰らせるが、自分はずっと会社に残って仕事をしなければならなかったと言っていた。

8. 復興

2 月の終わりか 3 月の初め、父はいつも通り会社から家に向かっていた。ポートアイランドから橋を渡って真っ暗な 2 号線をいつもバイクで帰っていた。そんなある日、ポートタワーや海洋博物館に震災後、明かりが初めて点灯した。それが父にとっては震災があってから、1番うれしいことだった。今まで光なんて当たり前だった。でも、その光はあの時には涙が出そうなくらいうれしいものだった。神戸の街に光が灯っている、そのことは父だけでなくおそらく他の神戸の人たちにも前向きな力を与えることができたと思う。そして、光は人を安心させることができるものなのだと感じた。
ルミナリエの電気は各会社で電源の確保を頼んでいた。父のいる三宮の郵便局も頼まれて、実行委員となった。9月には復興のはずみをつけよう、という目的でルミナリエの実行委員の会にずっと参加していた。もちろんルミナリエの企画に賛否両論はあったが、結果的には成功した。終わった後にはやりがいがあり、本当にやってよかったと言っていた。

9. 母から見た震災

震災ではいいことなんてひとつもなかった。でも、その中で地域のつながりは再認識することができた。地域では復旧がちがっていたため、小束山では水、舞子ではガスが早く復旧できた。だからお互いに足りないものを補い、ずっとみんなで助け合った。
このつながりのおかげで地域の協力の大切さが身にしみて分かった。1人では決して生きていけない、つながりが大切なのだとこの震災で強く感じた。

10. 私にとっての震災

私は小さい頃から神戸に住んでいることもあり、ずっと地震と関わっていた。小学校の時、1 月 17 日には「しあわせはこべるように」を歌ったり、当時の話や写真・映像なども見たり、防災未来センターにも校外学習で行った。中学校でも炊き出しを行っていて、ずっと阪神・淡路大震災に対して子供の時から怖いもの、と教えられていた。でも地震のときの映像や、写真を見ても、綺麗すぎる神戸のまちしか知らない私は正直これが本当に神戸のまちだなんて全然信じられな

かった。

11. 環境防災科

環境防災科に入った理由は、「震災を後世に伝えていきたい」といったきれいなものではない。友達に誘われたオープンハイスクールでのクロスロードがきっかけである。災害時、150 人の避難所で 100 個のおにぎりをどうするか、食糧不足のなかで困っている人が大勢いる避難所の中で自分が持っている非常持ち出し袋を開けるべきかなど、答えのない問題をゲーム感覚で考えていく。私はこのクロスロードによって「防災ってめっちゃおもしろい！」とすごく興味を持ったことを覚えている。もちろんクロスロードだけでなく、ボランティアや国際交流の様子、そしてそのことを堂々と発表している先輩を見て「私もこんな先輩になりたい！」と思い環境防災科に決めた。

環境防災科にはいったのは全く地震が関係ない、ということもないと自分自身思っている。小さい時から決して地震に対して無関心だったわけではなかったし、ずっと防災について学んできたからこそすぐに防災に興味を持つことができたのだと思う。きっかけは小さなことだが、今となっては本当に入ってよかったと心から思っている。

12. 語り継ぐ

地震からもう17年が経とうとしている。もう震災を知らない世代がどんどん増えている。もちろん私も記憶はないのでその中に入るのかもしれない。でもその中でも私なりにできることはたくさんある。今回聞いた話を自分で発信していくこと、そして忘れないこと、それをしていかないといけないと思う。

今まで両親と真剣に当時の話を聞いたことはなかった。「あの時、ここのビルつぶれてんで。」といった話はたまに聞かされていたが私も「へえ～」というくらいできちんと聞いたことがなかったからだ。でも、ちゃんと地震のことを聞いていく中で初めて知ることがたくさんあった。母が地震の直後わたしを必死になって守ってくれていたこと、父はずっと仕事を辞めたくなるくらい一生懸命仕事をしていたこと、あの時幼かったわたしは全然あの地震のことは覚えていないが、そんな大変なことを両親は経験したのだととても驚いた。

まだ当時、あんなすごい被害があったなんて想像はできないが、今あるこの生活は当たり前なんかではないということ、どれだけ今の生活が幸せなのかということ、それを実感した。そして同時に、この地震を決して風化させてはいけないと強く思った。私は四川にも行ったが、そこでは地震から3年経った今でも1万人が埋まっている町がある。でも日本では四川大地震のことはみんな記憶から薄れていっている。家族を亡くした人たちはまだ悲しい思いをしている人が多い。そのギャップが私はすごく悲しかった。それは四川大地震だけじゃなくて阪神・淡路大震災にも通じると思う。私自身の中でも、地震が風化している部分はあった。でも、地震は決して風化させてはいけないものだと四川に行き改めて強く思った。だから私はこの地震を決して風化させないよう、そしてもう地震で誰かが命を落とさないようにこの震災体験や、環境防災科で学んだ防災について、もっともっとたくさんの人に伝えていきたい。

わたしの将来の夢は海外で防災を伝えていくことである。今回の東北の地震でも、阪神・淡路大震災でも、もし途上国で発生していたら被害はさらにひどかっただろう。だからもっと途上国の防災が必要だと思う。日本で伝えていくこともちろん大切だが、わたしは今まで自分が勉強してきたことや経験を途上国で伝えて地震の恐ろしさをもっとみんなに知ってほしい。そして命を守るために、防災について広めていきたいと思う。

それぞれの震災

竹中　梓

((家族の体験談～姫路市～))

阪神・淡路大震災が起こったとき、私は姫路市飾磨区に住んでいた。父・母・祖父・祖母・姉（当時 5 歳）・姉（当時2歳）・私（当時1歳）の7人家族。家は2階建てで地下がある家だった。神戸ほどの揺れではなかったけれど、姫路でもいつもの地震とは何かが違う揺れだった。姫路は震度 4 だった。父はそのとき出張で家にはいなくて、母・姉2人・私は2階で、祖父・祖母は地下の寝室でいつも寝ていた。あの日もいつものように寝て、母はそろそろ起きようとしていたところだった。突然、少し大きめの揺れがきた。家が結構古い家だったので、少し大きく感じられた。私たち 3 人は起きんかったん？と聞くとぐっすり寝とったわ、と笑いながら返された。でもその後に母は、あんたら 3 人をかきあつめるようにしておおいかぶさるようにしてゆれがおさまるまで必死で守ったんやで。と何気なくボソってゆっていたけど、必死に守ってくれたのだと思う。母に小さいころから守られて生きてたんやとすごく感じた、ありがとう。その行動が母にできる精一杯いっぱいの行動だったのだと思う。震度 4 でも大きな揺れにはかわりなかった。

揺れがおさまってから母は 2 階から 1 階にかけおりてみたら食器棚からコップが2つ落ちて割れていた。でも姫路はそんなに被害はなかった。確認してからすぐにテレビの電源をつけてみると、神戸で大きな地震があったことがやっとわかった。出張中の父に電話をかけてから、神戸に住んでいる祖父・祖母にそく電話をかけてみると幸いなことにすぐつながった。安否確認ができたときには生きていてよかった、と何度も心の中でつぶやいた。しかしつながったのはその 1 回きりでそのあとはまったく電話はつながらなかった。それからは姫路では避難しないといけないというようなことはなく、普通に生活できた。姉は幼稚園にも通えた。だから私たちは支える側に変わった。神戸から祖父・祖母がお風呂に入りに来たり、母の友達が洗濯やお風呂に入りにきたりしていた。母は水を買って祖父・祖母・友達の家に持っていったこともあった。やれることはしないといけないという母の気持ちがこの話を聞いてすごく感じられた。

((いろんな人の話から))

こんな話を聞いた。震災の日になるとよく倒れた高速道路に半分落ちかけのバスの映像を毎年テレビで見た。母のあの中にいた人、助かったのかな～と聞くと、あのバスに後輩が乗ってたんやで、と話してくれた。幸いなことに助かったと聞き安心した。

こんな話もある。母の先輩は車に乗って高速道路を走っていた。そのとき地震にあい高速道路から落下した。しかし奇跡的に骨折はしたものの助かった。たくさんの方の事を聞くと余計に地震があったのだと実感してくる。あの時、たくさんの命が失われた。しかし助かった命もたくさんあるのだと思った。

おねえ、地震のこと覚えとる？と当時 5 歳だった姉に聞いてみた。するとあんまり、と言葉が返ってきた。でも大きく揺れて物が割れる音がして、怖いと思ったな～とは言っていた。もう記憶が曖昧でわからない感じだった。そうやって記憶はだんだん薄れ、忘れられていくのかなと思った。被災地の人だけが覚えていたって意味ないのに、このままじゃただの震度4の地震があった、で終わってしまいそうで嫌になった。何年かたって、何十年かたって、阪神・淡路大震災と聞いて関係ないと思ってしまうのではないかってすごく心配になった。兵庫県南部がゆれて姫路もゆれた。関わりはすごくあるのに。同じ兵庫県民として、揺れの大きさは違うけど、そのことを姫路の人にも忘れてほしくないと思ったし、みんなにも忘れてほしくないと思った。

((祖父・祖母体験談～神戸市～))

震災当事、祖父と祖母は神戸市垂水区に住んでいた。前の日、地震が起こったのは高知県から旅行から帰ってきた次の日のできごとだった。前の日は、高知県の親せきの家に旅行に行っていた。祖父は親戚とお酒を飲みながら笑って、祖母はたくさん自慢の料理をふるい、おいしいと食べてくれるみんなの嬉しそうな顔をみながら楽しんでいた。そんな楽しいひと時を過ごし、まだ少し余韻に浸りながらも次の日に帰ってきた。高知県を出る時間が遅くなってしまい、帰ってくる時間も遅くなった。家に着いたのは夜中の12時をまわっていたそうだ。疲れているので2人はいつものように寝室でねむりについた。

あの日、2 人はそろそろ起きようとしていたところだった。1995 年 1 月 17 日 5 時 46 分・・・。突然、「ドーン！！！」というすごい音とともに下からすべてが突き上げられたような感覚に襲われた。この瞬間、「天と地がひっくりかえった」と祖父はそう思った。この頃は神戸には地震はこないと聞いていて、神戸には地震は絶対にこない！そう信じていた。だから突然起きたこのゆれが“地震”だったとは思いもしなかったし、地震という言葉が頭に浮かばなかった。なにか戦争でもはじまるのか、近くで爆弾が爆発したのではないかとも疑った。しかしこれは阪神・淡路大震災という大地震だった。ゆれがおさまったとき、わけもわからず周りをみわたすと鏡台が倒れていた。幸いなことに寝室にはタンスもなく鏡台だけだったので、祖父も祖母も怪我なく助かった。地震が起きる1か月前、寝室には大きなタンスがあった。狭いし邪魔だから、という理由でおしいれのタンスに変えたそうだった。もしタンスをそのままにしていたら、祖母に直撃していた可能性が大きかった。その1か月前のなにげない行動が、命にかかわる大きな出来事になっていたかもしれない、と祖母は怖そうに話していた。

ゆれがおさまり外に出ようとしたとき、リビングが目に入った。食器棚が斜めをむいていて天井に角がぶつかってかろうじてたっていた。陶芸好きだった祖父が作った大切なお皿も割れ、中身はほとんど外になげだされ、食器類は割れ、周りはガラスの破片ばかりだった。ただ立ち尽くすしかなかった。そして2人はすぐにベランダにでた。いつもとは違う感じがした。なにか嫌な雰囲気が2人を包み込む感じだった。いつも向こう側に見える青く大きな水平線、そんな美しい風景が目の前にはなかった。赤く怪しい大きな雲が端から端までを埋め尽くしていた。なにがあったんや。それしか言葉はでてこなかった。外に人影はあまりなく、わりと静かだった。しばらくすると外で誰かが“ガスくさいぞ”と大きな声で叫んでいた。そのときすごく危険を感じた。ベランダ、階段、駐車場はひび割れていた。家に戻ってまた中を確認した。祖父は思わずカメラを片手に何枚もの衝撃的な風景を写真に残していた。祖母は1番最初にガスを止め、お風呂に水をため始めたそうだ。住んでいる家の団地には大きな貯水タンクがあって、しばらくそのおかげでお風呂に水をためることができた。そして私たち家族、いとこの家族に必死に電話をして安否確認をしようとした。しかし電話はなかなかつながらなかった。焦る気持ちでいっぱいのとき、電話もようやくつながり、無事か？と安否を確認しあった。誰も怪我もなく助かって一安心。そして水をためるように、私たち家族といとこの家族に伝えた。その頃は電気・ガス・水道などのライフラインが寸断されていた。少したってから電気が戻った。祖父は高砂にある会社に勤めていた。会社に行こうとしたけど交通機関が止まったというラジオ放送で知り行くことができなかった。同時に地震のことも知った。会社の社長さんが“えらいことになっとるから無理するな”と言ってくれた。だから祖父は会社に行かず家にいることになった。

同じ神戸でも被害には差があった。私のいとこの当時7人家族が住む神戸市西区にある家では、玄関に置いてあった壺が1つ倒れただけだった。食器棚もタンスもほかにあったものはすべ

て倒れることなく無事だった。地盤の関係だ、と祖父は言っていた。プレートやその土地の地盤などそれぞれの場所で被害の大きさは違ってくるのだと思う。

祖父・祖母が住む垂水区の家では、倒壊していなかったので目の前に小学校があったけどその避難所にはいかなかった。お風呂にためた水は2，3日でなくなった。そんなとき、祖父の会社の人が持ち運べるタンクに水をいれて持ってきてくださった。本当に感謝の気持ちでいっぱいになった。数日たつと“水は水道局でもらえます”と放送しながら走る車がやってきた。歩いて20分のところにある神戸市水道局にバケツかなんかをもって水をもらいに行って、家まで運んだ。もらった水はトイレなどにも使った。お風呂は入れるわけもなく、1度だけ私が住む姫路市飾磨区まで車できてお風呂に入りに行った。道路は寸断されていたので125号線に乗って姫路まで来て、お風呂に入って1日すると神戸に戻った。こうしていつのまにか人と人は助け合って生きてきたのだと思う。

((神戸へ引越し))

私は家の事情で7年間暮らした大好きな姫路の町から神戸へと引っ越しをすることになった。そのときは地震があったことはまったく知らなかったと思う。どこをどうみたって普通の町だったから。学校は転校ということになり小学3年生からは新しい学校に通うようになった。姫路の小学校では運動場を走り回っていた記憶しかなくて、記憶が濃いのは神戸に来てから今までの10年間。神戸の小学校にきて、甘えん坊、泣き虫な私はずっと姉の梢にくっつきまくって登校した記憶がある。そうして始まった神戸での学校生活。印象に残っているのは、道徳や総合の時間に“幸せ運べるように”という教材で地震のことについて勉強していたこと。音楽の時間には“幸せ運べるように“の歌も歌ったこと。あの歌詞とメロディーがすごく好き、そんな感じで楽しく歌っている自分がいた。でも中学 3 年のとき歌ったときは、頭の中で想像してしまって悲しくなったことがあった。年を重ねるごとに感じ方ってかわるなと思った。小学校低学年の頃まではきっと地震のことは記憶にもないし自分の中でもあまり関係がなく知らなかったことだと思う。でも知らないうちに阪神・淡路大震災のことを少しずつ知っていっていた。高学年になると地震があったことを知っている自分がいた。そんなに深くは知らなかったし、祖父に写真をみせてもらったり、話を聞かせてもらったり、授業で習った程度だった。だけど 1 月 17 日に近づくと毎年番組が震災の特集になり、震災にふれる時間が多くあった。そんな時、私はすぐに震災のチャンネルに変えていた。気になっていつもくぎづけで、小さい頃から涙線の弱かった私は、特集や新聞の記事を見るだけで涙が出てくることもたくさんあった。今はこんなにも普通の町なのに、住めなくなるような町にかわったことが信じられなかった。そうやっていつの間にか震災と関わっていくようになった。

((環境防災科に入学して))

私は神戸に来て良かったとすごく思う。転校せずに姫路にいるままだったら、今こうして震災についてあまり学べてなかったし、学ぼうともしてなかったと思う。入学して震災のことや災害のことについて深く学んでいくようになった。たくさんの外部講師の方（消防士、自衛隊、ガス会社、電気会社、水道局・・・）から話を聞ける機会がたくさんあった。消防や自衛隊の方はたくさんの人の死を目の当たりにした。その日助けた人でも次の日に亡くなる。そんな現実と向き合いながらも活動を続けた。被災者だけでなくかかわった人すべてが辛く苦しんだのだと思う。でもそうやって苦しみを分け合いながら、復旧・復興するためにたくさんの人と支えられながら 17 年間やってきたのだと思う。前向きに生きてきたからこそ今の神戸があると思う。深く学ぶことは少し怖かった、知らないとこまで知るから。でも神戸の人が現実と向き合ってきたように、現実と向き合うことも大切だと思った。授業やイベント、ボランティア活動を通してたくさんのことを見て、聞

いて、感じられるこの学科に入学できて本当に良かったと思った。私が震災について知ったことはほんの 1 部にしかすぎないかもしれない。だけど亡くなった 6434 人 1 人1人のことを忘れない。顔も知らない人たちだけれど、同じ日本に住む大切な仲間だから。亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていきたい。この学科にきて学んでいるうちにそう思うようになっていた。

((あたりまえじゃない日々))

今の生活があたりまえなんかじゃない、私はけがをしてそう思った。走りたくても走れない、大好きなことができない。あたりまえのようにやってきたことができなくなるのは苦しかった。だから地震のときも誰も予想してなかったと思う。いきなり食べること、寝るこができなくなったり、帰る家がなくなったり。あたりまえと思っていたことが突然できなくなる。毎日の生活は幸せいっぱいってことにその時気づくのだと思う。今、すべてのことがあたりまえなんかじゃなくて、生活できていることに感謝しないといけないと思う。食べられる幸せ、寝られる幸せ、走りまわれる幸せ、帰る家がある幸せ、生きている幸せ。たくさんの幸せをかみしめながら生活していきたいと思う。

((将来))

私は将来、救急救命士になろうと思う。災害が起こったときに現場に駆けつけて多くの人の命を繋げたい。1人でも多くの尊い命が助かるように。地震の時、母が私を必死になって守ろうとしてくれたみたいに、私も目の前の消えそうな命を必死で守りたい、そう強く思った。なにか起こったとき自分の命は自分で守らないといけない。誰かだけが学べばいいのではなく1人ひとりが学ばないといけないことだと思う。命が助かるまでには一連の動作が必要である。まず怪我をしたり倒れたりしている人を見つけた人。その人がしっかり対応して救急隊に受け継いで病院に運んで、医者が治療する。誰かがかけると命は救えない。だれも欠けてはいけないのです。震災の時に助け合って乗り越えてきたように、大切な人や自分の命を守るのは自分だと防災の勉強をしていくうちにわかった。だから将来、たくさんの人に防災を学ぶきっかけをつくりたい。人の命を繋ぐ仕事をしながら、地域の方に防災を学ぶきっかけをつくれるように、イベントや講習会などを開きたいと思う。立ち止まったときや迷った時は学んだことを思い出して、毎日を大切に全力で過ごしていこうと思う。そして将来、多くの人の力になれる救急救命士になろうと思う。

語り継ぐ

谷　勇也

はじめに、

父３０歳、母２８歳、姉３歳、僕１歳
阪神・淡路大震災があった当時、僕は１歳で本多聞の団地の１階に住んでいた。
１歳だったので何も覚えていない。いつも僕は父母姉と一緒に寝ていた。僕たちの寝室の周りには天井まである棚と大きなタンスがあり、家具の固定などはしていなかった。家の中の物にはほとんどそういった対策はされていなかった。それだけ地震に対する意識が低く、大きな地震は来ないと思っていたのだろう。

１　阪神・淡路大震災

地震が起こった前の日から父は体調を崩し、その日は仕事を休んでいた。地震が起こった日も今日も休もうかな。と思っているときに地震が発生した。地震が起こると父と母は飛び起きました。ドーンという音が聞こえたかと思うと急に激しい揺れが襲ってきた。部屋にあった大きなタンスが僕たちに向かって倒れてきた。そのタンスを父が受け止め、母は僕と姉を抱きかかえて守ってくれた。父はタンスを支えているのがやっとで、地震の揺れとタンスの重さで手と足が震え限界ぎりぎりだった。地震の揺れは長かった。もしタンスが僕らを襲っていたらどうなっていただろう。父や母がいてくれたから僕らは助かった。感謝してもしきれない。家の中では、食器の３分の１ぐらいが床に落ち、割れて破片が散乱し、テレビは揺れで移動していたが家具はほとんどそのままで使える状態だった。子供部屋があるのだが、そこにある大きなタンスが倒れていた。その部屋は姉が使う予定で、この時期はまだ父母と同じ寝室であったが、もし震災の時期がもっと遅ければ姉の命が危なかったかもしれない。こういった偶然の出来事が重なって、今僕たちは生きていられるのだ。
震災後も電気、水道は使えた。電話もつながり祖母の安否確認を済ました。ガスは使えない。しかも復旧に時間がかかり使えない期間が長かった。水道はしばらく経つと漏水の点検か何かで止まってしまった。家の中にいると余震が来たときに危険だったのと、朝方の冷え込みが厳しかったのでとりあえず車に入った。車の中でラジオを聞いて震災についての情報を得ていた。そのラジオでは震災で亡くなった方々の名前が流れていた。夜になって父方の祖母の家の近くの学びが丘北公園へ行き、祖母を車に乗せた。祖母の家の扉は開かなくなり水道やガスも使えない状態だった。その時は車で公園に入ることができたのでそこで一晩過ごした。普段の僕は夜泣きなどしなかったが環境が変化したことなどが原因で夜泣きをし、家族を困らせた。
その次の日から母方の祖父の家へと向かった。祖父の家は田舎で当時の家から１０分で着く場所にある。古い木造建築だがそのあたりは地盤がしっかりしていて、地震での家屋被害は少なかった。納屋の土で塗り固められた壁がはがれおちたり、家の周りのブロック塀が崩れたりはしたが、母屋自体は無事だった。祖父の家は、電機、水道も使えたし、プロパンガスなのでガスも使えた。農家なので米や野菜などがあったため食事には困らなかった。そのため僕たちは２週間ほどここで滞在した。父は建設関係の仕事に勤めていたため毎日仕事場へ行きました。
阪神・淡路大震災の話を親から聞いて、親のありがたさを改めて知ることができました。自分たちを守ってくれた両親に心から感謝している。

２　環境防災課に入って

(1)　過去の自分

僕が環境防災課に入った理由は、僕の将来の夢である、消防士になるのに環境防災課が有利だと思ったからだった。防災を広めたいなど考えていなかった。
消防士になりたいと思うようになったのは、父が僕に消防を勧めてくれてからだった。中学生になって、漠然と消防士になりたいな。かっこええな。と思うぐらいで人を助けたい。という感情はあまりなかった。今思うと、僕は薄情な奴だったなと思う。しかし、夢を追いかける中で消防士になってたくさんの人を救いたいと思うようになった。たくさんの人々を火災や災害の恐怖から守りたいと思う。真剣にそう思えるようになったのは環境防災科に入りたくさんのことを学び、体験することで、人の命の大切さを知ることができたからだ。
環境防災課に入るまで阪神・淡路大震災の勉強や教訓を学ぶ機会がなかった。小中学校で教えてもらうことはあったが、ほとんど覚えていない。僕自身、震災に対してあまり興味を持たなかった。なぜなら、震災の記憶はないし僕の家族や身内は、全員無事だったから。

(2)　環境防災科で学ぶ

環境防災課に入ってから震災について深く考えさせられた。震災の出来事を高校生になってやっと考える機会ができたのだった。たくさんの人が犠牲になり、多くの被害をもたらした震災を外部講師の方などに、いろんな視点から話を聞かせていただいた。感じたことはたくさんあったが、震災の恐ろしさをまだ感じきれなかった。
これまで人の死についてなにかを感じたことはなかった。去年の冬に曾祖母が亡くなった。夏に熱中症で倒れたことが原因だった。今では人の死について少しは理解しているつもりだ。悲しかった。人が死ぬととても悲しいことがわかった。亡くなる前のことを考えると自分の無力さを感じた。もっと何かしてあげられたのではないかと思い後悔しました。先輩の中には親を震災で亡くした方がいる。震災に対する怒りや親を亡くした悲しみを聞かせてくださった。その感情が今では痛いほどわかる。大切な両親、自分を守り、今まで育ててくれた両親に突然会えなくなるのがどれほど悲しいことか。そんなことを考えさせられ、改めて人の命の大切さを知ることができた。阪神・淡路大震災で犠牲になった人たちの遺族の方々の気持ちがどれだけ複雑な思いだったか。環境防災科に入って、人生の経験を重ねていくことで、人の気持ちを少し理解することができるようになった。先輩達が震災を語り継いでいくことで僕自身、成長することができた。人の命の大切さ、人々が語り継ぐことの大事さを学ぶことができた。

(3)　東北ボランティアを通して

僕たちは東北の被災地に行きボランティアを行った。被災地へ行くのは初めてだった。初めて目にする震災の被害、津波の被害。テレビで見たようながれきの山を実際に見た。自分の目でそれを見てみると、一つ一つのものに表情があり、これをがれきの山と言ってしまうといけないと思った。家具やぬいぐるみ、車や船などそれぞれが大切に扱われていたものたちだ。もう使われることはないのかもしれないががれきと言いたくなかった。

現地での仕事の大半は泥かきの作業だった。大変な作業だったが被災地にいる人々が毎日のように作業しているのだと思うと、１週間しかいることができない僕たちの力で少しでも、復旧・復興の役に立たせてもらいたいと思い１日１日一生懸命働かせていただいた。被災地へ行った３日目に避難所にいる人たちと一緒に僕たちが用意した夕食の鍋を食べた。さとうさんという人と一緒に食べながら、お話を聞かせていただいた。

さとうさんは地震が起こった当時、港近くの仕事現場で働いていた。地震が起こり、従業員たちは近くの避難所の体育館へ行きました。津波が来ると思ったさとうさんらは体育館の上にあるギャラリーへ上った。そして窓から海の方を見ると、黒い波がだんだんこちらへ向かってくるのが見えた。さとうさんらは早く皆を助けないといけないと思い、できるだけ多くの人をギャラリーへ上らせた。まもなく津波が体育館へ到達した。体育館の扉を破り、津波の波が体育館へ入り込み、黒い渦を巻いた。流れてきた物と一緒に避難所にいた人々も巻き込まれた。さとうさんらのいるギャラリーの窓からも波が襲ってきた。頭から水をかぶった。黒い水がしばらく続くと次は水が澄んできれいな水の色をしていた。黒い渦の中には、流されながらもまだ生きている人がいたので玉入れの棒を使うなどして救出活動を行った。多くの方を救出したがそれでも救えなかった命もあった。それから２、３時間経つと次第に水が引いていく。黒い泥と流された物、亡くなった方々の遺体だけが残された。さとうさんはもっとたくさんの人を救いたかったと言っていた。

その話を聞いて僕は、言葉を失った。その時の写真を見せてもらったが、とても悲惨なことになっていた。言葉では言い表せることができないような感情を抱いた。ほんとうに津波は恐ろしいものだと思った。実際に被災者の方と話をさせていただいて、普通に明るく接してくださっていたが、震災でほんとうに大変な体験をしていて、心の中ではどんな気持ちなのだろうかと思うと、複雑な思いになった。

３　未来の自分

高校に入る前までは、震災のことに興味がなく、何も知らなかった自分だったが、環境防災科に入って、色んな体験を通すことで震災に関することの勉強を積極的に取り組むことができ、災害に対する意識が全く違うものになった。東北の被災地ではたくさんのことを学び色んなことを感じた。話を聞かせてくださったさとうさんの話の中で避難所にいても津波に襲われるという想定外の出来事も引き起こしかねない災害の恐ろしさを痛感した。被災地では、がれきをがれきと呼ぶことをやめておこうと思う気遣いの大切さ。僕達ボランティアのできることはたくさんあり、一生懸命相手を思って実行すれば少しでも喜んでいただけること。そしてなにより人の命の大切さを感じることができた。

それらを学び、感じさせてもらった僕は、消防士になりたいという気持ちがさらに強くなった。阪神・淡路大震災で自分たちの町が大変なことになり、今でもその恐怖を忘れられない人がたくさんいる。僕は消防士になり、そんな人たちの助けになりたいと思う。災害や火災の恐怖から人々を救い、環境防災科で学んだたくさんのことを消防士になって活かし、この町を守っていける存在になりたいと思う。

東北関東大震災は僕の記憶がはっきりしているころに起きた最大の災害だ。震度５強ほどの余震を初めて体験したのも被災地へ行ってからだ。今回はボランティアとして活動して、たくさんの方々から「ありがとう」という言葉を駆けてもらった。嬉しかったが僕達はお礼を言ってもらいに被災地へ行ったのではなかった。消防士になって僕は空気のように人助けをしていきたいと思う。周りの人々に「ありがとう」と言われること

も無く、当たり前のように人助けをすることができる消防士になりたいと思う。
　阪神・淡路大震災や東北関東大震災のような大規模な災害を二度と繰り返さないように防災を広げる活動を行いたい。阪神・淡路大震災がきて、もうあと何十年も地震は来ないだろうと考える人もいるかもしれないが、そのようなことを思う人を出さないように防災の意識を高くしたいと思う。そのために今回僕達が被災地へ行ってたくさんのことを感じ取ったことを地域のみんなにも考えて欲しいと思う。命の大切さを知ることができれば防災意識も向上すると思う。僕の夢は消防士になることで、防災意識を持ってもらえるような活動の企画にも携わり、災害をできるだけ小さく、最低限の被害で抑えられるような活動を行なえる消防士になりたい。

阪神・淡路大震災の1歳の私と震災！

谷口　諒

1995年1月17日5時46分。阪神・淡路大震災発生。
この瞬間に、私の家族は被災した。
当時私は、1歳でこの震災の記憶はほとんどない。
私の家族は、父、母、姉、私の4人家族だ。
震災が起こったあの日、私は母親とベッドで寝ていた、母親は大きな音が聞こえたと同時に目を覚まし、その直後の大きな揺れがきた、母はとっさに私を腕で包み込み揺れがおさまるのをまっていた時に、ベッドより少し高い位置にある棚の上に置かれていたテレビが飛んでくるように母の上に落ちてきた、母はそれで動けなくなったが、母はとにかく私の命を守るのに必死だったので、痛みより緊張の方が大きかったと言っていた。
そのころ、父は姉の部屋にいき姉の安否を確認した。
姉が無事だったので父は母と私のいる部屋にきた、父が母の上にのっているテレビをどかした。幸い私と姉にけがはなかった、母と父も軽症の打撲ですんだ。

私の家の被害

私の家は倒壊しなくて住んだが、家の中はめちゃくちゃだった。
キッチンは、戸棚がすべて開いていて、食器類や母がダイニングに飾っていた、ティーカップがすべて床に落ちて割れ、1階の床の3分の1ぐらいの面積が割れた食器でいっぱいになっていた。
リビングに行くと、子供ぐらいの大きさの水槽がおいてあったはずの場所から1メートルぐらい動いた、それだけでなく入っていたはずの水も3分の1ぐらいにへり、当時父が飼っていたたくさんの熱帯魚が床で跳ねていた。

仕事の使命感・・・父の背中

私の家は離婚しているので、私の姉と母から聞いた話です。
母と姉が家の片づけをしているときに、父は母に「後は頼む」と行って黙々と仕事に行く支度をしていた、そして支度が終えると、急いで仕事に行った。
父は、祖父母に連絡がつかず、心配でたまらないのに警察官という使命感に駆りだされ、安否の連絡もまたずに涙ながらに、現場にむかったことや、現場で風邪をこじらせ、高熱を出しながらも救助活動を続けたことなど、他にも警察官である父の話を聞き、いつもうっとしいと思っていた父を初めて尊敬した。
それから、私は人を助けるという使命感に魅力を感じ、私は将来人を助ける仕事をしたいと強く思った。

母方の祖父母の震災被害・体験

震災からしばらくして、母方の中央区に住んでいる祖父母に連絡がとれ、無事を確認。
祖父母の家も私の家ぐらいの被害だったらしく、建物の倒壊は免れたが、家具などが倒れ、家の中はぐちゃぐちゃになってしまったらしい。
祖母から聞いた話だが、祖母の部屋にピアノが置いてあって、それが祖母の家が倒れてきた

のだが、たまたまベッドの柵がつっかかったおかげで、隙間ができ小柄の祖母は助かったと言っていた。
もし、ベッドの柵がなかったら、数センチずれていたらと思うと背筋が凍りそうになるとと言っていた。

父方の祖父母の被害体験

　それから、数時間たち父方の兵庫区に住んでいる祖父母とも連絡がとれ、無事を確認。
　被害は、私たちの家族のなかで1番ひどく、家は全壊だった。
100坪以上あった昔ながらの料亭だったため、屋根の重さで2階が1階になってしまった。近所の人に助けてもらった後、近くの小学校に避難し、待機していたらしい。
祖父母は、揺れと同時に目がさめ、次の瞬間すとんと落ちたと思えば、ベッドと一緒に直立した態勢になっていたらしい。
　そして、全壊になったのにも関わらず、屋根の隙間で助かったらしい。
　私も写真で見たことがあるのだが、祖父母の家は外から見ると無残だった。
そして、近くに住んでいる叔父は様子を見に行ったが、あまりの光景に気力を失い、助からないだろうと思ったので探さずに帰ったらしい。
　後から、祖父は叔父に「親を見捨てて帰る奴がどこにおんねや！この薄情者」と怒られたらしいが、今では私たちの家族や親戚の中では、笑い話になっているのだ。

母の苦労

　父が、仕事に行ってから、母は誰に頼ることなく一人で全部やり遂げた。
　まだ、当時3歳だった姉と1歳の私を抱えながら、車で親戚の家をまわったらしい。
　父方の祖父母の安否が確認でき、兵庫の避難所に祖父母を迎えに行く時も、私たちを後部座席に座らせ、とても混雑している道路を何時間もかけて向かった。
　途中、長田ぐらいのところであちらこちらから炎が立ち上がっているときに渋滞で身動きが取れなくなり、すぐ近くにあったガソリンスタンドから爆発の危険性があるので注意してくださいと言われ、その時、目の前の恐怖というものを初めて感じたらしい。
　そして、祖父母を迎えに行ったあと、私の家にはたくさんの人が避難してきていたらしい。私の家は、周りに比べたら、そこまで被害はなかったので、母が避難所などに避難していた親戚たちを呼んだらしい。母はそれからもご飯の支度や掃除などに、毎日覆われていた。

　そんな時に母方の祖父が経営していた灘区にある、バイク用品店が震災で壊れたと同時に中においてあった商品が盗まれそうな事件が起きた。祖父が震災直後に胸騒ぎを感じ、店に駆け付けてみると、そこには壊れた店の中から商品を盗もうとしている人たちがいたらしく。祖父が駆け付けたことによって商品は盗まれなかったが、祖父は震災の中で困っている人達がたくさんいるなかで、盗みをする人たちがいることにショックを受け、その晩からずっと壊れた店の前に座り込み極寒のなか、見張りをしていたらしい。そんな祖父のことも心配しながらも、母は私と姉だけでなく、親戚の世話をし続けた。

　その話を聞いてから私は、父がいないのにも関わらず一人ですべてやり遂げた母を尊敬した。

阪神・淡路大震災と環境防災科と今の自分

　環境防災科は、阪神・淡路大震災から得た、命の大切さ・助け合いのすばらしさなど、震災の

教訓に学ぶなどのことから、「新たな防災教育」を推進するために高校の専門学科で展開しようというものである。
　私がなぜ、環境防災科にはいったかというと1番は、姉の影響である。私の姉は、ここの5期生である。
　私の夢は、消防士になることだ。
　そんな私に姉は環境防災科でしか、学べない専門的な知識や貴重な体験ができるし、将来にきっと役にたつことばかり学べるからと、姉の強いすすめでここに入学することにした。
　入学して1番驚いたのは、先輩たちの災害に対しての強い気持ちだった。
　私には、阪神・淡路大震災のころの記憶はほとんどないので、特別阪神・淡路大震災について考えたことはなかったが、私は阪神淡路で父を亡くした先輩の話を聞かせていただいた、私はその先輩の、震災に対しての怒りや、悲しみがひしひしと伝わってきた。
　そこで私は、阪神・淡路大震災を絶対に忘れてはいけない、この先輩が卒業してから次は私が次の世代に伝えていくことが、その先輩から学んだことを語りつぐことが、私の使命ではないのかと感じた。
　そして、時が過ぎ3月11日「東北関東大震災」が起こった、私たちの先輩が卒業したばかりで自分は、今何をするべきなのか？何をしたらいいのか？と混乱していた。
　その時に、3月17日～東北の募金活動を垂水で行うという知らせがきたので、とりあえず今できることをしようと私は生れて初めて募金活動に参加した。
　そして、募金活動をしているなかで、たくさんのことを学び、様々な方と出会いった。
　募金をいれてくれた方の中で「私たちが阪神・淡路大震災の時全国の方に助けてもらったのだから次は私たちが助けるばん、人間は助け合えるからこそ素敵だね、募金活動ご苦労様、ありがとう」といわれ私は、たくさんの方が東北のために何かしたい、少しでも力になりたいという気持ちを感じ、私は人の心の温かさを感じた。
　そして、阪神・淡路大震災のとき、全国からたくさんのボランティアの方が、募金活動や救援物資を送るなどしてくれたことや、現地にきて私たち被災者のためにたくさんの活動をしてくださったことを知り、私も現地で少しでも力になれたらいいなと思いボランティア団体を探したが、高校生不可なところが多く私は諦めかけていた。
　しかし、5月7日～5月13日の期間に東北に行って、現地でボランティアをさせていただけることが決まり、私はこの学校だからこそできたことだと感じ、私がしたかったことをさせてもらえてこの学校に入ってよかったと感じた。
　そして、現地での活動をしている中で出会った、高橋さんと雫石さんにもたくさんのことを学び、様々なお話を聞くことで、とてもショックを受けたり感動したり、被災者だからこそわかる話を聞きとても貴重な体験をさせていただいた。
　そして、高橋さんも雫石さんも私たちが兵庫県の神戸からきましたというと、「阪神・淡路大震災があったところ？」と聞かれた、そして私が「そうです」と答えると、どちらの方も同じ被災者ということもあり、とても心をひらいてくださった。
　そして、私は高橋さんと雫石さんに東北の震災のことを聞くだけでなく、阪神・淡路大震災のことを自分が知っている範囲でお話した、そして私は「神戸は震災で壊滅的な被害うけたけど今では、復興しています」というと「私たちにも希望が見えた、私たちも災害に負けられんな」と言ってくださりました。
　そして、高橋さんと雫石さんはここがきれいになったら、次は遊びにおいで、神戸に行ったら会いに行くねと新たな人との関わりができ、私はこのボランティアで得たものは、私にとってとても大きなことだ。
　そして私は将来、阪神・淡路大震災と東北関東・大震災のことをこれからも忘れられないように語りつごうと思う。

私の中の阪神・淡路大震災

寺下　真衣

・私の記憶の阪神・淡路大震災

平成7年1月17日。私はまだ1歳6か月だった。

正直さっぱり覚えていない。どんな揺れだったのか、どんなに大変だったのか…。

だが、あの写真や映像で見る地震を経験しているということは事実だ。

あのときの揺れは全く覚えてないけれど

・父の記憶

突然の揺れに目を覚ました。地震だ！とっさに子供たちに覆いかぶさり身をすくめた。

永く感じられる揺れが治まりホッと一息吐く。幸いに家族で寝ていた部屋には何も置いて泣く、家具が倒れてけがをすることはなかった。大きい揺れだったな…最初はその程度の感覚だけだった。なにしろ周囲を見渡すもいつもと変わらぬ景色で、被害は感じられない。いつもより少し早いが起きて出勤の支度をはじめた。停電はしていたがガスも水も出ていた。万一に備え空のペットボトルに水を入れお風呂にも水をためた。そのうち電気もつくだろうと安心しているとガスが止まり、水道も止まった。結構大きな被害があったのかなと少し不安を覚え始めたころに電気がついた。そしてテレビが震災の様子を映し出した。

倒壊した高速道路や建物、そして火災現場をまるで映画のように映し出していく。
しかも時間が経つうちにその被害状況は拡大し、震災の大きさを伝えてきた。いくつかの駅が倒壊し電車もすべて止まっている。出勤は無理だと思い職場へ連絡いれるため電話をいれるがつながらない。何度かかけ直したが一向につながらない。こういうときは公衆電話が優先されることを思い出し近所の公衆電話へ。なんとか連絡がとれ、ついでにパンと飲料水をコンビニで買い求めた。テレビでは被害状況が刻々と流れている。見慣れた街が無残な状況になっていた。

何度も余震におびえながら一日が過ぎ、夜になった。夜中に大きな余震がきたら…と昼間以上の不安が襲う。いつでも逃げられるようにと全員服を着たまま枕もとに靴を置いて眠りについた。2日目に買い物しようとスーパーへ向かった。いつもの調子で考えていたが、到着してみると長蛇の列。みんな考えることは一緒だなと思いながら列に並んだが、店内に入るまでに数時間を要したあげく店内の商品はほとんど売り切れ状態のため買えたのは牛乳2本。道路事情が悪く配送のトラックが来ないらしい。昨日のうちに来るんだったと後悔しても遅かった。夕方に長崎に住む弟がカセットコンロやポリタンク、食料品を持ってきてくれた。さっそくポリタンクを抱えて水を汲みに行く。歩いて5分ほどの所にあるラーメン屋の店先の水道が出ており、みんな寒さに震えながら並んでいた。

ガスがきていないのでお風呂は沸かせない。濡れタオルで体をふくだけの日々だったが、冬で汗をかかないからまだ我慢できた。
水道やガスが無くて不便でも避難所に暮らしている人よりはましだと思った。
水は2週間、ガスは3か月かかった。余震も減り、少しずつ元の暮らしに戻った。

・聞いた話

地震が起きる前の日はいつもと違う空気だった。月が赤く嫌な予感がした。

午前5時46分大きな揺れが襲った。

姉は当時5歳で幼稚園に通っていた。教室がある建物は使えなくなり、年少から年長まで全員が幼稚園の体育館で過ごした。

・感想

父の話を聞いて初めて知ることがいっぱいあった。小学校のときから聞く機会があったけれど、簡単にここは被害小さかった。だとしか教えてくれなかった。被害が小さかったから阪神・淡路大震災は他人事なような気もしていた。知り合いも亡くなっていないし、家も食器が少し割れたぐらいだったから。だけどガスが止まり、水が止まり…不便だったこと。自分の住んでいる街が一変してしまったことを考えると他人事なんかじゃないと思った。
私はまだ1歳で姉も5歳だったから親に守られていた。部屋に家具がなかって、父が覆いかぶさって守ってくれたことで今もここにいる。感謝しないといけないなと思う。
冬に起きたこと、朝方だったことでよかったこともある。
お風呂に入れなくても汗をかかない時期だからよかったと思うし、おじさんがわざわざ九州からカセットコンロなどを持ってきてくれて本当に助かった。
単に被害の大きさだけで考えてしまってはいけないと改めて感じた。
今でも孤独死する人はいるし、当時の傷が癒えていない人もたくさんいる。
そんな人たちがいるのに簡単に過去の話にしてしまってはいけないし簡単に忘れてはいけない。

・語り継ぐということ
正直1歳だった私たちはどう語り継いでいいのかわからない。記憶がない。頼りになるのは家族、親戚の話や今まで授業などを通して聴いてきた話だけだ。自分なりに受け止め自分なりの言葉で伝えることが阪神・淡路大震災を忘れないですむだろう。1歳だったとはいえ神戸で生まれ神戸で育ってきたからこそ伝えていかないといけない。あのときの恐怖や支え、そして今。もう昔の話になっているのかもしれない。東日本大震災のほうが大きく記憶に残ってしまうかもしれない。でも阪神・淡路大震災で得た教訓は今でもずっと役に立っている。これから私は阪神・淡路大震災と東日本大震災どちらも語り継いでいこうと思う。忘れられないように。

・環境防災科に入って
環境防災科に入った理由はいろんなボランティアをしてみたいと思ったから。
そしておもに環境に興味があったから。でも実際環境の勉強は少なく防災が主だったが勉強していくうちにすごく楽しくなってきた。それまで全くと言っていいほど防災なんか考えていなかったけれど、勉強するうちに新聞やニュースに注目するようになった。
私の中に一番印象に残っているのは2年のときに行った長田まちあるき。話をしてくれたお茶屋さんのおじさんは家族を支えるために自分がしっかりしないといけないと思い、店が全壊したけど親戚や商店街の方に協力してもらい、店先でお茶を売っていた。
仲間も多く失った。弱音がなかなか吐けなくずっと自分の心にためていた。
なんで自分だけ…と思うこともあったそうだ。
だけど、商店街の仲間で話すと一人じゃないという安心感ができた。同じような体験をした仲間がいることがおじさんにとって支えになった。そして復興のためにいろんな活動を積極的に行っている。そしてあの地震があったからこそ普通に生きているのは当たり前ではないということと、毎日がしあわせであることに気付いたそうだ。
そして私たちに「自分の24時間だから小さいことでいらいらしたりしていたらもったいない。1日1日を大切に。」と言ってくれた。
私はそのときから毎日感謝するようになったし、大切にしようと思った。
そして3月11日の東日本大震災は本当に言葉がでなかった。地震＋津波で阪神・淡路大震災を超える死者、行方不明者、など甚大な被害だった。テレビや新聞で見ていると昨日まであったはずの、昨日まで暮らしていた家が流され原型もない状態。
めちゃくちゃだった。私たちは神戸からニュースを見ているだけで何もできなかった。
こういうとき何か行動できるために授業を通して知識をたくさん持っておかないと「いけないと

思った。環境防災科にいることでよくちやほやされたりするけれど、私は環境防災科ですと簡単に言っていいのかわからなくなった。2か月経ってから宮城へ行ったけれど、全然復興していなかった。思っていたよりひどかった。被災した人たちはみんな今日までずっと復興に向けてがんばっていたのだろう、そしてこれからもずっとずっとやっていかなければならないのだろう。阪神・淡路大震災でも復興に長い年月がかかった。

でもそれ以上に長くかかるということは先が見えない不安や悩みがあるのだろう。

そんな人たちに私は何ができるのか。正直何もできないと思う。

だけど、実際現地へ行って感じたことがたくさんある。私たちはその見てきたことを神戸で発信していかなければならないと思う。まだニュースや新聞で取り上げられているので多くの人は頭の中にあるだろう。でもちょっとずつ時間が経つにつれて他人事になってきてしまう。それはさせないように私たちは語り継ぐのだと思う。

阪神・淡路大震災と東日本大震災はどちらも私の中での原点になると思う。

そもそも阪神・淡路大震災がなければ環境防災科ができてないわけで、ということは私hpここにいないわけで今一緒に勉強している仲間にも出会えてなかった。

東日本大震災がなかったらこんなに深く考えずただただ防災の勉強をするだけになっていただろう。

環境防災科に入った最初の理由は何であれここでしか学べないことをたくさん学んでいる。私たちの役目はこれから先阪神・淡路大震災を知らない世代が増え、阪神・淡路大震災を経験した人たちが減っていくなかでずっと伝えていくことである。

・将来の夢

高校に入ってすぐ「理学療法士」という夢ができた。

スポーツで怪我をした人のリハビリがしたいと思ったからだ。でも、防災と夢をつなげるときに何が結びつくのかわからなかった。

災害によってけがをした人のリハビリをする。長期的にその人と向き合っていくことで信頼関係をつくり、一人じゃないと教える。そしてエコノミー症候群などの予防もやっていきたい。でも一番したいことは語り継ぐということ。理学療法士は幅広い年代の患者さんと関わる。＝幅広い話が聞けるということである。そこで患者さんとコミュニケーションをとるためにいろいろな話をする。そのときに環境防災科で学んだことや患者さんから聞いた話を広げていきたいと思う。

人と人とがつながるということを感じられる仕事だと思うので人との関わりを大事にできる理学療法士になろうと思う。環境防災科で多くの人と関わっていくことが将来につながっていくだろう。

・これから…

阪神・淡路大震災は経験し、東北大震災を見て感じることがたくさんある。

私のまわりはあまり防災に興味ないし、どこか他人事だと思っている人が多い。

そんな人たちにどう防災に興味を持ってもらうか。どう伝えていくかが大切だと思う。

一人ひとりが防災のことを知っていくことが一番減災につながる。だからこれからまずは自分の周りの人に伝えられる、教えられるぐらいに自分の知識を増やす。
そして学んだことをそのまま教えるのではなく自分自身で理解し、自分なりにまとめてから教えようと思う。

阪神・淡路大震災を忘れないように語り継ぎながら震災で亡くなった多くの方々の分までしっかり生きていこうと思う。そして夢をかなえようと思う。

当時の記憶

永井　梢

当時の家族構成は、父、母、兄（6 歳）、姉（3 歳）、私（1 歳）である。

発生時

地震が起こったとき、寝室は父以外同じ部屋だった。揺れを感じた時、隣で寝ていた母が私に覆いかぶさり、姉を呼んだ。別室から父がきて、兄にかぶさった。怪我もなく無事で、タンスが倒れるといったこともなかった。母は「すごい音と揺れだったのに、あんたたちは全然起きなかった」と言った。

何が起こったのか分からず、外が明るくなるまでは布団で待機し、7 時ごろに起きだした。地震には慌てず、ずっと家にいた。

私たちを無事だった寝室に閉じ込め、父と母で散らかった食器やガラスを片付けた。食器棚は中身が飛び散り、テレビも放り出され、油が散っていたらしい。5 時 46 分という時間に火は使っていなかったが、もし使っていたらと思うとぞっとする。

私、姉、母、兄の寝室は無事だったが、父の寝ていた部屋では上から物が降ってきたらしい。父は急いでその部屋を出て正解だった。

部屋の片づけをし、テレビをつけると、少しの間だけ映った。その時見たのかは分からないが(いつテレビで見た映像なのかよく覚えていないらしい)、長田の町が燃え、高速が倒れていた。垂水が一番酷いだろうと思っていた両親は呆気にとられた。

私たち兄妹がぐずり出したので、安否確認を兼ねて神陵台の祖母の家に行った。祖母の家は大人だけなので片付けが比較的早く出来ていた。そこに私たちを預け、両親は家に戻り片付けを再開した。

当時、私はマンションの 1 階に住んでいた。その壁にひびが入っただけでも不安だったのに、階段の踊り場全部にバッテンが入っており、いつ崩れてくるのか不安に思ったそうだ。

壁にヒビがはいり、当日はどうしていいか分からずそのままの家で寝た。

震災から 1 週間

発生から 1 週間は、車で寝たり祖母の家に泊まりに行ったり、昼間は水をもらいに行ったり部屋を片づけたりといった生活をしていた。

家の近所に水道局があり、近くてよかったと母は言ったが、父はそれでも徹夜で並んだらしい。直後こそ父が並んだが、昼間には母や兄、姉が並んだ。

当時一番困ったことは何か、と聞いたら、「水が使えなかったこと」とかえってきた。子供のいる家庭で洗濯できないのは辛い、と言っていた。自分たちはいいが、当時の私は 1 歳で体は清潔にしないといけないと思っていたからだ。太山寺、コープデイズの向こうのなどの温泉に行ったが、お湯が黒かったらしい。

祖父のツテでライオン工場の温泉にも入らせてもらった。ライオン工場は一般オープンしていないので、一番きれいだったらしい。

昼間は家で過ごしていたが、夜になると祖母の家に行っていた。これは父の仕事が始まるまで続き、仕事が再開すると家に帰るのは片付けや生活用品などを取りに行く時くらいだった。

父の仕事が再開したのもあるが、神陵台のガス、水道が復旧したためである。祖母の家には 1 カ月程度世話になった。

父は発生から 1 週間程度は家にいたが、当時、運送の仕事をしていた。父は仕事で須磨区

に配達に行っていたが、いつも配達に行っていた馴染みの人がみな亡くなった。
　震災後は道路交通法も無く、1カ月程度信号も無く無法地帯だった。
　震災直後、運輸省に配達が止められた。運輸省とは今の国土交通省である。
　基本的に止められているが、どうしても行かなければならないものがあったので行こうとすると、通れる道が限られている。わき道に入ると、元が道なのか、人の家なのか、敷地なのかが分からない。
　普段15分で着くところを、3時間かけて行った。普段の何倍と時間をかけて運んだものを避難所に届けては「FAXは無いんか」「こんなんいらん」「持って帰れ」と文句を言われ、自分のせいではないのにと今でも腹を立てている。避難者が我儘になり、基地にもないようなものを要求され、自分たちではどうしようもなかった、と父は言った。
　須磨区の下の方は道一本隔てて南が壊滅しているのに北は無事だった。
　北区や西区に行くと水が出て普通に生活していて、少し離れただけで世界が違った。
　兄の通っていた幼稚園は休園し、生活発表会が中止となった。卒園式はでき、小学校の入学式も普通にできたそうだ。休園中は3人で祖母の家で遊んでいた。姉や私は幼稚園にも保育園にも通ってなかった。
　神陵台の祖母の家では、ガスが直る前は電気鍋やカセットコンロで料理をした。電気が一番早く復旧し、カセットコンロの替えは父が西区に買いに行っていた。カセットコンロは火が使えるので電気鍋より早く料理ができ、電気鍋だけでは料理のバリエーションが少なかったので重宝した。
　電気は使えたので、ご飯を炊いてひたすらおにぎりを作っていたという。
　夜は懐中電灯や蝋燭が必須で、電池もカセットコンロの替えと一緒に買ってきていた。東京の親戚からも電池が大量に送られ、大阪の親戚がカップラーメンなどを持ってきてくれた。
　本多聞は神陵台に1カ月程度遅れてライフラインが復旧し、私たちは2ヶ月程度で普通の生活に戻れたらしい。自宅のマンションは一部損壊で、近所の建物が全壊したがすぐに建て直された。
　母は、当時こそ仕事を辞めていたが、以前、西市民病院で働いていた。勤めていた時、母は5階の東などで働いていた。震災で潰れたのは、5階の西である。
　震災当時、西市民病院は封鎖され、看護師はほかの病院などの手伝いなどに行っていたらしい。
　この時の知り合いが兵庫や長田に住んでいたので、ポリタンクに水を入れて持っていったりした。病院のツテなどで西神の方に避難していて知り合いは無事だったが、長田は焼け野原だったと母は言った。
　当時私たちが住んでいたマンションは、詳しくは分からないが築20年くらい経っていた。神戸に地震が来ると思っていなかったので、一切地震対策はしていなかった。壁のヒビを埋め、3年はそこに住んだ。私が住んでいたマンションに限らず、マンションにはそこら中にヒビやバッテンが入っていた。歪んで扉が閉まらなくなったマンションもあるらしい。そのヒビの上から塗ってあるだけのマンションなんて絶対買わないと母は思ったそうだ。
　今、私が住んでいるのは当時のマンションではない。このマンションは、震災当時作りかけで、耐震などを見直された震災後のマンションなので安心して住めると思って買った。
　祖母の家の近所でガスが噴出し、火が付いていた事があるらしい。しかしそれは延焼せず、本当にガスにだけ火が付いていたそうだ。もっとガスが多いと爆発したのではないかと思う。
　以上が、私が両親に聞いた話で、おもに母の視点である。
　私自身が覚えている事は一切ないが、母もよく覚えていないと言ったので、時系列がはっきりしないものは下の方に持ってきている。
　これを書くにあたり、私は両親から今まで聞いたことも無いような震災体験をたくさん聞いた。

話を聞いて、人との助け合いがあると無いでは、ずいぶん違うだろうと思った。私たちの家族も、祖母が近くに住んでいなければ、祖母の家のガス、水道が使えなかったらどうなっていたかわからない。地域のつながりは大事だと、改めて実感した。
　兄や姉も小さかったことから、震災について何か覚えてないかと尋ねても答えてくれることは少ない。話してくれても、水を貰いに行ったことだけである。自分も小さかったから、と曖昧にされる。それは事実だと思うし、何が起こったのか分らなかったのだと思う。

環境防災科

　中学 3 年になり、そろそろ進路を決めないといけないという時期に私は、入れる高校があるならどこでもいいと考えていた。明確な将来の夢もなく、とりあえず進学できればいいと思っていたが、先生に環境防災科を勧められた。
　　パンフレットを見るだけでも発表や消防学校、普通科との教科の違いなど、不安要素が多く、ここに入学したいという気持ちと私には無理だろうという気持ちでいっぱいだった。だが、当時心理学に興味のあった私は普通科よりこっちのようが心理学に近いことができるかもしれないと思い、受験した。
　いざ入学し、震災のことについて今までより詳しく勉強すると、今までのように他人事だとは思えなくなった。
　私が 10 歳の時に弟が生まれた。
　今は小学生になり、1 月に入るとしあわせはこうぼうを読むという宿題が出されるが、当然震災に興味関心はなく、写真を見てすごいすごいと言いながらも、真剣には読んでくれない。私も小学生の時は「こういうことがあったんだ」という風にしか思ってなかった。
　しかし今、弟が震災のことを真剣に学んでくれないのが悲しくて仕方ない。
　よく、自分たちにできることをやろうと簡単に口に出しているが、どうやったら出来るだろう、私に何ができるだろう、と考えたことがある。
　私が今一番身近にできるのは、弟に少しでも震災について話すことだと思う。真剣に話は聞かないし、そもそも私自身の記憶ではないけれど、今の小学生たちに少しでも震災のことを知ってほしいと強く思っている。
　　たぶん私が環境防災科に入っていなかったら、こうは思わなかっただろう。色々な面で環境防災科は私を変えたと思う。

これから

　上にも書いたが、両親に話を聞き、初めて耳にすることが大部分だった。
　父の仕事の管轄が須磨区だったこと。母が看護婦をしていたのは知っていたが、西市民病院勤務だったこと。家の被災状況、震災直後の暮らし、ライフラインの復旧までの期間の生活。
　今まで話してくれなかった話を聞くことが出来て私はとても嬉しく思った。それとともに、語り継ぐことの重要性を身をもって知った。
　大した被害も受けず、比較的早く普及した地域だし、両親はそんなに話すことがないと言って今まで話してくれたのは水をもらいに行ったことだけだったが、私はそうは思わない。
　どんな体験でも、語り継いでいかなければどんどん風化が進んでしまう。
　そして、どんな些細なことでもいいから子供たちに聞かせ、少しでも興味を持ってもらいたいと思う。

「語り継ぐ」

永瀬　雄介

1、日常

震災当時の家族構成は父・母・兄・僕の 4 人家族でした。須磨区の奥、山側にある地域のマンションを買い、暮らしていました。万が一の時でも助けに行けるように祖父の家の近くに家を買いました。当時の僕らは 1 歳と 3 歳で、まだまだ手のかかる小さな幼児のはずでしたが、基本的に僕らは毎日長時間睡眠をしていたのであまり手はかからなかったそうです。父が会社に行き、母が家にいて子供の世話をして、家事をしていました。その時代は専業主婦が多かったそうですが、父がそれを嫌い母は結婚と同時に会社を辞めて家庭に入りました。朝に父が出勤、母がご飯を作る、子供にご飯を食べさせる。というサイクルで毎日を過ごしていました。

2、地震発生直後

震災発生時は、母と兄と僕が同じ部屋で寝ていて、父は別の部屋で寝ていたそうです（踏みつぶすから）。地震が起きた時、母は目を覚まし僕らに覆いかぶさろうとしましたが、寝かした位置に僕がいなかったそうです。いつもすぐ横に寝かして朝起きた時には、いつもいるのに、そういう緊急時に限って動き回っていたそうです。「全く、迷惑な奴だ。」と、この話を聞いた時に言われました。真っ暗な中探し回り、やっとの思いで見つけ抱きかかえたそうです。その時には揺れは収まっていたそうです。電気をつけようとしたけれど、停電により電気が付かず、明るくなるまで僕らを抱きかかえたまま布団にくるまって待ち、明るくなってから外に出ようとしました。が、ドアが傾いていて開かなくなっていて、父が力ずくで開けて外に出ることができたそうです。

父の話によると、揺れが収まってから長田の方面を見ると、とても曇っていたそうです。最初は「あそこだけ大雨でも降ってるんか？」と思ったそうですが、明るくなってからもう一度確認した時に、地面から立ち昇っている黒煙だと分かったそうです。普通火事ならば1か所から煙が昇るのが当たり前だけど、その時は数か所から煙が上がっていたそうです。その時は、全く火事だということが実感できなかったそうです。テレビが付かなかったから「その火事の詳細が全く分からない。情報が全くない。」という状況だったそうです。家の周りは被害が皆小さかったので、ただ「大きな揺れだったな。」という程度だったそうです。自分の地域は電気が付かなかったけど、祖父の地域の電気はいつも通りに付いたそうです。10時過ぎくらいに電気が復旧して、テレビをつけると阪神高速が倒れていた。それで、ただの地震じゃないと分かったそうです。一番情報が欲しい人に情報が届かないということは、こういうことなのだと思います。

僕の住んでいる地域は阪神・淡路大震災の被害はたいへん少なかったそうです。被害としては断水と一時的な停電。停電は10時過ぎくらいに直り、断水は 3 日ほどで復旧したそうです。祖父の住んでいる地域では、被害は停電だけで、断水は起こっていなかったので、お風呂は祖父の家で入らせてもらったそうです。

赤ちゃん用品は祖父の家にもあり、自宅にも事前に買い溜めしておいたので、全く問題なく、困ることもなかったので、振れが起きても起きることなく、僕らには何の被害もなかったそうです。

断水後、すぐに給水車が来たので大して水には困らなかったそうです。マンションの中に通っている水は出なかったそうですが、マンションの1階付近にある散水用の水道だけ使えたそうです。しかし、管理人さんに「この水で飲食しないで。」と言われたので、給水車が来るのを待っていたそうです。給水は僕らが昼寝している間にしにいったそうです。と言っても基本的に寝ていたのでいつでも給水には行けたそうです。一番苦労したのは水をマンションの 3 階まで女性 1 人だけで大量の水を運ばなければならなかったことだったそうです。祖父の家では水が出たの

で、飲み水は父が祖父の家まで車で取りに行って、ベランダに置いてあった青い大きいゴミバケツにビニール袋を敷いて、その中に給水車の水と祖父の家で貰った水を溜め、飲み水・料理用水に使い、1階の散水用の水をお風呂にためて、トイレ用にしたそうです。排水管は壊れてなかったので、「トイレも水を流せば支障なく使えた。」と言っていました。

食料はその時、たまたま買い溜めしていて、ガスも使え、給水車が来て水もあったので、その日は普通に料理ができたそうです。震災直後は買い物には行ってないからわからないけれど、「近くのスーパーは落ちた商品を棚に戻して営業していたんじゃないのかな？」と言っていました。それほど僕の住んでいる地域の被害は小さかったといえます。

震災直後に祖父の住んでいる地域で断水が起きなかったのは、「国立病院の近くだったから断水しないように出来ていたんじゃないのか？」という事が地元で噂されていたそうです。あくまでも噂なので実際のところは分りませんが、大きな病院の近くなのであり得ない話ではないとは思います。

3、2 時間の奇跡

地域ではなく、永瀬家での震災の一番大きな被害と言うと、父の会社が地震によって『全壊』したことです。

それを知ったのは9時前後だったそうです。父の会社の近くの従業員の人が会社を見に行ってもらうと、「社長（当時は祖父）の会社、壊れていますよ。」と言われ、祖父が会社を見に入ったそうです。

長田区で小さい製造会社を営業していて、その建物が1から4階まで全て壊れて跡形も残っていませんでした。母はその惨状を見ると、「昼間に起きていたら確実に死んでいた。」と思ったそうです。その中で、不幸中の幸いだった事は、会社はビルの1階を借りていて、月払いの建物だったので、2000万3000万という借金が残らなかったことです。が、中に入れていた機材、資料などは全て使いものにならなくなり、買い直さなければならなくなりました。

その会社を見に行った帰りに、どこかの畑から大根を引っこ抜いて家に持って帰ってきたそうです。母は「食糧難でもあるまいし、別にいらんかった。」と言っていました。その夜に仕方ないので、その大根を調理して食べたのですが、とても大根がまずかったそうです。父が「作るんやったらもっとうまい大根作れよ。」と言っていました。「人様の大根を勝手に取ってきて、文句を言うなんて最低だ。」と心の中で思はずでしたが、思わず口から出てしまいました。それを聞いて父は全く反省せず逆に開き直ってしまいました。

一番の幸いは、父が死ななかったことです。もしも震災が2時間遅れていたならば、僕の父は死んでいました。ビルが全壊していることがそれを物語っています。2 時間ずれていたならば、僕は父の顔を今知らないだろうし、父の愛情を受けることもなかっただろうし、今いる 2 人の弟が生まれることもなかったと思います。5 時台に地震が起こったから死者が多くなったのは知っていますが、僕はあの時間に地震が起きて良かったと思っています。

母が僕らをわざわざ会社が壊れた現場に連れて行ったそうですが、全く記憶にありません。アルバムの写真で見たことは覚えていますが、「語り継ぐ」での参考として聞いた時に、連れて行ったもらったことを知りました。といっても、物心の付いていない一歳ですから、覚えていないのも、当然と言えば当然だと思います。

4、地震後

父は会社が潰れたので、しばらく家の片付けをしていたそうです。台所の皿が落ちて割れたのを母と拾っていたそうです。その後、会社まで行って、ぺちゃんこになった会社の前で得意先が来るのを待っていたそうです。

家の片づけが終わってからは会社のがれき処理。1階～4階までのがれき処理という終わりの見えない仕事だったみたいです。何tあろうかというがれきの処理に追われたそうです。
片付けや土地・建物の購入、買った建物の手直しなどを行って、6月に会社を再開できたそうです。ということを考えると、1月下旬～5月下旬までの約4ヵ月間がれき処理をしていたということになります。4ヵ月も同じ作業をするということは大変精神力のいることで、父いわく「全く進んでいる気がしない。」と言っていました。長田が全体的にがれきの山なので、重機の助けを借りることもなく人の手で片付けたそうです。従業員や、そのビルに入っている人などがいたからよかったものの、これが家だった場合はおそらく片付ける気力すらなかったと思います。
父は、こんなに働いていても「まだマシだ。助かった。」と言っていました。それは、家に被害がなかったことと、家族が無事だったからだと言っていました。「避難所生活でがれき処理なんてしていたら、身が持たない。会社だけでよかった。」と、言っていました。会社が全壊という被害を受けながら、「マシだ。」なんていうことを言っていられる父を僕はすごく尊敬しています。
今、父は長田区の刈藻島の台風が来たら堤防を水が越えて建物の中に水が入ってきて台風の風で貝殻がいっぱい飛んできてガラスがいっぱい割れる場所に新しいそこそこの大きさの製造場を買って、仕事をしています。震災の時とそんなに規模も人数も変わってないみたいです。台風が近づくと、いつも遅くに濡れて帰ってきます。そしていつも、「堤防の意味なんてないじゃないか。ガラスまた割れたし・・・。」という愚痴をこぼしています。「そこ場所を買ったのはあなたなのに・・・。いったい何に対しての愚痴なのか・・・。」と台風が来るたびに思っていますが、一切口には出さず、「御苦労さま。」と言っています。
父は震災で一番記憶に起こったことは、「自分の会社が全壊した。」というのではなく、起きた時に見た長田の町の、「煙がすごかった。」だそうです。

5、「語り継ぐ」

震災当時の家族のことを僕は全部知っているつもりでしたが、実際震災の時に起きた大まかな出来事しか知らないということを知りました。父の会社が壊れたのは知っていますが、がれき処理を6月までやっていたことは全く知りませんでした。水道が断水していたのは知っていましたが、散水用の水道が使えることは知りませんでした。その日に料理を作れたことも、祖父の家では水を使えたことも、父がどこかの畑から大根を取ってきたのも初めて知りました。このレポートを書くまで知らないことだらけで、知ったかぶりをしていたということを思い知らされました。今思うと、両親は震災の話を聞くと快く喋ってくれました。聞いたこと以上のことを教えてくれたり、その時思ったことを話したりしてくれました。僕は今まで「環境防災科で勉強してるから」ということで天狗になっていたかもしれません。阪神・淡路大震災のことも勉強し、風化させず語り継いでいかなければならない立場の人間なのに、「一番身近な家族の被災体験もロクに知らない人間が何を語り継いでいけるのだろうか？」と思いました。
これから僕ら、若い世代が震災を語り継いでいかなければいけないので、快く震災について話してくれる両親に感謝し、聞けることをたくさん聞き、自分の子供などに伝えていきたいと思います。

私の記憶にない震災の体験

中曽　妃名子

1．＜前書き･･･＞

　私は当時、兵庫県にいましたが神戸市ではなく、尼崎市の武庫川沿いのマンションの4階（最上階）に、当時、父（30 歳）・母（31 歳）・兄（3歳）・私（1 歳）・妹（4 ヶ月）の5人家族で住んでいました。でも、当時の地震のことについては何の記憶もありません。なので、両親に当時の話を聞きました。
震災が起きる少し前、父がヘルニアで動けなくなったそうで、普段は大きいタンスのある部屋に一人で寝ていたけど、その部屋は寒くて腰にひびくため、母と子どもたちが寝ている部屋で一緒に寝るようにしていました。
　そして震災が起きる前日は、いつもと変わらない日常の生活を送っていて、鳥が大量に逃げ出したり、犬や猫などの動物が騒いだりというのはなく、とくに地震が起こりそうな予兆は何も感じなかったそうです。

2．＜阪神・淡路大震災が起きた時･･･＞

　震災が起こる当日の朝は、みんなひとつの場所で寝ていました。地震が起きた時、父が言うには、突然「ゴーーッ」という音が聞こえて目が覚め、その音と同時に縦に大きく揺れて体が宙に浮いたそうです。母は、揺れと同時に「地震や！子供たちを守らんと…！！」と思い、大きな揺れの中、3歳の兄と1歳の私に頭までスッポリと掛け布団をかぶせて、ベビーベッドで寝ていた生後4か月の妹に覆いかぶさって守りました。あまりの揺れで、絶対に天井が崩れてくる！と思い、「ヘルメットがあったらよかったのに。」とすごく思ったそうです。その間、食器棚が倒れて中の食器やガラスの割れる音がしたりして、すごく長く揺れを感じたと言っていました。地震が起きた時、私も兄も妹も泣かなかったそうです。おそらくまだ小さかったので、地震に対する恐怖心がなかったのだと思います。

3．＜地震後･･･＞

　しばらくしてから地震がおさまり部屋を見渡しました。しかし、部屋のあたりを見回しても停電しているし、まだ外も暗かったため身動きがとれず、外が明るくなるのを待ったそうです。その時、1階にある駐車場の方から車のエンジン音がして、母は「このマンションが潰れるから、みんな逃げ出すんや！」と思い焦っていたら、父が「逃げるんやなくて、車のラジオを聞いて情報を得ようとしてるんやろ。」と言ったそうです。
　それから外が明るくなり家の中を見渡すと、足場もないくらいぐちゃぐちゃになっていたそうです。テレビは無事だったのでつけると、ニュース速報でこの地震が甚大なものであるのが分かって震えたそうです。その時見たニュースで神戸市の長田の町が大火災になっていて、高速道路も倒れていて言葉も出なかったそうです。そして、後で分かった話なのですが、うちの家具は東西に向いて置いていたので倒れたけど、南北に向けて家具を置いていた家は倒れなかったと言います。
　震災後すぐ、父の友人がうちの家族の無事を確認するために、伊丹から車で飛んで駆けつけてくれたそうです。その時、“友達ってありがたいな”とつくづく思ったと言っていました。
　とり合えず、家の中は足の踏み場がなかったので、台所の割れた食器やガラスを片付け始め

ました。台所を片づける時、ぐちゃぐちゃになった状態を見て、どっからどう片付けようかと途方に暮れたそうです。片付ければ片付けるほど、使い物にならなくなった物とかがたくさんあって、すごいゴミの量になりました。不思議なことがひとつ、それは食器棚です。この食器棚は震災の時、上半分がはずれて倒れ、中の食器が全部飛び出していたにもかかわらず、引き戸のガラス1枚だけが無傷で残っていました。その食器棚は今はもうありませんが、8歳の時まで使っていたのでガラスが1枚だけ無傷だった食器棚を今でも覚えています。

誰もいない大きいタンスのある部屋は、やはりタンスが倒れていたそうで、もし父がヘルニアにならずいつも通りにその部屋で寝ていたら、タンスの下敷きになっているところでした。その話を聞いて、父がヘルニアになっていてよかったと思いました。それから、倒れた大きいタンスは父と父の友人が起こしたそうです。

父がベランダから外を見ると、西宮市の方で黒い煙と火柱が何箇所も立ちこめていたそうです。私の家は武庫川沿いで、その反対側は西宮市なので家からでも西宮市が見えて、ひどい被害を受けているなと感じたそうです。

この日、妹はいつも8時ぐらいには起きるのに、11時くらいまで寝ていたおかげで、家の片付けがはかどり助かったそうです。兄と私も母に、「動いたら危ないから動いたらアカンで。」と言われ、布団の中で大人しくじっとしていたそうです。食器やガラスの破片など、危ない物だけ片付けが終わった頃には、お昼になっていたそうです。朝から何にも食べていなかったので、買い置きのパンを子供たちに食べさせたそうです。

地震のせいで水が出ず、当然トイレの水も流れないので、近くの墓地の井戸を開放してもらい、その井戸の水を汲んでトイレの水に使ったそうです。

お隣の家族も赤ちゃんがいて親しくしていたので、お隣に倒れたタンスを起こすのを手伝ってと頼まれ、腰痛で苦しんでいた父でしたが、断れず手伝ったそうです。

次の日、近くの保健所に給水車が来ていたので水を汲みに行き、その水でご飯を炊いておにぎりを作って食べる、という生活が始まりました。

私の家は神戸などと比べるとあまり被害はありませんでしたが、水道は2週間くらい、ガスは3～4日くらい、電気は震災当日の昼ごろには復旧したと言っていました。でもライフラインが復旧していない間は、食器を汚さないようにラップを敷いてご飯を入れたり、お風呂には1週間も入れなかったりと、けっこう辛かったそうです。その時、父の友人が、「1週間風呂入れてへんのやろ、うちの風呂使って。」と言ってくれて、お風呂に1週間ぶりに入れたそうです。でもその友人のお風呂も、水道からお湯がちょろちょろっとしかでなくて、5人入るのにすごく時間がかかったと言っていました。

お米を買うとき、国産のお米は入ってくる量が少ない上、高くてもすぐに売り切れてしまって、普段は売っていなかった“中国米”を仕方なく買ったそうなのですが、その中国米はあまりおいしくなかったと言っていました。買い物をする時は、パンなどすぐに食べられるものを買っていたそうです。しばらくは寝巻きを着て寝ず、いつでも飛び出せるように普段着を着て寝ていたそうです。

震災の後、交通機関がだめになっていたのでみんな交通手段は「足」だったそうです。

普段の生活に戻ったのは、震災から2か月くらい経った頃だそうです。

4. ＜友人の死･･･＞

この地震で父の友人が亡くなったそうです。原因は“火災”でした。西宮のアパートに住んでいたそうなのですが、地震でアパートが壊れて、おそらくガス漏れが原因で出火してそのまま火に飲み込まれて亡くなったそうです。父と家に来てくれた父の友人はバイクでその亡くなった友人の家に行くと、アパートは跡形もなく、全焼していました。その光景を見たとき父は愕然として腰が抜けたと言っていました。この友人のお葬式には行けなかったそうです。

私は親に、阪神・淡路大震災の話を何回か聞いたことがあったけど、父の友人が亡くなったという話は今回初めて聞きました。親戚や家族が亡くなるというのは当然悲しいことだけど、親しい友達が亡くなるというのも同じ悲しみだと思います。話している時、少し辛そうな顔をしていたので、きっと話したくない出来事だったのだなと思いました。
そして父のような思いをした人は、たくさんいます。そして中には今でも、そのことを忘れられず苦しんでいる人もいます。この震災が残したものは残酷だなと思いました。

5. ＜人の温かさ・・・＞

震災から10日ほどしても水道が復旧しなかったため、父のお父さん（祖父）の弟（おじちゃんと呼んでいます）の住んでいる島根県に行きました。このおじちゃんの家には、小さい頃から夏休みなどによく遊びに行ったりしているので、親戚の中ではけっこう深い関わりがありました。そのおじちゃんの所に行った時に、私たちの乗っていた車が“神戸ナンバー”なのを地元の人たちが見て、被災して帰ってきた！と大騒ぎになったそうです。そして、その騒ぎですぐに浜田市からお見舞金50,000円や家族分の毛布、救急箱セットなどの救援物資を私たち家族は頂いたそうです。私の家はそんなに大した被害はなかったので、申し訳ない気持ちになったと母が言っていました。それでも心配りをして下さる人たちの温かい気持ちがとても嬉しかった、とも言っていました。
そういう話を聞くと私も温かい気持ちになりました。知らない人でもテレビやラジオで阪神・淡路大震災のことを知って、「何か自分にできないか」と感じていた人はいっぱいいたと思います。だからこの震災の時、多くのボランティアが兵庫県に来たのだと思います。こういうところで人と人とのつながりがあるのだなと思いました。
そして野菜や食べ物などもいっぱいくれたそうです。このおじちゃんのところには、1ヶ月くらいお世話になったそうです。
このおじちゃんにも阪神・淡路大震災の時の話を聞きました。おじちゃんは島根県の浜田市に住んでいるのですが、毎朝4時に起きて仕事に行く支度をしていて、外に出たとき東の空を見たそうです。そしたらすごい稲光のようなものを見て、「なんだか今日はおかしな空じゃな～。」と思ったそうです。それからしばらくして、あの阪神・淡路大震災の報道を見たそうです。たまたまなのかその地震のせいなのかは分からないけど、きっと前触れだったのかな、と思いました。

6. ＜震災後、日常の生活で変わったこと・考えたこと・・・＞

水道の使い方を震災直後のことを思い出しながら、より無駄遣いをしないよう常に節水を心がけ感謝して使っていたそうです。震災の後も余震が続いていたので、これだけは必要かなと思うものをひとつにまとめて、寝るときそばに置いていたそうです。
震災の時、生後4ヶ月だった妹がそれまであまり手がかからなかったのに、震災後からぐずってお昼寝をしなくなり、1日中おんぶをして家事をしていたそうです。洗濯物を干すのも竿が高い位置にあったので、肩がつりそうになって本当に大変だったそうです。
父は震災前から入院予定だったけど、震災で怪我などをした人が優先となったので、入院するのに2ヶ月くらい後になってから、父は10日ほど入院しました。夏くらいまで父は働けなかったので、家族みんな家にいたそうです。
同じマンションの人に、神戸に仕事に行くのに電車が使えなかったらしく、スクーターを3ヶ月くらい貸したそうです。スクーターは、道が悪かったためかどろどろになって帰ってきたそうです。父と同じ会社の人の話では、パンの配送途中に地震があって配送先に行けなくなり、車を停車していると社名の入ったトラックを見て人が集まってきて、「パンを分けて下さい」と言われ、自分

の判断ではどうしようもなく、上司に聞いたら任せると言われ、その人の判断でパンを無料で渡したそうです。その時みんなにとても喜ばれ、感謝されたということを父が聞いたと言っていました。

7．＜感想＞

母は、水道の蛇口をひねったら水が出てくるありがたさを身にしみて感じたと言っていました。そして、震災ですごく大変なことになって、多くの大切な命が亡くなるという大きな悲しみをもたらしたけど、震災を通して気づかされたこともたくさんあったそうです。

話もしたことのない近所の方が、「近くのお風呂屋さんが開いているよ」と一軒一軒声をかけて下さったり、また違う方が食器を洗えるようにするため仕事用の野菜洗い場を開放して下さったり、近くの墓地の井戸を開放して下さったりと、もし地震が起こらなかったらこういった人の“本当の思いやりや優しさ”を感じることも無かったと言っていました。

私の記憶にはないこの阪神・淡路大震災の話を家族から聞くと、本当に自分も体験していたのだなと感じることが出来ました。両親からこの震災の話を聞き始めた時、「もう十何年も経っているから当時のことはあんまりおぼえてへんわ、それに神戸とかと比べたら被害も少なかったしなぁ。」と言われました。だけど、聞いているうちに震災当時のことを徐々に思い出して話してくれたので、十何年経って忘れていてもやはり記憶の片隅にはあの震災が脳裏に刻まれているのだなと思いました。そしてこの阪神・淡路大震災は当時ではかなり大きな揺れ（震度）だったので、被害が多かれ少なかれ被災した人々にとっては忘れられない災害だったのだなとも思いました。

今年の3月11日に東日本で大震災が起きて、この震災は阪神・淡路大震災よりも規模も被害も大きいものでした。実際起きた時私はテレビを見ていたのですが急にニュース速報になり、火災や津波による被害を見た時、本当に驚いたし言葉が出ませんでした。その時テレビでしか見ていない私が驚いて怖いなと思う程だったので、被災した人たちはもう何とも言い表せない感情だっただろうなと思います。今思い返すと、阪神・淡路大震災の時も緊急ニュース速報が入り、非被災者がテレビでその状況を見ていたのと、今回起きた東日本大震災を自分が同じ立場で見ていたのだなと思いました。

阪神・淡路大震災が起きた時は、私はまだ幼くて何も出来なかったし、逆に両親やご近所の方など色々な方々にお世話になってここまで育つことが出来ました。今私は、自分で考え、行動できる年になっています。阪神・淡路大震災の時できなかったことを、東日本大震災で被災した方に少しでも支援できるようにしていきたいです。神戸の町が復興したように、関東・東北が復興できるまで何らかの形で支援をしたいと思いまいした。なので、学校の力ですが東北に行ける機会があれば行って、小さなボランティアしかできないけれど少しでも復興につながれば、と思います。卒業したら今度は、自分の力で被災したところに行って支援します。

阪神・淡路大震災や東日本大震災で多くの命や大切な物が失われたけれど、この震災で気づくことや得ものもあったと思います。私は感謝の気持ちを忘れず、そして何か人の役に立てるような生き方をしていきたいです。そして、阪神・淡路大震災の記憶はなくても、親や被災者から聞いた話、東日本大震災には被災していないけど、見て・聞いて・感じたことを後の世代に伝えるのは大切なことなので、後世に語り継いでいこうと思います。

自分自身の阪神・淡路大震災の被災体験「語り継ぐ」

濵　友貴

1,1月16日の出来事

　その夜は、父は、3歳の兄と二階で寝ていて、当時1歳の私と姉（双子）は1階の居間で母の横で寝ていました。しかし、今日に限ってずっと私と姉が泣いていてなかなか泣き止みませんでした。特に姉の方がずっと泣いてうるさかったので、父も1階におりてきて母は姉を抱っこし、違う場所に移動させました。兄は、1人で寝ました。

2,1月17日の出来事

　まだ薄暗い朝方、すごく大きな揺れがきて、食器が落ちて割れ、電気が大きく揺れました。母は、私たちを守るため反射的におおいかぶさったそうです。しかも気づくと姉の泣く前、寝ていたところにクリスマスにもらったシクラメンの鉢が落ちていました。もし、姉があの時泣いていなかったら、もし、母が姉を抱っこして違う場所に移動させなかったら姉は今ここにいなかったかもしれません。兄が心配になった父はガラスが飛び散っている床を素足のまま「裕磨、動くなよ。今、いくからな！！」と言いながら懸命に駆け上がりました。見ると、兄の体の上に電球が落ちていたそうです。しかし、兄は冬布団をかぶっていたおかげで怪我はありませんでした。父はすぐに「大丈夫か！」と確認しながらみんなのいる一階に兄を抱きかかえて降りてきました。母もとてもホッとしたそうです。その時、子供3人とも恐怖でいっぱいだったのか、小さくて状況がわからなかったのか全く泣いてなかったそうです。そして、母がリビングに置いてあるスリッパをはき水道をひねると一滴も水がでませんでした。（地震発生から、約1時間経過）又、兄の部屋には3つのタンスがあり、今回は数センチメートルずれただけで済みましたが、もう少し揺れが激しかったがタンスが倒れ、兄は亡くなっていたかもしれません。家を見渡すと、リビングだけがぐちゃぐちゃになっただけではなく、庭の植木鉢は倒れて割れ、家にはおおきなヒビがはいっていました。お風呂場も下のタイルがすべてとれ、壁がヒビだらけでした。幸い窓ガラスは割れていませんでしたが、私の家は半壊状態でした。

3,震災後の私の家

　私の家は、長田区でも山の方にあったため火事などはありませんでした。しかし、私の後ろの家が崩れ私の家に乗っかってきたのですが、地盤が強かったため耐えたそうです。私の家の前は崖なので本当に地盤が強くてよかったです。すべてのライフラインが断たれてしまいました。しかし、幸いにも数時間後、電気だけは普及したので電気ストーブを付けて暖をとっていたそうです。そのころは、石油ストーブは1歳の私たちは危ないので、すべて電気ストーブでした。

4,翌朝

　翌朝、人が訪ねてきました。祖父母でした。話によると、祖父母の家は全壊したのですが、そんなことよりも私たちのことの方が心配だったので、わざわざ来てくれたのです。そのあと、父と母は祖父母の家財道具を取るため、祖父母の家に行きました。祖父母の家は、長田区で1番火災がひどかった場所（長田市役所周辺）に住んでいました。幸い、祖父母の家は火災にはあいませんでしたが、両親が、祖父母の家を行くのに他の人の屋根を歩いて行ったそうです。祖父母の家は、太い梁をいれていたので形だけはあったのですが、周りの家は何もなくて元々な

かったかのようだったのです。

5.途中に

　祖父母の家に行く途中1人の知り合いの方がしゃがんでいました。
　母は「どうしたのですか。」と尋ねると、何もなくなった家を見つめて泣きもせずにたんたんと「夫が死んで、家が壊れたのですよ。」と言いました。母は（なぜ、こんなにたんたんとしていられるのだろう。）と疑問に思っていたのですが後で考えてみると、きっと大きすぎる悲しみと損失感で泣くのをこえてしまって、まだ自覚できていないのかもしれません。母はその人に結局それ以上何も声がかけられなかったそうです。今、その人がどこに行ったのかもそれっきり分からなくなりました。又、違うところでは「誰か、誰か・・・毛布をください！うちの子、もう息をしてないのです。」とずっと叫んでいる人がいました。しかし、祖父母の家の近くはみんな火災で何も残っていないのでどうすることもできませんでした。また他の所では、「お父さん、息をして。お父さん。目を開けて！」と言い続けている女性もいました。

6,ヘリコプターの音

　阪神・淡路大震災が起こり、マスコミが長田区を中継しているのか、ヘリコプターが救助活動を行っているのか、あの地震以来ずっと長い間ヘリが飛び回っていました。同時にまだ余震も続いていました。だから、ヘリコプターの音と地震が起こるまでの「ゴォー！」という音が非常によく似ていたためと、ヘリコプターが家の近くを飛ぶと窓が揺れ、地震が又来るのではないかと思い、とてもこわかったそうです。

7,北海道からの支援

　私たちは、救援物資にたよって生活をしていました。しかし、私と姉のおむつが足りなかったのです。救援物資は食料やタオルが中心で赤ん坊用のために用意などされていないのです。はじめは、ミルクもなく大変だったのですが、数日後には粉ミルクをもらえるようになりました。しかし、オムツはなかなか手に入らなかったのです。しかしある日、北海道から母の大学生の時の友達が車で何時間もかけてわざわざおむつをたくさん持ってきてくれたのです。その人の親戚もこの地震を神戸で被災し、大切な友達と親戚のためにわざわざ来てくれたのです。母は、それが1番うれしかったと言っていました。

8,祖父母の生活

　祖父母は、家を失ったため、初め長い間私たちの家で寝泊まりして、その後仮設住宅で暮らしました。そして、新しい家（今の家）を購入しました。しかし、前の家の梁のぶんのお金が残っていたので新しい家のお金と前の家の梁のお金を同時に払っていかないといけなかったので大変だったと言っていました。今は、すべて返済したのですが、当時は全壊でも国からは、たった10万円ほどしかもらえなかったそうです。

9,お金よりも食料を

　私の家の近くにはダイエーという大きなスーパーがあります。まだあまり食料が配給されていないとき、父は数重枚の1万円札を手ににぎりしめて大行列に並んだそうです。結局、開店はせずに前で出店（でみせ）のように売っていました。父は、買い物をしたのですが大人数の人が一

気に買い占めるため、あまり買えなかったそうです。その時、父は（お金はこんな時はただの紙きれでしかない）と思ったそうです。

10,祖父の築いた会社

私の家は自営業で、鉄工所をしています。その会社も長田区にあり、中の機械が全部合わせて約1億円します。しかもそれで生計をたてているので、地震で壊れないかとても心配でした。しかし幸いにも機械に支障はありませんでした。しかし、何トンもある機械が前に動いていたので、のちに機械の専門の方に来ていただいて専用の機械で押して戻したそうです。人間には絶対動かすことができない何トンもの重さを阪神・淡路大震災は簡単に動かしてしまうほど大きく激しい揺れだったのです。

11,自分より子供が優先

私の家族は5人家族だから3人も子供がいます。特に1歳の私と姉はまだまだミルクもオムツもいる時期なので、人の2倍の量が必要です。上で書いた（北海道からオムツを持ってきてくれた）後、オムツの配給も多くなりました。しかし、オムツや粉ミルクを取りに車で行くと父と母の食べるお弁当などがもらえません。なぜなら、取りに行くまでに時間がかかりすぎてお弁当がなくなってしまうからです。それでも両親は子供を優先にし、あまり食べられない日が続いても全く文句を言いませんでした。

12,長田区の消防士

母が祖父母の家に行き来している時、火災のおこっているところにようやく消防車がやってきました。しかし、消防士はただ人達と一緒に火を見つめているだけでした。市民の人が「何をやっているのだ？早く火を消してくれ！」と言うと消防士は、「火災を消す水がないのです。」と言ったそうです。水が使えないため火を消すことができないのです。
のちに、阪神・淡路大震災で活動した消防士の方のなかから自殺された方もいます。断水して水がでず、でもどこも火災だらけで消火器もみつかりませんでした。最終的に長田区の火災は長田港の海水で消火にあたったそうです。

13, 学園都市に住んでいる親戚の家

私たちは、阪神・淡路大震災から長い間お風呂に全く入ることができませんでした。すると、学園都市に住んでいる親戚の方が「子供だけでもお風呂にいれてあげたい」と私たち（子ども）が親戚の家のお風呂にはいらせていただきました。学園都市に住んでいる親戚の家は、水も電気も水道もガスも、全く止まらず正常に動いていたそうです。母は、私たちのため週に1度通ってくれました。

14,学園都市のダイエー

両親がそのついで（お風呂に入れてもらった時）にダイエーで買い物をしようと店に入ったら、何もかも普通どおりにモノがきちんとそろっていたのですごく驚いたそうです、長田区のダイエーが全然モノがなく、いつも少ししか買うことができなかったのですが、こんな少しの距離だけでこんなにも違うのかと思ったそうです。それからは、学園都市まで車で通い日用品や食べ物を買いました。

15.長田区の被害状況

長田区だけで、921人もの方の尊い命が奪われました。幸いにも私の身内に亡くなった人はいませんですが、知り合いの方の身内の方が亡くなったりしました。長田区は高齢者が多いためと、火災が多かったため多くの方が亡くなりました。（65歳以上　545人）
全壊は、全部で15521件もありました。これに私の祖父母の家が入っていると思うとごく身近な出来事だと改めて感じました。同じく、半壊は全部で8282件もあり、私の家もこのうちの一件にあたります。

16,兄が幽霊を見る

阪神・淡路大震災起こり、兄が下に降ろされてから兄は「人がリビングにいる」と言っていました。当然誰もいません。この震災が関わったのかどうかはわかりませんが、霊感体質のない兄が見えたのだから、兄も心の奥で震災が怖かったのだと思います。

17,阪神・淡路大震災をきっかけに私は

私は、阪神・淡路大震災を経験しましたが、記憶にはありません。幼い頃から震災のことを両親や、祖父母からよく聞かされていました。次第に私は震災での教訓などを考えるようになり「なぜ多くの人々がなくなったのか。」を真剣に考えるようになりました。そして、これからも起こり続ける災害に対し、「どのような対策をすべきか」、「どうしたら災害に強いまちになり、被害を軽減できるのか。」という課題を解決するための方法を見つけるため、私は阪神・淡路大震災をきっかけに創立した舞子高校環境防災科で防災を学びぼうと入学しました。環境防災科では、外部講師の方の講義をきかせていただける機会がたくさんありました。特に、水道局の方や、電気会社の方、消防士の方の当時の話を聞かせてもらい、その時の課題や反省点、今行っていることなども学ぶことができて大変勉強になりました。今回の東日本大震災の被災地に行かせていただいたとき、「私も阪神・淡路大震災を経験し・・・」と言うと、被災者の方も安心して自分の悩みなどを言ってくださったりしました。この三年間貴重な授業を受けることができ、とても嬉しいです。阪神・淡路大震災は多くの尊い命、財産、思い出・・・、数えきれないくらいの大切なものを奪ってしましました。しかし、この震災をきっかけにこの科が創立し、私が今学んでいられるのです。この三年間で学んだことを決して無駄にせず、これから、場を借りて多くの方々に防災・減災の大切さなどを伝えていきたいです。

18.感想

今、私の家には阪神・淡路大震災の跡は庭のひび割れしか残っていません。だから、両親や祖父母に聞くまでは、地震の怖さがあまり理解できませんでした。しかし、今回の授業をきっかけにさらに詳しく聞くことができ、家族で避難場所や避難経路などをもう一度確認する機会もできました。今となっては神戸市はおしゃれな街として全国で有名になっています。しかし、神戸市の方々はここまでにどれほどの苦労をしてきたのでしょうか。阪神・淡路大震災で奪われた尊い命、財産、思い出・・・。これは、2度ともとには戻りません。しかし、神戸の方々は未来にむかって前進してきました。今回の東日本大震災でも多くのモノが奪われました。阪神・淡路大震災の時とは規模も原因も違いますが、同じ経験者として復興に向けてのお手伝いなどできます。私も覚えてはいませんが、経験者として少しでも被災者の方々のお手伝いをしたいです。そのために、環境防災科で習っていることをしっかりと頭に入れ、日々防災・減災を考えていきたい

です。

「語り継ぐ」私と震災

浜崎　聡子

1、　　震災直後

私は2月生まれなので、震災が起きた時はまだ1歳にもなっていませんでした。だから、当時の記憶はありません。まだちゃんと喋れず、伝い歩きしかできませんでした。
家族は父、母、姉が2人の5人家族です。寝室は父と母と私の3人が寝ている部屋と姉2人が寝ている部屋と分かれていました。当時、姉2人は小学生でした。住んでいる場所は垂水区の明石よりだったので、家にも被害はありませんでした。
震災直後、私は寝室で母と2人で寝ていました。タンスの上に置いていた箱やダンボール等が父の布団の上に落ちてきたそうです。本当なら隣で寝ているのに父はなぜかその日は姉2人の寝室で寝ていました。母は地震が起きた時、私の上に覆いかぶさって守ってくれました。
次女は揺れている間も寝ていました。けれど長女は揺れている間起きていて怖い思いをしたそうです。陶器の時計が次女の頭の真横に落ちて来たのも見たそうです。長女は当時、寝る前にペンライトで遊ぶ事にはまっていたので枕もとにいつもペンライトがありました。父はそのペンライトで照らしながらスリッパを持って私と母のいる寝室まで来てくれました。台所をのぞくと、食器棚は倒れてこそいなかったものの皿やコップ等が奥からどんどん出てきて、下に落ちて割れていくのが見えました。
揺れがおさまってからリビングに集まりました。家族全員無事なのを確認してから父と母は台所の割れた食器やガラスの片づけを始めました。その日の朝、私は壁や机を持たずに一人で歩けるようになってしまったので、台所や危ない所に勝手に行かないように姉がずっと面倒を見てくれていました。午前中に掃除を終わらせた後、父は1時間かけて自転車で三宮の祖父母の家へ行きました。
父は自転車で三宮へ行く途中、長田を通りました。外を歩いている人も多く、怪我している人も多かったようです。その怪我している人の多くは頭にけがをしていたそうです。震災があったのが朝で寝ている人が多かったため、物が落ちてきて怪我をした人もいたようです。歩道や道路には焚火のような火がそこらへんに点々とあったそうです。火事ほどではないけれどそれほど小さくもない火だったそうです。でも誰もそれを消そうとはせずみんな避けて歩いていました。その景色は「異様」だったそうです。

2、　　震災から数時間後

母は以前「大きな地震が起きたらお風呂に水をはった方が良い」ということをどこかで聞いたことがあったらしく、水を入れ始めました。ちゃんと水は出ましたが、揺れのせいで出てきたサビが混じっていて、赤く濁ってしまっていたそうです。入れ終わったとたん、水が出なくなってしまったそうです。水のライフラインが復旧するまで、そのお風呂の水でトイレを流したり、飲み水以外の用途で使っていました。赤サビが混じったのでとても飲む事はできませんでした。
電気のライフラインはその日のうちに復旧しました。しばらくしてからテレビがつくようになりました。その時初めてどんなにひどい地震だったか知ったそうです。家族はテレビの映像を聞いて衝撃を受けたそうです。ずっとテレビをつけていると長女の様子がおかしくなりました。だんだん震えだしたそうです。震災の時期が冬だったせいもあってか体調も崩してしまい、熱も出たそうです。長女はその時、映っている場所が日本ではないように見えたそうです。
私の家は物不足に困ることはあまりありませんでした。２日前の日曜日に水を大量に汲んできていたり、食べ物を買い込んでいたり、前日にオムツも箱買いしていました。私がまだ赤ちゃん

だったのでしょっちゅう買い物に行かず、たくさん買い込んであまり買い物に行かないようにしていたようです。
　電柱や建物などの人工物はたくさん倒れていました。でもそんな中、街路樹などの自然の物はほとんど変わっていない事に父は違和感を持ったそうです。頑丈にできているはずのコンクリートなどの人工物は倒れていても倒れない自然を見て、自然の強さを改めて感じたようです。

3、　　祖父母の家

　祖父母は三宮の高架下でクリーニング屋をしていて、その2階を住居スペースとして使っていました。震災の時、ちょうど祖父母は東京に旅行に行っていたため直接被害を受けることはありませんでした。けれど震災が起きた日の午後、父が祖父母の家を見に行くとお店はぐちゃぐちゃになっていました。お店のドアは引き戸でしたが歪んでしまいなかなか開かなかったそうです。中は服や物が散乱していたそうです。もし旅行に行っていなかったら怪我じゃ済まなかったかもしれません。けれど高架下のお店などが並んでいる所はコンクリートもしっかりしていたために崩れたりする事はなかったそうです。祖父母は三宮に戻らず大阪の親戚の家にしばらくいたそうです。昼は家を掃除しに三宮へ行って、夜は大阪へ行く生活が続きました。ライフラインが復旧して暮らせるようになってからは三宮へ戻ってきました。
　父が三宮に最初に着いた時、もうすでに倒れているビルもあったそうです。けれど、父が見た時フラワーロードにあったビルはまだ倒れていませんでした。震災からだいぶ時間が経ってから倒れたそうです。銀行も倒れていてお金を勝手に取ろうと思えば取れる状態でした。けれど何日たっても誰も取る人はいなかったそうです。

4、震災から数日後

　父の職場の人がおでんを作って持ってきてくれました。おでんの具を牛乳パックにいれてくれていました。それを温めて久しぶりに温かい物を食べたそうです。
　ガスボンベを買いに大きいスーパーに並んだりしたそうですが、まったく物が買えませんでした。どこも品切れでスーパーは空の状態でした。だめもとで家の近くの小さなドラックストアーへ行くと大きい店よりも物があったそうです。噂などで「小さな店はもう何もない」という話もあったそうで小さい店にはあまり人が来ていなかったそうです。私の家はそこでガスボンベと食べ物を買う事ができました。
　姉と母が体調を崩していたので、相生市の方にある被災していない地域の病院へ診察を受けに行きました。家の近くの病院では風邪のように軽い病気の人は後回しにされてしまうからです。診察の後、物を買うために病院近くのお店を回りました。食べ物や生活必需品を買おうと思ったからです。ガスボンベも買おうとしましたがありませんでした。困っているとお店の人が私たちを被災者だと気づいて店の奥からガスボンベを持ってきてくれました。なぜ被災者なのか気付いたのか聞くと被災者と被災者ではない人との買い方は違うからだと答えました。普通は品定めをして買い物をするけれど被災者の人はあまり見ずに必要なものはなんでもかごに入れていて、あきらかに他の人とは買い方が違ったそうです。
　父は他県から来たボランティアの人はあまり見なかったそうです。「公園や学校で炊き出しをしている人は居たかもしれないけど家の瓦礫を綺麗にしていたり掃除をしている人を手伝う人は見なかった」と言っていました。
　被害の状況や給水・給食についての情報が少なかったようです。特に避難所ではなく自分の家にいる人には情報が来なかったそうです。そのため、噂を信用して給水車をずっと待っていた人もいたそうです。信用できる情報が少なく、混乱したそうです。神戸新聞は17日の夕刊からはもう新聞を出していました。しばらくしてからまた販売を開始したため、私の家もその神戸新聞

の情報のおかげでだいぶ情報も入るようになり安心したそうです。
　東灘区の方では死体安置所がいっぱいになり、道路にも亡くなった方を並べている所もあったそうです。父は最初「なんで道路に人が寝ているんだろう」と思っていましたが、後になってそれが寝ているわけではない事を知ったそうです。
　給水や物を運ぶのに便利だからかリュックサックで行動する人が多くなったそうです。私の家も祖父母もリュックサックを買ったそうです。
　お風呂はほとんど入ることができませんでした。父は仕事に行けるようになってからは仕事場にあるシャワーで体を洗ってしましたが、母と姉2人と私は入れませんでした。そのため、週末にだけ少し遠くのお風呂屋さんまで行って体を洗っていました。近くにもお風呂屋さんはありました。そのお風呂屋さんは被災者の方には無料で開放していました。けれど、希望者が多くて毎回行列ができていて、なかなか中に入れませんでした。水なしで出来るシャンプーを使ったこともあったそうですが、使った後はどうしても気持ち悪くてあまり使わなかったそうです。

5、震災から2週間後

　2週間後、父は仕事に行けるようになりました。高速道路が倒れている道の横を単車で通ったそうです。大阪に行くまでになんどもタイヤがパンクしてしまったそうです。父は大阪の区役所に勤務していたので何時間もかけて職場まで行っていました。大阪では神戸と違って電気もあるし水も出る、今までどおりで、まるで震災がなかったように思えて、同じ国とは思えなかったそうです。
　家が明石に近いので母は明石によく買い物に行きました。お店はいつも通り営業していて、マクドなどのファーストフード店も開いていました。でも道を隔てた向こう側はまだライフラインが復旧してなくて営業が再開できていませんでした。その差に驚いたそうです。
　小学校は2週間で授業を再開しました。姉も学校へ行き段々元気になっていったそうです。

6、現在

　私の父は今、大阪の淀川区役所の「地域の防犯」の仕事をしています。警察と小学校や幼稚園などに行って自転車の正しい乗り方や不審者から身を守る方法などの講義等をしています。そして、地域で防災についてのイベントもしています。地域のコミュニティーの人と一緒にハザードマップを作ったりもしているそうです。他にも、防犯に関する研究をしている先生・防災に関する研究をしている先生を呼んで講演会も企画しています。父は今も、仕事を通して防災を考えています。
　家には、それぞれの部屋に懐中電灯が置かれています。夜に地震がおこったり、停電になっても大丈夫なようにしています。ほかにも、電池を多めに置いていたり、充電式の電池をいつでも使えるように充電を一杯にしています。水もいつも備蓄しています。乾パンなどの保存食も置いています。父が仕事でお試し用としてもらって来てくれた非常食などもあります。けれど、家には非常持ち出し袋がありません。だから、今、家族で必要な物などを話し、作っています。

7、感想

　街中の風景の話を聞いて、印象に残ったのは「人が作った丈夫なものは壊れてしまったけれど、木や森などの自然は壊れなかった」ということです。母は「まるで地球が人が作ったものだけを壊して掃除をしているみたいだった」と言っていました。私はこの言葉を聞いて少し怖いと感じました。コンクリートでできた丈夫な建物はたくさん壊れたり、倒壊してしまいました。でも震災があった日の夜、空はとても綺麗で星がよく見えたそうです。

家族からたくさんの震災の時の話を聞かせてもらえました。母は小さかった私の面倒をみてくれていたので外にあまり出ていませんでした。なので、たまに外出した時の町中の風景について話してくれました。父は自転車や単車で三宮や大阪、買い出しなどのために明石方面へも行っていたので震災直後の町中の様子も教えてくれました。一番上の姉はあまり話したがりませんでした。それぐらいショックな出来事であまり口に出したくないようでした。たまに少し話してくれたのですが、涙目になりまた黙ってしまっていました。それぐらい震災が怖くて衝撃的な事だということがわかりました。私が知らないことがたくさんありました。私がまだ小学生や中学生だったからという理由で今まで教えていなかったきつい話も聞かせてくれました。震災が起きた時の異常な風景や普通の時はしない行動が普通になったり、感覚がマヒしてしまう事もあったそうです。まだ神戸の被災した人全員の心の傷が癒えたわけじゃないということに改めて気付きました。当時の記憶がない私は完全には話の中には入れないと姉と話していて感じました。東北のボランティアで知り合った被災者の方との会話の中で感じた壁を感じました。気持ちや体験を共有することはできないかもしれないけれど一生懸命話しを聞こうと思いました。

私はこの被災の経験の話が風化してしまい、消えてしまうことが怖いです。家族も当時のことについて忘れてしまっていることもありました。普段、誰かに話す機会も少ないし、あまり進んで話そうとも思わないそうです。無理に聞こうとするべきではないと思います。けれど、まったく誰にも話さなくなると教訓や体験が消えてなくなるんじゃないかと私は思います。知らない人に伝えることは重要だと思いました。同じような体験をした人とは話しやすいけれど、経験していなかったり覚えていない人には話しにくいかもしれません。私は無理に聞き出そうとしないようにしています。でももしかしたら、不快に感じる人もいたかもしれません。話しを聞くことは難しいと今回も改めて思いました。でも話してくれたことは忘れずに誰かに伝えようと感じました。誰かに話したり、文章にしたりすることで、たくさんの人に伝えることができれば、それが教訓・経験の風化を防ぐことにもつながると思ったからです。

学生の間は、まだ誰かに震災のことについて誰かに話す機会はあるかもしれません。でも就職をしたり、自分の希望する職業につくことができたら今ほど話す機会はできないと思います。話すことをやめたら、私に伝えてくれた人の気持ちを無駄にしてしまうと思います。だから私は大人になっても誰かに話せる人になります。震災を知らない人や経験していない子どもに伝えていきたいです。次の世代に語り継ぐことをしていきます。

語り継ぐ

原　悠太

1,最初に

私は、阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）が発生したとき1歳でした。また、当時広島県東広島市に住んでいて震災の記憶は一切ありません。僕は震災を体験していないので、震災の概要と広島に居たときの家族の行動と親戚や知り合いの方の震災体験等を書きます。

2,阪神・淡路大震災の概要

発生年月日　平成7年(1995年)1月17日(火)午前5時46分52秒
地震名　平成7年(1995年)兵庫県南部地震
震源地　淡路島北部(北緯34度36分、東経135度02分)
震源の深さ　16㎞
規模　マグニチュード7.3
各地の震度
震度7　須磨区鷹取・長田区大橋・兵庫区大開・中央区三宮・灘区六甲道・東灘区住吉、芦屋市芦屋駅付近、西宮市夙川等、宝塚市の一部、淡路島北部の北淡町、一宮町、津名町の一部
震度6　神戸、洲本
震度5　京都、彦根、豊岡
震度4　岐阜、四日市、上野、福井、敦賀、津、和歌山、姫路、舞鶴、大阪、高松、岡山、徳島、津山、多度津、鳥取、福山、高知、境、**呉**、奈良
震度3　山口、萩、尾鷲、伊良湖、富山、飯田、諏訪、金沢、潮岬、松江、米子、室戸岬、松山、**広島**、西郷、輪島、名古屋、大分
震度2　佐賀、三島、浜松、高山、伏木、河口湖、宇和島、宿毛、松本、御前崎、静岡、甲府、長野、横浜、熊本、日田、都城、軽井沢、高田、下関、宮崎、人吉
震度1　福岡、熊谷、東京、水戸、網代、浜田、新潟、足摺、宇都宮、前橋、小名浜、延岡、平戸、鹿児島、館山、千葉、秩父、阿蘇山、柿岡
人的・物的被害
死者　6,434人(家屋倒壊による圧迫、窒息死が過半数を占める)
行方不明者　3人
負傷者　43,792人
全壊　104,906棟(186,175世帯)
半壊　144,274棟(274,182世帯)
一部破損　390,506棟

3,広島で

広島県東広島市に、父・母・僕（1歳）の3人で住んでいた。震災が発生した時は、東広島市でも震度3くらい揺れたそうだ。父と母も、今までに体験したことのない揺れだった。僕が寝ている部屋に大きなタンスがあったので、違う部屋で寝ていた父が心配してすぐに駆け付けたほど

の感じたことのない揺れだった。もちろん家は全然どこも壊れず大丈夫だった。震災発生時刻が5：46と早朝だったので地震の情報が詳しくわからず1時間くらいたった頃にニュースなどで神戸が大変だということがわかった。父の実家と父の弟と妹の家が加古川にあり、大変だと思い電話するも、もうすでに電話はつながらなかった。大変だと思うが電話が繋がらずどうしようもできなかった。会社に行く頃（7時頃）になってテレビで現地の映像が伝わってきた。広島では被害がなかったので、会社に行かなくてはならず、父は出勤しました。会社着いてから、会社にある公衆電話から実家に電話をかけたら繋がって無事の確認をすることができた。父は母（僕から見て祖母）から「揺れがすごかった」と聞いたそうだ。みんな無事だったと聞き父は一安心しました。震災の状況が気になり、家でも会社でも会社から帰っても震災のニュースをつけていた。父と母はニュースで長田の火事や高速の高架が倒れているのを見て大変だと思いながらもすぐには何もできなかった。長田の火事現場で若い子が「お父さーん」と叫んでいる映像が母の脳裏には焼きついているそうだ。1ヵ月後に、父が大阪の本社に行こうと思ったが、新幹線が不通になっていたので広島空港からの臨時便で出張に行った。父の会社は建設会社なので社員の多くが阪神高速の橋脚が折れて横倒しになっているのを見てとてもショックを受けたそうだ。震災が起きてから父の会社では福岡や広島の各支店から水のペットボトルを大量に送り、義援金を出した。震災の年の秋に、親戚の結婚式があり神戸に行った。神戸市内に入ったら阪神高速やビルなどの復興工事がいたるところで行われていたことにとても驚いたらしい。

祖母の話(加古川市東神吉町)

震災発生したときは寝ていた。今まで感じたことのない大きい揺れに、動くことや立つこともできず、揺れが収まるまで寝ていた。天井に吊るされている電気が揺れで天井に届きそうだった。揺れが収まったあとも、足が固まって動くことができなかった。時間がたち、外にある常楽寺のお墓をみたら、お墓が崩れていた。家には壁にひびが走り、座敷の壁が 5cm くらい下がった。観音開きの食器棚があり、それを地震後に開けたら、中で散乱していたお皿が開けた途端にいっぱい落ちてきた。この被害で、60～70 万円の保険金を祖母はもらった。周りの家や常楽寺も瓦が一部落ちていた。近くにある親戚の家では壁のクロスがはがれたそうだ。それ以外はいつも通りで水も出たしガスも使えたそうだ。次の日に、孫の幼稚園の園長先生が神戸に行くから、保護者でおにぎりを作って園長先生に渡した。園長先生によると、神戸になかなか着くことができなかったそうだ。何日かして、西宮の友達と電話がつながり、話をした。友達はお風呂に入ることができないと電話で言っていた。祖母は、2 年間地震を受けた家にそのまま住み続けた。その後に、地震の被害もあったので家を建て替えました。

叔母の話(加古川市東神吉)

地震が起きたとき、揺れで目が覚め、長男が寝ていた上に大きな時計があったので落ちないようにするだけで精一杯だった。外を見てみると、地面から光が出ていてとてもびっくりした。揺れがおさまり寝ていた部屋はどうもなかったので、たいしたことはないと思って寝た。寝ていたら近くに住んでいる祖母が飛んでやってきて「よく寝てられるな。ひどい地震やのに」と言われた。1階に降りてみると、食器棚にあったお皿が床に散乱していた。お風呂の壁にもひびが入り、家の外の基礎にもひびが入った。屋根の瓦の一部も落ちた。近所の家でも瓦が落ちている家がとても多くあった。農協で働いていた叔母は、地震後の農協は、保険関係での支払いが多く、被害などの計算をしてどんどん保険の支払いをしていた。

村上さんの話(宝塚市安倉)

当日は、自宅の2階で寝ていた。旦那が出勤するので目を覚ましたくらいだった。外を見たら西のほうが発光していた。天候が悪いのかと思いベランダに出て西のほうを見たけど、何もなかった。部屋に入って旦那に「雨降るかもよ」と話していたら大きな揺れに襲われた。子供が心配になり3mの廊下を何回も転げながら時間をかけて行った。旦那はテレビの下敷きになっていた。揺れているときの印象は、「カシャカシャ」という音が耳障りだった。後からわかったがこの音は瓦の音だった。揺れているときは、瓦の音や家具や食器が落ちる音がうるさく、冬の早朝だったので寒く暗くて周りが見えなく、とても恐怖を感じた。揺れが収まったころに子供の部屋に着き、無事を確認してから外に出た。

外では、近所の人が集まっていて、隣の人が、灯油を出してくれて、近所のみんなで暖をとった。明るくなってから家に入った。家の中はタンスが倒れていたり、翁人形が落ちていたり、ぐちゃぐちゃだった。財布だけを取って、ローソンに買い物に行った。その時はまだローソンは営業していて、パン・コーヒー・牛乳・バナナ・サンドウィッチを買って食べた。8時か9時ころになり、家の片づけを始めたら、大阪ガスがやってきた。大阪ガスの人に、この地域でガス漏れが発生しているから避難をしろと言われ位牌・タオル・毛布を持って近くの福祉会館に避難した。避難所はとても過ごしやすかった。避難所では、最初の2日間は冷たいおにぎりだったけど、3日目からはパン・お菓子などの支援物資が届いた。支援物資は神戸まで届けることが不可能だったので宝塚で止まっていたものを食べた。物資が多く余った物資を家で生活している人に配る活動をした。また、炊き出しの情報も伝える活動もした。避難所で不快だったのは、当時はパーテーションがなく隣を向いたら知らないおじさんだったのでプライバシーがなかったことだ。10 日目くらいに水とガスは戻り、後日福祉会館に障がい児が来るので帰れと言われ帰った。お風呂に入れたのは水が十分に使えるようになった、震災から 20 日目くらいだった。家に帰ってからも余震があり、とても怖かった。揺れたら外に出て近所の方と集まるときはとても安心した。家が元通りの生活に近づけたのは 10 月くらいだった。自宅を早く直したかったが、会社が少なく順番で回っていたので工事が遅かった。震災の時、全壊は、義捐金をもらえたのだけど、一部損壊だったのでもらえなかった。嘘をついたり、被害を大きく報告したり、気持ちがひどかったら、お金をもらうことができるけど、神戸のことや、ひどい人のことを考えるとそれはできなかった。

4,震災を知る

僕は、震災から 6 年後の 2001 年に兵庫県宝塚市に引っ越した。小学校 3 年の僕は、まだ、震災のことは知らなかった。宝塚での最初の 1 月になってから学校で防災学習をし、テレビでの震災特番を見ることで、初めて震災を感じた。初めてみた映像を見て思ったことは地震の力を感じたことだ。広島にいたころには、祖母が被爆者であり、学校でも戦争の様子や体験を聞くことや、映像で見たりすることが多かった。今になれば、戦争の被害と自然災害の被害の違いはわかるが、小学校3年生の僕には同じ光景に見えた。まちのほとんどが瓦礫の山になり、長田や須磨、兵庫も延焼火災で焼け野原になった。広島で見た、原子爆弾の爆風で飛ばされた家屋、熱線で燃える家屋と同じような状況だった。当時、その映像にとてもショックを受けたのを覚えている。まさか、地震が原爆と同じような力を持っているとは思っていなかった。

この時から、震災に興味を持つようになった。自分で震災を調べたり、先生に震災のことを聞いた。小学校・中学校の総合の発表では、震災のことを発表していた。小さいことだったけど自分なりに知らない震災を知ろうとした。

受験が近付き、どの高校にしようか迷っていた時、僕が消防士になりたいこと、震災を調べていたことを知っていた先生が、環境防災科の新聞の切り抜きとホームページのアドレスを書いた

紙を渡してくれた。この時に初めて環境防災科の存在を知った。それから1か月ほど、環境防災科についていろいろなことを調べた。防災を学べ、消防学校にも行けて、したことがなかったボランティアをできることが、この学校を受験することの決め手となった。迷惑をかけたのに、僕を後押ししてくれた先生のおかげで、環境防災科に合格することができた。

5,環境防災科に入学して

　環境防災科に入学して、消防・警察・自衛隊・大阪ガス・関西電気・水道局・NTT など震災を体験した方から多くの話を聞くことができて、自分の知らない震災を知ることができ、苦労したことや、悔やんでいること、いろんな視点からみた震災を教えていただいた。また、災害に強い街に作り直す復興についても環境防災科で学ぶことができた。多くの人が苦労して、励ましあいながら今の神戸を作っていった。人と人との繋がりやコミュニケーション、自分のまちを思う気持ちが、復興には大切だということを知ることができた。
　学年が上がるにつれて、授業の内容もより高度になり、毎日がとても楽しみになった。諏訪先生から教えてもらう、防災の授業も新しく聞くものばかりで、防災の知識も上がってきた。

6,東北地方太平洋沖地震

　環境防災科に在学中に、これほど大規模な地震と津波が発生するとは思っていなかった。本当に、地震はいつ起こるか分からないことを実感した。テレビで流れる津波の映像をただ見ることしかできなかった。現地にボランティアに行き、津波の恐ろしさを感じた。陸にあるはずのない、船・ブイ・漁具が散乱し、海藻や魚も打ち上げられていた。車はひっくり返り、家は流され基礎部分だけが残り、家の残骸だけが残っていた。初めて見た被災地に、自分は言葉がでなかった。初めての被災地での活動はとても辛かった。床下に入り泥を出す。庭にたまった泥を出す。倉庫に入った泥を出す。高校生の僕でも話す力がなくなるくらいにしんどかった。それでも、被災地の方は毎日この作業を続けている。津波に浸かったけど助かった人、自分の区の遺体の身元確認に立ち会っている副区長の人、家だけでなく育てていた作物まで奪い取られてしまった人。被災地の方みんなが心に大きな傷を持っていることはすぐにわかった。それでも、復興のために作業している姿を見て、人の生きていこうとする力をとても感じた。あるボランティア先の方に防災を専門に学んでいると話をしたところ、「何か防災について教えてくれ」と言われた。それは、これから勉強して将来教えてほしいのか、今すぐに教えてほしいのか、どちらでもとれる内容だったけど、僕は何も答えられなかった。今まで、防災ついて学んできて、被災地で頑張れると思っていただけに悔しかった。まだまだ、勉強することは多くあると改めて思いました。
　それでも、作業が終わると笑顔で感謝してくれたり、泣いて別れを悲しんでくれました。最初は、自分は役に立つのかと思っていたけど、被災地のために少しでも力になれたと思うと、活動をしてきてよかったと思いました。東北は復興にまだまだ時間はかかります。これからも長期的に支援していきたいと思います。

7,これから

　僕は、小さい頃からの夢である消防士になろうと思っています。消防士になったら、多くの人の命を自分の手で救いたいです。そして、国内だけでなく国外で起こる災害でも、活動をしていきたいです。そのためにも、国際消防救助隊に登録されることを目指していこうと思います。
　消防の仕事は現場での活動だけではなく、災害の被害を最小限に食い止める活動もしなければなりません。現場での活動だけではなく、予防の仕事もがんばりたいです。環境防災科で学んだ知識を使い、市民の方々に災害の恐ろしさを伝えたり、市民の方々が参加しやすい防災

行事を企画していきたいです。

語り継ぐ

福田　芽生

1.　　阪神・淡路大震災

私は、阪神・淡路大震災が起きたとき西区に住んでいました。同じ神戸市の中でも西区は比較的被害が少なかったです。

私の家では、父の部屋のタンスの上に置いてあるものが落ちてき窓から外を見ると電線が揺れていて火花が飛んでいました。地震が起きてすぐは、電気・ガス・水道が止まっていたけれど電気が割と早く戻ってテレビが見られるようになりました。テレビでは、長田区のパチンコ屋さんが火事で燃えている映像が繰り返し流れていたそうです。

電気はすぐに戻ったけれど、ガス・水道が止まったままだったのでお昼ごはんはポットに残っていたお水を沸かして母と兄と私の3人で分けて食べました。

2.　　長田区大橋に住む祖父

地震が起きてすぐ、祖父を心配して父は祖父のところに行きました。その行く道はあちこちの道路が通れなくなっていたりしていたので、火事の中、火をよけて車で行ったそうです。父は祖父の家に着いたときはまだ火事になっていなかったけれど、どんどん火が近づいてくるのが分かって父が祖父に「家の中から大事なものだけ出し」と言ってカーテンを破って風呂敷代わりにして、通帳やアルバムや祖父の大事な将棋盤などを包んでいました。火事が近づいてきて、15分ほどで家は全焼してしまいました。祖父の家には、昔父が優勝したりしてもらったカートのトロフィーなどもたくさんあったけれど一部しか持ち出せなくてほとんどが燃えてしまいました。

3. 家族

夕方頃父は祖父を連れて帰ってきたけれど、祖父の顔が煤で真っ黒になっていて「家燃えてもた」といったそうです。その時兄は、「地震のバカ」と言っていたそうです。祖父は、家の中から大事なものだけを取り出すときに一生懸命入れ歯を探していたけれど、片方だけ見つからなくて私の家の近所にある歯医者さんがお急ぎで作ってくれました。その日の晩御飯は冷凍の焼きおにぎりをみんなで食べました。でも、祖父はその時まだ入れ歯がない状態だったので「おにぎり固いわー」と言ってすごく食べにくそうにしていたそうです。

父は、当時兵庫区にある会社に勤めていたけれど壊滅的な状態だったので大阪の本社に報告しに行こうとしたけれど電車は動かないし道は通れないとこばかりだったので、兵庫県北部の方をまわって大阪の本社まで行きました。

長い間ガス・水道が止まっていたけれど水は給水車が来たり、父が明石の水道局まで水をもらいにいったりしていました。でも、お風呂に入れるほどお水はもらえなかったけれど私がまだ小さくおむつかぶれをしないようにポットでお湯を沸かしておもちゃ箱でお風呂に入っていました。

お風呂に入れないと困るので明石のお風呂屋さんに行ったけど兄が初めてのお風呂屋さんで大泣きして父はお風呂に入れなかったそうです。ほかには、遠方の親戚の家や市内でも被害の少なかった親戚やお友達の家などにお風呂を借りに行きました。いろんな方々のお世話になりました。

我が家の水道が再開したときには、お友達が洗濯をしにきたり近所のおばあちゃんたちがお風呂に入りに来たりとみんなで助け合って乗り越えました。

西区は、お店はすぐに開いたけど近所の友人の会社の人がおむつやカロリーメイトなどくれ

てすごく助かりました。
　兄は既におむつが取れていたけど、洗濯が出来ないからおむつをはかせていたらおむつが戻ってしまったと言っていました。
　地震当初はお米を洗わずに炊いたり、お皿の上にラップをしいて洗い物を減らしたりといろいろな工夫をし、料理はレンジとカセットコンロを使って調理しました。

4. 祖父の友人

　祖父の仲良しだった友人はたくさん亡くなってしまって、友人の奥さんは地震で家が崩壊して挟まれて身動きが取れなくなってしまい旦那さんが助けようとしたけれど火がせまってきて「もういいから、もう逃げて」といったそうです。その旦那さんは服屋さんをしていて、お店の名前が奥さんの名前から取って名付けたものなので、そのくらい仲のいい夫婦だったので本当につらい経験をしたと思います。
　祖父は、毎年震災が起きた日になるといろんなことを思い出して寝られなかったと言っていました。
　震災から3ヶ月後の4月に西神の仮設住宅が当たりました。仮設住宅は、夏はトタン屋根だからすごく暑くて冬は花瓶の水が凍るくらい寒かったそうで、そのときの仮設住宅には、クーラーなどの電化製品も設備されてなくて本当に過酷な状態だったので父と母がクーラーなどの電化製品を買いに行ったと言っていました。それから祖父は仮設住宅に2年住みました。
　祖父は、西神の仮設住宅に住んでいても毎日毎日長田の友人のところに会いにいっていました。仮設住宅に2年住んだあと、賃貸のマンションに3年住み、新長田北地区都市計画があり今私が住んでいる家に祖父も一緒に住んでいました。そこまで至るのに 5 年もかかりました。

5. 高取山に住む曾祖母

　私の曾祖母は、高取山に住んでいて同じ祖父と同じ長田区だったけど、山だったので地盤が固くかわら一枚も落ちませんでした。叔父は、絶対に家は潰れていると思っていたからすごく驚いたそうです。

6. 被害状況

　死亡者数（2005 年 12 月 22 日現在）
死亡者数全市4571長田区921うち65歳以上全市2308長田区545男性全市903長田区205女性全市1405長田区340行方不明者数全市2長田区1負傷者数全市14678長田区532（死亡者数には自殺者を含む）
　建物倒壊状況
全壊棟数全市67421長田区15521西区436半壊棟数55145長田区8282西区3262合計棟数全市122566長田区23803倒壊率全市30．8％長田区57．2％
　火災被害状況（1995 年 1 月 17 日～26 日発生）
火災総数（件）全市175長田区27焼損延床面積（平方メートル）全市819108長田区523546全焼（棟）全市6965長田区4759西区0半焼（棟）全市80長田区13西区0部分焼（棟）全市270長田区61ぼや（棟）71長田区1損害額（千円）全市22453574長田区11558243
　応急仮設住宅建設数（建設総数 1999 年 12 月 12 日完全閉鎖）
団地数全市288長田区14戸数全市39178長田区647

　私が住んでいた西区と長田区の被害状況を比べてみると圧倒的に長田区の被害が多くて驚

きました。

7. 環境防災科

私は、中学3年生のころに県立舞子高校に環境防災科があるのを担任に教えてもらい阪神・淡路大震災のときに、身近な人は亡くなっていないけれど祖父の家が火事で全焼し、他の被災した方々と比べると小さなものだったけど自分の家も被害をうけたので阪神・淡路大震災や防災について学びたいと思って環境防災科に入学しました。

1年生のときに、三宮の東遊園地でやっている阪神・淡路大震災の追悼式に行きました。初めて追悼式に行き、15年も経っているのにたくさんの人がいることに驚きました。私は、竹筒に水を入れ、テントの中でメッセージを書いた紙を花の形にするお手伝いをしていたけれど黙とうの時間には外に出てたくさんの方々と一緒に黙とうをしました。その中には、泣いている人もいて大切な人を亡くした気持ちはいつになっても薄れることはないと思いました。

8. まとめ

私は、阪神・淡路大震災を経験しているけれどまだ1歳で全く記憶もなく実際どれだけ大変なことがあったのか分からないけれど、話で聞いて想像していることよりはるかに大変でつらい思いをたくさんしたと思います。阪神・淡路大震災などの大きい災害を記憶はないけれど、経験した世代として経験してない世代とは災害に対する意識などが違うと思うし、実際小学校に防災訓練のボランティアをしに行ったときに、「ゆれるん」で震度7を体験させてもらったときに私はすごく怖い気持ちがあったけれど、小学生の多くがジェットコースターなどのアトラクション感覚で「楽しい」「もう一回乗りたい」などと言っていました。そういう地震に対して、恐怖心をもっていない小学生たちに私たちが阪神・淡路大震災などで聞いた話などを語り継がないといけないと思います。

祖父は、3年半くらい前に亡くなってしまって今はもういないけれど仮設住宅に入れたけど西神中央で長田の友人と離れて暮らさなくなってしまい友人が心配だったのと1人になって寂しくて毎日長田まで通っていたと思います。そのことが次起きた災害のときに活かされて、地域ごとのコミュニティを考えてくれているから祖父の経験が活かされてよかったです。

これから、いろんな災害がまた起きると思うけれど過去の災害の経験を活かしてどんなに大きな災害が来ても最小限に被害を抑え、被災者の方々に対する配慮などもいいものに出来ていったらいいなと思います。

語り継ぐ

藤田　悠真

阪神・淡路大震災

1995 年 1 月 17 日火曜日午前 5 時 46 分兵庫県南部を強い揺れが襲った。震源は淡路島北淡町で地震の規模を示すマグニチュードは 7.3 であった。死者 6,434 人、行方不明者 3 人、負傷者 40000 人を出す未曾有の大災害であった。

当時の記憶

その当時ぼくは 1 歳 7 か月で阪神・淡路大震災の事など覚えていない。もちろんそれ以外の記憶もない。僕の記憶がはっきりと始まっているのは 3 歳ごろからだと思う。かすかに被災後に大阪に居たときの事を覚えているがそれは実際に自分が記憶していることか、それとも後々見たその当時のビデオによる刷り込みなのか自分でもわからない。また、震災とは全く関係の無い記憶も、もしかしたら震災の時の記憶として勘違いしているかもしれない。それを踏まえてつづっていこうと思う。

家族構成

その当時、僕の家族構成はおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、自分の 5 人家族だった（後に弟と妹が生まれる）。おじいちゃんとおばあちゃんは農業をしていて、お父さんは日本通運大阪支店に勤務、お母さんは専業主婦だった。防災のことについては全く話していなかったらしい。

芦屋のおばあちゃんの家の家族構成は総祖母、おばあちゃん、おじさんの 3 人家族でおじさんは大阪の方でコンピューター関連の仕事をしていて機械にはとても詳しかった。

垂水の実家は耐震補強をしていない築何十年かわからないような古い木造 2 階建ての 2 世帯住宅（内装は至って普通な現代風の家）で、芦屋のおばあちゃんの家は外装も内装も現代的な一軒家だった。

地震発生当時の状況

1995 年 1 月 17 日火曜日 5 時 46 分、僕とお母さんは芦屋のおばあちゃんの家に居た。場所は阪急芦屋川駅から北に徒歩 5 分ほどの閑静な住宅街の中の一つだった。

地震が発生した時、僕は寝ていたが地震のゆれで目が覚めたらしい。その当時僕は地震なんてものも知らなかったし、なにが起こっているのかわからなかったと思う。だが、何もわからないとは言え何かただならぬ事が起こっている事が分かったのか、怖くてずっとお母さんにしがみついていたそうだ。また、寝ていた部屋に本棚とクローゼットがあったが、僕はお母さんとおばあちゃんの間で寝ていたため助かった。しかしおばあちゃんは倒れてきた本棚にあたり、軽いけがをした。母が語るに、地震が発生した朝には警察の方が一軒一軒お宅を訪問して怪我などが無いか確認しにきたそうだ。

地震が発生してから2日後、まだ今なら迎えに行けると父は思い、車で迎えにきてくれた。そして母親と僕は垂水の実家に帰ったがおばあちゃんと曾祖母とおじさんはそのまま残った。

ふだんなら垂水から芦屋までは 1 時間ほどで来ることができるが、その当時は阪神高速が倒れており、しかも国道も渋滞や通行規制も始まっていたので数時間もかけてやってきたそうだ。

（父親もおじいちゃんもおばあちゃんも二輪の免許を持っていなかったので車で来るしかなかった。）

垂水の自宅

垂水の自宅(現在住んでいる家）はそんなに被害がなく、壁にひびが入った程度の被害だった。また、電気・ガス。水道も大丈夫だった。特にガスはプロパンだったことが一番大きかったと思われる。今思うと昔の家の造りはすごいなあと思う。

被災直後

被災直後の芦屋の家は電気もガスも通っておらず暖房機器、電気ストーブはもちろん使えず、灯油も品薄状態になりストーブも使えなくてとても寒かったそうだ。だから僕は地震発生からお父さんが迎えに来るまで2日間ずっと毛布にくるまって寝ていたそうだ。そして2日後お父さんが迎えにきたときにカセットコンロと灯油を持ってきた。
母が言うには地震が発生した日から芦屋の町がガラッと変わったそうだ。鳴り響くサイレン、倒壊した建物、ひび割れた道路…何もかもが変わってしまったらしい。

被災後の様子とその後

垂水の実家に帰ってきてから、お母さんは弟がお腹の中にいたのでずっと病院に通いっきりで、お父さんは大阪の会社に勤めいていたが、電車がとぎれとぎれの運航だったので会社の寮で生活していた。だから僕はおじいちゃんとおばあちゃんと一緒に生活していた。だから自然と畑に行ったり田んぼに行ったりしていた。今思うと飽き性だったのか田んぼに行っても 1 時間もたたないうちに「帰ろう～」「早く帰ろう～」と駄々をこねていたことを思い出す。とても申し訳ない気分だ。
また、芦屋の家は半壊の認定を受け地震発生から 2 週間ほどでおじさんたちは大阪の堺市のマンションに引っ越した。
その後大阪のマンションに行く機会がよくあったがあんまり楽しかった記憶はない。公園ではただ遊具でひたすら遊んでいた記憶しかない。まわりの子供たちはみんな楽しそうに遊んでいたけど僕はただひたすら遊具であそんでいるだけ。そんな感じだった。
そのほかにも遊園地とまではいかないが小さな遊園地のような場所に行ったり、動物園に行ったりしてとても大切に育ててもらった気がする。

記憶

阪神・淡路大震災が直接的な原因なのかわからないが震災の後ある日突然、「地震」「地震やー」と何回も何回もお父さんに向かって叫んだことを確かに記憶している。しかし残念ながら父はその時のことを全然覚えていないのでこのことについては質問できなかった。何歳だったかわからないが確かに記憶している。床を叩くと床から振動が伝わってきたことからたぶん「地震」という言葉が出てきたのではないかと思う。今回の東日本大震災でも津波の絵を描いたり、ミニカーを使ったりして津波で車が流されているのを表現したりする子供がいるように僕も何か地震により影響を受けたんだなぁと今になって思う。その時僕はただ、「地震」という単語を知ったからお父さんにも伝えようとしていたのかもしれない。もっと言うとお父さんに同意を求めていたのかもしれない。その時お父さんは何も言わずに黙っていたと思う。「そうだね」と一言でも言ってくれたら僕はどのようにしていたのかが今となってはとても気になる。

環境防災科

僕は幼稚園を卒園し公立の小学校、中学校を卒業し、防災の「ぼ」の字も知らないような人間で、防災とは全く無縁な生活を送っていた。しかし僕は舞子高校環境防災科に進学した。僕がなぜ環境防災科に入ろうと思ったかというと特にこれと言った理由はなかった。絶対防災を勉強したいなんて思ってもいなかった。ただ中学校に入ったときから舞子高校に入りたいなーと、ただ漠然とした目標しかなかった。環境防災科を知ったきっかけは中学の時、野球部に所属していて先輩に舞子高校について聞いてみたことからである。その時に僕の頭の中では「環境防災科」という名前だけあって「環境」と「防災」の二つのことを勉強しているのかなー？と思った。僕はもともと理科、特に環境の分野が好きだったので「環境」について勉強したいなと思った。また「日本にひとつしか無い学科」という言葉が僕を引き付けた。ちょうどそのころテレビ番組で環境防災科について取り上げられていて、ますます僕を引き付けた。しかし、めんどくさがりな僕はオープンハイスクールに行かなかった。

入試当日の試験問題は基礎学力レベルの問題だったのでそんなに苦戦した記憶はない。ただ、集団面接に苦戦した記憶はある。もともと「環境」の分野で入りたかったので集団面接で四川省地震の事を聞かれたときは頭が真っ白になった。とっさにニュースで見たり聞いたりしたことを頭のなかで掘り返してきてうまく切り抜けることができた。個人面接では「環境」について聞かれたので苦戦することなく言うことができた。

その後無事、舞子高校環境防災科に入学することができた。しかし1年生の頃はとても辛い日々だった。勉強の内容はほとんど防災のことだらけで全くついていけなかった。このとき初めてオープンハイスクールに行かなかったことを後悔した。そんな日々が1年ほど続き、2年生の夏休みに初めて佐用町の小学生との交流ボランティアに参加した。これも特に行きたい理由はなかった。あえて言えば「ただなんとなく」という気持ちからだった。しかし、僕はその1日でボランティアの素晴らしさをはじめて知った。その日を境に僕は防災の授業もがんばるようになった。最初は理論の授業だと思って1時間ひたすら集中して話を聞いていた。でもそのうち防災というものにだんだんと惹かれていった。「災害に強い社会」「被災者の気持ち」様々なことを学んだ。ボランティアも積極的に参加するようになったし、テレビで防災のことが取り上げられていると自然とそっちを向くようになった。今では防災を勉強することが全く苦ではなくなった。逆に防災のことを積極的に勉強していこうと思うほどだ。

現在

今では神戸の街は元気な姿を取り戻したように見える。実際に僕もそう思う。それゆえについ最近まで今の生活が当たり前のように思ってしまっていた自分がいる。今僕はとても幸せな生活をしている。決して欲しいものがすぐ手に入ったり、たくさんのお金があったりするという意味での幸せではない。ただ普通の生活ができているということが幸せだ。僕たちは当たり前のように食べ物が食べられるし、もちろんながら帰る家もある。しかし今、同じ日本にいるのに十分にごはんが食べられない人、毎日配給のお弁当を食べている人もいるし、家に帰ろうにも原発事故で帰ることができない人だっている。だから僕たちはその人たちのつらさを忘れないようにし、できるだけ今の生活が不幸だなんて思わないようにしたい。

これから…

僕はこれから大学に進学したいと思っている。しかし防災がメインというわけではなく、防災を勉強するにしてもあんまり深くは取り入れないと思う。僕は将来的に経済と法律が必要となるの

で大学では経済学か法律学を専攻しようと思っている。しかし決して環境防災科で学んだことは無駄にはしたくないと思う。阪神・淡路大震災のこと、ボランティアのこと、東北に行ったこと…環境防災科で学んだことはいつか役に立つ日が来ると思う。しかしそれがいつになるか分からない。もしかしたら自分が被災者かもしれないし、支援する立場の人かもしれない。いずれにせよ環境防災科で学んだことは大きなアドバンテージになっていると思う。

最後に…「僕たちは生かされている」だから僕はさまざまな人に感謝の気持ちを忘れないでいたい。

震災を知らない僕たち

桝井　賢

僕はこの阪神・淡路大震災が発生した当時は1歳だったので具体的に家族がどのような状況だったのか、近くの被害状況はどのようなものだったのかなどはあまり覚えていない。だから自分の頭の中でわずかに残っている記憶と、親や親戚などから聞いた情報などでまとめたいと思う。

＜自分の状況＞

1月17日に阪神・淡路大震災が発生した。1歳の僕と3歳年上の兄は両親といつも通り一緒に4人で和室に寝ていた。そして震災が発生した瞬間、両親に僕と兄は押し入れの中に入れられ助かった。この押し入れの中に入れられ助かったという記憶は1歳当時のとこだったのだが今も覚えている。しかし僕は、まだ1歳だったということもあり何のために押し入れに入れられたということまでは分からなかったし、またすぐに押し入れの中で寝ていた。

そして震災が発生してからの数日間は余震が何回も来て怖かったので、親戚の家や・祖父母の家などを訪れていた。

次に震災が発生したとき、僕はまだ1歳というとこもありオムツを付けていた。しかし震災が発生したことにより家の近辺でオムツを手に入れるとこが難しくなったので大久保に住んでいる、親戚の人がオムツを買って自分たちのもとへ持ってきてくれた。

＜家と家の近辺の状況＞

僕は震災が発生した当時は垂水区に住んでいた。だから僕は、この話を聞くまでは、何も被害がないと思っていたのだが、小さいことであれ様々な被害があった。

震災が発生した直後の自宅は、食器棚の扉が開いて食器が割れてしまっていた。あと、醤油の入っているボトルやお酒の入っていた瓶などが落ちてしまっていたりして、瓶が割れていたり、醤油などがこぼれてしまっていた。そして、その割れてしまったガラスの破片が散らばってしまっていたので、スリッパを履かないと片付けられない状況だった。

次に自宅のライフラインの復旧については、電気についてはとても早く復旧したのだが、ガスの復旧はとても遅く、ガスが使えるようになったのは、いかなごを作る時期ぐらいまでかかった。だから、ガスが復旧するまでのお風呂は、健康ランドや父の会社に入りに行っていた。

家の近辺の状況として、地震があった日に母は家の外に出ていった。すると空から降ってきているものがあり、母は1月17日ということもあり雪が降ってきたのだと思っていた。しかし、目の前でその降ってきていたものをよく見るとそれは黒くて灰のようなものだった。その瞬間母は、目の前に灰が落ちてくるのを見てどこかで火事が起きているのだと分かったそうなのだが、どこで起きているのかまでは分からなくて、近くで起きているのでは無いかととても心配していた。しかし、後々テレビや新聞などの様々な情報から長田で起きていた火事の灰が僕らの住んでいた垂水にまで飛んできていたのだ。

家の近辺の被害状況は、倒壊している家は近くには無く、あっても半壊程度だった。

＜祖母の体験談＞

祖母が寝ていた布団の横には、整理ダンスがあり、その上に人形ケースを置いていた。震災が発生したために、そのケースの戸が外れ下に寝ている自分の布団に落ちてきていた。震災が

起きた時期が時期でもり寒かったため厚い布団を頭から被っていたので怪我をしなかった。冬ではなく、夏に起きていたら頭の上に人形ケースが落ちてきていて、自分の身体に被害があったかもしれないのでこのような面では寒い時期に震災が起きてよかったと思う。
震災発生後どこからか人のしゃべっている声が聞こえてきて近所の人たちが外に出てきていて話しているのではないかと思い、隣の部屋に行くとテレビが食卓にあったテーブルにあたり、スイッチが入ってしまってテレビがついてしまっていたのだった。このテレビが付いていたので尼崎は停電していなかった。
玄関に向かうと、下駄箱が倒れてしまっていた。階段のカベ土は落ちてしまっていて、屋根瓦は滑りおちてしまっていた。
祖母は、垂水に住む僕の母と西宮に住む母の妹に電話をした。垂水にはつながったのだが、西宮には電話がつながらなかった。そのため、車で出かけようとしたのだが、西宮に行く途中の武庫川から西には行くことが出来なくなってしまっていた。
何回か車で垂水に行ったときに、途中の長田を走っていると焼け跡が残っていた。
今回の話を聞くまでは、祖母とは震災の話についてあまり話をしていなかったので、自分の住んでいる垂水区の話だけではなく、他の地域の話も聞くことが出来てとても勉強になった。

＜父の体験談＞

僕の父は神戸新聞社に勤めている。神戸新聞社は、1回ドラマになったこともありとても大きな被害を受けたことは僕も知っていた。しかし神戸新聞社がどのようなことをしていたのかはドラマで1回見ていたこともあり少しは分かっていたのだが、詳しくまでは知らなかったし、なによりも父が震災当時にどのような事をしていたのかは全くと言っていいほど知らなかった。
震災が発生した1月17日の朝10時ごろ父は「やっぱり行ってくる」という言葉を僕たち家族にかけて、僕の父は三ノ宮にある神戸新聞社に向かった。三ノ宮にある神戸新聞社に行くのには約2時間もかけて国道2号線を使って原付で向かった。鷹取を越えたあたりから被害がすごくなってきていて、長田らへんになると、火事がすごくて消防のホースをまたぎながら走って行った。震災が発生したのは1月17日で冬なのに長田の辺りはとても暖かかった。
会社に着くと会社のビルはほぼ全壊していて、いつ余震が起こるか分からないし、中に入っていては危険ということで立ち入り禁止になってしまっていて、震災が起きてから初めて行った日には何もすることが出来ずに、帰らないといけなかった。帰りは国道2号線が行くときに危なかった事を思い出し国道2号線を外しながら帰った。
その後、父は宝塚線をもちいて京都新聞に訪れたり、西神の印刷工場に行ったりして情報をできるだけ多くの人に知ってもらうために新聞を止めないようにしていた。
そして神戸新聞社が自社制作するまでにはシステムがすべて壊れてしまっていてとても時間がかかってしまった。特にテレビの欄と株式の欄は自社制作するまでにとても時間を費やした。
神戸新聞社が復旧するまでで1番しんどかった作業はシステムがゼロの状態になってしまっていたのでそのシステムを元通りに復活させるのが1番しんどかった。
今回の話を聞いていて父がどのようなことを震災当時にしていたのかを詳しく知ることが出来たし、神戸新聞社がどのように復旧していったのかも詳しく知ることが出来たのでとても為になった。

＜環境防災科＞

僕はこの環境防災科という他の学校には無いような特色のある学科に入ったのかというと、他の学校にいては体験できないような事が出来ると兄から聞いたのがきっかけだ。しかしどのようなことをしているのかをもっと詳しく知りたかったため、僕はオープンキャンパスに参加した。この

ときの説明では被災地に訪問した時の話があったり、カードで防災を学んだりと防災について何も知らなかった僕だったのだが、先輩方がとても優しく教えてくれたりして、僕もこのような先輩になって僕のように防災を知らない人たちにも楽しくかつ、詳しく教えられる人になろうと思いこの環境防災科に入ろうと思った。

今の僕はこの環境防災科に入ろうと思った時の人になれているかといえば、正直全然なれていないと思う。しかし2011年5月の上旬に、東日本大震災の被災地のボランティアとして宮城県に訪れた時に、僕は環境防災科に入っていてとてもよかったと思った。環境防災科でないとできないような貴重な体験を高校生としてできたからだ。しかしこの貴重な体験を自分の心の中にしまっていては行った意味が薄れてしまうと思うので、しっかりと他の人に伝えていくことが大切だと思った。そのため、今回被災地に行ってどのような事をしたのかや、被災地の現状はどのような感じだったのかを近くの人からでいいのでたくさんの人に伝えていきたいと思う。

僕は環境防災科に入り、他の学校では学ぶことのできないたくさんの事を学ぶことが出来たし、被災地に行って人と人とのつながりをとてもたくさん味わうことが出来たので、環境防災科に入って本当に良かったと思っている。

＜将来＞

僕はこの環境防災科で学んだことを必ず将来の仕事に活かしたいと思う。自分は消防士などの誰もが思う防災に携わっている仕事に就くことはできないと思うが、どのような仕事に就いたとしても小さいことでもいいので防災に少しでも携わっていたいと思う。今考えているのは、地域にある消防団に入るなどしたいと思っている。そして災害が起きた時には地域の防災のリーダーとして活躍できる存在になりたい。そのためにも環境防災科としていられる少なくなってしまっている1日1日を大切にして学んだことをしっかりと将来につなげていきたい。

＜阪神・淡路大震災との向き合い方＞

僕が記憶にある小学校の時は震災にしっかりと向き合っていなかったと思う。音楽の時間に「しあわせ運べるように」を歌っていた時は、この歌にはどのような意味が込められているのかなどは考えないで歌っていたと思う。それに、震災の体験がたくさん書かれた本を総合の時間に読んでいた時には、自分が全然体験していなかったこともあり、何となくという気持ちで読んでいたと思う。

僕が震災としっかりと向き合うきっかけになったのは、中学校2年生の時、トライやるウィークで「人と防災未来センター」に行ったのがきっかけだ。僕がなぜ「人と防災未来センター」を選んだのかというと、正直自分の行きたかったところが行けなくて、残っていたのが「人と防災未来センター」だったのでここを選んだのだった。残りもので選んだこともあり、トライやるウィークに行くまでは何も考えていなかったのだが、終わったときにはすごい充実感であふれていた。なぜなら、仕事もとても充実していたのだが、何回か見学の時間があって、そのときに震災当時の写真や、語り部さんからの話を聞いたりするなどして、1月17日に起こった震災は絶対に忘れてはいけない出来事だと、とても実感させられた。これが僕にしっかりと震災と向き合うようにしたきっかけだった。

今は環境防災科に入り、震災についての情報を自分の中に取り込んでいっている。だから、この取り込んだ情報を、震災を体験していない子供たちに伝え、いつまでも震災の事を語り継いでいって欲しい。

＜感想＞

今回僕は両親や祖母から震災当時の話を聞いて、今まで震災の事についてあまり話したことがなかったので、自分の知らなかった、たくさんの情報を聞くことが出来たのでとてもよかった。今回聞いた両親の体験談や、祖母の体験談などは自分の中にしまっておくのではなく、たくさんの人に語り継いでいきたい。そして震災をいつまでも忘れないようにしていきたい。

語り継ぐ

松浦　由依

1. はじめに

震災当時、私は1歳で地震が起こった時の記憶は全くない。何が起きて、どうなっていいたのか、全く覚えていない。これから書くことは、すべて母や祖父母から聞いた話である。

2. 母から聞いた話

私は当時1歳で、5つ上の兄と母と父と4人で寝ていた。地震が起きて、どの方向に揺れているのか分からなくて、とにかく部屋中が回っていたらしい。私と兄はそんな地震に気づかず寝ていたそうだ。寝ていた場所のタンスも浮き上がったりしたので母と父は、全然起きない私たちの上にありったけの布団をかぶせたそうだ。兄はそこで起き出してきたそうだが、私は地震がおさまるまで全く起きなかったらしい。マンション自体は無事だったが、家の中ではテレビなどが落ちてしまうことはなかったけど、タンスの開き戸は全部開き中のものが全部出てきて、開き戸の食器棚の中の食器も何枚も割れ、出入り口を塞ぐような状態だったそうだ。割れた食器をどかしながら、外に出ると外は長田の方から来た火災の煙に空が覆われて何時間経っても真っ暗だったそうだ。

そんな中、私たちはみんなで集まっているために祖父母の家に行ったそうだ。祖父母の家もそんな大きな被害もなかったそうだ。

3. 母の仕事

祖父母の家に私と兄を預けた後、母は当時勤めていた病院に呼ばれたので、そこに向かったらしい。道はいたるところでガス漏れを起こしていたので、どこもかしこも通行止めになっていて、いつもなら10分か15分で着くところが2時間もかかってしまったそうだ。病院に着いて中に入ったら、点滴は倒れて割れていて、廊下には毛布が引かれその上に沢山の人が寝転がっていたそうだ。

当時勤めていた病院は対応が早く、電気をすぐに自家発電に切り替え、ガスもプロパンガスに早くから切り替えたそうだ。食べ物も患者さんに食べさせるために、お弁当でもカップラーメンでも何でも集められるだけ全部集め、地震発生から何日かはそれを食べていたそうだ。しかし、それからすぐに京都の日清食品さんからお弁当が届くようになったそうだ。また、病院がプロパンガスに切り替え調理ができるようになったら、弁当だけじゃなく食材も届けてくれるようになったらしい。これのおかげでお弁当は職員が食べて、患者さんにはその人の病状に合わせた御飯が作れるようになったそうだ。さらにその食材を使って、病院の近くの避難所になっている小学校や中学校、高校に行って炊き出しのボランティアを何回も行ったそうだ。

しかし、治療の面では自家発電に切り替えたので何とか医療機器は使うことができたが、薬が全くと言っていいほど入ってこなかったので、病院に入院していた人だけではなく、避難所で生活していた糖尿病の人や、心臓に疾患を持っている人が何日も薬を投与できなくて、高血糖になったり心臓発作を起こして、次々と運ばれてきたそうだ。しかし、薬がなかったので、大急処置ぐらいでちゃんとした治療ができなくて大変だったらしい。また、東の方から患者さんの受け入れ要請が早朝にあり、受け入れることになって待っていても通行止めなどが原因でなかなか来なくて、朝に受け入れ要請があったのに患者さんを乗せた救急車が病院に着いたのが夜中になることがあったそうだ。救急車を待っている間、母も他の職員たちも「まだ来ない」といらいらしなが

ら待っていたそうだ。なので、夜中の2時・3時に帰り、朝の8時にまた病院に行って仕事をするという生活が、毎日繰り返されたらしい。

4. 祖父母から聞いた話

地震が発生した時間帯には2人は起きようとしていたそうだ。だが地震が起こり激しく揺れたため、布団をかぶりじっとしていたそうだ。家の外側は外壁に、少しひびが入ったり門がいがんでしまって開かなくなってしまったりしたらしい。家の中はふすまが全部倒れ、開き戸の食器棚の中の食器がほとんど落ちて割れてしまったそうだ。そのほかにも、冷蔵庫や洋服ダンスが前にずれてドアが開いていたり、1階のテレビは落ちなかったが2階のテレビが落ちてしまったり、地震で浮き上がったせいか食器棚の下に落ちて割れた食器が入っていたり、アルミサッシの窓が割れてはいなかったが畳の上に乗っていたりしたらしい。また、長田の方から流れてきた煙で長い時間暗い状態だったので辺りが明るくなってからわかったことらしいが、祖母が寝ていた場所のすぐ横に中にたくさん入った人形ケースが落ちていたそうだ。少しずれて落ちてくれたから良かったが、今思うと危なかったと言っていた。

5. 祖父母の家での生活

私の家や、祖父母の家の方では地震発生の次の日には電気は通っていたらしい。しかし、ガスが約1か月余り止まっていたので、ご飯を作るのが大変だったそうだ。祖父と父が、プロパンガスやコンロを持ってくるまでは、灯油で動く火鉢があったのでそれを使ってご飯を作っていたらしい。食べ物は、お正月に買いだめしておいた餅などの食材があったし、電気が通って冷蔵庫が使えていたので肉や魚などの食材が腐る心配もなかったそうだ。なので、当時の主食はほとんどが餅だったそうだ。そのほかにも、姫路の方で畑もしていたので、前に収穫しておいて保管していた、芋や白菜などもあったので、それらの野菜をおかゆに入れて芋粥などにして私たちに食べさせてくれたそうだ。他にも、足りなくなったり近所の人でいる物があるという人がいたら、父が加古川の方で勤務したいたのでそっちの方まで買いに行ってくれたりもしたそうだ。お店には、水やガスボンベはもちろんのこと食べ物もほとんどなかったし、私たちが住んでいるところにはどういう訳かまったく救援物資などが届くことがなかったので、食べ物や生活していくために必要な物資に関して困ることがなかったのはラッキーだったと言っていた。今考えると、救援物資が来なかったのかは、なぜなのか不思議に思ったそうだ。

だが、煮炊きをしたり、当時私が使っていた布オムツを洗ったりするために大量の水が必要だったが、給水車が近くの小学校にしか来なかったので、祖父と母はあちこちに水を貰いに行ったそうだ。水道局の方に行って並んで貰いに行ったこともあったそうだが、すぐに無くなりなかなか貰うことができなかったので、水道局の人に聞いたら水道局に水を送るタンクまでは、水が来ていると言っていたのでそっちに水を貰いに行ったり、ある一帯だけ水が出る場所があってその地域にお店を持っている人が無料で水を提供してくれていたので、そこに貰いに行ったりもしたそうだ。また、母は夜中仕事から帰ってきた後に自分たちの分だけでなく祖父母の家の近所の人やマンションの人で車を持っていない人の分まで水を汲みに行って、分けていたらしい。また、父が加古川の方から水を持って帰ってきたりもしたので、それで生活していたそうだ。お風呂も母が勤めていた病院の近くの老人ホームに借りにいったり、地震の被害をあまり受けなかった祖父のお兄さんの家に借りに行ったり、母の友達の家に借りに行ったりもしたらしい。水が出るようになってからは、祖父が会社から入れておいてらお湯が沸く機械を持って帰ってきてくれたので、その機械でお風呂を沸かしたらしい。

また、兄や私のことを聞いたがあまり覚えていないようだった。しかし兄の方は、小学校が避難所になっていたこともあり、しばらく学校に行っていなかったらしい。私の方はあまり覚えていな

いそうだが、もともとマイペースな性格なせいか祖父母の家にいて余震が起こっても、泣き出すこともなく、普通に生活していたようだ。

6. 環境防災科に入って

私が環境防災科に入った理由は、特にボランティアに興味があったわけでも、防災や環境について関心があったわけでもなかった。ただ、卒業した人の中に心理系や看護系の方面に進学している人がいたからという、とても単純な理由だ。しかも、それまでは他の高校を受験しようとしていたのを変えて突然、環境防災科を受験することを決めたので面接練習から小論文の書き方まで担当の先生に最初から教えてもらい他の受験者に追い付くのに必死だった。中学校の先生達も合格するかどうか、心配だったそうだ。

しかし、環境防災科に入学したものの勉強ができるわけでもないし、中学生のころから積極性に欠けるところがあるので、本当にやっていけるのか不安な思いもあった。しかし、周りの人と話すようになり少しずつ変わっていけたし、いろんな分野で活躍されている外部講師の方々の話の中で、今まで知らなかったことや分からなかったことがあったりするので、勉強になることばかりだった。もちろん、普段の学校の授業の中でも地震のメカニズムや地震の種類、様々な災害の発生の仕方など今まで教わったことのないことが勉強できたし、どれもこれも将来自分のためになることばかりだと思う。今まで、聞いたことのない事、体験したことのない事を実際に聞けて体験できたので、私は環境防災科に入って良かったと思う。

7. ネパール

環境防災科は、普通科や他の学校ではなかなかできないような事も、沢山やっている。その中で私が一番印象に残っているのが、ネパール訪問である。私は 2 年生の時に、このネパール訪問に参加した。ネパールの学校を訪問したり、ネパールの人々と交流したり、またホームステイなどもして日本とは違う、ネパールの文化・習慣を体感することができた。また、交流することで人々の優しさや温かさを感じる事ができたし、一緒にいることでとても元気をもらった気もした。

しかし、一方でネパールの建物は日本の建物のように耐震化などがほとんど進んでいないという事も分かった。日干しレンガで脆かったり、外壁にひびが入っていたりする家や建物が沢山あった。それを見た瞬間改めて建物の耐震化の大切さを実感することができた。

8. 消防学校

高校1年と2年の時には、消防学校の体験入校もした。1年生のころは、「別に消防士になりたいわけじゃないのに、何でやらないといけないんだろう。」と思ってしまう事もあった。実際、消防学校での訓練はとてもハードだった。

1年の時は日帰りで、規律訓練をやったりグラウンドを何回も走ったりもした。ついていくのがやっとだったのを覚えている。でも、緊急時の人の運び方やロープ結束の仕方など普段じゃ聞くことのない事を教えてもらえてとても勉強になった。

2年は1泊2日での体験で1年の時のように規律訓練をやり、ロープ結束をしたがそれに加え、放水訓練や煙の充満した部屋に装備を付けて入っていったり、ロープ降りやロープ登りなど、なかなか体験することがない事を体験できた。他にも、夜の防災訓練や早朝のランニングなどもしてしんどかった事を覚えている。夜には、実際に消防士として働いている先輩から話を聞かせてもらって、耳で聞いて実際に体験して改めて消防士のすごさと大変さを感じる事ができた。

9.「語り継ぐ」を書いて

この「語り継ぐ」を書くことになって、今まであまり詳しく聞くことのなかった阪神・淡路大震災の話を家族から聞いて、自分の知らない聞いたことのない話が沢山出てきて、正直驚いた。私の住んでいる場所は、地震の被害をあまり受けなかったそうだから、あまり話はないのかと思っていたので、こんなに話が聞けると思っていなかった。被災後の祖父母の家での生活、母の仕事の様子、生活していく上での大変だったことなど、長田の方に住んでいた人に比べれば小さいことかもしれないけど、当時を体験しているようでしていないに等しい私にとって、とても大きな出来事に感じた。また、今回の東日本大震災のこともあって余計に当時の大変さが重みを増して感じられた。母も祖父母も、今考えたら疑問に思うことがいくつかあったそうだが、その頃はそんなこと考える暇がなかったと言っているのも分かる気がした。

しかし、阪神・淡路大震災も今回の東日本大震災も多くの死者、被災者を出してしまっているのは一緒である。日本は、これからまだまだ大きな地震が起こると予測されているので、死者を減らす努力、被災者を減らす努力をより一層していかなければならない。でもそれは、誰か1人が頑張ってもなかなか結果に繋がらない。なら、どうするのか何をするべきなのかを考えるのが、私たち次世代の人への課題だと思う。

人々にどう防災を伝え広げていくのか方法は沢山あると思うが、私は講演会などで防災を広げていきたい。実際に人と触れ合って話をしたうえで防災に関心を持ってほしいし、防災への意識を高めてほしいからだ。阪神・淡路大震災でも東日本大震災でも、「まさか地震が来ると思わなかった。津波が来ると思わなかった。」という人がいる。自分には関係ない、地震なんか来るわけないと思っていると、いざ来たときにどうしていいか分からなくなってしまう。なので、他人事じゃない、地震は必ず来るんだということを少しでもいいから思ってほしい。1人ひとりの意識が高まれば、自然と防災・減災に繋がると思うので、将来できればしていきたいと思う。

また、私は将来心理カウンセラーになるのが夢なので、もしその夢が叶ったら地震などの災害で被災された方々の心のケアをしていきたい。被災した後、自分の持つ恐怖や不安を誰にも話せず溜めこんでしまうと、体を壊して病気になることに繋がってしまうと思うので、それを防ぐためにも話を聞いて一緒に解決策を探して、心の健康を回復させるお手伝いをしたいと思っている。そのために、しっかり知識を持って心理カウンセラーになるという夢を叶えられるようにしていきたい。

語り継ぐ

松尾　美穂

当時の家族構成：父…競輪選手、母…専業主婦、長兄…小学校2年生、次兄…幼稚園年長、私…0歳

　1995年当時、私の家族は神戸市西区の樫野台という郊外に住んでいた。ど田舎という表現は言い過ぎかもしれない。だが、車を5分も走らせれば櫨谷町や平野町に到着するので田舎だろう。
　長崎の五島列島出身の父は、「神戸にはあまり台風が来ないし、雨が沢山降ることもない。」と、神戸をいたく気に入っていた。台風は神戸にも結構な頻度で来るが、台風銀座である九州に住んでいた父からすると、相対的にかなり少なく見えたようだ。

震災当日

　午前5時46分、私は寝室で両親と眠っていた。ゴーッ、と地鳴りがして激しい横揺れに襲われた。私以外の家族は地震の揺れで飛び起きたのに、私は暢気にも眠り続けていたらしい。
　地震発生後、2階にいた家族は全員で1階のリビングに下りて毛布にくるまっていた。地震から数時間が経った10時頃、母方の祖母から電話がかかってきた。
「明石で地震があったらしいけど、そっちは大丈夫？」
母は家族全員無事だと伝えた。私達は神戸がめちゃくちゃになっていることを、まだ知らなかったのだ。
　電気が復旧したので母がテレビをつけた。すると、どのチャンネルでも普通の番組が放映されていた。特別編成の番組に切り替わったのは今と比べると随分遅かったようだ。今は大規模災害が起こって数分もしたら特別編成の番組に切り替わるくらいに情報伝達が速くなっている。
　話は飛ぶが、新潟県中越地震が起こったのは土曜日で、当時私は小学5年生だった。その時はアニメを見ていた。放送が始まって数分後に画面がいきなり特別編成のものに切り替わったのが今も鮮明に記憶に残っている。このアニメを見ていたからこそ、私は新潟県中越地震が起こった曜日を未だに覚えているのだ。くだらないきっかけで繋ぎとめられている記憶ではあるが、震災のことを忘れずにいるというのはとても大事なことだ。だからこそ、この『語り継ぐ』を書き起こしている。
　技術の進歩は素晴らしいな、としみじみする半面、1995年当時のマスコミは何をやっていたのだろう、と詰りたくなる話である。
　話を元に戻そう。父は17日に仕事仲間と一緒にゴルフをしに行く約束をしていたが、もちろんのこと中止になった。
　同じく震災当日、私と母と兄は三木市にあるサティへ食料の買い出しに行った。行き帰りの道路はかなり渋滞していて、出発したのは朝なのに、帰って来た時はもう夕方になっていた。

地震による被害

　西区は地震の被害が比較的少なかったので、地震が起こった時に寝室の家具が倒れてきた、などということはなく、家が倒壊することもなかった。我が家の中に目立った損傷はなく、食器棚の皿やコップが飛び出して割れ、室内の壁紙が一部破れた程度だった。
　しかし、父も母も「地震が起こった時はすごい揺れで、家が潰れるかと思った。」と漏らしている。実際、外から見ると問題がなさそうな我が家にもガタが来ていて、次に同じような地震が起こった

ら倒壊するかもしれない。だから、我が家は現在、地震保険に加入している。

震災数日後

　競輪選手である父は、20日に新幹線で四日市競輪場へ向かう予定だった。ところが困ったことに、乗るはずだった新幹線は震災の影響で運行を停止していたのだ。父は普通の電車で迂回する羽目になった。まず、西明石から在来線（山陽本線）に乗って姫路まで行き、姫路からは播但線に乗って但馬へ、但馬で山陰本線に乗り換えて京都へ向かった。ここからが更に面倒で、三重県には新幹線が通っていないので、いったん京都から新幹線で名古屋まで行ってから関西線で四日市に戻った。「電車の中はかなり混雑していて、新幹線に乗っている時しか座れなかった。」と父は言っていた。

復旧

　地震で水道が止まっている間は、向かいの家の人に井戸から汲んだ水を分けてもらっていたそうだ。もちろん、私が住んでいる樫野台に井戸はない。向かいの家に住んでいた人の仕事場は、今も井戸水で生活している人々がいる神出にあったのだ。その人は巨大な容器に水を入れて、軽トラックで持って帰ってきて近所の人に容器を一つずつ配ってくれた。その後、ゴミ箱とゴミ袋で即席の容器を作って水を少しずつ移し替えて使用した。その人からもらった容器というのがお風呂の浴槽なみの大きさで、おかげで一度も給水に行くことなく水道が復旧した（樫野台の水道が復旧したのは17日から2、3週間後のこと）。
　その人は強面で、数年前にどこかへ引っ越してしまったし、私には当時の記憶など全然ない。しかし、言葉では言い表せないほどその人には感謝している。人を見た目で判断してはいけないということをひしひしと感じさせられた。
　水が復旧するまでは、無駄遣いしないように皿をラップで包んで皿洗いの手間を省いた。
　水が復旧した日、外にある給湯機から水が噴き出しているのを近所の人が教えてくれた。地震で給湯機の中のパイプが外れていたのだ。
　私達家族は水道が断裂してから復旧するまでに一度、祖母が住む篠山へお風呂に入りに行った。
　水道が復旧した後、我が家のお風呂に入りに来た人がいる。その人は見も知らぬ赤の他人だった。
　車で出かけた際、瓦礫を積んだトラックが沢山走っていて、荷台から落ちた木片が後ろを走っていた車に当たったのを父は見た。その車の運転手は何も言わなかった。
　西消防署の横にある西体育館は当時、全国から届いた支援物資を仕分ける場所になっていた。子どもに手がかからなくなった母親達がそのボランティアをしていたようだ。

仮設住宅

　樫野台には高層のマンション群が二つある。オークスクエアとネクステージというもので、どちらも一番高い棟は20階以上ある。エレベーターは一応あるのだが、給水しに行くのは大変だっただろうと思う。
　その二つの他にも、エトワールコートという3階建ての低層マンション群がある。そこにはエレベーターがないので、3階に住んでいる人達は相当苦労したことだろう。
　震災当日からしばらくの間小学校は休校になり、学校の横にある空き地には仮設住宅が建設された。その仮設住宅は私が小学校1年生の頃に撤去されて、その後一時期は駐車場にもなったりした。しかし、今は草が方々に生えている空き地に戻っている。高校から家に帰る時は

必ずそこを横切る。手入れは施されていないように見受けられるけれど、あそこはあのままであって欲しい。日本が仮設住宅を建てないで済むくらい地震に強い国になればいいな、と思う。
　震災前、樫野台2丁目の空き地には低層住宅が建設される予定だった。だが、震災後は急きょ仮設住宅の建設が始まり、本来の計画は白紙になった。そこは現在、ルナ西神中央という一戸建て住宅になっている。
　空き地ではない樫野台公園や竹の台公園、更には西神中央公園にまで仮設住宅が建設された。春日台5丁目の西消防署の横にあった空き地（現在は住宅地になっている）にも仮設住宅が建てられた。
　震災による直接的な被害は少なかった西区でも、震災による日常の変化を感じることはあったということだ。
　震災から1年ほどが経ったある夜、樫野台のエトワールコートに住んでいた人が用事で自動車を運転していたところ、道路に寝転がっていた酔っ払いを轢き殺してしまうという痛ましい事故が起こった。事故現場はエトワールコートのすぐ横にある道路だった。被害者は樫野台小学校の横にある仮設住宅に住んでいた。エトワールコートと仮設住宅は一本の歩道を隔てた隣同士に立地していたので、酩酊状態で迷い込んでしまったのではなかろうか。震災を生き残れたのに車なんかに殺されるなんて、やりきれない話だ。

環境防災科

　私は確固たる意志があって環境防災科に入学したわけではない。恥ずかしい話、防災についてはそんなに興味がなかった。だからボランティアに進んで参加するということもあまりなかった。専門科目よりも普通科目の方が得意なので、他の高校の普通科に入学しておけば良かった、と後悔したこともある。現に今も、公募制推薦で志望校に合格できかったら、という不安が頭をよぎる。環境防災科は専門科目が全単位数の3分の1あるので、その分普通科目の単位数が削られてしまう。センター入試や二次試験で普通科の生徒と互角に闘うなどといった真似はできない。
　しかし、私はこの学科で他の普通科の生徒が学ばないことを沢山教わってきた。地震のメカニズムや国内外の災害のこと、他にも沢山のことを学んだ。私が思っていた以上に高校生活2年間で得たものは大きい。小学生に震災のことを教えるため、出前授業に行ったりもした。中学校3年生当時の自分と比べたら、かなり主体的に、そして積極的になれたと思う。この2年間で得た賜物だ。
　東日本大震災の被災地支援ボランティアに参加した経験も、絶対に無駄にはしたくない。

忘れられない写真

　数ある専門科目の中で一番好きなのは、1年生の時に履修した『災害と人間』である。この授業は、震災を体験した外部講師を招いてお話を聴かせていただく形式になっている。中でも印象に残っているのは、神戸市消防局の中谷明美さんの講義だ。
　中谷さんはパワーポイントを見せながら話をしてくれたのだが、途中で震災当時の写真をスクリーンに表示した。消防士が燃え盛る家の前で立ち尽くしている写真だった。火事になっている家の前で、なす術もなくただそこに佇んでいる消防士。水をひいて来ることができなかったために消火ができなかった、と中谷さんは説明していた。あの消防士はどんな気持ちだったのだろうか。あのような写真が二度と撮影されないことを祈る。中谷さんの講義から2年が経った今でも、私はあの写真を忘れられないでいる。
　外部講師の方の勤め先は警察や自衛隊、関西電力やNTTなど十人十色で、震災を色々な角度から知ることができた。また、校外学習によって学校で学んだ知識を更に深められた。

消防学校の体験入校はとても充実した行事だった。苦しかったけれど、皆が団結した時の高揚感は何物にも勝るものだった。

将来の夢

今のところ文房具メーカーに就職したいと思っている。残念ながら防災とは関連性があまりなく、高校生活で学んだことを生かすのは難しい。他にも色々就職したいと思う民間企業はいくつもある。そのいずれも、防災と直接関係のあるものはない。新しい将来の夢ができたとしても、多分防災とは関わりの薄いものだろう。第一、就職氷河期なのに「あの会社じゃないと嫌だ。」などと言っている余裕はない。

だが、この2年間で学んだことを無駄にするような人生は歩みたくない。貴重な経験を沢山させてもらったのに、それを生かさずに一生を終えるということは、自身の高校生活を全て否定することになる。

最後に

この『語り継ぐ』を書くにあたって、両親から震災当時の話を根掘り葉掘り聴いた。実は、これまで震災のことについて詳細なことを聴く機会がなく、初めて知る話も結構あった。
無知だった上に、自分の震災体験すら進んで知ろうとしなかった自分が恥ずかしい。

神戸市に住んでいる住民の内、3分の1は震災を体験していないらしい。私は一応3分の2に入るが、当時0歳だったので震災を体験していない人々となんら変わりはない。

それでも、阪神・淡路大震災を風化させないために、両親や外部講師から聴いた話を次の世代の子ども達に伝えていかなければならない。

震災の話は、する側も聴く側も辛い。だが、伝えなければ、また大きな地震が起こった時に同じ過ちを繰り返してしまうかもしれない。

家が潰れて瓦礫の下敷きになった人々を助け出したのはほとんどが近所の人だった。人と人との繋がりはとても重要なものだから、近所づきあいは大切にしなければならない。他にも伝えなければならないことが沢山ある。

私の学年は、震災当時に全員がこの世に誕生していた最後の学年だ。一つ下の学年からは、当時生まれてさえいなかった生徒がいる世代になる。そんな彼らにも、大人達から聴いた震災の話を一人でも多くの人に語り継いで欲しい。

この『語り継ぐ』を読むことによって、少しでも多くの人に防災への興味を持ってもらえることを切に願う。命が失われてからではもう手遅れなのだ。あの震災によって亡くなられた方々のためにも、身近なことからでいいから災害への備えをして欲しい。

語り継ぐ

水野　壮太郎

はじめに

僕は阪神・淡路大震災が起きたときまだ1歳だった。だから、震災のことは何も覚えていないから体験していないに等しい。この語り継ぐでは、自分で体験したこと、感じたことは書くことはできない。だから、これから書く当時のことはすべて両親、兄弟、祖父母、親戚に聞いた話である。自分の中に記憶がなくても、阪神・淡路大震災のことは語り継いでいきたいと思う。

1. 阪神・淡路大震災の詳細

1995年（平成7年）1月17日午前5時46分52秒に発生。淡路島北部沖の明石海峡を震源としたM7．3の地震である。正式名称は兵庫県南部地震である。

死者6，434名、行方不明者2名、負傷者43，792名、避難人数はピーク時で316，678名にのぼった。全壊家屋が104，906棟、半壊家屋が144，274棟、一部損壊家屋が390，506棟で被害総額は約10兆円に至った。

震度7の地域　神戸市須磨区高取、長田区大橋、兵庫区大開、中央区三宮、灘区六甲、東灘区住吉、芦屋市芦屋駅付近、西宮市、宝塚市、北淡町、一宮町、津名町

震度6　　神戸市、明石市、洲本市

この地震で東北地方や九州地方まで揺れが観測されている。

阪神・淡路大震災でたくさんのボランティアが参加し、この年がボランティア元年と呼ばれるようになった。

2. 震災前

阪神・淡路大震災が起こる前は、神戸は地震が起こりにくいところだと聞いていたからまさか地震が起こるとは思っていなかったと母は言っていた。地震は来ないと思っていたが、父が消防士だったので一応非常持ち出し袋（防災バック）は用意していた。だが、使うときは来ないと母は思っていたと言っていた。

3. 家の被害状況

僕の家があった場所はあまり被害が大きなところではなかったので、家が全壊したり、半壊したりしたということはなかった。だが、それでも家の中は食器などが散乱し、ぐちゃぐちゃになったそうだ。水道とガスは止まり数日間使うことはできなかった。

祖父母の家は東灘区にある。幸い祖父母の家はすこし傾き亀裂がはいった程度でしたが、近くにある阪急の線路をこえたら、家はほとんど全壊していたそうだ。祖父が寝ていた部屋には大きなタンスがあり、地震で倒れそうになったそうなのですが、タンスのところにあった神棚が支えとなり、タンスは倒れてこなかったそうだ。祖父は神様が助けてくれたと言っていた。

4. 震災直後

僕の家族は5人家族である。いつも、子供3人が同じ部屋、父と母が同じ部屋で別々に寝ていた。阪神・淡路大震災が起きた日も、いつもと同じように寝ていた。地震が起こる前「ゴゴゴゴゴー」という音がした。父と母はその音で目を覚ましたが、父は自動車が事故にあったと思ったと

言っていた。母は近くを走る新幹線だと思ったと言っていた。その音がしてすぐものすごい揺れがきて、父はとっさに子ども部屋に行き兄と姉の上に覆いかぶさり2人を守ったそうだ。だが、揺れが大きすぎてなかなかいけなかったと言っていた。母もなんとか子ども部屋まで行き、僕の上に覆いかぶさったと言っていた。揺れていた時間は10秒程度だったそうだが、父はとても長く感じたと言っていた。幸い僕が住んでいた地域は揺れもさほど大きくなく、僕の家族で亡くなった人はいなっかた。まだ1歳だった僕は、何事もなかったかのようにぐっすり眠っていたままだったそうだ。兄はこの揺れがあったとき、自分の近くに鳩時計が飛んできたことを覚えていた。鳩時計以外にもテレビや小さな家具が飛び交っていたそうだが、子ども部屋にはおもちゃぐらいしか置いていなっかたのでけがをすることはなかった。リビングにあった金魚蜂の水はこぼれ、ジュータンはびちょびちょだった。地震が起きてすぐは停電していたので、真っ暗で何も見えなかった。夜明けとともに部屋の様子が分かってきた。姉は、当時4歳だったがこのときのことをあまり覚えていない。始めにも言ったが当然僕は何も覚えていない。

父は消防士だったので、地震が起きてすぐ招集がかかり消防署へ向かった。だが、東灘区に住んでいた祖父母と連絡がとれず、心配だったので消防署に向かう前に祖父母の家に寄ったそうだ。その後1週間、父は帰ってこなかった。さっき書いたように祖父母の家はぎりぎり被害が大きくなかったところなので祖父母も、一緒に住んでいた叔母も命はたすかった。

父が仕事に行ってからは母がひとりで幼い3人の子どもの面倒をいていた。正直、一人では心配もいっぱいあったし、不安もいっぱいあって父に家にいてほしかったそうだが、消防士の妻になったのだからしょうがないと思い父を見送ったそうだ。父も母と子ども3人を残して行くのは心配だったそうだが、消防士になった以上こういうときが来ても覚悟は決めていたと言っていた。それでも地震が起きたとき、仕事に行く日で家にいたのでよかったと言っていた。もしいなかったら、しばらく連絡がとれかっただろうから生死もわからなくて心配だったと思うと母は話していた。

5. 被災生活

家自体の被害は何もなかったが、水が止まり母はまだ5歳だった兄と台車に家にあるタンクやゴミバケツなどをのして、マンションの敷地内に来ていた給水車まで水を汲みに行ったそうだ。当時はマンションに住んでいた。エレベーターが止まっていて、汲んできた水を家まで運ぶのが大変だったそうだ。それでも、僕の家は4階だったのでもっと上の階に住んでいる人に比べれば、まだ大分ましだったと思うと母は言っていた。このように水が止まって水を汲みに行くのも大変だったため、食事のときはお皿にラップをまいて汚れないようにして、洗い物を出さないようにし水を節約してつかっていたそうだ。当然トイレの水も流れない。だから、トイレの水はお風呂にためていた水を使い、流していた。お風呂の水はいつも洗濯に使っていたのでその日も前の日のお湯が浴槽にあったそうだ。飲み水はペットボトルを買い置きしていたのでそれで過ごしていた。お風呂は地震が起きてから3日目ぐらいに、当時西区の西神に住んでいた僕のいとこの家で入らせてもらったと言っていた。その後、水は1週間ぐらいで出るようになった。電気は2～3時間で復旧した。テレビを見て神戸の市街地の様子が放送されていて母はびっくりした。特に長田の火災は衝撃的だったと言っていた。その後数日間はテレビにかじりつきで、地震の被害状況を見ていたそうだ。

スーパーに買い出しに行っても食品はほとんどなかった。だから、あるものだけを買っていた。それ以外に隣の人が買ってきたものをおすそわけしてもらったこともあるそうだ。父が出勤し、しばらく帰ってこなかったので、近所の方は僕たち家族を心配し、気にかけていてくれたそうだ。母は人の温かさを感じたと話していた。このときのことを母はすごく感謝している。当時、一番助けられたのは近所の方だったそうだ。

父が帰ってくる日、お風呂をわかしてあげたかったが、ガスがまだ止まっていてお湯を沸かす

ことができなかった。だから母は、湯沸かしポットとホットプレートの上にやかんを置きお湯を沸かした。この2つで4時間かけてお湯を沸かし、なんとか浴槽の半分ぐらいまでためて、父が帰ってきたときにお風呂に入ってもらった。 ガスが復旧してからは普段の生活をとりもどせていったそうだ。

震災が起きて1ヶ月後に、母は子どもたちに神戸のまちの様子を見せておかなければいけないと思い、僕たちを長田まで連れて行った。長田から高取まで歩き、つぶれた家や焼け跡などをしたそうだ。

6. 震災後の生活(震災前と変わった点)

震災が起きてからは、地震に備えて家具を固定したり、非常持ち出し袋の中身もしっかりそろえるようにしたりするようになった。耐震工事はなかなかできないが、自分たちが寝る部屋にはタンスなどの大きい家具は置かないようにしている。それに今は、南海地震が来るといわれているので、当時とは違いしっかり準備している。

7. 環境防災科に入って

僕が環境防災科にはいったのは、正直阪神・淡路大震災があったからとか、阪神・淡路大震災のことを伝えていきたいからという理由ではない。単純に消防士になりないからだった。環境防災科に入ると消防学校に体験入校できたり、消防士の体験ができるときいていたからだ。

でも、入学し授業が始まり、いろいろな方の話を聞く機会があったり、校外学習に行ったりする機会が増えた。そこで阪神・淡路大震災の話を聞いたり当時の写真や映像を見たりてしていくうちに、この震災の記憶が風化していると感じた。それまでは、小学校でも中学校でも震災の授業はあったけど震災の記憶や教訓を伝えていかなくてはいけないとか、考えたことがなかった。でも、環境防災科に入りこのままではいけないと思った。だから僕が環境防災科で3年間学んだこと、感じたことを阪神・淡路大震災を体験していない世代に伝えていかなければいけないと思った。

8. これから…

僕は将来、消防士になりたいと思っている。高校を卒業してすぐなろうと思っている。消防士になってたくさんの人を救っていきたいし、できるだけ火災や交通事故などの人為災害を減らしていきたいと思っている。人為災害だけでなく、自然災害にも強いまち・コミュニティーをつくっていきたい。そのためにも、この阪神・淡路大震災の教訓を生かしていきたいと思っている。この先、必ず起こるといわれている東海地震、東南海地震、南海地震につなげていきたいと思う。ただ教訓を生かしていくのではなく、次の世代にもその教訓を伝えていかなくてはいけないと思っている。

「天災は忘れた頃にやってくる」と寺田寅彦さんが言ったように、震災の教訓を忘れ、意識が薄れてからまた震災が起こると同じような被害がおこるか、もしかするとそれよりひどい被害になるかもしれない。そうならないためにも、この震災の記憶や教訓を風化させないようにしないといけない。だが今は、震災の記憶が風化しつつある。実際に、僕を含め震災を体験したことがない人がどんどん増えている。これから震災を体験した人もどんどん減っていくだろう。それはどうしようもないことだが、だからと言って風化させていいわけではない。だから、僕たちが体験した人たちに震災の記憶や教訓をしっかり伝えてもらい、その人たちに代わり僕たちが、次の世代に伝えていかなくてはいけない。今はそれをしっかり僕の心に刻み、消防士になったらこの教訓をしっかり子どもたちに伝えていこうと思う。

僕は小さいときから防災を考えていくことが大切だと思うから、小学生に伝えていきたいと思っている。小さい子どもは何にでも興味を持ち何にでも真剣に取り組み真剣に考えるからだ。それに子どもの頃に教わったかとは意外と大きくなっても覚えているからだ。だから、小学校の避難訓練などに積極的に参加し、そのときに防災教室を開くことができればいいなと思っている。でも、小学生が大人になりその教訓を生かすまでには時間がかかる。だから、僕はその地域のコミュニティーの代表者を集めて軽い講義をしたり自治体で行っている防災訓練などに消防が参加したりし、一緒に防災訓練をしていけたらいいと思っている。

それと同時に、3月11日に起きた東北・関東大震災の話も伝えていき、阪神・淡路大震災のように風化させていかないようにしていきたい。この東北・関東大震災では阪神・淡路大震災では体験しなかった津波を経験している。5月に行かせていただいたボランティアのとき、被災された方に話を聞く機会があった。どの人も地震より、そのあとにきた津波の方が怖かったと言っていた。この前のチリ津波のときは町内放送で津波が来ることを知らされていたけど、今回はその放送がなく津波が来ると思はなかったので避難せず、近所の人と話をしていて危ない目にあったと言っていた人もいた。今回のボランティアで聞かせていただいた話もしっかり伝えていきたい。

過去の災害の教訓や記憶で学べることはたくさんあると思う。でも対応できないこともたくさんある。でも、だからそのことを風化させていくのではなく、それを土台に自分たちで対処法を考えていけばいいと思う。そうすることで、より災害に強くなることができると思う。だから、僕は過去の教訓を次の世代に伝えていこうと思う。

語り継ぐ

宮辻　知見

1.　　日常

私の家は、父・母・私の 3 人とお母さんのお腹にいる赤ちゃんの4人家族です。私の家は父が八百屋をしていて両親ともそこで働いています。母も出産前ですが店に行き仕事をしていました。私は保育園に行っていました。当時はすごく体が弱く、風邪をひくたびに入院していました。阪神・淡路大震災の時耐震補強はしていませんでした。

2.　　震災前

1 月 15 日に、母は高熱を出し、病院に点滴をうちにいきました。16 日は父の誕生日でした。私は入院していたので一緒に行けませんでしたが、お祝いにご飯を食べに行ったそうです。母は、出産が近く流産しかかっていて、流産しないように治療をしていました。17 日は予定日が近いのでそれを外しに行き、それから私を迎えに行く予定でした。

3.　　阪神・淡路大震災

1 月 17 日午前 5 時 46 分阪神・淡路大震災が起こりました。その日の朝、父と母はゴーッという音で目を覚ましました。とても大きいダンプカーが通ったような音でした。私の家は坂の上にあったので、その音が家の方までどんどん上がって来ました。家まで来たときドーンと音がしました。家は無事で、電気もつきました。

それから私を病院まで迎えに行こうとしましたが、祖父がやって来ました。いつもなら、父が仕入れに行っている時間だったので母が一人でいるのではないかと心配して来たそうです。でも震災の日は火曜日だったので父の仕事は休みで家にいました。後で知ったのですが、父がいつも仕入れに行っていた所は震災により潰れ、そこの警備員の方も一人亡くなったそうです。もし震災の日が火曜日じゃなかったら父がどうなっていたのかと思うととても怖いです。

4.　　長田の町

祖父から「下が大変や」ということを聞き、坂を下りて行きました。父は私を迎えに行き、母は祖父の家の近くに車を止めて、その中で待っていました。母が待っていた時、近所で火事が起きました。消防車が何台かやっていましたがポンプに、水が通っていませんでした。川の水を使えばいいと思いましたが、それも出来なく、そこら一帯が燃えてしまい火の海で、あっと言う間にすべてが燃えていきました。

父は私を迎えに病院に来ましたが、病院のまわりはパニック状態でした。たくさんの人が運ばれて来ていました。木の枝に人を乗せて運んできている人もいて野戦病院のようでした。私を引き取ろうとしましたが、今帰すと誰がどこにいるのかというのが分からなく恐れがあったので、私を引き取る事はできませんでした。昼頃に迎えに行くと引き取る事が出来ました。看護師さんが私を抱いていてくれました。

帰り道はすごい状況でした。瓦礫の中から家族や近所の人を助けようとしている人、必死に「助けてください。」と叫んでいる人がたくさんいました。まるで戦争映画を見ているようでした。私達は母が待っている所まで行き、曾祖母・祖父・祖母・いとこの家族が避難所にいるので行きました。避難所から祖父の家の方を見ました。あちこちで煙が上がっていてまるで怪獣が通った後

のようでした。

5.　　阪神・淡路大震災の夜

　避難所にいたのですが、いとこ達と一緒に私の家に行きました。自分達の住んでいる街を離れるのがいやと言い、祖父と祖母は避難所に残り来ませんでした。1晩、私の家で過ごすはずでしたが、震度 4 ほど地震が来たときにガスのにおいがしてきました。ガス爆発したら大変なので近所の人と声を掛け合ってガスの元栓を閉めて近所の公園に避難してそこで朝まで過ごしました。

6.　　震災翌日

　父と祖父は母の出産のため病院を探していました。予定日が 1 月で出産がもうすぐということ、産婆さんが来ることが出来ないため、もしもの事があったらということで病院は見つかりませんでした。父の親戚と連絡が取れ、私達は加古川に行きました。加古川に行き長田との状況の差に驚きました。

7.　　加古川での生活

　加古川は震災後も全部普通で何かに不自由することはなかったです。でも震度 3 位の地震はあったそうです。
　お母さんが出産のために病院に入院したのですが、神戸などから運ばれてきた人達もいて病院は人がたくさんいました。6 人部屋を 8 人部屋として使っていました。廊下にもベットが並んでいました。
　2 月 8 日、無事に出産し、弟が生まれました。

8.　　避難所での様子

　阪神・淡路大震災で祖父の家・仕事場、いとこの家は倒壊し震災後の火事でなくなってしまいました。いとこ達は避難所で半年ほど生活しました。
　避難所では温かい食べ物がなく、お弁当ばかりで、お弁当ばかりだと舌がピリピリしてくるそうです。
　いとこは絵で自分の家が燃えている様子と、見ていないのに遺体の絵を描いていました。何もない所で転んだりしていまいした。兄妹でずっと一緒にいました。はじめは家が燃えてしまった後、「今度は3階建の家がいいな。」などいとこ達は言っていました。しかし近所の小学校で生徒が亡くなったという話を聞いたとき何も言わず青ざめていました。それから震災の話をいやがりました。避難所に温かい物がなかったので、温かい物を食べに行きました。でもその時、いとこのお兄ちゃんは何も食べようとしませんでした。どうしたのかと思い聞くと、「今家がなくなって何もないのに、ご飯なんか食べられない。」といいました。「お父さんもお母さんも頑張って働いとうから大丈夫。」と言ったら安心してご飯を食べました。子供なりに物がなくなる事の怖さを感じていたのかもしれません。

9.　　営業再開・

　父の店は震災で潰れていませんでした。少し物が落ちたり、傾いたりしていました。知り合いの人が早く店を再開してほしいのと言われました。野菜などをとても高い値段で売っている店が

あるそうです。だから、営業を再開する事にしました。普段とは違い店の隅の方で何個か商品を並べて売りました。知り合いのお客さんも手伝ってくれました。

10.　　現在の神戸

阪神・淡路大震災から16年が経ちました。当時は火事により焼け野原だった場所も今では家が建ち震災の面影はありません。かつて震災があったことなどわからないくらいです。何もなくなった場所には家が建ち、人が住んでいます。色々な場所でイベントをし、神戸の街は復興しています。

11.　　震災から私が思ったこと

私は阪神・淡路大震災の時、1歳で記憶はありません。けれどその時の事は、両親や学校などで話を聞いたり、当時の映像を見たりとして被害の状況は知っています。小学校の時に震災の時の映像や写真を見ました。自分はその時小さくて記憶はないのに、それを見た時衝撃で、怖かったです。自分が震災を体験していたなんて信じられませんでした。今の街並みからは震災があった事は、想像できませんでした。でも震災ではつらい話だけではありませんでした。瓦礫の下敷きになっていた所を近所の人に助けられた・家の火を消すためみんなでバケツに水をくみ消したという話も聞きました。人と人との繋がりを感じました。災害という緊急の事態には、家族や親せき・近所の方などとの日頃からの関係が大切ということを知りました。阪神・淡路大震災はボランティア元年と言われています。各地から、たくさんの人がボランティアに来てくれました。避難所で子供と遊んでくれたり、足湯をしながら話をしたりいろんな所でボランティアの方が活躍しました。たくさんの人が震災の被害にあった場所に来てくれたおかげで助けられたという話を聞きました。私は阪神・淡路大震災で助けられた話を聞き私も災害が起こった場合に被災地の人の助けに少しでもなれるようになりたいと思いました。そして、私が今生きて生活している事がすごい事で、命を大切にしなければいけないと思いました。

12.　　環境防災科

私は高校生になり、舞子高校の環境防災科に入学しました。警察・消防士・災害救助犬・関西電力・水道局などたくさんの外部講師の方が来て話を聞かしてもらいました。大学の先生やNPOの方も来てくれました。阪神・淡路大震災の話、今後の災害の為の話も聞きました。過去の災害の話やその災害から学んだり、都市の災害の話もありました。

私達が学んだ事を小学生の子供たちに教えたりもします。舞子高校でクイズラリーのように回ってもらい楽しみながら一緒に勉強したり、小学校に行って授業のように教えたりします。小学校の子供達と一緒に地域を回り危険な所や災害時に避難できる場所を一緒に考えたり、消火栓の位置や110番の建物などの場所を調べました。学校に帰って来て地図にその位置を記録します。他の班の地図と繋げて地域の防災マップを作りました。

消防学校にも行きます。消防士になる人が実際に訓練する場所で私達も活動します。敬礼や休めなど基本的な訓練から、実際にホースを使い消火訓練をしたり、ホースを運び結合する訓練などをします。

ボランティアにも参加しました。近所の小学校の夏祭りや防災訓練のお手伝い、災害・防災のイベントで舞子高校のパネル展示をしたり募金活動をしました。地域のボランティアに参加していると、いろんな人と話が出来ます。どの人もやさしく声をかけてくれます、地域の人とのつながりができているのを感じます。募金活動では、災害が発生した時に生徒の「募金をしたい」という声から始まったりします。先生や色んな人の協力から募金をします。

舞子高校では災害・防災のことを学んだり、たくさんのボランティアに参加することができます。3 月 11 日に発生した東日本大震災の被災地にも行かせてもらいました。

13. 東日本大震災

私たちは東日本大震災後に宮城県に行かせてもらいました。宮城県ではおもに東松島で活動しました。ボランティアセンターから派遣され、班ごとに各家に行きました。ピアノの先生をしているお家に行き、汚れた楽譜や写真を拭きました。「写真や楽譜はとても大事な物」と言っていました。その時に私の母が「阪神・淡路大震災の火事で写真や小さい時に描いた絵や大事な思いでの物が全部燃えてしまった。」と言っていたのを思い出しました。だから少しでも思い出の物が残せるように頑張ったのですが、上手く作業を進めることができませんでした。けどそのお家の人は「みんなのおかげでやる気がわいてきた」と言ってくれました。私も何か役にたてたんだと思いました。

おじいさんとおばあさんの二人で住んでいる家では家の中を拭き掃除や掃き掃除をしました。はじめはみんな黙々と作業をしてたんですが。1 日一緒に作業をしているといろんな事を話してくれました。私たちと話している時、笑顔で私たちと話ている時だけでもつらい事忘れてもらえてるように感じました。

宮城に行き人と話をすることの大切さをしりました。災害の話をしてくれる人や、アドバイスをしてくれる人・私たちの心配をしてくれる人もいました。話をすることでその人達の優しさを感じることができました。そして石巻の状況をみて自分の力の小ささも思い知らされました。でも宮城の人達と関わったことや、教えてもらったこと、話したことは全て私の大事な物になりました。これからも手紙を送ったりと交流を続けていきたいです。

14. これから

私は阪神・淡路大震災の時、避難所にいたいとこの話を聞きました。震災後、叔父や叔母は家族のために必至で働きました。しかしいとこの心の傷をケアする事が出来なく。今でも何もない所で転んだりします。私は、他にも震災後心の傷を抱え苦しんでいる達の助けになりたいです。起こった災害だけでなく、これから起こる災害で心の傷を負う人達の助けにもなりたいです。私はそのために大学で勉強して心理カウンセラーの資格を取り災害時やその後に被災者の方と長期的に交流し、心のケアをできるようになりたいです。災害が起きるのは日本だけではないので、英語も勉強して外国で災害が起きた時、日本で被災した外国人の方の心のケアもしていきたいです。

東日本大震災の被災地に行き、自分の力の小ささを思い知らされました。自分一人では出来ることも限られます。だから NPO のような組織やグループを作り、みんなで協力し補い合いながら活動できる仲間を作っていきたいです。そこからみんなが災害のことを忘れないように講演会を開いたり、ホームページを作ったりと発信していきたいです。

「語り継ぐ」

山本　雅大

はじめに

　阪神・淡路大震災が起こったとき僕は１歳だった。震災を体験したと言ってもそのときの記憶はいっさいなく体験したとはとてもじゃないけど言えない。だから僕自身が震災のときのことで語れることはないに等しい。
今から言うことはすべて家族から聞いた話をもとに書いていこうと思う。

地震が起きる前の状況…

阪神・淡路大震災が起こったとき僕は１歳だった。このとき僕の家は、父・母・姉・僕の４人構成の家族だった。
一軒家ではなくごく普通の団地に住んでいた。
地震が起こる前は、時間が遅かったので普通に家族みんな就寝していた。僕は子供部屋で姉と母と一緒に寝て、隣の部屋で父が寝るというのが普段通りだった。

地震がおこる前日…
この頃は姉も僕も小さかったので幼稚園にはまだ通っておらず、いつもどおりに朝おきて家族で朝食をとった。
姉は近所の友達と外へ遊びに行った。外といっても団地内の公園がいつもの遊び場なので親も安心して遊びに行かせることができた。僕は昼寝をしたり、母と一緒に家の中で遊んだりしていた。いつもどおりに平和な日常をすごして就寝した。

地震が起こった１日…

このまだ薄暗い午前５時４６分に「ドゴーン！！」と大きな足音をたてて地震が走り出した。母と父はこの音と衝撃で目を覚ました。父は最初、母に「仕事に遅刻するぞ！！」とたたき起こされたのかと思ったけど、時計を見て違う地震だとわかった。「ゴゴゴゴ～ドドドド～」と地震は足を止めることなく走り続けた。このすごい揺れと音の中、僕と姉は全く起きる気配すらなかったそうだ。リビングの食器棚から食器が落ちたり、棚の中身が飛び出したりで何が飛んできてもおかしくなかったらしい。
父は、まず家族が外へ逃げることができるよう窓を開けた。地震といったら関東大震災と幼い頃から聞かされていて、関東大震災のとき揺れで家がいがみドアが開かず生き埋めになったと聞いていたからだ。
隣で寝ている僕・母・姉を心配し、僕たちが寝ている部屋に向かおうとしたけれど、父が寝ていた部屋にあった大きな服掛けが父の上に倒れこんできて、父は身動きがとれなくなってしまった。
母は父のことよりまず「子供を守らないと」と思い、僕と姉を飛んでくるものから守るため、僕と姉を自分のしたにして布団でくるまり必死で僕たちを守ったそうだ。揺れがおさまった。
僕たちが寝ていた部屋の足場は特に危険はなかった。外に出ている人もいたけど、外は真っ暗なので出ようとは思わなかったそうだ。懐中電灯を持ってリビングに行くと、食器棚・テレビ・タンスは倒れたりはしていなかったが、中身の食器はほとんど飛び出

してガラスの破片や僕たちのおもちゃが散乱し、とても危険な足場になっていた。
　祖父祖母の安否を確認するため電話しようとしたがコードレスの電話は、停電していて使えなかった。けれどレゴのブロックでできた回線の電話は繋がった。朝霧に住んでいる祖父母にはすぐに連絡がつき、全員無事だということがわかり安心した。しかし塩屋に住んでいる祖父母の家・職場に連絡がとれず様子を見に行くことになった。父が車で行くことになり、僕と姉がまだ寝ていたので母とお留守番をすることになった。父が塩屋の祖父母の家に着くと、１部損壊していて、家の中のタンスなどの家具はほとんど倒れていた。中にいた祖母は怪我をすることなく無事だった。しばらくすると出勤していた祖父が仕事場から戻ってきて祖父も無事であることが確認できた。
　父は母に祖父母の安否を伝えた後、和田御崎にある仕事場に向かおうと思い祖父にバイクを借りた。道が寸断され、国道２号線は車ではなかなか進めないと、知り合いに聞いていたからだ。父は仕事場についたはいいが、電気がまだ通っていなかったので中には入ることができなかった。父は神戸信用金庫で働いていて、中に入れなくても金庫を守らないといけないので仕事場に駆けつけていた仕事仲間と一緒にしばらく見張りをすることにした。
　バイクで来ていた父は、その場にいない知り合いの仕事仲間に安否確認と明日からどうするかの連絡をするためいろんな場所をてんてんとまわることとなった。その移動中父は、毛布でくるまった人々が外でうろうろしている姿、あちらこちらで上がっている黒煙、全壊している建物を目にして世紀末のようだと思ったそうだ。
　お留守番で家に残った母はまず、僕と姉が起きて歩き始める前にリビングに散らばったガラスの破片を掃除することにした。桃山台は被害が少なく僕たちの住んでいた団地はすぐに電気が戻ったため、テレビなどで情報を得ることもできた。リビングの掃除も割りとすぐに終わったらしい。
　地震が起きる前の日曜日に名谷のパティオで灯油ストーブを買っていて、地震が起きた日に届くことになっていた。母はこんな事態になってしまい届かないと思っていたが、その日の夕方頃にヘルメットをかぶった若いお兄さんが届けてくれてすごく驚いたが、それと同時にありがとうという感謝の気持ちが溢れたそうだ。そのころはまだ寒かったのでストーブがとても役にたった。
　母がベランダにでると空から何かが降ってきて「雪？」と思ったがそれが灰だと気づいた。長田の方の火事で出た灰がこちらのあたりまで飛んできていたのだ。母はテレビで周りのニュースを見ながら泣いた。
　この日の夜は、家族４人で身を寄せながら寝たらしい。

地震が起こった次の日の父の話…

　父は仕事場に向かった。仕事場で職員の安否確認を行うと１人後輩の女の子が確認をとることができなかったそうだ。父は職場の人と一緒にバイクで彼女が住んでいる須磨に様子を見に行くことになった。須磨につくといろんな建物が崩れていて、自衛隊・警察官・消防士・土木のおじちゃんなど重機を操縦できる人が、鉄筋などの瓦礫をのけながら救出作業をしていた。公衆電話に並び現状を連絡すると、班に分けて交代で仕事場に戻ることになった。仕事場では数日間、銀行の仕事よりお客さんの安否確認をすることがほとんどだったらしい。
　その日の夕方、安否確認がとれなかった後輩の女の子が遺体として自衛隊に発見されたと連絡があった。父の働いている職場の社員で唯一亡くなってしまった。父はしばらくの間彼女が夢に出てきたそうだ。彼女は高校卒業の１９歳の新入社員で、とてもまじ

めでいい子だったらしい。
　この日父は腹がたったことがあった。警察・消防士・自衛隊はそれぞれ組織が違うからか、協力しあわなかったらしい。周りでは刺青が入った怖そうな人たちがいろんな人と協力をして作業をしているのに。しかし自衛隊の人たちは上官から命令を受けるまで周りの人の「助けて！！」などの言葉を受けても動くことができないなどを考えると、父は悲しくなった。

地震後の生活…

　僕が住んでいた桃山台の団地は倒壊することもなく火災が発生することもなかったので、被害は小さくすんだ。
　電気は地震がおきてすぐに使えるようになったので、冷蔵庫の中身も腐らずにすみ食料がなくて困ることはなかった。近くのコンビニも開いていた。
　水もすぐに使えるようになり、祖父祖母の家や友達の家に届けに行くことが多かったそうだ。でもガスが長い間使えなかった。ガスが使えないのでお風呂を沸かすことができず、おしぼりで体を拭くだけが多かった。定期的に、近所の友達の家にみんなで集まりカセットコンロを持ち合わせて鍋でお湯を焚いて協力してお風呂に入ったらしい。
　国道を通る車の中に、「頑張れ神戸！！」と書かれた復興車両が見られるようになった。その車を見ると母は、嬉しくてなんども泣きそうになったそうだ。
　普段はまったく会話をしない人とも話をし、困ったことがあったらみんなが優しく協力してくれて、この世界に悪い人はいないと思え他人を気づかう人の温かさというものが心から感じることができたそうだ。

話を聞いて思ったこと・感想

　僕はこの「語り継ぐ」をするまでに、阪神・淡路大震災のことについて母に聞いたことが数回あった。だけど父に震災のことを聞いたのは初めてだし、こんなに深い内容を聞いたのも初めてだ。父の後輩の女の人は高校卒業の１９歳といっていたけれど、今の自分の年齢がとても近くてなんか心がぐっとなった。
　地震が起こった日僕と姉はずっと寝ていたと聞いたときは、兄弟そろってなんという危機感地能力がないのだと思った。
　レゴのブロックでできた電話は今でも家にあり、おもちゃだと思っていたあれが本当に繋がったと聞いて信じられない。
　僕の住んでいる桃山台の団地は本当に被害が少なく、避難所に行くというような事態はなく生活にもあまり困ることがなかったけれど、震災が起こったときのような非常事態は近所の人や友達、その他のたくさんの人が優しく協力しあい心の支えになったのだと感じた。

環境防災科

　僕が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは環境防災科の説明会で、普通の学科の高校では体験できない行事がたくさんあり興味がわいたからだ。また、公務員になるには良いと耳にはさんだから。
　環境防災科に入って自分が想像している以上に外部講師の方の講義が多かった。消防士・警察官・自衛隊・大学の教授・災害ボランティアで活動する方々など、他にもいろ

んな人から多くのことを学んだ。この講義の話の多くから阪神・淡路大震災のことがでてきて、震災のことをより詳しく知ることができた。
　長田の町歩きでは震災当時のできごとを店ごとに話を聞いた。震災の話をすることは長田の人たちからしたら辛いことだと思う。それでも長田の人たちは何も知らない僕たちのために、真剣に話をしてくださった。僕はこの話をきいて、震災のことを風化させていってはならないと思った。
　消防学校では他ではすることができない貴重な体験をすることができた。ロープ結成が上手くできなかったとき友達が分かりやすく教えてくれてとても助かった。訓練中はものすごく怖い教官も本当はとても温かく優しい人だ。夜には、友達のお姉さんが阪神・淡路大震災のことを語ってくれた。クラスのみんなとさらに絆を深めることができた。
　この他にも環境防災科で学んだこと、体験したことはたくさんある。今では環境防災科は僕の中でとてもかけがえのないもで、このクラスであることを誇りに思う。

はじめておこなったボランティア…

　僕が環境防災科に入って、初めて行ったボランティアは募金活動だ。初めての募金活動でどういうことを言ったらいいのかわからず不安でしたが、先輩が「なんでも思ったことを言えばいいんや。」と優しくアドバイスをしてくれて、不安が一瞬で消え先輩の頼もしさを心強く感じた。募金活動を始める前は本当に募金をしてくれる人なんているのだろうかと思った。いざ募金活動を始めると、たくさんの人が募金箱にお金を入れてくれてビックリした。人の温かさを生で体験し、世界が変わって見えた。阪神・淡路大震災のとき母が感じた人の温かさがすこし体感できたと思う。

東日本大震災
　２０１１年・３月１１日に東日本でマグニチュード9.0の大規模地震がおこった。僕は朝起きてテレビをつけると、どのチャンネルも緊急ニュースになっていて呆然とした。阪神・淡路大震災のときも、テレビはこんな状態だったのだろうと思った。
　自分に今なにができると考えたとき頭に出てきたのは募金活動だった。僕は部活の合間を探し、行けるときに募金に参加した。このとき募金活動をすることができたのは環境防災科のＯＢ・先生方々が手続きをしてくださったからだ。
　東北に行かしてもらい、生で大地震の被災地を見たのは初めてで衝撃だった。テレビなどのメディアを通して見た風景とは全然違うように見えた。阪神・淡路大震災のときもこのような姿だったのかと思った。
　現地で作業をしていろんなことを感じた。東北で体験したことも語り継いでいかなければいけないと思った。

最後に…

　阪神・淡路大震災のことは時間が流れるにつれて風化していってしまっていると思う。被害がより大きい東日本大震災が起こった今はなおのことである。
　阪神・淡路大震災を生まれている状態で体験しているのは僕たちの１つ下の年代で最後だ。しかし、体験したと言っても僕たちと１つ下の子たちは０歳～１歳だったのでその当時の記憶がない。僕らは一応震災を体験しているという点で、人それぞれだが阪神・淡路大震災について興味を持ちやすいとは思う。だがそれより下の年代の子たちか

らしたら自分たちが生まれる前の過去のことだと思うのではないか。阪神・淡路大震災の爪痕が治っていくにつれて、地震で多くの人が苦しみ、傷つき今でもそれを背負って生きている人がいるということが薄れていってしまうのは仕方がないことだと思う。それを風化させないように体験した年代から語り継いで発信していくのが生きている僕たちの義務であると思う。

「語り継ぐ」

横尾　遼祐

「兵庫県南部地震」

1995 年 1 月 17 日火曜日阪神・淡路大震災を引き起こした兵庫県南部地震が発生しました。発生時刻は午前 5 時 46 分、最大震度 7 で地震の規模を表すマグニチュードは 7.3 です。震源は兵庫県淡路島北部、北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分で、大都市を襲った直下型地震です。余震などの分布から、兵庫県南部地震を引き起こした断層は「六甲・淡路断層帯」と呼ばれている断層帯であるそうです。東は福島県いわき市、西は長崎県佐世保市、北は新潟県新潟市、南は鹿児島県鹿児島市までの広範囲で有感(震度 1 以上)となりました。

「亡くなったかた」

死者 6434 名、行方不明者 3 名、負傷者 43792 名にまで上りました。また、死者の 80%相当、約 5000 人は木造家屋の倒壊で家屋の下敷きになり亡くなりました。特に 1 階で就寝中に圧死した人が多かったそうです。死者の 10%相当の約 600 人は「室内家具の転倒による圧死」と推測されています。また、死に至る時間も短く、遺体を検案した監察医のまとめでは、神戸市内の死者の訳 2456 人のうち、建物倒壊から約 15 分後までになくなった人が 2221 人と 92%にものぼったそうです。また、二階建ての木造建築の場合柱に壁が支えられるなどで、建物が倒壊しても生存スペースが残りやすく死者が少なかったそうです。

「震災の影響」

震災の情報は報道に大きく取り扱われ、発生後約 3 日間テレビ、ラジオはほぼすべてのチャンネルが全日にわたって震災関連の特別番組になったそうです。また、神戸新聞社は地震により本社社屋が全壊し、新聞編集が不可能になったそうですが、前年に京都新聞社と締結していた災害時相互援助協定によって新聞を発行できたそうです。日本のインターネットは震災当時、商用利用、個人利用は始まったばかりでしたがパソコン通信ネットワークの掲示板や電子会議室が、被災者情報や大学の休講状況などの情報交換に役立ちました。また、神戸市の人口は、震災前 150 万人だったのが震災後一時 139 万人まで落ち込んだ。平成 16 年 11 月までには震災前の人口に戻っていますが、社会の高齢化、少子化の影響もあって人口が震災前の水準に戻らずに減少に転じている区も出ているそうです。地震が起こった中では、暴力団が救援活動に当たっていた一方で、震災に乗じて災害救護資金を不正に受けたり、建設会社に対し工事の受注を要求するなどの触法行為を犯していたこともあったそうです。また、報道の問題として過剰な取材活動というものが大変問題になったそうです。地震発生直後、マスメディア各社が航空取材活動を開始したらしいのですが、地震直後から始まった航空映像によって首相官邸など被災地以外の人々が地震の被害状況を素早くつかむことができた反面、このヘリコプターの騒音によって、家屋の下敷きになった被災者の声を聞き取れずに救援隊の初期活動の大きな妨げとなったとするしてきがあります。

「消防機関などの対応」

地震発生とほぼ同時に 118 回線ある 119 受信専用回線がすべて受信状態となった。それ以降も、119 番通報はやむことがなく鳴り続きました。受信件数は 7 時までに 441 件、17 日は 6922

件でした。火災は、地震発生直後には少なくとも市内 50 箇所以上で同時多発的に発生しています。さらに、地震により消火栓が使用できなくなったことによる水利不足に加えて、建物倒壊、道路陥没等道路状況の悪化により消火活動は困難を極めました。特に、木造家屋が密集している兵庫区や神戸市の地場産業であるケミカルシューズ関連工場の密集している長田区、須磨区では大規模な火災に移行しました。そのため、消防隊は他都市応援部隊とともに懸命の防御活動を行いました。日別の火災発生件数をみてみると、地震発生後から当日の 24 時間までの出火件数は 109 件であり、出火件数は、その後は漸減しています。しかし、地震発生から 3 日後の 19 日以降においても、火災は依然発生しているということが考えられます。地震後 10 日間の出火件数合計は 175 件で、これは神戸市で平年に発生する火災件数の 2 か月分に相当します。また、ほぼ同時に火災が多発したため、消防機関のみならず一般市民も多数の人々が消火活動を行いました。また、消防救助隊は各担当地区の多数生き埋め現場（西市民病院等）へ出動し、他都市応援隊、警察、自衛隊とともに、救出活動を行いました。木造家屋の倒壊においては、エンジンカッター、チェーンソー等の資器材が救出に役立ったが、その数量は不足していたそうです。

「復興」

復興事業では、ライフラインの復旧が最優先とされました。電気は殆どの地域で 3 日から 1 週間程度で復旧が可能だったのですが、地下に埋まっている水道・ガスの復旧に長期間を要しました。復興支援物資の輸送も全国各地において受け付けられました。また、交通網も至る所で寸断されていました。大量の復興支援物資を早急に送るために、復旧よりも残された道路を優先的に整備して被災地と大阪市を結んでいました。神戸近郊の道路でも「神戸市に行く」と言えば交通整理などで最優先に通行させてもらえるなど復興活動を支援する場面が見受けられました。建造物の本格的な復興事業が開始されたのは、翌月に入ってからで、この頃には多くの機材・人材が全国から駆けつけて瓦礫の撤去や再建をサポートしていました。

「東北のボランティアに行って」

東北のボランティアに行って一番感じたことは、仲間の大切さです。人には個性があります。5 日間体育館でクラスのみんなと生活していると、普段見ることのない友達の一面を見ることがあります。それは、いい面でも、悪い面でもです。食事の用意をしているだけでもそのした仕事の量は人によってさまざまですが、その人それぞれが 100%の力を出していればそれでいいのだと思いました。一緒にボランティアをした 6 人くらいの班の人だけでも、いろんな人がいます。ボランティアで実際作業をする家の人はほとんどが高齢者だったのですが、僕は自分の年齢から親の年齢くらいまでの人以外と会話をするのがあまり得意ではありません。でも運動部だったというのもあって土嚢などの重いものを運んだりするのは積極的にその作業をしました。その経験を通して、自分の活躍する場は必ずあってそれをいかに見つけるか、そして苦手なことをボランティアなどの練習のない場面で無理してやらないということが大事だと感じました。また、そうであるからこそ困ったときに助けてくれる仲間が大切だと考えました。

次に感じたことは、マスメディアでは災害の恐ろしさを完全には伝えることはできないだろうということです。僕が被災地の海から何キロも離れているところに船があったり、車が何十台もひっくり返っていたりするような光景を見たときのあの衝撃はたぶん一生忘れることはないと思うし、忘れてはいけないと思います。その時の気持ちは、テレビや新聞で被災地の光景を見たときの気持ちを完全に超えていたと思います。また、泥かきをした時の土の感触やにおいなどは当然ですがマスメディアでは伝えることはできません。被災者の人たちはこのような環境の中で毎日過

ごしているのです。これは現地に行かなければ本当にわからないことです。このことは実際に東北へ行ったぼくたちが東北の震災の現状を知らない人たちに伝えていかなければならないと思いました。

「環境防災課に入って」

環境防災課に入る前の自分は阪神・淡路大震災の時の記憶なん全くと言っていいほどなくて、災害や防災についての意識も相当低かったと思います。日本が地震などの自然現象が多い国だということは何となく知っていたのですが、日本の自分が住んでいる地域以外や日本以外のほかの国で地震などによる災害が起こっても、まさか自分の住んでいるところでは起きないだろうとさえ、思っていたと思います。環境防災課に入って、それは全く間違っていて自分が生きているうちにとても高い確率で、南海、東海、東南海地震が起こりそして、それらの地震やそのほかの台風などの自然現象からの被害をできるだけ少なくそるために、日頃から備えをしておかなければいけないということを知りました。その時は少し不安でショックな気持ちになったのを覚えています。

まず環境防災課に入りたかった理由は、中学の時の将来の夢が建築士で地震や津波のことを詳しく学びたかったからです。舞子高校に入学し、環境防災課の専門科目を受けていると、今まで自分の命が奪われるかもしれないような自然災害には合わないだろうと思っていた自分の考えが大きく変わりました。道を歩いているときに「この建物は地震に弱そうだ」とか「この川は三面張りだから危ない」とかを考えるようになりました。また、防災や減災に興味を持ちました。新聞を読んでいて、防災や減災に関係する記事があると積極的に読むようになったし、ニュースでも関係のある内容だと進んでみました。その中で得た知識を何らかの形で将来活かしていきたいと思っています。

「家族構成」

地震が発生したとき僕は兵庫県の須磨に住んでいて、父、母、姉、自分の 4 人家族でした。

「母の話」

1993 年 1 月 17 日の早朝、母はいつもどおり朝食の準備をしていました。ふだんと何ひとつ変わらない、ごく普通の朝だったそうです。フライパンで炒め物を作っていると、遠くから聞いたことのないような「ゴオォー」という音が近づいてきて、気づいた時には恐ろしく激しい揺れに飲み込まれていたそうです。このように巨大な自然現象に見舞われても母は意外と落ち着いていたそうです。しかし、心の中で少しの恐怖と同時に、人生にはこんなにひどいことが起きる時もあるのだから、もうこれからは幸せな気持ちで暮らしていくのは不可能だなと、揺れている途中のほんの一瞬でその先の人生について冷静に考えたそうです。そして、揺れがおさまるのも待たずに、寝室で寝ている僕と姉のところへ向かったそうです。そのとき僕と姉は何が起きているのかも知らずぐっすりと寝ていたそうです。僕たちを居間へ連れて行くとただぼーっとしているだけで、母はその表情を見て少し気持ちが落ち着いたといっていました。いったん揺れが止まって再び台所へ行くとフライパンの火を止めていなかったそうです。家の被害は大きな災害にもなった地震にも関わらず奇跡的に被害は 2、3 枚食器が割れたのみという状況だったそうです。また、電気も止まることもなかったので、すぐにテレビを見てみると目にした光景はあまりにも悲惨なものだったそうです。母の中で一番印象に残っているのは、なぎ倒された高速道路から落ちかけている奇跡のバスの光景だそうです。また、当時住んでいた須磨区の隣、長田区では多くの火災が発生していて、開けてきた空をみてみると今まで見たことのないような、赤、紫、黒が混ざり

合ったような不気味な色が広がっていました。
　昼間のうちは水道も使用でき電気も問題なかったので、生活は今までと変わらないと思っていたそうなのですが、食料品だけは買っておくべきだろうと遠くのスーパーまで車で買い物に出かけたそうです。近くのスーパーは確か開いていなかったと言っていました。店の中は同じく買いだめをする人がたくさんいてとてもこんでいたそうです。買い物から帰ってきても特に変化のある生活をしないといけないようなことはなかったそうなのですが、その日の夜になると、突然水が出なくなったそうです。理由はマンションのタンクに入っていた非常用の水が底をついたことでした。須磨から父の仕事場である大阪の天満までは通勤できないということもあって、購入した食料品は、マンションの隣の人に渡してその日のうちに母の実家のある大阪へ向かうことになったそうです。
　車で東灘区や芦屋市を通ると、道路沿いの家々が倒れていて屋根が並んでいるというひどい状況だったそうで、この下に人が埋もれているのではと考えてしまってずっと涙が止まらなかったそうです。また、道路もあちらこちら割れたり盛り上がったりで、進むのにとても時間がかかったそうです。母は無事に大阪までつけるのかととても不安だったと言っていました。余震も何度も起きていました。ところが、大阪へ入った途端にまるで今まで見てきた光景が嘘だったかのように街はきれいで、悲しいほど日常の風景だったそうです。神戸との街の風景の違いに唖然として、なんともいえないその時の気持ちがとても印象に残っているそうです。
　大阪で過ごし、被害の状況もだんだんと明らかになるにつれて、その重大さに毎日心が痛むばかりでしたが、須磨区の自宅周辺は1、2か月ほどで水道やガスが復旧し、自宅に戻ることができたそうです。しかしその時は、家に戻るのにまたあの光景を見ないといけないとか、本当に戻って大丈夫なのかなどと考えてしまって素直に喜べませんでした。
　2011年再び関東、東北で大地震が起こり大変な災害となりましたが、心のどこかに、もうあのような地震は神戸では起きないだろうと油断があるのを感じます。地震大国に住んでいるということをこれからも決して忘れずに、日頃から防災や減災を意識して生きていかなければいけないと思っています。

「参考文献」

PCサイト
http://www.city.kobe.lg.jp/

http://ja.wikipedia.org/wiki/